
セカンドライフは波乱万丈！？

白鳥隆士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカンドライフは波乱万丈！？

【Nコード】

N9067I

【作者名】

白鳥隆士

【あらすじ】

突然死んでしまった山代翔吾。彼の前にあらわれた神と名乗る少女によって、ゼロの使い魔の世界へ飛ばされることに！これから彼の前にはどんなことが起きるのか！

作者の暴走が起きたため、題名変更です（前ゼロ魔でセカンドライフ！）

この作品はArcadia様の方でも投稿させていただいています。

ブローグ

暗い、暗いトンネルを抜けるとそこは・・・なにもない空間でした・・・。

というかここどこ!?

オーケー、cool down cool down・・・。

俺の名前は山代^{やましろ} 翔吾^{しょうご} 15歳。

身長167センチ、一般的な黒髪、黒眼の日本人。顔はおん・・・
中性的な顔・・・。見てくれはまあ、普通の高校生だ。

趣味は、アニメ、ゲーム、漫画、スポーツ、ギター、etc・・・。

ここまで言えるなら記憶喪失ではないな。

次にここだが、始めに言ったように真っ白で方向感覚がくるってしまいそうな場所だ。

よし、じゃあ今日一日ダイジェスト。

朝、いつも通りの時間に起き、いつも通り自転車で登校。友達とバカをやって朝休憩は終了。

今日はテスト最終日で午前中で帰宅。今までの鬱憤を晴らすため（期間中はずっと遊んでいたが・・・）近くの古本屋へ直行。立ち読みをして、帰宅していて・・・あゝ、ボールを追っかけてった子供を助けるために道路に飛び出したんだっけか・・・。

「ようこそ、シヨウゴ君」

翔吾の前に少し背の低い少女があらわれる。

あゝ、あの子供無事だったのかねゝ．．．。

「おい」

続けて呼びかける。

そついや、今日あの漫画の最新刊の発売日じゃん！うわゝ見たかったな．．．。

「シヨウゴ君？」

さらに呼ぶ．．．。

はあ．．．まあ、漫画より人の命か．．．。

「うう．．．無視は立派ないじめだよ．．．」

ついに、しゃがみ込み人差し指で「の」の字を書きだす。

「ん？お前誰？」

ようやく気付く。

その声を聞いてはっ、と顔を上げる。

「やっと気づいてくれたよ．．．」

感激のあまりか泣きだした。

「おい、泣くなつて。悪かったからさ」

急に泣きだした目の前の少女の頭をなでる。

1分後

「えーとね、君は山代シヨウゴ君であってるよね？」
泣きやんだ少女が言う。

「ああ、あってるよ。で、お前は？」

泣きやんだことに安堵のため息をつきつつ言う。

「わたし？わたしは神様かな？」
にこつと笑いながら言う。

「へえー、そう。で、ここは？」
あつさり流しつつ次の質問に移る。

「え！？なんでそんなにあつさり！？神だよ！？GOD！カムイ！
デミウルゴス！めちやくちやすごいんだよ！」
なんかいろいろな言葉で説明された・・・。

その様子にため息をはきつつ言う。

「あのな、俺はお前が何であるのかが分かればいいの。そんないち
いち驚いてたら面倒だろうが。で、ここはどこなんだ？」

その言葉に納得したのかは分からないが、渋々といった感じに言う。

「・・・ここはわたしの作った空間だよ」

「なんで作ったの？」

「君が死んじゃうから」

「死んだんじゃないの?」

「肉体的にはね。でも、魂はまだ死んでないよ?」

「なんで?」

「そりゃ、わたしがここにとどめたから」

「その理由は?」

「・・・君はあそこでは死ななかったんだよ」

「は?」

「あのね、本当はあそこで君は死なないの。ちゃんと生きるんだよ。なのに、君はあそこで飛びだして、死んだ。だからここに連れてきたの」

「死んじゃけなかったのか?」

「そりゃね、世界のバランスが狂っちゃうし」

「そうなのか。なら俺はどうするんだ?」

「うん、君には異世界で新しく生きてもらう」

「どんなところ?」

「ゼロの使い魔ってわかる?」

「まあ、主要人物の名前くらいは」

「うん、それだけ分かればいいや。君をその世界に飛ばすからさ。」

「わかった。なら代わりに楽に生きたいからチート能力つけてくれない？」

「まあ、そう言うだろうと思って許可は取ってあるよ」

「やりい！なら、まず能力値はマックスだろ？」

「そうだろうね。OK、他には？」

「漫画、アニメ、ゲームの技使用。条件あるやつは無視してもいいように」

「うんうん」

「まあ、こんなもんだろ。こんだけあれば死にはしないだろうしな」

「まあ、軽く世界征服可能だろうね」

「じゃあ、行くとするかな」

「りょーかい。あ、それと、魔力と記憶は今の歳になってからつけるから」

「わかった。初めからあっても邪魔なだけだしな」

「よし、なら幸運を祈ってる」

そう言って親指をぐつと出す。

それに俺も同じように返す。すると、体が光に包まれて・・・俺の意識はなくなった。

プロローグ（後書き）

ちよい名前変更

幼き日々（前書き）

どうも、今回はゼロの使い魔に挑戦です。ところどころ変な部分や、キャラの性格がおかしい！とお思になる部分もあるかもしれませんが、どうか暖かい目で見守ってください。それではどうぞお楽しみください。

幼き日々

翔吾が別の世界で生き返って早5年。この時にはチート能力のおかげで一般知識や魔法の知識、礼節など、子供とは思えないくらいの成長を遂げていた。

まあ、本人は気付いてないが……。

彼が生まれたのは大商人の家の次男。家族は、父親のチエフス、母親のスフレ、長男のアーク、そして山代翔吾改め、カイト。今、長男のアークは15で親元を離れ働いている。

父親であるチエフスだが、彼はかの有名なヴァリエール家が懇意にしている商人で、最低でも1月に一度は訪れている。そして、今日、彼は同じ年代であるため、ヴァリエール家が三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの遊び相手を務めることになった。

さて、それでは説明もこのくらいにしてそろそろ本編へと入るとしよう。

ふあゝ……。特大の欠伸をしながら馬車をまったりと進めていく。

俺はカイト。まあ、それなりに裕福な商人の息子だ。

外見だが、髪も眼もともにエメラルド色でおん……。中性的な顔立ちでごくごく一般の平民である。

今俺は5歳であるのだが、なぜか、この年でこんな感じになってし

まった。周りの大人からは不思議がられている。

まあ、自分で言うのもなんだが、こんなにしっかりした5歳児に対してはその反応が普通だろう。

俺の話はこのくらいにしようか。

今俺と親父は、トリスティンでの有力貴族であるヴァリエール家へと向かっている。

ちなみに親父は馬車の荷台で商品の整理をしている。

いつもなら俺は家に残るように言われていたのだが、今日はとある事情があつてついに行っている。

その事情とは、ヴァリエール家の三女であるルイズ・フランソワズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの遊び相手になることらしい。まあ、俺もそれなりに楽しみである。

礼儀正しくするのは疲れるから嫌いなんだけどな……。

おっ、話をしているうちに着いたようだ。

「親父、着いたぞ」

5歳児らしくない親への言葉だが、

「わかったぞ、お前もしっかり準備しとけよ」

俺のことをしっかり理解してくれているので、普通に返してくれる。

親父殿に言われた通り準備をする……といっても、持ち物がないので軽く身だしなみを整えるくらいだ。

「よく来てくれたな、チェフス」

威厳のある声でヴァリエール公爵が俺たちに言う。

気付いたかもしれないが、心の中では俺は全員地位とか関係なく扱うようにしている。理由はせめて心の中であらう自由でいたいからだ。

親父はその言葉に、頭を下げながら返事をする。

それから、形式的なあいさつをする。

「では、カイト。くれぐれも粗相のないようにな」

親父は俺に言う。どうやら、公爵と話があるようだ。

親父の言葉に頷きながら立ち上がり、公爵の方を向く。

「それでは、公爵様。失礼いたします」

きちんとした礼をして言う。

「うむ、我が娘を頼むぞ」

そう言ってメイドさんの一人を呼ぶ。あの人が案内してくれるらしい。

「では、こちらへ」

そう言って扉へと向かう。出る前に一礼し、メイドさんの後を歩いて行く。

「5歳というのに礼儀正しいな。チエフスよ」
公爵はカイトの出で行った扉を見ながら言う。

「いえいえ、まだまだ子供なもので・・・」
チエフスは頭を下げたまま言う。

「そう謙遜するな。将来お主を超える大物になるやもしれんな」

「ありがたきお言葉です」

「娘たちにも見習ってほしいものだ」

「いえいえ・・・」

その後しばらくお互いの子供の話が続きましたとき。

メイドさんにつれてこられた場所は中庭であった。というか、この屋敷でかすぎだろ・・・。移動するのにも一苦労だ。まあ、体は強いほうなのでこのくらいは軽いのだが。

その中庭に一人の少女がいた。

ピンクブロンドの髪をもつ、美しい少女。ルイズである。

ぼーっと見ているとルイズはこちらに気が付いたらしく、こちらへと駆けよってくる。

「あなたはだれ？」

その言葉と同時に頭を下げる。

「わたくしめは公爵様に懇意にされております商人チェフスの息子のカイトと申します。今日はルイズ様の遊び相手をさせていただくためにここにあります」

長ったらしくてめんどくさ……。敬語とか使わなくてもいいなら楽しいだろうな。

そんなことを思っているカイトにルイズは、

「そう、わたしはルイズ。カイト仲良くしましょ？」
そう言って手を差し出す。

これ、どう反応をしようか……。救いを求めメイドさんのいた方に……。っていないしっ！マジかよ……。

誰も見てないしっか。そう思い握手をする。

俺の様子をみてルイズは笑って俺の手をひいて走る。その様子を見て、俺も笑いながらついて行った。

そんなこんなでさらに5年。あれ以来、ルイズとはよく遊ぶようになった。俺が妹ができたように可愛がっていたためか、カイト兄と呼ぶようになった。そしてその間には、彼女の姉であるカトレアさん、エレオノールさんとも知り合った。

カトレアさんは病弱であつたが、聖母のような優しさを持っていた。
エレオノールさんは、公爵の妻であるカリーヌさんほどではないが・
・・怖い。

そんな楽しいような時間を過ごしていたが、それも唐突に終わりを告げた。

その日は珍しく、兄のいる町による日であつた。そして、兄も長期の休暇が取れたらしいので、久しぶりに家族で家で過ごすことになる。

そして、家へ帰る途中、それは起きた。

始めは晴れていた天候も、山道にさしかかったときにあやしくなり、とうとう雨も降りだした。

俺は兄と久しぶりに会えたのがうれしくてずっと話をしていた。

ドゴーン！！！！

急に上方から大きな音がする。その瞬間、親父が悲鳴を上げる。
その声を聞いた俺は外に出ようとしたのだが、親父とお袋によって止められた。

親父は俺の上に覆いかぶさる。すると残りの2人も俺に覆いかぶさる。

みんなの行動に意味がわからず、質問をしようとしたとき、

大きな衝撃が加わる。

その音と目の前で起こったことにより意識がフリーズする。

親父も、お袋も、兄も全員が急に血を吐く。それを顔や服に受ける。その暖かさを感じられない。

みんなは、息絶え絶えに、

「お・・・前だけ・・・でも・・・な」

小さな笑みを向けながら親父は言う。

「そ・・・うよ・・・でもかなし・・・まないで」

同じように言うお袋。

「おれた・・・ちは・・・いつ・・・までも・・・一緒・・・」

最後に兄が言う。しかし、最後の方は聞きとれない。

「うそだろ・・・親父、お袋、兄貴・・・嘘だといってくれよ・・・」

「懇願するように言う。だが返事はない。ただ、ただ笑みを向けるだけ。」

しかし、次第にその体も冷たくなっていく。それを感じ俺は・・・、

「うわあああああ・・・」

意識を失った。

この時起きたのは土砂崩れだ。雨で地盤が緩み、とどめとばかりに雷が落ちておきた。

俺は、それから2日後土砂をどけていた近くの村人たちによつて救出された。幸い、家族が盾となったおかげで俺だけは助かった。

意識が戻つて、周りを見渡す。だが、見知らぬ部屋で家族はいない。理解していた。家族は死んだのだと、だが心が許さなかった。

それからこの村の村長さんにお世話になっていたが、心に余裕のない俺は塞ぎこむ。

塞ぎこんで1週間後、いつものようにぼうつとしていたところに少女があらわれる。

「やつほ、翔吾・・・じゃなかった、カイト君」
その声の方に顔を向けるが、すぐに元に戻す。

「あちゃゝ・・・思った以上に重症だね、こりや・・・。早めに来てよかったよ」

うんうん、と頷きながら言う。
しかし、反応を示さない。

「うん、これは好都合。じっとしててね」

少女はそう言って、俺の額に手を当てる。

「そりゃ」

気の抜けた声とともに俺は頭の中に流れ込んでくる情報量に戸惑う。何だこれは……。

「んー、やっぱりスペック最強はすごいね。前世の記憶を戻してもな
んともないなんて」

いや、すこしこれは気持ち悪いぞ……。

「どう？少しは別のことに目を向ける気にはなった？」

その言葉に俯く。さっきまでよりは気は楽になった。それは前世で
の俺の経験のおかげだろう。だが、

「……もう少しだけ、時間があるな……」

やはり、目の前で、自分のせいで死なせてしまったことはなにより
も重くのしかかる。

「うん、それでいいよ。じっくり考えて答えを出してくれたまへ」
そう言いながら俺の頭をなでる。あの時はこいつの方が小さかった
のに……。だが、心地いい。

俺は家族を失って初めて笑みをこぼす。それはとても、とても小さ
なものだったが、神の少女は納得したようだ。

「それじゃ、元気でやるんだよ？」

その言葉に、頷く。それを見届け、神は元の場所へと帰って行った。

俺は少女のいたところを見つめ続ける。

そうだ。俺はみんなの分も生きなければならぬ。みんなも言っていた。いつまでも悲しむな、いつも一緒にいると。

そう考えると、急に元気が湧いてきた気がした。まだ、悲しみからは抜け出せていない。だが、これで1歩前へ進める気がする。少しずつでも進んでいこう。

まずは村長さんに挨拶だな。そう思って俺は扉を開く。それは、新たな世界への扉にも見えた。

幼き日々（後書き）

はい、最後の方めちゃくちゃシリアスですね・・・。

しかし！筆者は楽しいことが大好きなのでこれからはそうそうでないことでしょう。

急展開ですが、また次回をお楽しみに！。

再会する2人（前書き）

眠い目こすりながら仕上げました。何か変なところがあるかもしれませんのでもしあればご指摘をよろしく願います。
それではお楽しみください。

再会する2人

俺が記憶を取り戻してからさらに6年。俺は、家族のことを完璧にふっ切ることができた。

まだ忘れたわけではない。だが、いつまでも悲しみにくれている何も変わらない。そう思い、神がきたときから俺は行動を始めた。

そのうちの1つが畑仕事。最初はよそよそしくしていたが、一心不乱で作業に集中している俺を見て、少しづつだがみんなとの距離も縮まり、今では、家族のように扱ってくれる。

他にもお年寄りの手伝いや、配達、家屋や家財道具の修理、はたまに子供たちの遊び相手など、みんなの笑顔が見れるようにがむしやうに頑張った。

最近では、村の近くにある森の魔物退治をしている。

記憶とともに、チートの魔力を手に入れた俺は、それを扱う練習をしてある程度扱えるようになり、さらに、オリジナルの魔法も作り上げておいたので、試しておきたかったのだ。

今日の獲物はコボルドと呼ばれる犬のような頭を持つ亜人の一種で腕と足の筋肉は発達しており、目が赤く夜目が利き、嗅覚は犬並みだが、力も知能もそこまで大した事はなく、今の俺でも簡単に倒せる程度だ。

さて、そんなこんなで目の前にはコボルドが5匹。まあ、妥当だな。とりあえず、今日試したいことをすることにしよう。

そう思い、スペルを唱える。

「トレース・オン
同調・開始」

その言葉を合図に5匹のコボルドが襲いかかる。

「トレース オン
投影、開始」

その瞬間、両手には二本一対の陰陽の夫婦剣が握られる。

干将・莫耶
かんしやう・ばくや

この魔術を使うものがもつとも愛用した剣である。

1匹が持っているこん棒で横なぎにしてくる。それをしゃがんで避け、上方へと切りつける。

その一太刀で胴体に大きな裂傷ができ、そのまま倒れる。

残りの4匹のうち、2匹が左右から襲いかかってくる。右のやつが縦に切りつけてくる。それを左の剣で受け流し、その流れの中で胴体に右の剣を突き刺す。

そのまま、腰をひねりつつ回し蹴りを放ち左にいた奴のこん棒を蹴飛ばす。そして、その胴体へ剣を突き刺し、一言。

「ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想」

その瞬間、突き刺した剣が爆散。その瞬間に、巻き込まれないところまで退避。そして離れたところで、詠唱。

「散在する獣の骨！尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪、動けば風、止まれば空、槍打つ音色が虚城に満ちる！」

手のひらを残りの土煙りの向こう側にいる2匹に向け一言。

「破道の六十三『雷吼炮』！！！！」

その瞬間、大きな爆発が起こり、コボルドもとともに、周りの木も

吹き飛んだ。

うん、威力も申し分ないな。

さすがに、やりすぎた感が否めない気もするがまあ、そこは誤魔化すしよう。

さて、今日の昼ご飯はどうするかなあ・・・。

同時刻、トリステイン魔法学院

「我の運命さだめに従いし使い魔を召喚せよ」

ドリル状の巻き髪をした少女が唱えた瞬間、その足元に蛙があらわれる。

「よろしい、ミスモンモランシー。君の属性は『水』に決まりだ」
側頭部にしか髪のない教師が少女、モンモランシーへ告げる。

「はい！」

返事をしたとき、後ろで待機している生徒の中の一人が、

「やったねー！愛しのモンモランシー？」
とび跳ねながら言う。

「では、次が最後だ……ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

教師はそう残ったピンクブロンドの髪を持つ少女へという。

「はい！」

しゃきつとした返事をして前に出る。

「できるのかしら」

「何を召喚するのか・・・見物だな」

「どうせまた失敗するよ」

周りの生徒たちは本人に聞こえない程度の声で言う。

陰口をたたかれているのはわかっているので、それを無視し、精神を落ちつけるため深呼吸をする。

深呼吸を2、3度行つた後、顔をあげ詠唱し始める。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、五つの力を司るペンタゴン、我の運命に従いし・・・使い魔を召喚せよ！」

場所は戻り、カイトのいる森

「何だこれ？」

目の前に突如現れた魔法陣を見つめ言う。

な〜んか、どっかで見たような・・・

もう少し詳しく調べるため近づいた瞬間、

「おわっ！」

抗いようもないほどの吸引力で引っ張られる。

なんとか耐えようとするも・・・

「腹減った・・・あ・・・」

途中であってしまった腹の虫のせいで力が抜け、地面から体が離れる。

「うわぁー！ー！ー！」

そして、魔法陣の中にカイトは吸い込まれていった・・・。

ぼんっ！！！

ルイズが詠唱し終えた瞬間爆発が発生する。

「どわっ！！」

煙の中に何か落ちた音と人の声らしきものが聞こえる。

やがて煙が消えるとそこには・・・、

髪と目がエメラルド色をした女顔の少年が座っていた。
服装から見ると平民である。

しかし、ルイズはその姿を見ておぼつかない足取りで近づいて行く。
いまだ尻をさすっている少年へ向けて一言。

「カイト・・・兄・・・？」

「いった・・・」

マジで尻が割れてしまう・・・。こんな勢いで尻もちを着いたのは
いつ以来だろう。

そんなことを考えていると、上から声がかかる。

「カイト・・・兄・・・？」

その声にはっ、と顔を上げる。そこには・・・、

ピンクブロンドの髪をして、背はあまり変わらないであろう美少女
が立っていた。

俺はこの子を知っている。だから、その名前を告げる。

「ルイズか・・・？」

カイトに名前を呼ばれた瞬間、ここが学校であることを忘れて飛び

つく。

「今までどこに行ってたの！土砂崩れに巻き込まれたって聞いて本当に心配してたのよ！」

会えなくなつて6年。ためにためてきた思いをぶちまける。

それを受けたカイトはまぬけな顔をしていた。その顔を見て、

「ほんとに・・・心配したんだから・・・」

無事だったことを、そして、再会できたことの喜びからカイトの胸に顔を埋めて泣くのを耐える。

せつかく再開したのに泣き顔で迎えなくなかった。

そんな心境を察したのか、カイトは彼女の頭を撫で始めた。

うゝむ、最終的にどういう状況なんだ？

ルイズの髪の毛のやわらかさを感じつつ状況把握を始める。

たしか、目の前に現れた魔法陣に吸い込まれたんだよな・・・あれどっかで見たことあるような・・・あつ！そうだ、あれはサモン・サーヴァントの魔法陣だ。漫画で確か読んだな・・・あれ？主人公はどこに行つたんだ？まさか・・・あの神のせいか？だとしたら次あらわれたらぶつ飛ばしてやる・・・。

いつの間にか神への呪詛に変わっていたカイトであつたが、

「ねえ、カイト兄」

ルイズの一言で現実に戻される。

「じつとしてね」

あゝ、確かこの後は・・・どうだったっけ・・・。

そう考えているうちに儀式は進んでいく。

「五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、我の使い魔となせ・・・」

額に杖を当てられ、詠唱されていることにも気付かず、考え込んでいる。

その様子にため息をつきつつも、どこか嬉しそうな顔で近づき・・・キスをする。

その感触でようやく現実へと帰還したわけだが、その行為で再び思考の海へと落ちていく。

そうだ、コントラクト・サーバントはキスによってするんだったな。まあ、相手がルイズだしいつか。

今回は早めに現実へと帰還する。すると、左手が痒い。見れば、ルーンが刻まれている。

えゝと・・・《魔法を操る小人》？なんで読めたのかはわからんが、人が気にしていることを・・・。

「ほおゝ・・・随分珍しいルーンだな」

教師は俺の左手のルーンを見る。というか、いまさらだが外野がう

るさい・・・。

その中の一人が大きな声で言う。

「平民を召喚するなんて、さすがは《ゼロのルイズ》だな！」

その言葉を聞いた瞬間、ルイズは拳を握りしめ、唇を噛む。その行為だけでルイズかどう思っているかを察し、瞬歩を使いその目の前まで行く。

「おい・・・それ以上なんか言ってみろ。つぶすぞ？」

周りには聞こえないように、しかし、きちんと恐怖を持たすようにドスの利いた声で言う。

それだけで、その場に崩れ落ちる。それを見た瞬間、速攻でルイズの隣に戻る。

「それでは、これにて儀式は終了だ。各自寮へ戻るように、解散」
教師はそう言って校舎へと戻っていく。

その言葉をきいた生徒たちは飛んで帰っていく。しかし、ルイズは飛ばない。その様子をじっと眺めているだけだ。

全員が帰った後、俺は声をかける。しかし、やはり敬語に直した方がいいのか？

いいだろうな。よし、早速実行。

「それでは、我々も戻りましょう、ご主人様」

我ながら完璧。久々だと変になりそうで怖いんだよな・・・。

しかし、お気に召さなかったのか不機嫌そうな顔でルイズは言う。

「敬語なんて使わないで。カイト兄はカイト兄なんだから」

その言葉にほつと安堵をつき、ルイズの手を握る。

「じゃあ、戻るとしようか、ルイズ」

ルイズは笑いながら手を握り返し、

「うん、いこ！カイト兄！」

俺を引っ張って寮の方へと向かっていった。

再会する2人（後書き）

どうでしたか？一気に本編まで進めていってしまいましたが・・・。
微妙に暗い感じが目立っているので次回からは明るくできるよう精
いっぱい努力したいと思います。

それではまた次回もよろしく願います。

使い魔の仕事

ルイズと使い魔の契約を結んだ後、俺はルイズに連れられて部屋に入る。

部屋に入った後、椅子を勧められたが俺は床に座るほうが楽なので床に座る。

ルイズが椅子に座ったのを確認し、俺は口を開く。

「なあ、ルイズ。何で俺はここにいるんだ？」

確か、使い魔は召喚したメイジの属性の幻獣が呼び出されるはずだったか・・・。

「わからない・・・。でも、カイト兄が召喚されたことは事実だし・・・」

ルイズは俯きながらだんだん小さな声になっていく。

それを見た俺は立ち上がってルイズに近づき、

「そうか、わからないならいいさ。それよりも、またルイズに会えてうれしいよ」

ルイズを安心させるために頭を撫でながら言う。

撫でられている間、ルイズは昔のように気持ちよさそうに目を細めていたが、はっとした表情になり言う。

「カ、カイト兄！わたしもう子供じゃないんだからっ！」

その言葉と同時に立ち上がるとしたのだが、俺はそれを止め言う。

「まあ、いいじゃん。それにルイズの髪が気持ちいいからもうちょ

つとだけ・・・な？」

そう言うところ、ルイズは顔を赤くして俯く。

ルイズの髪を堪能し終えた俺は床に座りなおす。手を離れたとき残念そうな顔に見えたのは気のせいだろう・・・。

「それで、俺はこれからどうすればいいんだ？」

使い魔の存在は知っていても、何をしているのかを知らないのだからルイズに聞く。

ルイズは俺の質問に指を1本立てて言う。

「え」と、1つ目は主人の目や耳になる能力を得るんだけど・・・それは無理みたいね」

「そうか・・・他には？」

ルイズは2本目の指を立てて言う。

「2つ目は主人の望むものを探してくるの」

「それなら、場所さえわかれば俺にも可能な仕事だな」
「できることが1つでもあつてよかった・・・。」

しかし、ルイズは難しい顔をして、言う。

「でも、秘薬とかがあるのは危険なところばかりだから・・・カイト兄には危険な目にあつてほしくないし・・・。」

「まあ、ルイズの心配してくれる気持ちはうれしいけどさ、俺はルイズの使い魔だし、それに俺だってこの6年間無駄に過ごしてわけじゃないぞ？」

チート能力も手に入っただし。

「でも・・・」

しかしルイズはまだ泣く。

その様子を見て俺はため息をつき言う。

「わかったよ。そのうち俺の強さも見せてやるし、そのときに考え
てくれればいいよ」

このまま言い合ってたなら晩飯も食えなくなっちまうからな。あゝ、
昼ごはん食いたかったな・・・。

俺の言葉に少し納得してない様子だったが、ルイズはそのまま説明
を続ける。

「最後に、これが一番大切なことなんだけど、使い魔は主人を持て
る能力を駆使して敵から守るの」

そんなこと強制化されんでもやるっての・・・。というか、この3
つだけかよ・・・。少ないな。

「なあルイズ、他に俺のやることってないのか？さすがに少なすぎ
ると思うんだが・・・」

「え？でも使い魔の仕事はこれだけしかないわよ？」

俺の言葉に首をかしげながらルイズは言う。

「それは使い魔が普通幻獣だからだろ？俺は人間なんだし・・・そ
うだな、まずはこの部屋でも掃除させてもらおうか」

ふっふっふ、徐々に血が騒ぐぜ！

「えっ！？ちよっとカイト兄！」

「はいはい、そうと決めたら即実行！しばらく時間つぶしてくれな」

俺に抗議しようとするルイズの背中を押して部屋から出し、鍵をかける。ドアの外側が騒がしい気がしたが、無視！まずは窓でも開けて換気するかな。えっと、箒は・・・面倒だし、投影開始。^{トレースオン}準備は完了。さて、始めるか！

ふう、こんなもんかな。あれから、数時間。真上辺りにあった太陽も傾いてまわりを赤く染めていた。

久々に集中してやりすぎたな・・・。

まあ、こんなこと思ってもしょうがない。さっさとルイズを探しに行こう。

ぐう・・・。

・・・飯も手に入れないとな。

さて、内部構造を把握できてない人間が適当に歩き回るとどうなるか。

・・・お分かりですね。

わたし、山代翔吾ことカイトは迷子になりました・・・はあ・・・。

適当に歩き回ればどうにかなるかと思ったけど・・・ダメだったな。

それから10分。どうしようかずっと考えてたわけだが・・・いい案が思いつかない・・・。

せめて誰か通りかかってくれたらいいのに・・・。

そう思った瞬間、突然服の袖を引っ張られた。
誰かと思い、そのほうを向くと蒼髪のルイズと同じくらいの背を持った少女がいた。

服装はルイズと同じく魔法学院の服なので貴族と判断し、スイッチを切り替え接することにする。

「何か御用でしょうか？」

そう言っと、蒼髪の少女は俺の目を見ながら言う。

「あなたは何者？」

その言葉に首をかしげる。はて、何のことを言ってるのだろうか。

「どういう意味でしょうか？」

ぶっちゃけこの世界ではただの平民に過ぎない・・・チート能力付きではあるが・・・。

「あなたから漏れている魔力。平民ならあり得ない」

そっちか。というかばれないようにしてたつもりだが・・・まだ甘かったか・・・。

「もう一度聞く。あなたは何者？」

はあ、どう答えりゃいいんだ？

「その辺は今度つてわけには・・・？」

その言葉に少し考える仕種をする。そして、考え終わったらしく口を開く。

「いつ？」

ん、さすがにルイズには先に説明しないといけないだろうし・・・

。

「今日の夜なんかはどうでしょうか？」

なんとかそれまでには信じられなくとも説明くらいはできるだろ。

「わかった」

なんとか了承された。

「それでは・・・えゝお名前は？「タバサ」ではタバサ様、後ほど・・・」

そう言つて適当に決めた方向へ足を進める。

「どこに行くの？」

タバサに声をかけられる。どこと言われても・・・。

「それはご主人様のもです」

こうとしか答えられん・・・。

「そつちは女子寮じゃない」

マジ？どうしよ・・・部屋にも帰れないとは・・・。

「こつち」

そう言つてタバサは歩き出す。どうやら案内してくれるようだ。

俺はそれについて行く。

それから１０分ほどでルイズの部屋の前に着く。

「ありがとうございます」

そう言いながら頭を下げる。はぁ、敬語めんど……。

「敬語じゃなくてもいい」

俺の心が読まれたのか、はたまた顔に出ていたのかは分からないがタバサはそう申し出てくれた。

「そうか？ならお言葉に甘えようか……またあとでな」

速攻で敬語をやめタバサに向かって手を挙げながら言っ部屋のアノブに手をかける。

すると、タバサも無言、無表情ではあるが手を振り返してくれた。その様子に少し微笑みながら部屋へと帰還する。

部屋に入ると腕を組み、ベッドに腰掛けているルイズがいた。何故だろう、笑顔で座っているのにめちゃくちゃ怖い……。下手な睨みよりも怖い……。

「で、カイト兄。今までどこに行ってたの？」

笑顔を浮かべたまま俺に言う。その笑顔をやめてくれ……。

「掃除が終わった後お前を探しに行ったんだよ。どうやら入れ違いになったらしいな」

肩をすくめて言う。まあ、迷ってたのが本当なんだけど……。ルイズは何かを言おうとしていたが諦めにも似たため息をつき、

「カイト兄は前からこんなだったわね。久しぶりだから忘れてたわ」という。む、それはどういう意味だ？

その瞬間、
ぐう

「・・・」

「・・・食堂に行きましょ？」

「よろしく・・・」

という事で俺たちは食堂へと足を運ぶことにした。

使い魔の仕事（後書き）

どうでしたでしょうか。次回はルイズ、タバサへ自分の秘密を暴露します。

秘密（前書き）

なんとなくて2日連続投稿です。そして、この話からキャラの性格が崩壊していると思います。

そう言うのが嫌な方はここで引き返した方がいいでしょう。それではどうぞ。

秘密

俺の腹が限界で、ついでに夕食の時間になったので俺とルイズは食堂へと向かうことにする。

食堂に入っただけの一言、でけーな・・・。

いふなれば有名なファンタジー小説『ハリー・ポッター』の大広間だな。長机は3つしかないが。

というか、無駄に金かけすぎだろ。もつと別のところに使えばいいのに・・・。

「どうしたのカイト兄？」

おつと、また考え込んでしまったな。見ればルイズはもう席について俺に手招きしていた。

その様子に苦笑いを浮かべつつルイズのもとへ向かうが、

「あの平民だれ？」

「ほら・・・今日”ゼロのルイズ”が呼び出した使い魔だよ」

「あれが？でもちよつとかわいいわね」

「ふん、どうせそこら辺から連れてきたんじゃないのか？」

途中最後のセリフを言った奴の背後にまわり、

「俺のことは何言おうが構わないがルイズのことはバカにするなよ？今度俺が聞いたら・・・この世にいることを後悔させてやるからな」

と、脅しをかけておく。可愛い妹が侮辱されるのは嫌だからな。

で、その彼がこっちの存在を確認する前にルイズの横まで瞬歩で移動。その間たった3秒弱。

「さ、カイト兄食べよう?」

ルイズはこっちを向いて言う。が・・・、

「ルイズよ、俺はどこで何を食えばいいんだ?」

さすがに貴族と同席するのは周りがうるさいだろうし。食い物だつて1人分しかないし。

「ん? はい、あゝん」

そう言つてルイズは俺に美味しそうな一口サイズの肉が付いたフォークを向ける。

「エゝト、ルイズサン?」

これはどんなリアクションを取るべきなんだ?

俺がどう対処するか思案しているうちにルイズの顔がだんだん赤くなり、

「早く食べてよ!」

と言つて急に俺の口の中に突っ込んだ。急なことだったので一瞬吐きだしそうになったがなんとか耐えて突っ込まれたものを食べる。

うまい。ここの料理長は化け物か(笑

それから、ルイズが差し出してくる食べ物もらい、今日の食事は終了。明日からは調理場借りて自分で作れんな・・・。

食堂から帰る途中、タバサが前から歩いてくる。あっちも俺に気付

いたのか、こちらに顔を向ける。

さすがに、ルイズの前で大っぴらに話すのはどうかと思ったので、某魔砲少女が使う念話でタバサに話しかける。一応あっちも魔法使いなんだし。

《後でルイズの部屋の前で待つてから迎えに来てくれな？》

擦れ違い様にそう言うと、タバサは驚いた顔でこっちを見る。その顔を見て、してやったり。と思いながらルイズとともに部屋に戻って行った。

部屋に戻り、ルイズがベッドの上でくつろぐ。このことはだれにも聞かれたくないので、結界を張り、部屋の中のことが外からは認識できないようにする。

準備完了。さて、説明でもしますかね。

「ルイズ」

とりあえず呼びかける。

「何？カイト兄」

ルイズはこっちに顔を向ける。

「いいか、これから信じられないような話をする。実際聞いても信じられないだろう。だが、それでも記憶の片隅くらいには置いておいてくれ」

できる限り真剣な声と表情で言う。

「どういうこと？」

俺の言ったことと表情に疑問を持ちながら言う。

それから、俺の前世、今の能力等を話す。

これらを聞いたルイズは信じられないような顔をしていたが、真剣な俺の表情に嘘ではないと判断したのか、信じる。ということは言ってくれた。たぶん、本当に信じてはないだろうけど。

ルイズへの説明も終わったので、ちょっと外へ出てくることをルイズに言って許可を取る。

そのことに関してはルイズも許可してくれたので、礼を言い、タバサに念話で、

《迎えに来てほしい》

といい、部屋からでる。

すると、そう時間もかからずにタバサは来て、できるだけ人の来ない場所に案内してもらう。

タバサに連れられてきたのはヴェストリの広場と呼ばれるところだった。ここでも結界を張る。

ルイズは気が付かなかったが、どうやら普通なら気づくらしく、タバサは珍しそうに周りを見渡していた。

さて、こっちにも説明しますかね。

こっちにもルイズと同じような説明をする。すると、

「あなたの力をみせてもらう」

等と言ってこっちに杖を向けてくる。この子はなにを言ってるんだよ・・・。

「いく・・・氷の・・・矢・・・」

っておい！いきなり何十本もつららを出すな！まだ準備もできてないのに・・・。

「トレスオン
投影開始」

とりあえず、あれだな、盾だな。ちょうどいいのあるし。

「・・・」

そう思っていると無言でつららを飛ばしてくる。というか、無言だとほんと怖いな。

「ロ
熾天覆う七つの円環」
アイアス

その時、右手の中に桃色をした七枚の花弁の蕾が現れ、七枚の花弁の如き守りは花開く。

この花弁一枚は古の城壁一基に匹敵するので、それなりに高位の魔法なのだろうが、一枚も破られることはなかった。

タバサの攻撃を防いだ後、盾を消す。タバサは信じられないような顔をしている。

まあ、反則なものな、この力。

「これで、信じてくれたか？」

これだけ見せれば十分理解してくれるだろう。

「うん・・・」

俺の予想も当たったようで、信じてくれるようだ。しかし、始め見てから思っていたんだが・・・、

「タバサ、お前はなにを背負っているんだ？」

俺の言葉にはつとした顔になる。

こいつの目は何か悲しみに渦巻いている。そう、家族を失ったあの時の目に似ている気がする。

できるなら、助けたい。せめて周りの人だけでも幸せに笑っていてほしい。あの頃から思っていることだ。

しかし、タバサは黙ったまま。その様子に俺はため息を吐きながら言う。

「まあ、あまり一人で背負うな。お前はまだ子供なんだ。周りを頼れ。俺はどんなことがあるうともお前の味方だ」

そして、言い終えた後タバサの頭に手を置き撫でる。

その行為にも驚いた顔になっていたが、やがて、俺の胸に寄りかかり嗚咽をあげて泣き出した。

「じゃあ、また明日な」

タバサが落ち着いたことを確認し、俺はそう言って寮へ向かう。

「また明日・・・」

タバサもそう返す。

その言葉に微笑みを浮かべながら、後ろにいるタバサに向かって手を挙げた。

秘密（後書き）

次回はシエスタとの出会いです。

朝 前篇（前書き）

今まで放置しててすいませんでした……。これからの展開をどうしようかと悩んだり、ゲームしたり、フットサルしたり……。マジですいません……。

今回は短いですが、明日に続きをあげたいと思います。どうか見捨てないで見ていただけると嬉しいです。
それでは、どうぞ！

朝 前篇

翌朝、まだ日も昇らぬ頃、カイトは目を覚ました。

それから10分程ぼーっとしてから今の状況を思い出した。
その後、そのまま気配と音を消してとある場所へと向かう。

やってきたのは昨夜タバサといたヴェストリの広場。その中心に立つてポケットから銀色の龍の頭にリングが付いたアクセサリを取りだし、自らの分身を作り出してアクセサリを渡す。

受け取った分身は、アクセサリを前に掲げ言葉を発す。

「デイメンションARM：『修練の門』！！！」

その瞬間、カイトの足元に門があらわれ、その中にカイトは落ちた。

そして、カイトが門の中に消えた後、物陰から姿を現すものがいた。
・・。

「よし、着地成功！」

そう言つて、両足をそろえて体操の選手のように両手をあげて着地する。

うむ、きれいにできたな。さて、トレーニングでも始めようかね。

そう思つた後、自分の影から真つ黒なカイトがのっそりと立ち上がる。

二人の間には、静寂な時が流れ・・・近くにある木から葉が落ちた瞬間、両者がぶつかり合った。

お互いに得物なしの無手のぶつかり合い。黒カイトが鳩尾を狙えば、それをカイトがはたき落とし、瞬時に顔面に掌底でのカウンターを決めに行くが、黒カイトはそれをよんでいたかのように軽くしゃがんで避けた後に足払いをかけに行く。

しかし、カイトはそれを後退することで回避する。そして、すぐにぶつかり合う。というか、お互いの繰り出している拳も足も最早残像ですら起こらないスピードで応酬をしていた。

それを5時間ほど続けていると、不意に念話をするものがいた。

相手は自らが作つた分身だ。

《おい、カイト。お前の知り合いが訪ねてきたんだがどうするんだ？》

誰だろ・・・こんな朝早くに暇だねえ・・・。

《名前は？》

聞いてから判断するかね・・・。

《タバサだそうだ》

タバサか……。ふむ……。

《何の用なの？》

タバサなら普通に対応してもいいだろな。

《お前が見えたから付いてきたんだと》

普通のやつならわからん程度に気配は消してたつもりなんだがな・
・。やっぱあいつの抱え込んでるものが原因か？

《ふーん、なら中に入れてもいいよ》

まあ、興味本位で付いてきたんだろーし、この空間のことをどう思うかな。

《りょーかい》

我が分身がそう言った後、後ろに人が落ちてくる気配を感じた。さすがと言うべきか、初めてにもかかわらず着地に失敗せずに華麗に降り立った。

「10点!!」

その着地に点数をつける。

しかし、タバサは俺の発言の意味がわからなかったらしく、可愛く首をかしげている。

あゝ、可愛いなあ……。と、物思いにふける場合じゃないな。失礼だし。

「どうしたんだ、タバサ。俺の後に付いてきたらしいが……」

「こんな朝早くに何をするのかと思って。でも、この空間は何？」

「毎朝やってる鍛錬のためだよ。この空間は『修練の門』と言ってな、外の1/60の遅さなんだ。だから、俺は外の時間で毎朝1時間こん中でやってるんだよ」

とまあ、説明してみる。

めちゃくちゃアバウトな説明だったが、理解はしてくれたらしく頷いた。

「さて、この空間のことはわかってもらっただけ……どうする？俺はまだ日課を続けるけど」

「見て行く」

簡潔な答えをありがとう。

「なら、あそこくらいまで離れてくれ」

そう言いながら30メートル位離れたところを指差す。

タバサは頷いてから俺が指定した場所まで歩いて行った。

タバサがたどり着いたことを確認してから俺はタバサの周りに結界を張っておく。一応念のためにね。

さて……ギャラリーもいることだしタバサの得意な属性の魔法でも見せておこうかな。

何をするかを決定し、実行するために空中に飛ぶ。

肩慣らしに初級魔法からいってみよう。

まずは・・・アイスニードル。

すると、全方位につららがカイトの姿が見えないくらいの数現れる。

そして、

「発射」

一言でつららが一斉に発射される。そして、地面に着弾したと同時に、20メートルほどのクレーターを1本1本が作った。威力だけで言うなら中級以上上級以下と言ったところである。

その光景にタバサは声にもならない状態で見ていた。

そんなことは露知らず。やりたいことを終えて地面に降りる。すると、目の前に魔法陣があらわれる。

カイトはその魔法陣を見ると、それに近づいていく。すると、

「カイト!!」

幼女が飛び出し、カイトに抱きついた。

朝 前篇（後書き）

衝動でオリキャラ出現・・・名前も決まってません。よければ適当に感想などと一緒に名前を出していただけるとありがたいです。出て間もなく、どんなキャラかもわかってませんが、名前にあったようなキャラとして扱いたいと思います。それではまた次回もよろしく願います。

朝 後篇（前書き）

ふう、ようやく更新です。この一週間は地獄でした・・・。
さて、一応幼女の説明？も今回あります。しかし、名前はまだありません。

まあ、こんな感じでグダグダな文の極みですがどうぞ！

朝 後篇

T A B A S A S i d e

突如現れた魔法陣からカイトに飛びついた少女はカイトの胸に頬をこすりつけ、カイトも頭を撫でていた。

突然の事態でフリーズしていた私だったが、そう時間もかけずに動き出す。向かう先はカイト。

「その子は？」

私の声にカイトは反応して、こっちを向いた。

S i d e o u t

「その子は？」

そう言えばタバサは知らなかったな・・・。

「紹介しよう。俺の召喚獣・・・いや使い魔の方がこっちでは伝わるかな？まあ、そんな感じのやつで、名前はバハムートだ」

俺の言葉を聞いて、かなりびっくりしてる。今までで一番かな？でも魔法使えるんだからこのくらいわかると思ったけどな。

「カイト、妾は召喚獣であろう？」

おおう、こいつには説明してなかったな。

「こつちの世界じゃ使い魔って扱いなんだよ。まあ、別に召喚獣でも変わりはないけど」
ルーンとか刻む以外には。

「ふむ・・・そうか」

どうやら納得したらしい。再び顔を胸に埋める。その瞬間、すつこい寒気が背筋を走った。顔をあげればそこには・・・無表情なんだけどなんかキレてるっぽい空気を纏ったタバサがいた。

「・・・」

無表情・無言で睨むのはやめてほしい、ほんと。めっちゃ怖いからでもなんでキレル？どこにそんな要素が？んゝ・・・。

それから10分。

わからん・・・何が原因だ？バハムートか？だとしたら・・・ってなんでバハムートが俺に抱きついてたらそんなに不機嫌に？まあいい。こういうときは・・・、

頭を撫でる。

手を置いた瞬間、ビクッ、となったがすぐに落ちついた雰囲気になつてくれた。助かった・・・。

撫で続けること15分。

そろそろいいだろう。そう思い、タバサから手を放しバハムートも抱きつくのをやめさせる。

二人ともそんな不機嫌になるなよ……。マジで。

「ほら、修行するぞシユギヨ……！」

無理やり場の雰囲気を変えようとしてみた。

二人とも若干納得のいつてない顔をしていたがカイトのいうことをきくことにした。

「なら今日はこのくらいにしようか」

あれから外の時間で1時間。それなりに練習をした。今だ完璧には扱いきれない力も徐々に完全に近づいて行っている。まあ、今のままでも別にやっていけるけどな。

二人は俺の言葉にうなづく。

「じゃ、バハムートは待機していてくれ。必要な時には呼ぶから。タバサは一緒に外に行くぞ」

そう言うとバハムートは来たときの魔法陣を出現させ、あちらの世界に帰っていく。そして、それを見送った後にタバサを連れて外に出た。

女子寮に戻り、タバサを部屋に送り届けルイズの部屋に戻ってきた。
ちなみに、顔を洗うための水は準備万端だ。

「ほら、ルイズ起きろ」

ルイズの体をゆする。すると、

「んゝ誰・・・」

寝ぼけながらも起きてきた。

「おはよ、ルイズ」

笑いかけながらあいさつ。これ基本ね。

「カ、カイト兄！？な、なんで!？」

まだ寝ぼけているのか俺がここにいる理由を覚えてないみたいだった。

「おいおい、自分で召喚したんだからさ・・・」

肩を落とし、ため息を吐く。まったく・・・。

「あ、そうだった・・・。うん、おはようカイト兄」

どうやら思い出してくれたらしい。よかったよかった。

「うむ。なら、そこに水を汲んで来てるから顔を洗っとけ。そして、洗濯物をだせ」

左手で桶を指差しつつ、右手で催促する。

「な!?!カイト兄はそんなことしないでいいの!」

顔を真っ赤にしながらルイズはいう。と言われても・・・。

「でも俺の仕事がなくなるじゃん・・・」
ただでさえ何もなくて暇なのに・・・。

「いいの！！それよりも着替えるから廊下に出といて！」
俺の言葉を遮るように叫んでから俺を廊下へと押し出した。ま、それだけ大人になったってことかな？

廊下でぼくとしてルイズを待っていると、

「あら、あなたがヴァリエールが召喚した使い魔？」
なんか、背の高くて一部成長の著しい人がきた。

くそ、背が高いなんてうらやましい・・・などと考えつつ返答をすることにする。

「はい。そうですが・・・あなたは？」
貴族であることしかわからない・・・。

「礼儀正しいのね。わたしはキュルケよ」
ふむ。その辺の貴族とは違って普通には接してくれるみたいだな。

「キュルケ様ですね、わかりました。私めはカイトと申します。以後お見知りおきを」
できるだけ恭しく礼をしてみる。あ、やっぱり肩こるなこの態度は・・・。

「そんなに堅くなくていいわよ。普通に接して頂戴」
お、ありがたいお言葉！！

「そうか？なら今後はこう接することにさせてもらう」
いいと言われたので速攻で敬語をやめる。

「そうね、よろしく頼むわ。後、この子が私の使い魔よ」
キルケは俺の言葉遣いに対しては何も言わずに傍にいらしい使い魔を呼んだ。ん？こいつは・・・。

「サラマンダーか」
そう言ってしゃがみ込み顎を撫でる。猫と同じ要領で。サラマンダーも目を細めているところから気持ちがいいのだろう。

「あら、知ってるの？随分博識な平民ね」
どうやら、普通の平民なら知らないらしい。これはまずった・・・。

「ええまあ・・・。風のうわさで少し」
とつさに嘘をつく。ほんとに力試しでドラゴン倒しに火山に行ったとき見かけたことがあるだけだ。

「そうなの・・・。それよりも見て？この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ？ブランドものよー。好事家に見せたら値段なんかつかないわよ？」
キルケはどうやら嘘にだまされたようだ。一変してサラマンダー・・・フレイムの自慢を始めた。何故こいつの名前がわかるかというと、

『お前名前は？』

『む？私の声がわかるのか？』

『ああ、色々事情があつてな』

『そうなのか。私はフレイムだ』

『そうか。俺はカイトだよろしくな』

『こちらこそ、よろしく頼む』

という会話を顎を撫でている間に済ませておいた。力を手に入れてから気づいた能力の一つだ。だんだん自分が人外な気がしてきた・・。

そんな感じで話していると後ろのドアが開く音がした。どうやら準備は済んだらしい。

「なつ、キュ、キュルケ!？」

朝の挨拶としてはふさわしくない声でルイズは叫ぶ。

「あら、おはよう。ルイズ」

それに対してきちんとした挨拶を返すキュルケ。

「あんたがなんでここにいるのよ!！」

ビシッ、といった効果音が付きそうな指の指し方でキュルケの方に向ける。

「なんでって、あなたの隣の部屋なんだから当たり前でしょう」
ひょうひょうといった感じで返す。

「ならなんでカイトに・・・カイトと話してるのよ!」

「そりゃ、興味がわいたからよ。人間の使い魔なんて初めてなんだし」

それから、二人の言い合い———というかルイズが一方的に叫び、それをキュルケが軽く流す。といった感じではあるが———が始まった。

その間、俺はフレイムとじゃれていた。

それから少しして、二人の言い合いは終わった。

「それじゃあね、ルイズ、カイト」

そう言ってキュルケは去って行った。俺もフレイムから手を放し別れた。

「よし、じゃあルイズ。俺もちょっと行くところあるから先に行つてくれ」

「え？でも朝ごはんは？」

不安そうな目でこっちを見るルイズ。

「さすがにあれは恥ずかしすぎるし、これからそれを調達しに行くんだよ」

主に森で。

「・・・そう。なら、今日の授業には使い魔を連れて行かなきゃいけないから早めに戻ってきてね」

少しテンションが下がっているが許してくれた。

そんなルイズの頭を俺は撫でる。ルイズも気持ちよさそうに目を細める。

「じゃ、ちょっと行ってくるな」

10分ほどルイズの髪を楽しんでから森へと向かうことにする。

「うん。いつてらっしやい」

機嫌が直った感じでルイズも返事をしてくれた。よし、朝飯の調達といきますか。

それから30分。俺は森から帰ってきた。今日手に入れた食材はハシバミ草に兎数匹、鳥を数匹、魚数匹だ。しかし、ここで問題発生。厨房どこにあるか知らん・・・orz

別にこの辺で適当に調理をしてもいいのだが、やっぱり料理をするならきちんとした場所がいい。ということでその辺を歩き回って探すことにした。

見つからん・・・orz

ここ広すぎんだよ・・・。誰ともすれ合わないし。どうしようか・・・。

そんな風に考え込んでいると、

「どうしたの？」

後ろから声をかけられた。声の方を向いてみると、タバサ&韻竜がいた。

「いや、厨房は何処かなあ〜と思ってさ」

そう言つて手に持った今日の朝飯となるものを見せる。すると、なんかタバサの目が光った・・・ような気がした。

「こつち」

そう言つてタバサが俺の手を引つ張つていく。なんか速い気がする。というか歩くスピードじゃない。これは走るといつてもいい。

あとさ、

「お前、あの韻竜どうするんだ？」

俺は残されておるおろしている韻竜を指差しながら言つてみた。するとタバサは急に止まる。

そして、こつちを見る。

「なんで韻竜だとわかるの」

おう！？そんなに睨まないでタバサさん・・・。理由は言うからさ。

「まあ、こいつは覚えてないかもしれんがぶつちゃけ前にあったことがある」

二人？は驚いたようにこつちを見る。いや〜、適当に飯の材料探してたらしいの間に韻竜のいる森に入つてびつくりしたよな〜。喧嘩売られたし。いや、勝手に入つた俺も悪いんだが・・・。でもあの時は力も今ほど安定してないから身体能力オンリーで叩きのめしたから疲れたな・・・。というか、

「そろそろ思い出したか？イルククウ」

韻竜・・・いやイルククウは俺の言葉にびっくりしている。さて、このびっくりはどっちの反応からかね・・・。

「あー！！思い出したのね！素手なのにみんなをばったばったと倒してた時の人間なのね！！」

お、やつと思いい出したか。あ後はなんか和解できたし仲良くなっただで楽しかったな。

「ああ、その時の人間だ。名前は言ってたはずだがもう一度言っておこうか。俺はカイトだ」
手を差し出しながら言う。

「きゅいきゅい！今はシルフィードなのね！」
イルククウ改めシルフィードもこっちの手に合わせてくれた。

その瞬間、ぐうぐう、と俺の腹の虫が鳴る。

「わるい・・・。厨房に案内してくれ・・・」

「わかった」

俺の言葉に頷き、手を引いて連れてってくれた。

それから、すぐに厨房についた。てか、すぐそこだったのかよ・・・。

「で、お前はここを使わして欲しいってわけか」

ということ、現在ここの料理長のマルトーさんと絶賛交渉中。

「ああ、できるならば今すぐに。そして毎日
誠心誠意で頼み込む。」

「だがなあ・・・」
しかし、渋るマルトーさん。

「頼む・・・。材料だって自分で集めてくるし、ここの手伝いもする。じゃないと俺は・・・」
あの羞恥心たつぷりの食事をしなきゃなくなる・・・絶対耐えきれない！！

マルトーさんは俺の言葉に唸っていたが、

「わかった。許可してやるよ」
承諾してくれた！！

「ありがたい！！早速借りさせてもらおう！！」
そう言って返事も聞かずに朝飯を作り出した。

ふう、これでよし。残った材料は・・・亜空間の中にでも放り込んでくか。あそこなら腐らないし。
で、だ。

「タバサよ。何故お前はここに？」

何故か俺が食べようとしていた席に座っていた。

「わたしも食べる」

・・・は？

「わたしもあなたの料理を食べる」

ふむ・・・。しかし、

「マルトーさんに言えばご飯くらいもらえるだろう？」
「この生徒なんだし。」

「あなたの料理が食べてみたい」

うむ・・・そこまで美味いとは思わんが・・・、

「それなら一つだけいうことを聞いてくれるか？別に変なことじゃない。ここですぐできることだ」

俺の顔を見てうなづく。

「俺のことは名前で呼んでくれ」

俺の記憶では一度も呼ばれた覚えがない。こっちはずっと呼んではいるのにあつちは呼ばないのはなんか距離がある気がして嫌だからな。

タバサは俺の言葉を聞いてしばらく放心状態になっていたが、顔を赤くして、

「・・・カイト」

と呼んでくれた。てか可愛いなやつぱり。

「うむ！なら食うとしようぜ」

タバサはうなずく。

「というわけで、いただきます」

両手を合わせ食材に対して礼をする。

「それは何？」

そういえば、ここじゃブリミルだったか何だったかを敬うんだったっけ？やばいな、ばれないように人前ではしないようにしてたのに……。久々に人と飯を食べるからかしくじった……。

「あゝ、これはだな。俺の前の世界での飯を食う前にする儀式みたいなもんだ。俺たちが生きていけるのもこれらの動物たちの犠牲によつて成り立っているからな。それらに対しての感謝の気持ちを表すんだよ」

たしか……。だがな。

「いい習慣」

どうやら、タバサも気に入ってくれたらしい。俺と同じようにしている。

「じゃあ、食うか」

俺のその一言で俺たちは飯を食べ始めた。

「「ご馳走様でした」」

食べ終わってから締め言葉を言う。タバサも一緒に。このことは食べながら教えていたのだ。

「おいしかった」

無表情のようどこか満足げというか明るい感じでタバサが言った。

「お粗末さまでした」

そんなタバサにうれしくなりつつ笑いかけながら食器を集める。そして、なぜかタバサは顔を赤くして俯いていた。何故？

まあ、それは置いておいて使い終わった食器と料理が乗った皿を持つてマルトーさんのところへ行く。

「マルトーさん、ありがとうございます」

俺が声をかけるとマルトーさんはこっちを向く。

「ああ、別に気にするなよ。同じ平民なんだしよ」

俺に笑いながらそう言ってくれる。うう・・・いい人だ・・・。

そんなことを思いながら手に持った料理・・・疑似ぶりの照り焼きを差し出す。

「あの、これ食べてみてください。口に合うかはわかりませんが」
マルトーさんは少しその疑似（りょ）を見つめ、

「ああ、ありがたく頂くよ」

といって、受け取ってもらえた。

「なら、食器はお昼に洗わしてもらいますね。今日は授業に行かなくてはないそうなので」

「いや、このくらいは俺たちでやるさ。それよりも早く行きな。貴

族の嬢ちゃんが待ってるぞ」

その言葉を聞いてマルトーさんの視線の先をみるとタバサがいた。待ってたのか……。

「そうですか。ではお言葉に甘えさせてもらいます」

「おう。また後でな」

「はい」

最後に一礼し、タバサの方へと向かった。

タバサとカイトが出て行った後、マルトーはカイトの料理を食べ、絶賛していたのは余談である。

朝 後篇（後書き）

今日中にギーシュとの決闘に持ち込みたいと思います。

お昼〱決闘前〱（前書き）

すみません！！1時間ほど遅れてしまいました・・・。

しかし、どうにかギーシュとの決闘前までもつてくことができました！

多少・・・というかだいぶ駆け足な感じですがどうぞ！

お昼／決闘前／

朝飯を食べた後、タバサがもうすぐ授業が始まるといった。

余裕があるならば笑って対応していたかもしれないが、現在のカイトにはそんなものが微塵も存在していない。

やばい、やばすぎる！！このままだとルイズがキレることは火を見るよりも明らかだ。急がないとやばいがこのままタバサを放っておくのもよくない！だが、タバサが俺の走りについてこれるとは微塵も思っていないし・・・しょうがない・・・これしか手が無いと思う
としよう・・・

「タバサ！！」

考えるのをやめ、目の前にいるタバサに声をかける。

「なに？」

今まで汗をだらだらと流して考え込んでいた人がいきなり大声をあげたのでかなりびっくりしていたが、そんなことは悟られないくらい落ち着いた様子で答える。

普段のカイトならば気付いたかもしれないがやはり今のカイトには気付けなかったらしい。

「先に謝っておく！悪い！」

そう言った瞬間、右腕を頭に、左腕を膝裏に当て横向きに抱える。
所謂お姫様だっこだ。

タバサはいき나りの事態にフリーズしていたが今の状況を理解する

と今度は顔を真つ赤にしオーバーヒートしていた。

そんなことは露知らず、カイトは光の速さを超えんとする速さで駆け抜ける。ちなみに、風圧は魔法で障壁を張り無効化してある。

まあ、そんな感じに魔力がたくさんある場所を捜し出してそこまで走り抜けていったのまではよかったんだ……。でも、俺もどうかしていたみたいだ。

タバサをお姫様だっこしたまま教室に入るなんてさ……。

誰か助けて……。ほんとに……。

今の状況

右側でルイズが人を視線で殺せそうなほどの殺気を込めて睨みつけてくる。

左側でぼくとした感じで寄りかかってくるタバサ。

ありえないものを見てしまったかのような目で見てくる者、生温かい視線を送ってくる者、ひそひそとこっちに視線を向けながら話す者。

いつそ殺してくれ！！あの生き返らせてくれた神には悪いが本気で死にたい！！

そんな風に羞恥心と恐怖で色々やばい方向へと思考が向きかけた時、教室の扉が開いた。

その音で教室にいたもの——ルイズとタバサは除外で——

はその音の方へと顔を向ける。

紫色のローブに身を包み帽子をかぶっているメタ……少しふくやかな体型の中年女性が入ってきた。おそらく先生と思われる。

女性は教室を見渡すと満足そうに微笑んで言った。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

そう言うてから、なんかこつちを見てきた。

「おや、ミスヴァリエールは変わった使い魔を召喚したようですね」
シュヴルーズの言葉に教室は爆笑の嵐だった。ただ一部を除いて……。

そんなことにも気付かず、その辺の男子は馬鹿にしたような声で言う。

「ゼロのルイズ！召喚できないからってその辺歩いてた平民を連れてくるなよ！しかもチビで役に立ちそうにないしな！」
その言葉にブチッという音が聞こえた後、

ヒュン×15

ズドドド×15

という音がした。

15の音の内訳

3本がカイトが何処からともなくとりだしたナイフが男子生徒の横を通過および地面に突き刺さる音

12本がタバサが何処からともなく生み出した氷柱が男子生徒の横を通過および地面に突き刺さる音

「おい、てめー誰がチビだつて？ああ？」

最早チンピラ同然のカイトが指を鳴らしながらその男子生徒にドスのきいた声で言う。

「誰が役に立ちそうにないって・・・？」

いつもの無表情に背中に黒いオーラを背負ったタバサが、周りの空気の温度を急激に下げながら言う。

そんな二人に殺氣を向けられ気絶寸前の男子生徒は何も言わない。

そんな男子生徒の様子を見てタバサは座り、カイトは指を動かしてナイフを回収する。

普通ならばこのような光景に驚きなどが起こるかもしれないが、二人の急変した様子に周りはフリーズしたままだったのでなんの反応も起こらなかった。

ちなみにルイズも怒鳴ろうとしていたのだが、二人の殺氣を感じて

フリーズしていた・・・。

それから少ししてシュヴルーズが現実への帰還をし授業を始めることになった。

シュヴルーズの講義は続き、ルイズが錬金の実技をすることとなったのだが・・・、

「先生、やめておいた方がいいと思います」
キュルケがシュヴルーズに言う。

「どうしてですか？」
シュヴルーズはキュルケの言葉の意図がわからなかったらしく、キュルケに聞きなます。

「危険です」
きつぱりとキュルケは言った。その言葉に教室にいる全員が頷いた。

「危険？どうしてですか？」
今だ理解できてないらしいシュヴルーズ。ちなみに、俺もわからない。今日の朝に簡単な魔法をタバサから聞いたのだが、錬金はさほど危険ではないはずだ。それなのに何故？

しかし、ルイズはその言葉を聞いて、キュツ、と唇を噛み、

「やります」

そう一言言って前に出て行く。その様子を顔面蒼白の様子で見つめる教室にいる生徒。

その様子を首を傾げながら見てみると、タバサが服をつかみ引つ張ってきた。

「なに？」

タバサの方に顔を向けて聞く。

「危険」

一言で簡潔に伝えてくれてありがとう。それに机の下に引つ張ろうとするけど、

「大丈夫、何が起こるのかも興味があるし」

そう言って頭を撫でる。

「せめて障壁か何かを張った方がいい」

目を細めながらタバサは言った。ここは言うことを聞いておいた方がいいんだろうな。

一瞬で核が撃ち込まれても大丈夫なほどの障壁を作り出す。これだけ丈夫に作つとけば大丈夫だろう。

そんなことをしているとルイズが短くルーンを唱え、杖を振りおろす。

その瞬間机ごと石ころが爆発した。教室中は奇声喜声悲鳴の嵐だ・
・いや真ん中のはおかしいだろ。

「ちよつと失敗したみたいね」

顔についた煤をハンカチで拭きながら言う。

そんなルイズに教室中から猛烈な反撃が起きていた。

その後、シュヴルーズが気絶してしまい授業は中断、さらに教室が大変なことになっていたのでルイズとカイトは教室の掃除をするこ
とになった。

「ねえ、カイト兄・・・わたしのことをどう思う？」

机を拭きながらルイズが呟く。どうやら、さっきの失敗でかなり落ち込んでるみたいだ。そんなルイズに俺は窓を取り換えながら言う。

「ん？すごいと思うぞ？」

「嘘だっ！！」

速攻で否定されてしまった・・・。というか何でそんな言い方？

「だって、どんな魔法をやっても爆発してコモンスペル一つすら唱えられなくて・・・」

だんだん小さな声になっていく。どうやら、俺が失望したかどうか
と
思っているらしい。馬鹿らしい・・・。

「じゃあ聞くがな、あんな爆発ほかのやつらに唱えられるのか？」
たぶん、あんな高威力な魔法はタバサなどの例外以外には唱えられない
だろう。それに、

「ルイズの魔法はその意図にはそわなかったかもしれないが失敗ではないからな？」

魔法とは失敗したら何も起こらずに使用した魔力は霧散することになるのだ。しかし、ルイズは一応『爆発』という現象が起こっている。それは失敗したとは言えない。

ルイズは俺の説明を静かに聞く。

「だからな？周りのやつらのことなんて気にするな。お前にはお前にしか使えない魔法があるんだってことを教えてやれ」

そう言って頭を撫でる。すると、ルイズはだんだん目に涙をため、泣きだした。

「今まで・・・グスツ・・・お父様もお母様も・・・使用人にも馬鹿にされて・・・グスツ・・・」

今まで溜めていたものがあふれ出したかのように嗚咽とともに語る。

「もういい、ルイズ。これ以上言わなくても・・・」

そう言って頭を撫で続ける。表面上は優しい雰囲気醸し出しているが、内心はルイズをここまで追い詰めた周りの人間とそしてなにより自分自身に対しての激しい憤りを感じていた。

そうこうしているうちにルイズは泣き疲れたのか寝てしまったので、手っ取り早く魔法で片付けた後、部屋にルイズを寝かせに行っから厨房へと向かった。

カイトがルイズを運んだりしている間、図書室で本を一心不乱で読んでいた人物がいた。

ミスターコッパ・・・コルベールである。

彼は使い魔召喚の時にルイズが呼び出した平民の少年のルーンがあまりにも珍しかったので書物を漁っていた。

そして、とある一つの本を見て、そのルーンは見つかる。そしてそれを見て彼は学院長室へと走り出した。

場所は変わり、学院長室。今日も今日とて学院長であるオールド・オスマンは秘書のロングビルにセクハラ行為をし、蹴られていた。

そんなとき、勢いよくドアが開けられた。その瞬間、蹴っていたロングビルは机に座り、オスマンも後ろに手を組んで迎え入れた。なんととも言えないほどの早業であった。

「オ、オールド・オスマン！」

「なんじゃ？騒々しい」

「た、大変です！」

「ふん、大変なことなどあるものか。すべては小事じゃ」

「こ、これを見てください！」

「む・・・！？すまんがミスロングビル、ちと席をはずしてくれんかの」

そう言うとロングビルは立ち上がり、学院長室を出て行く。それを

見届けた後、オスマンはコルベールの方を向き口を開いた。

「詳しく説明するのじゃ。ミスタ・コルベール」

「おそい」

厨房の前にいたタバサが言葉を発する。というか、

「何故またここに？」

何となく予想が付いているが聞いてみる。

「あなたの料理を食べるため」

予想的中・・・もちろん嬉しいのだが・・・よくはない。

「なに？そんなに美味かった？」

聞いてみるとすぐにうなづくタバサ。うゝむ・・・まあ、そう言ってくれるのは嬉しいんだが・・・。

「二人分の材料がないんだが」

朝のうちにタバサの分まで作ったので後は自分の分しか残ってないのだ。

俺の言葉を聞くとタバサは悲しそうな顔になる。

うつ、そんな捨てられた子犬の目で俺を見るな・・・。

そんなことを思っていると、

「あの・・・カイトさんですか？」

後ろから声をかけられた。誰かと思いい顔を向けてみるとそこには・

・

黒髪黒目のメイドさんがいた。

誰だこの人。会ったことないはずだが・・・てかタバサよ、そんな『お前はまたか・・・』みたいなダメな子を見るような目で見ないでくれ・・・というか、何がまたなんだよ。

「なんで俺の名前を？」

とりあえず、今のタバサはスルーしておこう。

「あ、えと・・・マルトーさんがあなたの料理を絶賛していて・・・今厨房のみんなの話の中心なんです」

・・・何と言えがいいんだろこういつときって・・・。

「その、会うことがあれば伝えてほしいと言われたことがあるらしいんですけど」

「ん？なに？」

特に考えず返事をする。

「昼に来たときには何か作ってほしいそうです」
・・・いや、いま一瞬考えたことはないはずだ。

「マルトーさんだけだよな？」
おそろおそろ聞く。

「できれば厨房全員に・・・」

俺は脱兎のごとく逃げ出した。

しかし、タバサとマルトーさんに回り込まれてしまった。

って、

「何故ここにマルトーさん!？」
あんた仕事は？」

「がはは!ちょうど薪が切れちまったから取りに来たんだが・・・
せっかく来てくれたんだしなあ?」
めっちゃいい笑顔で答える。というか、なんでよりによってあんた
が出てくるんだよ。

「」飯

いや、だからお前は普通に食堂でも食べられるだろう?

「ま、そういうわけだからちょっと来てくれや」

「・・・」

何もかもが対照的な二人が俺の両腕をつかむ。そして引きずる。

もういいよ・・・こうなったら楽ちん料理で切り抜けてやる!!

「できたぞ」

そう言って厨房にいた人全員に声をかける。

『おー！！！』

全員が席に着く。みんなどれだけ期待してんだよ。座るのが残像が残るほどの速さだったぞ？

「はい、今日はカレーです」

そう言って全員に平皿に移した疑似カレーを配る。

「食べ方ですが、パンにつけて食べてもよし、俺が焼いたナンでもいいから適当に食ってくれ」

本当は米で食べたかったがそんな贅沢は言ってられないだろう。

全員が一斉に口をつける。どうだ・・・？

『美味しいー！！！！！』

『なんだ、この美味さは・・・』

『パンじゃなくてこのナンっていうやつもめっちゃ美味しいぞ！』
どうやら大盛況のようだ。

「おかわり」

そう言っただけでタバサが皿を俺に渡してくる。てか速すぎる！お前は早食い王でも目指してんのか？

そんなこんなで、大鍋に作っていたカレーは残らず完食しました。

飯も食い終わって、約束していた通り厨房の仕事を手伝うことにした。マルトーさんはしなくてもいいと言ってくれたが自分から言い出したことなの所以说うと、シエスタの手伝いをするようになった。

あ、シエスタっていうのはあの黒髪黒目のメイドさんね。

「すみません、手伝ってもらっちゃって・・・」

「いって。俺から言い出したんだし」

なぜか謝られながらケーキを配っていた。そんな感じで仕事をこなしていると、

「なあ、ギーシュ！お前、今はだれと付き合っているんだよ！」

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

といった会話が聞こえてきた。そのほうに顔を向けると、胸に赤いバラをさして、絵にかいたような気障ったらしい金髪野郎を囲んで何人かが冷やかしている。

なんで、こいつをやるうって呼ぶかというと・・・

「付き合う？僕にそのような特定の女性はいないのだ。バラは多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

ひとつ、臭すぎる言動しかできないこと」。

ふたつ、って、これに99%集約されるんだが・・・背が高い！
！以上！！

そんなことを思いながら彼を見ていたのだがふと、ガラスの小瓶が

地面に落ちたのが見えた。

背が高く、憎かろうと落し物くらいは教えてやろう。
そう思つてギーシュと呼ばれている少年の近くにまで向かう。

「おい、落とし物だナルシ野郎」
そう言つて小瓶を突き付ける。

「これは僕のじゃない。君は何を言つてゐるんだね？」
しかし、周りの友人らしきやつらは大声で騒ぎ始めた。

「おお？その香水は、もしや、モンモランシーの香水じゃないのか？」
「？」

「そうだ！その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分の為だけに
調合している香水だぞ！」

「そいつが、ギーシュ、お前のポケットから落ちてきたつてことは、
つまりお前は今、モンモランシーと付き合つてゐる。そうだな？」

「違う。いいかい？彼女の名譽のために言つておくが・・・」
「なんか、ギーシュ？が苦しい言い訳をしようとしたとき、」

「ギーシュ様・・・わたしとは遊びだつたんですね！！」
泣きながら頬をひっぱたいて泣きながら走りだしていった。おしい
な・・・もうちょっと腰を使えば威力も上がったのに・・・。

「モンモランシー誤解だよ。彼女とはただ一緒に散歩をしただけで・・・」
「」

「うるさい！！この、うそつき！！」

なんかいつの間にか口論になっていたギーシュ（仮）と金髪ドリル。そしてドリルは小瓶の中身をギーシュ（株）にぶっかけて去って行った。

「あのレディ達は、バラの存在の意味を理解していないようだ」
こいつバカだ！！もう知らん・・・一生やっつけ・・・。

そう思った後に仕事を再開しようとしたのだが、

「待ちたまえ」

ギーシュ（有）に呼び止められた。

「何か用でしょうか？」

こんなでも一応貴族らしいので敬語で話す。まったく敬ってない感をだしてはいるが・・・。

「君が軽率に、香水の瓶なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

めっちゃ気障な態度で接しながら言う。うわ・・・もうこいつダメだ・・・末期患者だ・・・。

「あなた様が二股なんかしなければよかったのでは？」

そう言った瞬間周りにいた友人たちは、どっと笑った。

「その通りだギーシュ！お前が悪い！」

それらの笑い声を聞いてさっと顔に赤みが差した。

「いいかい給仕君「はいアウト」俺は給仕じゃねえから」つく、貴族の言葉を遮るなど君は平民としての自覚が足りないみたいだね」

ぶるぶる震えながら言う。

「本当に貴族だと思う人にはきちんとした態度をとるさ。ただお前は俺からしたら貴族じゃねえ。ただそれだけだ」
やれやれ・・・この程度のこともわからないのかね・・・。

「ふ、君には礼儀を教えなければいけないみたいだね」
額に青筋が浮かんできた。

「やれるもんならやってみな」
通じるかわからんが親指を下にむける。

あ、なんかプチって音が聞こえた。

「ほ、本当にこいつは・・・。まあいい。準備ができればヴェストリの広場に来い」
そう言ってすたすたと歩いて行っただ。

さて、色々試してみたいこともあるし準備でもすっかな。などと
考えて適当な場所に向かおうとしたのだが、

「あ、あなた殺されちゃう・・・。」
なんか、顔が青ざめてるが・・・大丈夫か？

「き、貴族を本気で怒らせたら・・・。」
そう言っただけ絶した。おいおい・・・。

「なあタバサ？」
さっきから陰でこっちを見ていたタバサに声をかける。

「なに？」

隠れていたのにずいぶん素直に出てきたな。

まあいい。聞きたいこともあるし。

「アイツって強いのか？」

ここにすべては集約される。どれだけ楽しませてくれるかね・・・。

「あなたの足元どころか一生かかってもその域に達しないであろう位の實力」

あいまいすぎるな・・・。ま、試したいことの実験台くらいにはなるだろ。

「ま、面白いことするから見に来いよ？」

そう言つてシエスタを抱える。

その瞬間になんか、むっとしたタバサは軽くなずいてからヴェストリの広場に歩いて行つた。何故・・・？

まあいい。とりあえずシエスタだな・・・。マルトーさんでいつか。よし、なら頑張るとしようかな。

お昼〜決闘前〜（後書き）

。 次回は決闘です。ようやく戦闘・・・。うまく書けるだろうか・・・。

そんな不安もありますが、精いっぱい頑張りますのでよろしく願います！

今日の午前中にはあげたいと思いますので、楽しみにしてください。さい。

それでは、ばいにく。

決闘！ネタ技の試行錯誤（前書き）

どうも、午前中にあげるとかいつときながら3時間オーバーのアホな筆者です。

ついにギーシュとの決闘！！長かった・・・。

あと、なんか主人公ともどもキャラの性格崩壊が起きてるかもしれ
ません。ご容赦ください・・・。

それではどうぞ！！

決闘！ネタ技の試行錯誤！

学院長室では二人の人物が話し合っていた。

「彼のルーンが気になって調べておつたら『ガンダールヴ』に行きつuita、というわけじゃな」

学院長であるオールド・オスマン。

「そうです！あの少年の左手に刻まれたルーンは伝説の使い魔『ガンダールヴ』に刻まれていたものとまったく同じであります！」
光る頭皮が眩しいミスターコッパ・・・ゲフンゲフン、『炎蛇』の二つ名を持つコルベール

「しかし、それだけで決めつけるのも早計ではないか？」
オスマンがルーンのスケッチを見ながら言う。

「そうですね。しかし・・・他にも気になることが」
コルベールはルーンのこととは置いておくとして他にも話さねばならないことを話すことにする。

「なんじゃ？それは・・・」
オスマンが聞き返し、コルベールは話し始めた。

「諸君！決闘だ！」
ギーシュ・・・もう普通に呼ぶか。がバラの造花を掲げる。

『うおーッ!』

周りの生徒は歓声をあげる。

『ギーシュが決闘するぞ! 相手はルイズの平民だ!』

『しかもあんな大きな剣を持つてるぞ!』

『あんなの使えるのかよ!』

なんか、馬鹿にされた。ただ魔法が使えるだけだったのにな。

今の俺は腰に二メートル以上の長さを持つ日本刀を持っている。西洋剣ではないのであしからず。

どうやら俺の身長とあってないことを馬鹿にしたらしいが・・・まあ、油断してもらった方がサプライズにはなるだろ。

「とりあえず逃げずにきたことは誉めてやろうじゃないか」

バラをいじりながら歌うように言った。臭い! 臭すぎる・・・。

「お前こそ恥かく覚悟はできたか?」

顔をそむけて笑いをこらえながら俺はギーシュに言う。

「減らず口を・・・まあいい。どうせすぐに無様な態度をとることになるんだ。その位は僕の寛大な心がゆるしてやろうじゃないか」
ほあ、そんなことを言うか。なら遠慮なく。

「ナルシ野郎に寛大な心なんてあったんだな。二股した拳句自分の責任を人に押し付けてなお且つ逆ギレして決闘を挑んでくる奴にそんな心があったのか。いや、ならこの世界はみんな寛大な心の持ち主になるな。はっ、馬鹿らしい話だな」

両手を上に向けて、やれやれといいながら締めくくる。ちなみに周りにいた生徒たちは爆笑している。

言われた張本人は額に青筋を何本も浮かべ、今にも千切れてしまいそうだ。

「・・・これは徹底的にやるしかないようだね」

そう言っただけの花を振って花弁を一枚、宙に舞わせる。するとそれが一瞬で甲冑を来た女戦士の形をした人形になった。

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまいね？」

「いや、お前から魔法をとったら何も残らないんじゃない？」

とことん俺は馬鹿にする。背が高い人間は消えてしまえ！！

「・・・僕の二つ名は『青銅』。青銅のギッシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

すると女戦士の形をしたゴーレムがなんか突進してきた。なんだ、この遅さ・・・。

「・・・七閃」

カチツ、と音がした瞬間、ワルキューレは“七つ”の塊に分かれ地面に落ちた。

その光景に誰もが息をのむ。静寂に包まれていた。

「どうした？もう終わりか？」

正直拍子抜けにもほどがある。まだ試していないこともあるんだからな。

「くっ、まだだ！」

ギーシュはバラを振り全部で七体のゴーレムを生み出す。

「そうこなくっちゃな！」

俺は腰に差していた『七天七刀』を地面に捨て懷から文字と魔法陣が描かれたカードを取り出す。

「そんな紙切れで何をしようというんだね！」

なんか、ギーシュがキレてくる。ま、俺の意図がわかるはずもないし当然か。ならば！

「ふっ、お前なんか武器は必要ないってことさ」

馬鹿にする。やると決めたら徹底的につてね。

「くっ・・・どこまでも僕を馬鹿にして・・・行けっ！ワルキューレ！」

馬鹿正直にも俺の挑発に乗ったギーシュはゴーレムたちを向けてくる。しかし、

「連携の一つくらいとらせればいいのに」

キレてるから冷静に考えられないのか、ただ単に馬鹿なのかは知らんが、ただ突進させるだけってのはどうかと思うぞ？

そんなことを考えているうちに一番先頭にいた奴が切りかかってきた。

それを横に一步動いて回避。そして、カードを腰の・・・刀をさす場所に両の手を交差させて構える。

「灰は灰に」

塵は塵に

吸血殺しの紅十

字！」

その瞬間、ゴーレムが下半身と上半身が真っ二つになる。そして、カイトの手には二つの炎剣が握られていた。

『なっ！！！』

カイトとタバサ以外のヴェストリの広場にいた生徒たちは驚きの声をあげる。

『おい！あの平民魔法を使ってるぞ！』

『でもあんな魔法は見たことないぞ！』

『どういうことなんだ！？』

周りからそんな声上がる。うん、やっぱりびっくりするよね？でもさ、

「お前まで固まるのとは違うと思う。ナルシよ」

こいつはゴーレムを動かすのも忘れて固まっている。まあ、これは好機ととるべきかな。

炎剣を消し、詠唱を唱えることにする。

「——世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。それは生命を育む恵みの光にして邪悪を罰する裁きの光なり。それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ——ッ！」

その瞬間、さつき炎剣を生み出していた『ルーン』の刻まれたカードがヴェストリの広場全体に張り付く。あ、きちんと人は避けて張られてるよ？

そして、轟！という酸素を吸い込む音と同時に人の形をした炎の塊

『イノケンティウス魔女狩りの王』が現れる。

ギーシュはそれを見て青ざめていた。

「さて、どうするナルシ君。降参でもするかい？」

馬鹿にしたような笑みで見ながら言う。ここで降参するならば本当のクズなんだが……、

「ふ……、僕じゃ君には勝てそうにないね……。でも、一矢くらいは報わせてもらう！」

どうやら、少しは見どころがあつたらしい。根はまっすぐなのかも。

「その意気やよし。俺の名はカイト。お前は？」

馬鹿にした笑みをやめ、友人を見るかのような笑みで言う。

「僕は、ギーシュ……ギーシュ・ド・グラモンだ！」

あっちもいい顔で名乗る。

「いくぞ、『ギーシュ』！」

イノケンティウスを動かす。別に俺もいつも通り動けるんだが、今回はこいつだけで相手をしよう。

俺が名前を呼ぶとうれしそうな顔になり、

「ああ！いくぞ『カイト』！」

ゴーレム達を動かしてくる。数的有利な状況を上手く使った隊列だが、

「この程度で止められると思うなよ!!」

そう言っただけでイノケンティウスに命令する。イノケンティウスはその手に持ったカイトの身長大の十字架を横になく。それだけで前にいた三体は跡形もなく吹き飛んだ。

最早観客は絶句している。

そんな中でもカイトとギーシュは笑みを顔に浮かべたままだ。

「君こそこの程度で終わりだと思わないでくれ!」

そう言っただけでさっきの三体の後ろにいた四体のうち、二体がイノケンティウスの十字架を抑える。青銅のゴーレムではイノケンティウスを倒すことはおろか時間稼ぎすら厳しいものがある。

だが、数秒程度ならば抑えられる。

その数秒の間に残った二体がカイト本人に向かう。

しかし、その光景を見てカイトは焦るところか罨にかかった得物を見るような楽しげな笑みを浮かべた。

その瞬間ゴーレムたちの足元からとがった岩が突きだしてきた。それによりゴーレムたちは串刺しにされ、無残な姿となった。

そして、イノケンティウスも足止めしていたゴーレムたちを薙ぎ払う。

それらを見ていたギーシュは清々しい笑みを浮かべていた。

「降参するか?ギーシュ」

イノケンティウスを消し、いつの間にかルーンを回収していたカイトが目の前に立って言う。

「ああ、僕の負けだ。こんな清々しい気分になれたのは久しぶりだ」

そんな様子のギーシュにうんうんと頷く。

「いい顔になったなギーシュ。今のお前ならやらなきゃならないこととがわかるだろ？」

「ああ、彼女たちに謝ってくるよ」

「うんうん、正解だ。まあ、骨の一、二本は覚悟せにやらんかもしれんが・・・」

「ははは・・・、まあそうだとしても僕が悪いんだし受け入れるさ」

「そうか・・・、なら頑張れよ」

そう言つて拳を握つて挙げる。

「ああ」

ギーシュも同じようにし、俺の拳にぶつけた。

「それじゃあな」

そう言つて俺はギーシュに背を向け歩き出す。さて、シエスタはどくなつたかね・・・。

決闘〱ネタ技の試行錯誤〱（後書き）

さてどうでしたでしょうか。あと、今回はネタ技大量出現です。これからもこんな感じです。

次回は・・・フーケまで行ける・・・かな？

街へ行こう

「オールド・オスマン」

「うむ」

「あの平民、勝ってしまいましたが・・・」

「ギーシュは一番レベルの低い『ドット』メイジですが、それでもただの平民に後れをとると思えません。そしてあの動き！あんな平民見たことない！やはり彼は『ガンダールヴ』！」

「うむむ・・・」

「それに見たことのない魔法！あんな魔法見たことがありません！オールド・オスマン。さっそく王室に報告して、指示を仰がないことには・・・」

「それには及ばん」

「どうしてですか？これは世紀の大発見ですよ！現代に蘇った『ガンダールヴ』！」

「ミスタ・コルベール。ガンダールヴはただの使い魔ではない。あんな圧倒的な力を持ったおもちゃを王室のボンクラどもに与えてやつたらどうなる？彼らはやつらの好き勝手に使われるじやろう」

「・・・」

「まあ、彼ならばあんな無能な奴らのいいなりにはならんじやろうがな。ともかくこの件に関しては私が預かる。他言は無用じゃ」

「は、はい！かしこまりました！」

ギーシュとの決闘を終えて、俺はシエスタがあの後どうしたのかを厨房に見に行くことにした。

「・・・」

あれ？俺一人で歩いてたはずなんだが・・・。

横を見る。いつの間にか、タバサが隣にいた。

「お前いつの間に？」

全然気付かなかった・・・。

「さっき」

それじゃわからんよ。

「それよりも、あの決闘で何をしたの？」

そういえば驚いてもらうために教えてなかったな。あんまし効果なかったけど・・・。

「どれからだ？」

「初めから」

「わかった。まず一番目の七閃。あれはこいつを使ったんだよ」
そう言ってから手の中に使ったものを創り出す。

「鉄の糸？」

まあ、この時代ならしょうがないか。

「鉄を主成分として作られた人工的な物質で鋼っていうのを使った糸だ。たぶんこの世界の剣とか鎧なら真つ二つだな」
まだまだ技量は低いから素材の強さで何とかしてるけどな。

「じゃあ、あの剣は飾り？」

「あれは剣じゃなくて刀っていうんだが。まあ、七閃の場合ならあれはフェイクだ。でも、実際あの刀を使って七閃以上の速さと手数で斬る事も可能だ」

あれは疲れるから使う気はあんまないけど……。

「なら次。あの炎の剣と人みたいな塊」

酷い例えられようだなイノケンティウス……。まあしょうがないと思うけど。

「あれはな、これを使ってるんだよ」

そう言っただけは懐から一枚のルーンのカードを取り出す。

「マジックアイテム？」

やっぱりわかるもんか。

「そうだ。これはあらかじめ魔力を込めて刻まれたこのルーンの力で発動する。たぶんちょっと改良すれば平民でも使えるだろうな」

まあ、爆破までは無理だろうけど。

「で、このルーンの力を決められた配置で置くことによりイノケンティウスが発動できる。まあ、あれ使つとちよつとスタミナを使うから面倒なんだがな」

ちなみに、カイトは知らないがあれを常人が使えば1分も持たない上に発動中は動くことができないものである。

「じゃあ、最後の岩の突起は？」

「あれは、イノケンティウスの配置上に別の魔法陣をルーンのカードで描くことで発動した魔術だ。あのトラップは大分使えるからな」
作るのに苦労したよ。おかげで色々発動できるようにしておいたけど。

「なら、あれらは私にも使うことができる？」

「どうしてだ？」

「・・・」

「話せないなら教えることはできない。正直殺傷能力が高いからな」
ま、吸血殺しの紅十字くらいしか使えないとは思っけどな。

「・・・なら話す。あなたもあなたの秘密を教えてくれた」

「そうか。だが、今はやめておけ。そうだな・・・明日の朝、今日と同じ時間にヴェストリの広場に来い。またあそこに行くからな。その時に話してくれ」

そう言うのとタバサは頷いた。

「よし！それならシエスタの具合を見たらデザートでも作るとしようかね」

甘いものも食べなくなっただし。

「なにを作るの？」

お、どうやらタバサも興味があるようだな。

「そっだな・・・俺の元の世界で大好物だったお汁粉でも作るか」あれを作った人は天才だと思う。

「それは何？」

ま、こっちの世界にはないものか。

「まあとりあえずはお楽しみみてやつだ」

さて、亜空間の中に材料が突っ込んであったはず・・・。

「あの、すみませんでした！！」

厨房に入るため、ドアを開けるとシエスタがいて俺の姿を見るなりいきなり謝ってきた。

しかし・・・、

「え？何が？」

まったく謝られる覚えがない・・・。というかタバサ、

「お前、そんな目で見るな。お汁粉やらんぞ?」

食べ物を人質に取ってみる。どうやらこの一言は効果があったらしい。即座にやめてもらえた。

「で、改めてどうしたんだ? シエスタ」

シエスタに向きなおつてから聞きなます。

「あの時逃げ出してしまつて・・・」

あゝ・・・あれか。

「まあ、しょうがないさ。貴族は一般の平民にとっては怖いものだからさ」

というか、家族失つてから貴族になんて会つてない上にその辺のメイジよりも強い幻獣とかと戦つてたからね。正直自分のことはもう平民とは呼べないことに気がついたよ・・・。

「ほんとに貴族は怖いです。でも、カイトさんのおかげでもうそんなに怖くないです! 魔法の使えないただの平民でも貴族に勝てるんだつて!」

いや、このきらきらした目で見られるのがつらい……。魔法とか普通に使つちやつたし……。まあ、ぶつちやけ素手でも行けたけどさ。

「いや・・・その・・・よかつたな?」

つらい! この場所から逃げてしまいたい!!

「はい!」

シエスタは俺の言葉にめっちゃ元気よく返事をした。

「じゃあ、俺はマルトーさんところに行くから」

「はい！それでは！」

シエスタは元気よく厨房から出て行った。あゝ疲れた……。

「早く」

脱力しているとタバサが服の袖を引っ張る。そんなに興味があるのかよ。

「わかったから引っ張るな。伸びる」
さて、マルトーさんに会いにいこ。

「おお！『我らの剣』がきたぞ！」

マルトーさんは俺の顔を見るなりそう叫ぶ。はて……何のことだ？我らの剣で……。

「あゝ、マルトーさん。悪いんだけどさ、厨房使わせてもらってもいい？」

とりあえずスルーの方向でいかせてもらおう。

「ああ！！我らの剣の頼みならば何でも聞くぞ！！」

どんだけハイテンションなんだよマルトーさん……。

「ありがとうございます。それじゃ遠慮なく」
えゝとまずは……。

「できた」

うむ！我ながら会心の出来だな！

「・・・」

すでにタバサは食べる準備が万端の状態で待っていた。

「ほい、おまつとさん」

そんなタバサの前にお汁粉を置き、自分も向かい側へと座る。

「そいじゃ、いただきます」

手を合わせてから食べ始める。

「いただきます」

タバサも同じようにしてから食べ始めた。

「あゝ、食った食った・・・」

餅を5個を食ったらさすがにお腹いっぱいだ。

「おいしかった」

満足げな顔（普通の人からは無表情）でタバサは言う。

「喜んでもらえて何よりだ」

作ったものとしてはこれほどうれしいことはないからな。

さて、腹ごなしも済んだことだし。

「なあ、タバサ。最寄の街ってどこにある？」

「門を抜けてから馬で三時間のところ。でもどうして？」

「まあ、あれだ。働く場所探した」

ぶつちやけた話がお小遣いが欲しい。

「なら、私が連れて行く」

「いや、でもお前にもやることとかあるんじゃないのか？」

「大丈夫。それにわたしも用事がある」

そうか、ならそれなら。

「お願いしてもいいか？」

俺の言葉にこくんと頷く。

それから厨房の外に出る。本当は食器を洗ってからと思ったんだが、マルトーさんたちが、

「我らの剣よ、その位は俺たちがやってやるよ」
との事だったので、すぐに行くことにした。

外に出て、タバサが口笛を吹く。すると、空からシルフィードが下りてくる。

「街に行く」

背の上に乗ってから短く簡潔にシルフィードに指示する。

シルフィードはその言葉を聞いてから一声あげてから空へと舞い上がった。

「さて、仕事でも探すしますか」

街についてからタバサと俺は別行動をとることにした。タバサは一緒に行くといっていたが、俺の用事に付き合わせるのも悪いと思っ
たため、後で言うことを一つ聞くと行って説得した。

はてさて、何処から探すのでしょうかね・・・。

それからちよつとしてからの状況。

目の前に出で立ちは、腹筋が割れ体の筋肉もムキムキで、黒いビキニパンツ一丁にへそが出るような小さなピンク色のタンクトップという、目も当てられない姿の男。

その傍らにニコニコした女性。この現状をつくり出した人。

たぶんあの男の人のお店だと思われる『魅惑の妖精亭』というネーミングセンスもどうかと思われる場所にいる。

どうしてこうなった・・・。

さかのぼることほんの数分前。

大通りを歩いてどつかでアルバイトの求人広告ないかなあ〜と探しながら歩いていると、杖を持った平民が平民の女性から財布を盗っていたのを見た。

見た瞬間に人の間を駆け抜け抜けそいつの腕を締め上げる。なんかわめいてるが無視。さつき盗っていた財布をそいつから取り返した後杖を折って肩の関節を外しておいてあげた。これでもう悪さもできないだろう。

「ちよいとそこのお嬢さん」

財布の持ち主の女性に声をかける。

「なに？」

こつちを振り返る。

「これ盗られてましたよ？」

そう言つて財布を差し出す。

「え？あれ？いつの間に・・・ありがとね、坊や」

「残念ながら坊やと呼べる歳じゃないんだよ」

少しムツとしてしまったためか敬語でなくなる。

「そう？ならわたしも嬢さんと呼ばれる歳じゃないわよ？」

「そうか。それは悪かった」

「いやいや、こっちこそね。それよりもお礼をしたいからついてきて」

そう言っただけ俺の手をつかむ。

「え？ちよつ・・・」

俺が返事をする間もなく、その女性に連れて行かれてしまった。

回想終了。

「ありがとね、何か私たちにできることがあったら言ってくれかしら？」

体をくねくねさせながら言ってくる男・・・スカロンさん。というか、その態度をどうにかしてください。

しかし、これ以上探すのも面倒だし物は試しで頼んでみるか。

「だったらここで働きたいんだが」

俺の言葉に二人は顔を見合わせる。そして、なんか小さな声で話し始める。

それから数分、結論が出たのかこっちを向く。

「いいわよ、それじゃついてきてね。話があるから」
スカロンさんがそう言って奥の部屋へと向かっていく。それに俺は
ついて行く。

ついた先には服がいっぱいあった・・・女性用の・・・あれ？な
んで俺はここに？

「ん、これかしらね」

そう言って服の中から1着取り出す・・・なんか男としての尊厳が
失われそうな服を。

俺は逃げ出した。しかし回り込まれてしまった！！

「さ、これを着ましようね・・・ジェシカ」

「何？」

「あなたが着せてあげてくれる？」

「いいわよ。さて、カイト君・・・観念しなさい？」

その後近隣3キロくらいにわたって聞こえるくらいの絶叫が響きま
したとさ・・・。

街へ行こう（後書き）

また今夜もう一話あげたいと思います。

もうお婿に行けない・・・。(前書き)

前回から想像がつくでしょうがやってしまった・・・。

だが、反省も後悔もしてない！これからも筆者の暴走がたまに発生します。ご注意ください。

もうお婿に行けない・・・。

「いいこと？妖精さん達」

見るに堪えない格好のスカロンが店の従業員に声をかける。

店内にいる従業員はどれも美少女で、カイトが着せられたような服を着ていた。

『はい！スカロン店長！』

その彼女らはスカロンに声を合わせて返事をする。

が、

「ああん！！もう違うでしょ！？店内ではミ・マドモワゼルとお呼びなさいといつも言ってるでしょう？」

体をくねくねさせながら従業員達に言う。正直吐き気が止まらない・・・。

『はい！ミ・マドモワゼル！』

そんなスカロンに嫌な顔一つせず、きちんと言いなおす従業員達。心の底からすごいと思う。

「んっトレビアン」

スカロンはクネクネ体を捻らせ一通り余韻を楽しむと手を叩き集中を再び集める。

「さて、今日は嬉しいお知らせがあるわ。何と今日からこの魅惑の妖精亭に新しいお仲間が出来ます、ゼフィちゃん、いらっしやい」

スカロンがそう言うと、カイト（ゼフィ）が現れる。

「・・・ゼフィです。みなさんよろしくお願いします」
なんというか、諦めの境地に入った顔である。

さて、彼（彼女）の格好だが、服はアニメとかで出ているのでそれと同じ。髪は元々カイトが切るのが面倒ということで膝裏辺りまで伸ばされたエメラルド色の長い髪。目も髪と同じエメラルド色で、女の子のような顔立ちである。

かなり大雑把だがそこは作者の技量の足らなさと言うことで勘弁してほしい・・・。

とまあ、説明はこれくらいにして本編へ戻ろう。

「給仕をしたことがないそうだからみんな教えてあげてね」
スカロンが全員を見渡しながら言う。

『はい！ミ・マドモワゼル！』
相変わらず息がぴったりなことだ。

スカロンはそれを見て満足そうな顔をしてから裏方の方へと消えて行った・・・。

スカロン！俺も裏方が良かった！！

そんな心の叫びをしていると、

「じゃあゼフィちゃん、こっちにきてね」
従業員の一人に引きずられる。

ああ・・・俺は生きてけるのだろうか・・・。

夜も近付いてきた時間に俺は仕事から上がることにした。
しかし・・・、精神的な疲労度が・・・。

なんで客は俺の体を触ってこようとするんだ？気持ち悪いから体に
指向性の電気を纏わせておいたけどさあ・・・。ほんとに鬱だ・・・
。

まあいい。今日一日で大分金も貯まったし、明日買い物に行くとし
よう。

そうときまればさつさと学院に帰ろうかな。
そう思っただバサに念話をとばす。

すると、5分位してからタバサが駆け寄ってきた。

「大丈夫？」

一言目にタバサが俺の顔を見て言う。てか、顔に出てたか？

「カイトにしてはつかれた感じが出た」
さいですか・・・。

「まあ、俺は大丈夫。さ、帰ろうぜ」

そう言って会話を切る。タバサは少しこっちを見ていたがすぐにシルフィードを呼ぶ。

そして、まあこの後ルイズやらの追及があつたのだが、それらを潜り抜け無事今日を終えることができた。

翌朝、同じように『修練の門』を発動。そして落ちる。今回はタバサも一緒だ。約束があつたし。

「さてタバサ。お前が力を求める理由はなんだ？」
俺がそう言つとタバサは少しずつ話し始める。

自分がガリアの王女であること。父がその弟に暗殺されたこと。自分も殺されかけたが母親が自分の代わりに毒薬で心が壊れてしまったことなど……。

「だからわたしはジョセフに復讐するための力がほしい」
最後にタバサはこういった。

うむ……その心意気はよし。だが……、

「復讐のためだけに使うならば教えてやることはできない」
俺がそう言つと、タバサは動揺する。

「どうして」

そんな憎しみを持った目で見られてもねえ・・・。

「そんなのは簡単だ。俺がこの力を持つてるのはそんなことをするためじゃないからだ」

俺がこの力を使うのは俺が守りたいと思うものを守るためだ。決して人に復讐するためだけに使うわけにはいかない。

まあ、守る者のためなら人殺しもいとわんがな・・・。

「・・・」

俺の言葉にタバサは黙る。

「だが」

そんなタバサに俺は声をかける。

「お前の母親を救うためならば、俺は力を貸してやってもいい」
そう言うと、タバサは目を見開く。

「ほんとう・・・？」

「ああ。だからそんな泣きそうな顔すんなって」
目の端からこぼれそうな涙を指で拭き取る。

「・・・わかった。母を助けられるならジョセフはどうでもいい」
その言い方はどうかと思いますよ？タバサさん。

「ま、そう言うわけだ。お前も今日はあんまし寝れてないだろう？
時間はあるからゆっくり休め」

と言って俺はタバサを強引に寝かせる。俺の膝を枕にして。

「・・・／／」

タバサは顔を真っ赤にして逃亡を図るが、俺が逃げられないよう拘束する。

すると諦めたのか、目を閉じ静かに寝息を立て始めた。

そんなタバサの寝顔を見ながら、これからどうするか計画を立てることにした。

武器ゲット！（前書き）

どうも。ようやくフーケにたどり着きました！まあさわりの部分ですが・・・。

少し急ぎすぎた感がたつぷりですが、お楽しみいただけると幸いです。

それではどうぞ！

武器ゲット！

タバサ・・・シャルロットが眠ってから半日ほどたつ。結構思いつめてたのか？

そんなことを思いつつシャルロットの髪を梳く。さらさらしてて気持ちいいんだ、これがさ・・・。

「・・・」

そんなことをしているとシャルロットが目を覚ます。じっとこつちを見つめる。

ので、俺も同じように見つめる。

5分後、シャルロットが跳ね起きる。顔が真っ赤つかだ。大丈夫か？

「おはよう、シャルロット」

髪を梳けなくなって残念に思いながら挨拶。

「・・・おはよう、カイト」

なんだよ、その間は。

「なんで私をそう呼ぶの」

ああ、そういうことか。

「そりゃ、お前の本当の名前だからな。せつかく可愛い名前をもらったんだ。大切にしないと。あ、俺がお前にこの名前で呼んでも周りにはタバサって聞こえてるからな」

俺がそう言つと・・・というか前半部分らへんで更に顔が真っ赤になる。茹蛸みたいだ。

「・・・ありがとう」
シャルロットが礼を言う。

「気にすんなって。俺が好きでやってるんだし。さて、早速だがやれるか？」

シャルロットは頷く。

「よし、ならまづはこれだ」
そう言つて懷から青い文字で刻まれたルーンのカードを出し、シャルロットに渡す。

「よし、それじゃそれに魔力を込めてみる」
シャルロットは俺が言つた通りに魔力を込める。すると、その手には氷の剣ができていた。

「これは俺の炎剣の氷verだ。お前は炎より氷の方が適正あるし・・・どうだ？」
シャルロットは手にした剣を振るう。

「わるくない」
どうやら満足してくれたようだ。

「そのカードは特別製でな。消耗品じゃないんだ。魔力を切れれば元のカードに戻る」
すると、シャルロットは剣をカードに戻す。

「更に、俺以上の技量がある奴じゃないとお前以外のやつには使えないように作つてある。ま、普通のやつにはただのカードにしか見えないんだが・・・」
消耗品のやつと違つて元から魔力を込めてるわけじゃないからな。

シャルロットは説明を聞きながらカードを見つめる。そんなに珍しいかね……。ま、いいや。

「さて、次行くぞ」

さて、どこまでできるようになるかな……。

それから虚無の休日まで俺とシャルロットは毎日修練の門に入った。おかげで、シャルロットの技量、魔力量がスクウェアクラスにまで成長した。

自分が教えて成長しているのを見るのはいいものだ。なんか自分の事のように嬉しくなるし。

代わりに自分の異常性がはつきりと分かってくるが……。

まあ、シャルロットに関してはそんな感じで、今俺は掃除、洗濯、朝飯を終え中庭にいる。

「我に従いし者よ、我が前に現れろ」

そう言うのと目の前に魔法陣が現れ、中から少女……。ではなく、バハムートが飛び出してくる。

「今日はどんな用事なのじゃ？」

バハムートが抱きつきながら言う。

「今日は街に買い物に行こうと思ってな。お前を呼んだんだ」

頭を撫でながら言う。こいつも髪がさらっさらで気持ちいい。

「なら早速行くとしよう」

そう言つてバハムートが俺から離れる。

そしてバハムートの体が光り、その光が収まるとそこにはFFのバハムートが現れる。

俺はそのまま背に乗り、バハムートに街の方向を教えてから眠ることにした。

「カイト。そろそろ街につくぞい」

・・・あと5分・・・。

「そうか、なら5分後にまた起こすとしよう」

5分後

「5分たったのじゃ。起きるのじゃカイト」

「あゝよく寝た・・・」

首の骨をぽきぽき鳴らしながら立ち上がり伸びをする。

「ほんとによく寝るのお、カイトは」

笑いながら人型になっていたバハムートが立ち上がりながら言う。

「寝る子は育つんだよ」

胸を張りながら言う。

バハムートはその言葉を聞いてからカイトの姿を見て、言う。

「そんなに育ってないようじゃが・・・」

「ぐっ・・・」

効果はばつぐんだ！カイトは精神的に999999999のダメージを受けた。

カイトは鬱になった。

ロープを創り木に吊るして・・・

「待つんじゃっ！悪かった・・・妾が軽率じゃった・・・」

例え幼女でもドラゴン。力だけならぎりぎりでカイトと張り合えるので、なんとか止めながら機嫌を直そうと努力する。

1時間後

「はあはあはあはあ・・・」

なんとかカイトは思いとどまったが、バハムートは全力で止め続けたため息が荒い。

「悪かった・・・大丈夫か？」

「だ、大丈夫じゃ・・・じゃが少し休ませてもらおうかの・・・」
そう言つてバハムートは魔法陣の中に消えて行った。

「・・・気を取り直していきますか」

そう一人で言つてから目的地へと向かつて行った。

「おっさん、デルフ、来たぜ」

とある武器屋の扉を開けながら中にいるであろうおっさんに声をかける。

「ようやく買いに来たか」

カウンターにいるおっさんと、

「おう」

無造作に突っ込まれている武器の中の一つから返事が返ってくる。

「それじゃ、デルフと・・・」

有り金で買える中から厳選して武器を買った。

今日の戦利品

投げナイフ・・・10本

デルフ

素材だけはいいサーベル・・・3本

「まいどあり」。にしてもお前がそのサーベルを買うとはね

「おっさん。素材が欲しかったんだよ俺は」

「お前なら簡単に手に入ると思っるのは俺だけか？」

「ま、細かいことは気にすんな。気が向いたらまた来るからさ」

「期待せずに待ってるよ」
おっさんの会話を終え、買ったものを亜空間に放り込んで（デルフは別）武器屋を後にした。

「ん？あれなんだ・・・？」

現在バハムートで学院へと帰ってたんだが・・・、

「土の・・・ゴーレム？」

大きさから見るとトライアングルか？

「どうするんじゃ？カイト」

バハムートが聞いてくる。

「とりあえず、バハムートは一度戻ってくれ。あれだけでかいんなら騒ぎになって人がいるだろうからな」

「わかった。またの」

そう言つてバハムートは帰って行った。さて、空中に浮かびながらゴーレムの行き先を見る。すると、ある程度離れた場所で崩れ落ちて行った。

「ふむ・・・とりあえず戻ろつかね」
俺は学院に戻ることにした。

武器ゲット！（後書き）

正直この先どうしましょう……。原作通り進むかフリーケをこっち側に引き入れるか……。

もしよければ感想で一言書いてもらえたら嬉しいです。

追記 このアンケートは20日の昼までです。

それではまた次回！

道中〜どうしてこうなった〜（前書き）

カイト（以後力）：どうもみなさまこんばんわ〜！セカンドライフ
主人公のカイトです。

作者（以後作）：みなさまこんばんわ。ふがない作者です。

力：で、作者よ。なんでこんな時間にようやく更新なんだ？

作：え〜とだな。

力：ああ

作：キングダ〇ハーツしてた

力：は？

作：いや、久しぶりにやりたくなってさ。オリン〇スコロシウムで
大暴れしてた

力：一回死んでこい

作：マジですんません・・・

力：たく・・・まあいい。こんなふざけた作者は放っておいてみな
さん、楽しんでくれ！

道中〱どうしてこうなった〱

ガタンゴトン

え〱、読者様^{みなさま}こんにちは。カイトです。さて、今俺、ルイズ、シャルロット、キュルケ、ロングビルさんの5人で『土くれのフーケ』なる人を捕まえに行くところです。

まあ、100歩譲ってそのくらいのことは許容しよう。一応自分の今いるところに被害もあつたから安全確保、って感じでさ。

でも、

「タバサ！あんたカイトから離れなさいよ！」

「・・・」

「あら、大変なことになってるわね〱、カイト」

この混沌^{カオス}どうにかしてくれ・・・。

この事件の発端・・・てか本来の目的である『フーケ』の捕獲をすることになった理由を説明しよう。

事の始まりはあのゴーレムを見て学院に帰ると、穴の空いた宝物庫

の塔の近くにルイズ、キュルケ、シャルロットがいた。

理由はいつものようにルイズとキュルケの口げんかの発展版とでも考えてくれればいい。シャルロットはそれの付添だ。

で、何でかは知らんがルイズの魔法により壁にひびが入る。そこを急に登場したあのゴーレムがパンチで破壊。『破壊の杖』と呼ばれるものを盗んでいったらしい。

近くにいたルイズたちは当然一部始終を見ていることとなり、学院長の部屋に呼び出される。そこで説明をして、フーケを捕まえに行く。となった時に誰も志願しない。そんな様子を見たルイズがしびれを切らし志願。キュルケはツエルプストーリーだから。シャルロットは心配だからという三者三様の理由によって志願した。

そこに学院長の秘書であるミス・ロングビルさんがフーケの情報を手に入れてきたそうだ。片道馬で四時間といったところに。

ということと自動的にこの人が俺らの案内人に決定。

そして、現在に至る・・・と言うわけさ。

あのさ、二人とも・・・近いからね？そんなぎゅうぎゅうに詰めてこなくてもこの馬車は広いよ？

「タバサ！なんであんたそんなにカイトに引つ付くのよ！」

俺の左腕にしがみつきながら俺を挟んで反対側にいるシャルロットに怒鳴る。ごめん・・・耳が痛いです・・・。

「それはあなたも同じ」

ルイズの怒鳴りもなんのその。右腕にしがみつinaながらも淡々と本を読み続ける。本を読むならしがみつかないほうがいいんじゃない？

「そ、それは・・・そう！カイトは私の使い魔なんだから近くにいないと！」

暴論だなおい……。ルイズ、せめて普通に隣に座れば足りるからな？

「別にそんなにしがみつku必要はない」

うん、正論だ。だがそれはお前にも当てはまるからな？

「う・・・そ、それならなんであんたはしがみついてんのよ！」
反論できなくなったからって無理やり返すのはどうかと・・・。

「わたしは・・・」

はいっ！そこでなんで頬を赤くする！なんで！？

「・・・と・・・が・・・だ・・・ら」

ん？隣にいる俺にさえ聞きづらい。というか、人外の身体能力をもつてこの程度なんだからルイズには全く聞こえてないだろう。

「・・・暗いところが嫌いだから」

あゝ・・・可愛いね？

「・・・」

顔を真っ赤にして俯いてしまった。恥ずかしくて赤くなったのか・・・。

「そ、それならキュルケでもいいじゃない！」
うーん、まあその意見には賛成。

「カイトの方が安心できる」

何？俺ってお父さんか何かに見られてんの？父性溢れる若者ってか？・・・まあ中身は30超えたおっさんですがね・・・。

「それにはわたしも同感ね」

えー！！！ここで認めちゃうんだ！

「ま、いいわ。思えばカイトが一人占めされたわけでもないんだし」
え？俺って物扱い？

てか、そこで空気になってるお二人さん？何その生温かい目は。特にキュルケ！そのにやにや顔はやめい！

両側にいるお嬢さんたちも！つかむ強さを強くしない！それ以上は窮屈すぎるから！

はぁ・・・俺に平穩をくれ・・・。

道中〱どうしてこうなった〱（後書き）

カ：さて、今回の前書きから俺と作者の対談方式をとったみたいだが・・・これって他の作者様のもろパクリじゃねーか！！

作：勢いでやった。反省も後悔もしていない！

カ：威張れることじゃねー！！

作：ま、ぶつちやけ感想のコメ返しがしやすいからな。この形をとってみたんだ

カ：ま、そういうことならいい様な気もするが・・・

作：では、早速。不知火様、神裂 緩無様、月光閃火様アンケートご協力ありがとうございました！

カ：それに月光閃火様なんて感想とともにアップルパイまで送ってきてくれてるぞ？

作：マジか！？俺甘党だからな。それでは一口。

カ：こりゃ美味しいな。

作：だな。生地がサクサクでリンゴの酸味もうまく出てるし。

カ：作：ご馳走様でした。

カ：はゝ美味かった・・・

作：だな。

カ：こりゃなんかお返ししねーとな。

作：それは次回あたりにでも

カ：そうか。次はいつ更新するんだ？

作：明日

カ：そうか。頑張れ。

作：おう！では最後に。みなさま、こんな駄文を読んで下さりありがとうございました。みなさまが楽しんでいただけるように少しでもよい文にできるよう精いっぱい努力しますのでこれからもこの作品をよろしく願います！

カ：感想・意見・ダメだし・誤字脱字と何でもいいからよろしく！

カ：作：それではまた次回もよろしく！

急に变えてみたんですがどうでしょうか？特に否定的な意見がなければ続けて行きたいと思います。

ゴーレム撃破くそして和解（前書き）

カ：作者死ね——！！！！

作：ぐはっ！！しかしそのくらい失礼なことをしてしまったな・・・。

カ：死ぬか！？ぼろ雑巾になるか！？肉の塊になるか！？

作：どれも変わらねえ！！

カ：さあ、貴様の罪を教えろ！！

作：ではそれは後書きで・・・

カ：ぶるわああああああ！！

作：そ、それでは本編をどう・・・ぎゃ——！！！！！！

ゴーレム撃破くそして和解

さて、道中色々あったが馬車の移動も終わり、徒歩で少し歩いたらフーケの隠れ家らしいが・・・

「お前ら・・・歩きづらい」

歩く時ですら俺の両腕にはシャルロットとルイズがしがみつき、さらに、悪ノリしたキュルケが後ろから覆いかぶさるようにして抱きついてくる。

まあ、そうすると俺も男なわけで・・・その・・・ねえ？色々意識しちゃうわけですよ？

「キュルケ・・・放してくれ」

意識を別の方向へ逸らしながら言ったので多少ぶつきらばうになっただがまあ、伝えることができ・・・

「どうして？いいじゃない、それにあなたが可愛いのがいけないのよ。弟ってこんな感じなのかしらね」

なかった・・・。てか何？父の次は弟ですか・・・。でもさ、可愛いってなに！？俺はお・と・こじゃー！

まあそんなことを言ってる場合じゃない。さっさとこの状況をどうにかせねば・・・。ロングビルさん空気と化してるし。

「放してくれ・・・マジで・・・」

「あら？きちんと理由がわからないとそうするわけにはいかないわね」

こいつ！絶対わざとだ！わかっててやってやがる！くそ・・・こんな言いたくなかったが・・・

「その・・・当たってるから・・・」
ぐわーーーーー！！顔に火がつく！！恥ずかしすぎる！！

「ふふ・・・当ててるのよ」

ふ・ざ・け・ん・なーーーー！！！！

「ふふふ・・・貴様・・・俺を怒らせてそんなに死にたいか・・・」

「ちよつと・・・カイトどうしたの・・・？」

「怖い・・・」

俺のやけっぱちになった笑い声を聞いて本能的にかどうかはわからないが、前にいるロングビルさんのところへ二人は避難する。

「あ・・・カイト・・・？」

やりすぎたことに気付いたのか抱くのをやめて一步離れる。その顔には冷や汗がたらたらと流れる。

「ふふふ・・・死ねえい！」

喰らえ！我が奥義！

「え！？ちょ・・・」

キュルケの体が浮かび、素足になる。そして、何処からともなくとりだした猫じゃらし×100で撥りまくる。

「あははははは！！！！や、やめて！！！！はははははは！！！！」

キュルケの笑い声が辺りに響く。

俺はそれを聞いて高笑いをしながら更にスピードを上げる。
空気と化している三人はその姿を見て合掌。そして思う。

（（絶対にカイト（彼）は怒らせないでおう））
最早フーケがいることはみんなの頭の中から消え去っていた・・・。

10分後。ようやくカイトの復讐も終わり、キュルケは解放される。
息も絶え絶えでかなりきつそうである。

対照的にカイトは肌が妙につやつやしてかなりいい笑顔を浮かべていた。

それを見て、シャルロット、ルイズ、ロングビルは恐怖とともに可愛いなあと思っていた。

そんなことがありつつも、一行はようやくフーケの隠れ家に到着する。キュルケは来る道中に復活していた。

「さて、ロングビルさん。フーケはあっこにいるんですね？」
背中にあるデルフに手をかけつつ言う。

「ええ、私の聞いた情報ではそうだと」

「なら、ちょっと見てくるんでここで待機してください」
そう言って返事は聞かずに瞬歩で小屋の窓付近まで移動し、中を見る。どうやら今は誰もいないらしい。
みんなのいる草陰の方へと手を振る。するとみんなが駆け寄ってくる。

「いきなり飛び出していかないでよ！びっくりするじゃない！」

「・・・」

キレルルイズに絶対零度の目で見つめてくるシャルロット。

しかし俺は、

「まあ落ち着けて。シャルロットもその目はやめなさい。さっさと小屋ん中調べようや」

二人のそれらを軽くスルー。あれにはかかわらん方がいいとです。そしたら二人はため息をついた。

ふっ、我が知略の勝利。

「では私は周りを捜してきますね」

空気と化していたロングビルさんはそう言って森の中へと入って行った。その背中にとある細工をしておく。

「じゃ、探そうぜ」

俺はそう言って小屋の中へと入って行く。みんなも俺に続いて入る。

「破壊の杖」

なんとも呆気ない……。シャルロットが適当に開いたチェストの中から破壊の杖が出てきた。

つと。あちらさんも行動し始めたか。さて……

どーん！！！！

小屋の屋根が吹き飛ぶ。そして、そこからはゴーレムの姿が見えた。

「きゃっ！な、なに！？」

ルイズはそれを見て、悲鳴を上げる。

そんな中、

シャルロットは落ち着いて口笛を吹き、シルフィードを呼ぶ。すると、すぐにシルフィードは現れる。

「乗って」

シャルロットはそう言って乗り込む。キュルケもそれに続く、が・

「ルイズ！」

キュルケがゴーレムの真下にいるルイズを呼ぶ。しかし、聞こえてないのかずつと爆発をゴーレムにぶつける。

「ルイズ！早くこっちに来なさい！」

「嫌よ！ここであいつを捕まえれば、もう誰も私のことをゼロだなんて呼ばないでしょ！それに、貴族は魔法を使える者のことを呼ぶんじゃない！敵に背を向けない者のことを貴族と呼ぶのよ！」

その時、ゴーレムは真下にいるルイズにようやく気付く。そして、その手を振りおろした。

「ルイズ！！」

キュルケが名前を呼ぶ。その顔には涙が付いている。

「大丈夫」

しかし、シャルロットはいつも通りの無表情・・・いや普通の人に無表情だがカイト的には笑っている顔になっていた。

キュルケは親友の声を聞いてその顔を見る。シャルロットは言葉の

意味に対して指をさした。当然キュルケもその先を見つめる。

土煙りが起きているが、突如、

ぶわっ

風が起きて土煙を払う。そこには・・・

片手でゴーレムの手を止めているカイトの姿があった。

「ふう、間にあつた・・・」
あつぶね・・・。下手したらルイズにこの拳が当たるところだつた・・・。

「カ、カイト兄!？」
今までつむっていた目を開いて俺の姿を見た瞬間、いきなり叫ぶ。
耳がキーンとする・・・。

「お前は何をやってるんだ？俺が間に合わなかったらぐちゃつと見るにも堪えない肉の塊になっていたんだぞ？その辺のことよくわかつて行動してたのか？」

とりあえず、今のルイズの姿にはちよつとプチつてきたよ？

「プライドを持つのは別にいい。けどな、命を無駄にしようとはするな。そんなものはプライドとは言わねえんだよ、そこ履き違えんなよ？」

「でも・・・」

「でももストもテロもない！」
ちよつとボケてみた。

「カイト兄っ！それは違うと思うわ！」
ルイズからの突っ込み。うん、いい反応速度だ。

「ま、そんなことは置いといてだな。とりあえず、シャルロットのところまで行って空から観戦してろ」

「カイト兄は!？」

「そりや・・・このお人形で遊ぶんだよ」
いい年こいて何言ってるんだろっね・・・。

「・・・そうね。こんなことを言ってるカイト兄の心配はいらないわね」

あゝあ・・・いつもの呆れた顔になってるや。

「そーいうこと。ほら、キュルケなんて涙こぼして待ってるぞ？」
さつきちらつと見たただけだが。

「今は驚愕の色に染まってるけどね。まあいいわ。じゃ、カイト兄頑張ってるね」

そう言っつてルイズはシャルロット達のところまで走っていきシルフィードに乗って空へと飛んで行った。

「さて、行くぞ？土くれの」

そう言っでとりあえず距離を離し、デルフを抜く。

「行くぞ！」

そう言っで離れた距離を一瞬で詰め、両手足を一瞬で切り飛ばす。

「ほゝ、デルフ。お前切れ味いいな」

予想以上の名剣だったようだ。

『当たり前だろ？俺は伝説の剣だからな』
デルフは誇らしそうに言う。

「ああそうだったな。さて・・・デルフで木端微塵にするのもいいが・・・今回はこいつかね」

目の前で再生しているゴーレムを見ながら懷からカードを二枚出す。

「ゴーレムよ。木端微塵になる準備はいいか？」

目の前で再生し終わったゴーレムを見ながら言う。それに対して、ゴーレムは遅いパンチで返事を返してくる。

それを距離を離すだけで避ける。そして、

「『幻符 殺人ドール』！」

一枚目のカードに魔力を込める。すると、俺の左右後ろに穴が空き、そこから万本のナイフが飛び出してくる。そのナイフは両手足に飛んでいき、またもや木端微塵にする。

「さらに『恋符 マスタースパーク』！」

空中に浮かんでいるゴーレムの胴体に向かって二枚目のカードを突き出す。すると、

どかーーーーーん!!!!!!!!!!

ゴーレムの横幅の二倍くらいの太さの極太ビームが発射。ゴーレムは跡形もなく消え去り、さらに後ろの遠くにあつた無人（打つ前にきちんと確認）の山がなくなつて荒地になつていた……。

威力高すぎだと思う……。魔力込めすぎた？

まあいいや。ゴーレムは消えたんだし。

「おーい！三人はここで待ってるよ！俺ちよつとロングビルさん呼んでくるから！」

言うことを言つて、またもや返事も聞かず森の中、ロングビルさん改めフーケの元へと向かつた……。

「さて、ロングビルさん。チェックメイトですよ？」

あれから一分もしないうちにフーケを見つけ、首筋にデルフを突きたてる。

「あ、あんたなにもんだい？気配も魔力も察知されないようにいたのにどうして……」

落ち着いたように言ってるが、顔には冷や汗が一筋。

「俺は……。そうですね……。まあ後でそのことは言ひましょう。それよりも先に種明かしといきましょうか。なんであなたのいるところがわかつたか……。これはこいつのせいですよ」
そう言つて俺は人型の紙を取り出す。

「その紙がなんだってんだい？」

「俺はちよつと色々な技術を知つてましてね。その中の一つに陰陽道つてのがあるんです。そこで使われる式神……まあ簡略化された使い魔とでもいえばわかりやすいですかね……これをあなたの背中に付けていたんですよ」

ちなみに今回はこの紙そのものが動いていた。わかりにくい人はジ○リの千と千○の神隠しで頭が異様にでかい守銭奴がつかっていたやつを思い浮かべてくれ。

「は……そんなもんがあつたなんてね……で？あんたはあたしをどうする気だい？」

「うゝん……とりあえずですね。なんであなたは泥棒をしているんです？」

「……は？」

ま、いきなりこんなこと言つたら当たり前か……。

「あなたの目にはどす黒いものがない……。というか自分自身の為じゃないというか……その……えゝつと……」

上手い言葉が見つからん！！

「……つぶ、あはは！いいよ！あんたには教えてあげる。私にはね、妹がいるのさ。ちよいと事情がこみ合つてるね。その子を守るために私はいろいろ盗んでは金を稼いでいたつてわけさ」

「……そうですか。ならば俺と組みませんか？」

「……は？」

はい本日二度目」。

「あなたが泥棒をしていたらその子はと思うでしょうか。というか、そんなお金で育てられていることを知ったらきつと悲しみますよ？ならば俺と組みましょう。ちゃんとお金は払いますし、色々考えてありますから。ここでOKしてくれたらあなたのことはバラしませんし、それに今まで以上に金を稼げるようになりますよ？」

「・・・本当だろうね」

「本当と書いてマジです」

「ふっ・・・わかったよ。どうせここでつかまっていた身だ。それならあなたの考えに乗ってみるのも一興ってね」

「交渉成立です。それじゃ、これからよろしく」
そう言って俺は手を出す。

「そうさね・・・あんたには本当の名前を覚えておこうか。わたしはマチルダ。そう呼んどくれ」
ロングビルさん・・・マチルダさんは俺の手を握りながらそう言った。

ゴーレム撃破くそして和解（後書き）

作：ほ、ほんとに申し訳ありませんでした月光閃火様・・・あの時の俺はちよつと気が動転してたんです・・・

カ：ほあ・・・何故なんだ？というかなんで『ミート』パイをアツプルパイって間違えるんだよ！

作：いやさ・・・昨日ちようど投稿するため執筆してるときにアツプルパイ食ってて、さらに眠気でぼろっとしてたし、次の日（今日の朝に英検準2の2次試験もあつて緊張してて・・・

カ：というか英検あるのに書いてたのか・・・

作：ふっ・・・俺の辞書に自主勉と言う文字はない！！

カ：まったく威張れねえな、おい！！

作：しょうがないさ。こんなふうに着ちまったんだ・・・

カ：もう何も言うまい・・・それで作者よ。あの無理やり展開について色々言いたいんだが・・・

作：あはは・・・本当はもっと違う感じだったはずなんだけどね・・・
・何処で俺は間違った・・・

カ：しかも、何だよ！最後のあれ！なんで本名教えちゃってんの！
？マチルダ！！

作：いや〜・・・なんでだろ・・・

カ：・・・お前無計画すぎるのも度があると思うぞ？

作：いや〜、俺の作品なんてそんなもんだぞ？大体の話を授業中にプリントの裏に書いて、打ちながら修正。面白いと思ったネタを加筆したりさ

カ：もうチョイ先の方を見ながら書いたりしろ

作：無理

カ：断言かよ！

作：まあ、こんな感じでぐだぐだ間マックスで進んでいきますがどうぞよろしく！

カ：もういいや・・・ま、次でフーケ編はおしまいだ。

作：一応その後日常風景的なものを書いてからアルビオンに進みたいと思います

カ：おい、月光閃火様には何をお返しするんだ？

作：ふむ・・・これなんてどうだ？

てれてってってー

作：チーズケーキ♪

カ：今どっからだした？

作：そんなことは気にしない！さて、それじゃ月光閃火様のところにいつてこい！

カ：おい、どうやってあの穴を開けたんだ？

作：気にしたら負けさ

カ：ま、それもそうか

作：それじゃこのへんで終わるか

カ：そうだな

カ・作：それではみなさん、また次回をよろしく！

事件解決！（前書き）

カ：このバカ作者——！！

作：いや！まじですんませんでした！！

カ：てめーはどんだけミスれば気が済むんだよ！！

作：いえ・・・本当にすみませんでした・・・。

カ：ふん！お前への制裁は後書きでだな

作：うつ・・・まあ、みなさま本編をどうぞ！

事件解決！

さて、無事フーケ・・・マチルダさんとの交渉も成立し、事件も解決。その報告の為に学院長室へと出頭していた。

「ふむ・・・フーケは捕まえられなかったか・・・」

オスマン校長は報告を聞いて言う。いや、本当はあなたの隣にいますけどね。

「ですが、『破壊の杖』が返って来ただけでもよかったではありませんか」
そういえば、

「あの、もしよければですがその『破壊の杖』を見せてはもらえないでしょうか」

どんな能力を持ってそんな呼び名になっているのかが気になるし。

「うむ・・・、まあ、いいじやろう」

許可ももらい、早速校長の目の前にある箱を開ける。するとそこには・・・

「・・・」

この世界にあつてはいけないものがあつた。俺の勘違いであればいい・・・そう思って、俺の作った解析魔法————と言っても目に魔力を集めてちよいと変化させるだけなので別に相手に悟られる心配はない————で材質などを細かく調べてみたが、残念な結果に終わってしまった。

「もういいかの？」

オスマン校長からの言葉で我に帰る。

「はい、ありがとうございました」

そう言っただけは入り口付近にまで戻り、壁にもたれかかって思考の海につかる。

その間に、ルイズたちにはシュバリエの爵位を、すでにそれを持っているタバサには精霊勲章が授与されることになっていた。

一応俺にも、と三人は頼んだそうだが平民と言う理由で却下されていた。

それらのやり取りも終わり、ルイズ達は部屋から出て行く。しかし俺はついて行かずに学院長室に残った。

「それで、カイト君じゃったかな？何のようじゃ？」

「ああ、要件はその『破壊の杖』に対してだ」

あんなものもってる人に対して敬語なんて使ってらんないよね？

「どういうことじゃ？」

「それは、こことは違う世界の物だ。それもこことは比べ物にならない技術力のあるな」

俺がそう言っただけの場にいるもの全員が目を見開く。

「何故君がそのことを知っておるのじゃ！？」

「まあ、色々事情があって知ってたんだよ。わかるだろ？俺が普通の平民でないことくらい」

「・・・まあの。君は元々貴族ではないこともわかっておる。なに魔法は使える。さらには我々のもっていない魔法も使っておるしの」
そこまで調べてるなら話が早いな。

「とりあえず、俺の正体に関しては黙秘させてもらうが、まずその『破壊の杖』それは武器で名前は『M72ロケットランチャー』という。破壊力に関しては・・・そうだな、フーケのゴーレムが吹っ飛ばせるくらいの威力だな。これがそれについて知ってることだ。で、それを何処で手に入れた？」

「三十年前、わしが森を散策しておったとき、ワイバーンに襲われたワシを助けてくれたものが持っておったものじゃ。彼も元の世界に戻りたいと最後まで呟いておったことを覚えておるよ」

「そうか・・・。ま、その扱いは慎重にしてくれよ？暴発したら嫌だからな」

「わかっておる。わしもその威力は目の前で見せられておるからの」

「じゃ、俺からの用は以上。話してくれてありがとう」

俺はそう言って学院長室から出て行った。あ、敬語に直すの忘れてた・・・。

さて、夜になりアルヴィーズの食堂の上の階が大きなホールとなつて舞踏会が開かれていた。
が、俺はと言うと・・・

「マルトーさん！後何皿！？」

手の中でフライパンを動かしつつ後ろにいるマルトーさんへと叫ぶ。

「後100皿だ！」

ありえねえっ！

「こうなったら・・・『忍法 多重影分身の術』！」

気からチャクラを練りだし、自分を10人ほど生み出す。さらに俺の分身の為、全員がフライパンを創り出す。

「さて、俺よ！一人ノルマは10皿だ！」

『おう！』

「調理開始！」

俺の一言で全員が一斉に作り始めた。ものすごいスピードで・・・ものの5分でノルマを達成できた。

「お疲れ、俺。じゃな」

『またな』

そう言つて俺達は消えて行つた。

それを見ていたマルトーさんをはじめとする厨房にいる人たちは啞然としている。

「それじゃ、俺行きますから。あとこれ魔法じゃないから一応そう説明して、俺は厨房から出て行つた。」

「よう、デルフ。悪いな、放置してって」

ホールのバルコニーに立てかけられているデルフに謝罪をしつつ、
厨房で作って来た自分用の料理ともらった酒を並べる。

「いや、気にしてねーよ。それより・・・お前それ全部食べる気が
？」

デルフは見えてるのは知らんが、俺の持ってきた料理の量に少し
引ききみである。

その量とは、バイキングとかで料理が乗ってる大皿が10枚以上が
バルコニーいっぱいに広がってた。

「まあ、食おうと思えば食えるんだが・・・ま、頼まれたからな」

「あの青い娘っ子にか？」

何故か、シャルロットのことをデルフは青い娘っ子と呼ぶ。まあい
いけど。

「そういうことだ」

デルフにそう言うってから念話でシャルロットを呼ぶ。すると、教え
た神速を無駄に使って一瞬で現れた。てか、練習の時よりも精度高
いし・・・。

というより・・・

「そのドレス、シャルロットに似合ってた可愛いな」

シャルロットの姿を見て思った第一印象をそのまま伝える。そした

らいきなり顔が真っ赤になり、こっちに倒れてきた。

「っと。どうしたんだ？風邪？」

慌てず受け止め、料理に当たらないよう自分の腿に頭を置き、寝かせる。

神速使えるんだから体調はいいと思うんだが・・・

「お前さんは鈍いねえ・・・」

うーん、と唸っていると、デルフからそんな突っ込みが来る。

「鈍いつてなんだよ」

さっぱりだ。というか、何が？

「そういうとこがって意味さ」

そう言つて、デルフは鞘に収まった。

それから10分くらいしてから、シャルロット復活。しかし、俺の顔を見るとまた顔を真っ赤にする。今回は気絶をしなかったらしいが。

「・・・」

「・・・」

えーと・・・なんでここだけ無言？中から聞こえる音がよく聞こえる。

「・・・ありがとう」

「へ？」

突然の言葉に変な声をあげてしまった俺。恥ずい！

「・・・嬉しかった」

「いや、何が？」

いつもならその一言文でも意図が読めるのだが、今回は本当にわからない。よって、本人に問うことにする。

「・・・可愛いつて言ってくれたこと」

「いや、俺は見えて思ったことをそのまま口にただけなんだが・・・まあ喜んでくれて何よりだ。それより、早く食おうぜ」

俺はそう言つて箸を渡す。なんでかは知らんがシャルロットも箸が使いたいと言うので教えてあげたのだ。

「「いただきます」」

最早当たり前といった風に俺とタバサはいつも通りの挨拶をし、食べ始めた。

「おいしかった」

満足げにシャルロットは言う。

「そう言ってもらえるとうれしいよ」

皿を亜空間に放り込みながら言う。毎日言われてるが、嬉しいことに変わらない。

片付けも終わり、夜風に身を任せていると、

「踊って」

突如、右手が握られる。そして、そのまま手を引かれホールの中へと入る。

「ふむ・・・でも俺は踊れんぞ？」

元々そういうことに興味なかったし。

「大丈夫」

いや、何を根拠に？

「動きを合わせて」

そう言っただけでシャルロットが動き出す。言われた通りシャルロットに合わせて動く。

「うまい」

「と言われてもただついて行っただけなんだがな」

この程度の動きならば楽勝だ。格ゲ - のコンボを真似する方が難しい。

そんな感じで踊っていると曲が終わる。

「楽しかった」

そう言っただけでシャルロットは俺の手を引きながらまたバルコニーへと戻ってきた。

「ああ、俺も楽しかったよ」

そう言っただけで俺はコップに酒を注ぎ、双月を酒の肴としつつその味を楽しむ。

そんなことをしていると、

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな~~~~り~~~~!」
その言葉とともに着飾ったルイズが現れ、周りを男子生徒に囲まれる。その中には今までルイズを馬鹿にしていたものもいる。

「反吐が出るな・・・」

一気に酒を煽る。見ていて吐き気がする。今まで見向きもしなかった癖に、そしてルイズをどれだけ傷付けたかも考えずにあんな行動をとるとは・・・。

「タバサとこんなとこにいたのね・・・っと、機嫌が悪いわね。どうしたの?」

「どうやら、あいつらのことは完全に無視って俺達の方へと来たらしい。」

「いや、なんでもない」

さっきまで考えていたことは頭の隅へと追いやり、笑みを浮かべる。

「そう?・・・それでね、カイト。この服、どう思う?」

俺の顔を不安げに見る。

「似合ってるさ。だから、そんな顔をしなさんな」
頭に手を置きながら言う。

「あ、ありがと・・・カイト。あの、私と踊ってくれない?」
右手を差し出しながら言う。

「シャルロットの時にも言ったんだが、俺は踊れんぞ?」

「そうなの？タバサ」

「でも、普通に動きについてくることはできる」

「そう。なら十分じゃない。行きましょ？」

今度は、俺の手をつかみホールに引きずっていく。

そんな俺にシャルロットは手を振っていた。

「あのね、カイト兄・・・わたし、ほんとに今までこの前話してくれた前世とか神様とかそういうことを信じてなかったけど、フーケと戦ってるのを見て、本当なんだと思ったわ」
踊りながらルイズは言う。

「そうか。まあ、普通は信じられんものな。俺だってお前の立場ならそうだろうし。でも今は信じてくれてるんだろ？」

「ええ、もちろん」

「ならいいさ。それよりもこの時間を楽しもうぜ」

「うん！」

そう言ったルイズは子供のころに見たような純粋な笑顔を浮かべていた。

事件解決！（後書き）

カ：さて、一応だが言い訳（と言う名の遺言）を聞いておこうか

作：いえ・・・あれはマジで俺のミスです・・・。

カ：ったく・・・唯一感想を送ってくれる人に対して失礼すぎるぞ・・・

作：まったくもってその通りです・・・

カ：まあ、その謝罪の気持ちは小説につき込め

作：もち！

カ：さて、前回の内容から振り返ろうと思うんだが・・・作者よ、マスパとか殺人ドールとかわかる人いんのか？

作：結構有名だし大丈夫じゃない？

カ：まあ、わからん人は東方で調べればたぶんわかる。

作：そうだな

カ：で、今回だが・・・NAROTOか・・・

作：だね

カ：てか、ルイズ出てくるまで時間かかりすぎじゃね？

作：そこは・・・海のように広い心でどうか許容してくれ

カ：少しでも良くなるように努力しろよ

作：そうだな。頑張ろう。

カ：その意気だな。さて、話はこのくらいにして次回予告的なものでもするか

作：おう。次回から数話ほど本編から外れて日常とか作者的にやりたいネタに走ったりします。

カ：なんて言うか・・・最悪？

作：それ言うなよ・・・。さて、次回『あゝい、きゃゝん、ふらゝい！』です！

カ：うわぁ・・・いきなりネタかよ・・・

作：うるさい！まぁ・・・

カ：作：次回もお楽しみに～！

あゝい、きゃゝん、ふうゝい！（前書き）

カ：さて、日常編第一弾か。

作：そうだね。

カ：でもさ、作者

作：ん？

カ：あまりにも短くないか？

作：・・・

カ：それに一部の表現もあいまいだし

作：・・・

作者はログアウトしました

カ：逃げたか……。まあいい。それでは皆様、今回はマジで短いですがお楽しみください！

あゝい、きゃゝん、ふうゝい！

とある昼下がり、俺は木陰でのんびり空を見上げぼーっとしていた。隣にはシャルロットが本をきらきらした目で読んでいる。

その本の表紙には空を飛ぶドラゴンの絵が、空には楽しそうに飛びまわっているシルフィードの姿が。

その二つを見て思った。

「そうだ。リフボードを作ろう」

「えゝっとここから空気中のマナをとりこんで・・・」

現在、俺の力をフルに使ってリフボードを組み立てている。この世界にはトラパーはない代わりにマナが空気中にたっぷり含まれている。

ので、これをトラパーの代わりに見立てて理論を組みたてつつ、即興で作っていく。試運転して、悪かったら交換。これを神速とも呼べる速さで繰り返して行っていく。

まあ、それから2時間と半刻程・・・ようやく、形となったリフボードを作り上げた。まあ、一応まだ試作段階なんだが・・・。

というわけで試運転・・・と行きたかったが、この学院の周りにいいスポットがない！！と始め思ってた転移しようと思ってたのだが、よく考えたら波とか関係なしに飛べるんだからスポット要らんじゃ

ん！！と言つことに気づき、学院の一つの塔の屋上へと転移する。

ちなみにシャルロットも一緒だ。途中から本を読まずにこつちを見ていたらしい。俺は気付かなかったが。

「何をするの？」

まあ、この世界にはこんなものないから当たり前前の反応か。

「ま、見てろつて」

シャルロットにそう言つて俺は走り出す。そして・・・

空中に身を投げ出した。

そのまま落ちる。そして、脇に抱えていたボードに乗り、

「あゝい、きゃゝん、ふらゝい！！」

気の抜けた声とともに空へと飛ぶ。途中、びっくりした顔のシャルロットも見えた。

そして、ある程度飛び上がってからバックフリップやサイドフリップ等のエアトリックを決めまくる。スノーボードをやった時が懐かしい！

まあ、ある程度遊んだ後、一気に空へと飛びあがり、そのままジェットコースターの縦回転のように回り、そのまま下へと滑る。

決まった！カットバックドロップターン！！

いやゝ、まさかこれができる日が来るとは思わなかったなゝ。めっちゃ楽しかったし。

そんな満足感と高揚感もちつつシャルロットの元へと帰る。

「どうだった？俺のリフは」

「・・・」

シャルロットは無言で俯く。あれ？お気に召さなかったか！？

「ど、どうしたんでしょうか・・・姫？」

「・・・いきなり落ちたりしたら心配する」

ああ、そういうことが。

「そりゃあ悪かった。きちんと説明しときゃよかったな」

頭を撫でつつ言う。最近無意識にこうやってしまっな。嫌がってないからまあいいけど。

「ん」

短い返事だが、表情と声の調子から許してくれてることがわかった。

「ま、このテストも終わったし・・・これからどうする？」

またぼくとするのもいいけどさ。

「木陰でゆっくりする」

お、気が合うね。

「そんじゃ、戻るか」

俺がそう言つと頷いて俺の腕につかまり、満足げな表情をする。

なんか、最近ルイズもだがこうするのが当たり前になってきたな・・・。ま、可愛いからいいけどさ。

そんなことを思いつつ、さっきまでいた木陰へと戻って行った。

あゝい、きゃくん、ふうい！（後書き）

作：さて、まずは 普通様 んんん（．．）様。ご感想、ご指摘
ありがとうございます。

カ：良かったな。感想書いてくれる人増えて。

作：そうだな。これは嬉しいことだ。

カ：この感想に書かれたことをかなえるのか？

作：まあね。できるだけそうするよ。んんん（．．）様が書いて
くれたようにチート街道まっしぐらとか。マチルダをどうするかは
まだ決定してないけど。

カ：チートは決定なんだな．．．。

作：この作品は元々はっちゃけるために書いてんだから当たり前だな

カ：他のもあんまし変わらんような気もするが．．．。

作：それを言うてはなんのだよ．．．。それに、この作品が一番
いじりやすいし。

カ：ぶっちゃけたな。

作：原作ブレイクとかは当たり前！って感じだしね。

カ：．．．もう好きにやってくれ。

作：元よりそのつもりさ！さて、次回をどうしようか・・・。

力：案とかはないのか？

作：一応、マチルダさんとの商売的な話とタバサのお母さんでも助けに行こうかな。・・・なんて。

力：まて！前者はいいとしても、後者はアウトだろう！

作：どうにでもなるんじゃない？

力：いや、お前大丈夫なのか・・・？

作：気合いと根性で！！

力：最悪だ・・・。

作：まあ、よかったらあの二つのどちらがいいか感想を送ってもらえたらその通りにしようと思います。

力：他力本願か・・・。

作：さらに、『こんな話が見てみたい！』というのも募集します！

力：ネタがないからってそこまで読者任せか！？

作：まあ、いいじゃん？ここまできたらさ。

力：・・・

作：ま、まあとにかく！次回もよろしくお願いしますね！

力：・・・

作：その目はやめてくれ・・・

事業計画と会議（前書き）

作：どうも、みなさまお久しぶりです！

カ：本当にな。なんで1ヶ月も更新停止してんだよ

作：いや・・・とりあえずどっちに行くかを少し悩んで、先に商売をやろうと決めたんだが、何にするかを悩んでな・・・。さらに学校の学年末に溜めてた提出課題の片付け、さらにバイトと色々重なりまくってな・・・

カ：他の作者様の作品を読む暇があるのにか？

作：うぐっ！！

カ：・・・まあ、他にも言い足りないことはあるがグチグチ言うのも大人げないしな。この辺にしておこう

作：よかった・・・

カ：まあ、言われなくなれば更新をもっとはやくしろ

作：サー・イエス・サー！！

カ：それでは皆様、久々の投稿にも関わらずいつも以上に駄文な上に短い本話をお楽しみください

作：そう言われて楽しめる人っているのか・・・？

事業計画と会議

さて、リフボードに関しての実験を終えた翌日の夜。そろそろマチルダとの約束果たさないと、なんて考えたのでシャルロットの部屋に集合することにする。

あ、マチルダって呼んでるのは本人が、

「友人からかたっ苦しい態度でいられるのはいやだ」とのことなのでタメ口で、名前も呼び捨てにしている。

で、なんでシャルロットの部屋かというと、まあ遡ること数時間前、

「なんでフーケを捕まえなかったの？」

「ん？どういうことだ？」

「ロングビルはフーケ。なのに何で学院に連れて帰ったの？」

「そう判断する理由は？」

「まず、遠くから見ただけなのにフードを深くかぶってる人間の性別を確認できるとは思えない。次に行って帰ってくる時間がどう考えてもおかしい」

「まあ、結論から言えば合ってるんだが・・・だれにも言わないと約束しろよ？」

「わかった」

てな感じでシャルロットはフーケの正体に気付いてたようなので、信用もできるので事情を説明してこっち側へと入ってもらった。

後、連絡方法として名刺位の大きさの紙を使って念話の双方向の伝達を可能にした・・・簡単に言えば携帯電話である。を使用。登録した魔力の波長にのみ反応して使うので、本人以外は使用不可という代物だ。

現在、俺達三人はシャルロットの部屋に集合している。サイレントもかけてバッチリである。

「それでは会議を始めたいと思います。進行役は俺、カイトが務めさせていただきます」

机の上に用意したクッキーをつまむ。

「書記、タバサ」

同じようにシャルロットもクッキーをつまむ。

「・・・」

特に役が決まってないマチルダは無言でクッキーをつまむ。

「とりあえず、今回の事業に関する役割を決めて行こうと思う」
カリカリッとシャルロットのペンが紙の上を走る。

「そうは言っても何をやるのかわからないんだけどね」
まあ、何も言わずに始めたもの。知ってたら逆に怖いわ。

「では、今回着手する事業とは・・・ずばり、銭湯だ！」

「せんとぅ・・・？」

「なんだい、そりゃ？」

あゝ、この世界では馴染みのないもんだから知らんのも当たり前か。

「ま、簡単に言えば公衆浴場だ。これに決めた理由はだな、まず、この世界に馴染みがなくてインパクトがあること。次に、平民には毎日風呂に入る習慣がない。だからこそ、風呂に入る気持ちよさとかを覚えてもらえばこっちのもんだしな」

風呂はリリンの生み出した文化の極みだしね（笑

「後、始めの投資が少ない。源泉さえ見つければ、マチルダに地面いじってもらってすぐ完成だし。建物は俺が影分身で建てるし。従業員をほとんど雇う必要がないところもいい。さらに、利用料を低くしてタオルとかの貸出、酒、その他嗜好品とかを取り揃えれば簡単に利益は出るしな」

まあ、ぶっちゃけ俺が入りたいのもあるんだがな。

「さて、この案に異議を唱える人はいる？」
そう言いながら二人の顔を見る。

「ない」

「ないよ」

二人からは特にないようだ。てか、シャルロット。お前、風操って文字書くってどんだけ無駄に高レベルのスキル発揮してんだよ・・・クッキー食べたいからってそんなことせんでもいいのに。マチルダが隣で顔ひきつらせてるぞ？

「よし、なら役割分担な。俺は原泉探索。シャルロットは木材集め。マチルダは嗜好品の買い取りルートの確保。異存なし？」

「了解」

「まかせな」

おゝ、頼もしいね。

「ならそういうことで。各自明日から行動開始ね？ではこれで今回の会議を終えます」

そう言つて最後のクッキーを口の中へと放る・・・が横からシャルロットが風で奪つて自分のところに持っていく。

そして、そのまま食べる。

怒ろつかと思つたが、その食べる姿が小動物チックで可愛いと思つてやめた。モキュモキュと言つた感じの擬音が聞こえてきそうだ。

まあ、また作ればいいか。それよりも明日からは原泉探しか・・・。頑張るとしよう。

事業計画の会議（後書き）

作：さて、まずは、んんん（．．）様、a s a k u r a様、a o i様、天意無法の歌武鬼者 鬼龍院猷侍郎様、ご感想ありがとうございます。ございます。

カ：ほんとありがたい話だよ。良かったな作者

作：そうだな。天意無法の歌武鬼者 鬼龍院猷侍郎様なんてめっちゃうれしいこと書いてもらえたし

カ：んんん（．．）様なんてお前が放棄したルートの考えも書かれてたし

作：それを言われるとほんと頭が痛いぜ・・・

カ：自業自得だ、バカ者。まあ、こんな奴のことは放っておいて、a s a k u r a様が書かれていたことですが、それは作者の説明不足です。その、シャルロットの名前を呼ぶ時には他の人にはタバサと聞こえるようにネギまの認識阻害みたいな感じの魔法にかけてあります。正直ご都合主義にも程がありますがこういう設定で納得してください

作：さらに、今回の話で書いてあったことなども作者の思いつきにより書かれております。多少矛盾があるでしょうがそこもどうかご了承ください

カ：思いつきで書いてるのはいつものことだがな

作：否定はせんさ・・・

カ：まあいい。次の話をさっさと書け

作：ああ。頑張つて2日以内には仕上げて見せる！

カ：ああ、その意気で頑張ってくれ。読者の皆様を失望させないようにな

作：そうだな。マジで頑張らんと

カ：それでは次回もよろしく！

事業計画の準備の前篇（前書き）

カ：さて、今回はなんか言いたいことあるか？

作：べ、別にバイトと春休みの課題が忙しかったわけじゃないんだからね！

カ：キモいわ！！

作：まあ、自分で言ってて吐き気するしな

カ：ならやんなよ

作：そうだな。ほんというんな意味ですんません・・・

カ：てか、守らないんなら言わない方がよくないか？

作：かもしれない・・・。ある程度更新速度がまともになってからにする

カ：そうしろ。そしてもっと長くしろよ。まあ駄文だから長いと読みづらいだろうがな

作：うう・・・その辺は頑張って精進します・・・

カ：まあ、今回もこんな感じで済みませんがよろしくお願いします

作：それではどうぞお楽しみください

事業計画の準備の前篇

さて、会議の翌日。現在俺は一人でトリスタニア郊外を訪れていた。理由は昨日決めた役割の原泉探しのためである。

探索方法は日本ならず外国でも（きっと）メジャーな探し方、二本の直角に折れ曲がった金属棒を持って歩くダウジングである。

正直もつといい方法もあるのだが、元の世界の産物である銭湯を再現するんだし探すのも元の世界にある方法で・・・と思ったためである。

バカらしい理由ではあるが納得してくれ・・・。

まあ、そんなことは置いといて。適当に歩き続けて三時間。現在やる気が急降下中である。ウォークマンとかがあれば特に不自由しないんだが・・・しゃーないか。少しズルをしよう。

「忍法 多重影分身の術」

ということで俺が300人体制で動くことに。

いやゝ、同じ顔の人間が全員ダウジングで・・・カオスにも程があるぜ・・・。

ま、おかげですぐに見つかった。ビバ！人海戦術ってね。

見つかったところには魔力でマーカーをつけておく。このマーカーは地面に魔力で刻印を打ち、この場所が消滅するか俺が解かない限りは消えない目印をつけるうえに、座標がアドレス帳みたいにその魔法の中にインプットされるので転移も可能になるオリジナルの魔法だ。

使い勝手が良かったため、結構大切だと思える場所には大抵打つてある。まあ、欠点は俺一人しか転移できないところだが。

そんなわけで俺のやるべきことは終了。学院に戻るとしよう。

道中、野ウサギに野草をGET！

今日の昼飯は・・・シチューでいっか。これに米があればとマジで思うな。

まあないものねだりしても仕方ない。ライ麦パン辺りで我慢しよ。

そんな事を考えながら学院へと帰還したと同時に空から無数の木が降ってきた。それらの中で直撃コースにあるものをキャッチ&横にポイと放る。

それらが終わると同時に竜と人——シルフィードとシャルロットが地面に着地する。

「お帰り、シャルロット、シルフィード」
そう言いながら手を上げる。

「ただいま」
シルフィードの背中から降りて言う

「ただいまなのね、きゅいきゅい！」

シルフィードも今の時間

現在は本来シャルロットが

授業を受けているはずの時間

は誰もいないため喋る。

まあ、喋らなくとも理解は出来るけどな。

「つーかなんで俺の真上で木を落とすんだ？当たったら痛いだろうが」

たんこぶ位は出来そうな威力だったぞ？

「普通の人なら痛いどころか死ぬ。それにカイトなら当たるはずない」

まあ、信じてくれることには嬉しさを感じるよ？それに顔を赤くしながら言うのも可愛い。

それでも、木を落とすのはないって思うんだ、俺は。

「まあいいや。少し早いが昼飯にしようぜ」

そう言うと、シャルロットは駆け寄ってきて顔を赤くしながら腕を抱くように掴む。背がそこまで変わらない為シャルロットの息が首筋にかかりくすぐつたい。

てか、最近なぜかシャルロットが顔を赤くしながらもくつついてくる。多分羞恥心からきているのだと予想している。恥ずかしいならやめとけばいいのに。別にくつつく必要もないだろうし。

などと毎回思っているのに聞いたらウィンドアイシクルが弾幕並みに飛んできた。あれは前のシャルロットだとありえんな、普通の奴らなら不可能だろうし。まあそれでも俺はそれらを全部撃ち落としたが。

そんなことがあったので何も言わないことにした。特に不自由とい

うかマイナス面はなく、むしろシャルロット程可愛ければ役得だろう。

そんなことを思っているといつの間にか厨房にてシチューを作り終えていた。

何故かメイドさん+コックさんの分まできっちり。

ふむ。アイツがやってくれたか。後で礼を言っておこう。

まあ、それよりも飯をさつさと食うとしようか。

シャルロットが暴走しかねん。

『』馳走さまでした』

メイドさん+コックさん+俺たちで恒例化した挨拶をする。

これが恒例化したのは俺たちがやっているのを毎回マルトーさんが見ていて、疑問に思ったらしく俺に聞いてきたのが始まりだ。

前にシャルロットに説明したことをそのまま伝えと感激し、そのまま俺の料理の噂と共に使用人内に広がり現在に至る。

始祖ブリミルは何処に行ったんだ、と言いたい。どうでもいいが。

飯も食い終わり、最早授業をまったく受ける気のないシャルロットと共にヴェストリの広場へと向かう。

後はマチルダが帰ってきてくれればいいので待つことにする。多分後何日か掛かるだろうからどうするか考えようかな・・・。

事業計画の準備の前篇（後書き）

作：さて、まずは、んんん（．．．）様ありがとうございます。そしてすみません．．．。次から無謀なことは言わないようにします．．．

カ：そうだな。そうした方がいいだろな

作：うう．．．、まあこの失敗を糧と変えて次から頑張っていかなば！

カ：おお、その調子だ作者

作：よし！ではいきなりですがアンケートです。この後の日常編の展開でいくつか候補があるので、

A：使い魔を召喚してみる。

1）どつかのアニメかゲーム、漫画から召喚。このキャラを召喚してほしい！という要望がありましたら、原作名、キャラ名と一緒にご記入ください。

2）オリキャラを登場させる。これに関しても、こんなキャラがいー！と思われるものがあれば、できるだけ詳しくご記入ください。

B：ギーシュ強化イベント

C：タバサのお母さん救出イベント

D：上を全部

E：さつさと原作進める

以上の候補の中からアルファベットでお願いします。アンケートになにもなければ進むかどうか微妙な状態になります

カ：いや、それはどうかと思うぞ？

作：まあ、アンケートの結果が出るまでは他の小説更新するか、小説2巻以降は読んでないから立ち読みに行くか、アニメ見直すかするけどな

カ：ちゃんと原作読んでから書けよ・・・

作：アニメ一応3期までは見てたから大丈夫かなあ、とか思ってたんだが・・・。ダメか？やっぱし

カ：ああ、ダメだろ。さつさと読んで来い。もしくは買え

作：頑張って立ち読みに行くよ・・・

カ：まあ、そんなことは置いておいて。皆様のご意見、ご感想等よろしく願います

作：それではまた次回もよろしくおねがいします！

ギーシュ強化イベント～第一段階～（前書き）

作：お久しぶりです！

カ：ほんとにな。死んだのかと思われてるかもよ？

作：いや、そこまで言うか……。まあ、体調崩したりとかはしてただけさ

カ：ふうん、まあ正直読者の皆様方としては知ったこっちゃねえがな

作：……。それもそうだな

カ：ま、とりあえずこのバカ作者のことを見捨てずこれからもうどうぞよろしく！

作：……。それではどうぞ、お楽しみに……

ギーシュ強化イベント～第一段階～

マチルダが帰ってくるまでの間に何しようか考えながらぼっと空を見上げていると、

「やあ、シヨウゴ。こんな所にいたんだね」
と後ろから声をかけてくる奴がいた。

それに俺は片手を上げつつ振り返らず返事をする。

「よお、ギーシュ。決闘の日以来だな」
まあ、あれから色々やってて会う機会もなかったしな。

「そうだね。お陰で今まで会えなかったしね」
ん？俺を探してたのか？

「俺と会おうと思うなんてどうしたんだ？」
こいつとの接点だってあの決闘だけだし・・・。

「ああ、単刀直入に言うよ。僕に訓練をつけてくれ」
へっ、訓練ね・・・？あれ？

「もっかい頼む」
聞き間違いだろう、そう思い聞き直してみる。

「？わかった。僕に訓練をつけてくれ」
聞き間違いじゃなかったか・・・。

「どうして俺なんだ？平民だぞ？」

トリステインはそーいうのをウザイほど気にしてんのに。

「そうだけどね。僕自身は別に平民を差別扱いはするつもりはないし、貴族としての誇りさえあればいいと思っっているからね」
ほゝ、その辺のアホ貴族とはチヨイ違っってことか。

「ふゝん、ならなんで力を求めるんだ？特に今の状態でも同年代では優秀な方だと思うけど？」

こいつのゴーレム操作と錬金の技術は高いレベルにあると思う。まあ、あくまでも同年代の中では、だが。

「いや、今の僕ではまだまだなんだ。僕は貴族だ。そのうち戦争に駆り出されることもあるだろう。その時生き残るためには力があるだろうからね」

ふむ。プライドより自分の命を取るか……。

「なら何故生き残りたいんだ？」

答えようによつては考えねばならんからな。

「……まあ一番の理由としてはやっぱり生きたい、としか言えないかな。それに……」

「それに？」

「まだ知り合っていない女の子たちと仲良くならなきゃいけないからね」

ドーンと言い切るギーシュ。その様子に俺は脱力する。

まあ、こういうことをマジで言い切るこいつなら大丈夫かな。

「わかった。できる範囲で訓練をつけてやる」

「ありがとう！」

そう言った瞬間、ギーシュは顔を輝かせて言う。

「まあ、それなら早速始めようか」

立ち上がりながら言う。

「ああ！」

でもどうしようか……。うーん、まあ最初は、俺の力でも見てもらうか。決闘のが俺の全力と思われたら心外だし。

思ったらすぐ実行。周りに結界を張り、中の空間を弄って地平線が見えるほど広くする。

「な、なんなんだい！？これは！」

あ、説明すんの忘れてた。

「あゝ、簡単に言えばいくらでも暴れていいように結界を張ったんだ。まあ、ここでつかっている魔法とは違うからお前には使えないが」

なんて適当にも程がある説明をしつつ、地面に手をついてゴーレムを練金する。

出てくるのは実寸大1/1スケールのファーストガ○ダム。合金はなんか適当にそれっぽいのをチョイス。

うむ。やっぱりガン○ムはいいな。漢のロマンだ。

そんなことを思っている俺の隣では口をポカーンと開けたまま呆然としているギーシュがいた。

まあ、この世界だと有り得ない練金の仕方だししょうがないか。

「おい、ギーシュ。呆けてないで攻撃なりなんなりしてあれの強さを確認してこい」

あれの強さを確認してもらってから見せなきゃ意味ないしな。

「あ、ああ。わかったよ」

戸惑いながらもゴーレムを作り出しファーストガン。ムに攻撃を仕掛ける。

しかし、ドットメイジのギーシュが作った青銅のゴーレム如きに傷が付けられるほどガンダ。は軟ではない・・・まあ下手すりゃスクエアメイジ数人掛かりでようやくかすり傷、みたいな感じになる可能性も否めないが。

まあ、結果は予想通りというか案の定ギーシュのゴーレムでは傷を付けられなかった・・・それどころかゴーレムの使っていた青銅の剣の方が折れてしまった。

流石は。ンダムと言うべきか？

そのあと、ファイアボールやら知っている魔法で攻撃したが、まったく効果がなかった。

「これであれの強度の高さはわかったか？」

「ああ・・・あんなに硬いゴーレムだなんて思わなかったよ。で、あれをどうするんだい？」

魔法の使いすぎによる精神的疲労で倒れながらギーシュは言う。

「というかハルケギニアの貴族って基本的に持久力とか皆無だよな・・・」

まあ、あれだけ無駄な生活をしていたら当たり前だろうが・・・基礎から改善していかないといけないからやっぱり修練の門を使うことになるのかね・・・。

まあ、そんなことは後で考えようか。

「とりあえずだな・・・跡形もなく消し去ってやるよ」

そう言っ、手の中に約束された勝利の剣を創り出す。

隣でギーシュが、は？とか言っているがスル！。

半身を前に出し剣を構え、魔力を高めていく。

周りに余波で激しく魔力が渦巻いていて、ギーシュが小石に当たりまくっているのも見えたがスル！。

そして、念入りに、それこそ世界を揺るがしかねない程の魔力を練り上げる。正直、結界使わなければアウトだと思っ程。

全ての準備は整った。「エクス————カリバー————！！」

真名とともに剣を振るう。光の奔流が流れる・・・俺たちの目の前を真っ白に染め上げる程。

光が収まり、目に入ってきた光景は・・・

地面が消滅しかけている空間であつたやりすぎた・・・orz

「まあ、力の程はわかつて貰えただろう」

「無理やり切り替えたね、君は」

うるさいわ！自分でも苦しいとは思うが、こうでもせんとやってられん……。

「とりあえずお前にはメイジとして精神力、持久力の低さが問題だ。で、それを改善するためにまず、擬似的な死を体験してもらう」

「……どうということだい？それは」

まあ、わからんだろうな。魂とか、そういった概念が根本的に違うだろうし。

「これは俺の考え方だが、人の体には魂というものがある。これはこつち的に精神と呼ぶものだ。で、この魂の持つ力の容量は生まれた時から決まっているもの。だからどんなに頑張っても魂の容量の限界がくればクラスが上がることはなくなる。魂というものは肉体とは違い正直トレーニングなんてことはできない。一度死ぬか、それに匹敵するほどの出来事に会わなければな。ここまでは理解したか？」

「ああ、理解はできるよ。だが、何をするのかは全くわからない」
そりゃあ、ねえ？こんだけの事から予測出来たら気持ちわるいぞ？

「それで、擬似的に死ぬというのはだな。体の感覚を全て無くす。その状態で発狂寸前まで放置、休憩、そしてまた同じことを繰り返して、感覚がない状態で精神を保てるようになるまでする。感覚がないというのは死ぬ事と同義。だからこそ、魂を鍛える事ができる。どうだ？それでもやるか？今ならまだ引き返せるぞ？」

「……やるよ。簡単に強くなれない事はわかっていたし、何より、この位乗り越えないと君には追いつけそうにないからね」
おお！めっちゃギーシュかつけえ！

「そうか、なら」
結界を消し、変わりに修練の門を発動。問答無用でギーシュも落とす。
少し遅れて落ちる感覚に気づいたギーシュが叫んだのはうるさかった……。

さて、無様に着地にしくじったギーシュを蹴り起こす。

「ということでもやるぞギーシュ」

「少しは説明してくれないのかい？ 具体的にはどのようにするのかとか、この空間は何なのかとか」

「前者については百聞は一見にしかず。体験してから感じとけ。後者に関しては休憩の時だ。それいくぞ」
そう言ってギーシュの周りに空間魔法とその他諸々が混じった特殊な闇を生み出す。

さて、こいつはどのくらいで耐えきることができるようになるのかね……。

ギーシュ強化イベント～第一段階～（後書き）

作：さて、まず初めに、んんん（・・・）様 フォンドボー様
月光閃火様 プチ魔王様 神崎様、ご感想、ご意見、ご指摘ありがとうございます

カ：いやあ、今回は結構な人が感想送ってくれたな

作：そうだな、作者はもう感謝感激ですよ？

カ：しかも、ちゃんとアンケートにもきっちり答えてもらえてるしな

作：だな

カ：でも、こういうのだけで進めてくのもどうかと思うけど

作：・・・それは痛感しました。これからはきちんと考えさせていただきます

カ：そうだな。それが一番いい

作：そして、月光閃火様。使い魔の案ありがとうございます。是非使わせていただきますので楽しみにしてください

カ：具体的には次回かその次辺りに出ると思いますよ？

作：まあ、俺の暴走がなければ・・・だけど

カ：そうだな。初めに考えてたことから脱線しまくりなものな。グ

ダグダな話になってきてるし

作：・・・てか、初めっからグダグダ状態だな

カ：今よりはマシだったろ？

作：まあね。色々新しいゲームや漫画見てたら使いたくなってるさ。
ハハハ

カ：笑ってる場合じゃないが・・・

作：まあ、後二日はテストだしさっさと解答済ませて問題用紙の余白にプロット書いたりして考えるさ

カ：それもどうかと思うが・・・

作：ま、気にすんな。皆様、こんな感じのグダグダ感たっぷりの本作をこれからもほんと見捨てないでください

カ：じゃ、そういうことで。また次回もよろしく！

ギーシュ強化イベント・・・とかいいつつ今回はほとんど何もしてない・・・

作：いえーい！最新話投稿！

カ：今回は比較的早めだったな

作：頑張りました！

カ：まあ、何がやりたいのかが今回は特に理解出来んがな

作：俺にもわからん・・・どうしてこうなった・・・orz

カ：ちゃんとプロット作らねえからだろ？

作：おっしゃるとおりです・・・

カ：まあ、この前書きで言った通りかなりカオス&支離滅裂な文章です。みなさまの翻訳能力に期待します！

作：・・・それではどうぞ！

ギーシュ強化イベント・・・とかいいつつ今回はほとんど何もしてない・・・

ギーシュの訓練は結果からいうと、やっぱりいきなりは無謀だったと言おうか。

一瞬でヤバい状態まで陥ったギーシュを何とか落ち着かせて、俺は起きた時のため隣でご飯を作ることにした。

そして、何故かご飯を作り始めるとシャルロットが現れた。何故・・・？

念話も何もしてないし、学院には厨房の人達の手伝いの為に分身を1人行かせてある。実際に俺が分身であることには誰も気づいてない。あの学院長までも。

なのにこの子はここにいます。理由を聞いてみたところ、俺の分身を見ていてなんとなく違和感を感じ、問い詰めここに来たらしい。

分身・・・もうチョイ粘れよ。問い詰められてすぐに答えるとは何事か・・・。

まあ、そんなわけでシャルロットの為にご飯も急遽作ることになりました。

別にこの修練の門の中なら材料に事欠くことはないし別にいいんだがな。

それから数時間後ギーシュが目覚めたのでご飯の時間。

シャルロットには別に渡していたはずなのに、ギーシュの分まで取っていた。

俺はちゃんと取られないよう確保済みだ。ドンマイ、ギーシュ……。

飯を食べながらさっきのことを話すことにする。

「さて、あの中はどうだった？ギーシュ。一瞬とは言え何か感じているだろう？」

「ああ……。 “死” というものを本当の意味で感じたよ……」
ほう……。一回でそこまでのことがわかるか。

「ふむ……。これは意外と早めに次のステージに進めるかも、だな」

「何の話？」

なんの説明もなしに聞くと訳のわからん俺らの会話に当然のようにシャルロットが疑問の声をあげる。

そこで、ギーシュにやっている訓練の内容を伝える。それを聞いたシャルロットは、とんでもないことに、

「わたしもやる」

と言い出す。いや、シャルロットの場合、いつも通りでもこの世界では破格のレベルにまで上がるようになるんだが……。

「それでも、やる」

「それはどうしてだ？」

「・・・あなたの隣に立てるようになるため」

そういう意味か・・・。まあ、生半可な実力じゃあ無理なものな。
でも・・・、

「本当に後悔しないな？」

最後の確認で軽く殺気を出しつつ問う。この殺気に耐えられなかったらやらせるわけにはいかなかなあ、とか思いつつやってみたがシャルロットは少し怯んだだけで、頷いて返事をする。

はあ・・・、どうしてこんなに頑固なのかねえ・・・。

「・・・わかった、やってやるよ。ギーシュ、準備はいいか？」

「ああ、いつでも大丈夫だ」

「いくぞ」

そう言つて俺は二人を闇で包み込んだ。

あれから内部時間で60日、つまり外部時間で1日の間、延々と訓練を続けた。

おかげで、ギーシュは5日ほど、シャルロットは20日ほど持つようになった。この調子なら並行して次に進めるかもな。

そんなことを考えていると、マチルダから帰ってきたとの連絡ももらったので分身に迎えに行かせた。

「はい、これが今回の報告書だよ」

そう言つて紙の束を渡してくる。ふむ・・・、これだけ契約できていれば始めの方は大丈夫か？

「それと、他に気になる噂があつただけだよ」

「どんなだ？」

マチルダの話を要約すると、アルビオン内で内乱が起きているらしい。レコン・キスタなる貴族派が王党派と対立しており、トリステ^ちインにも飛び火しそうらしい。

現在トリステインはゲルマニアと同盟を結ぼうとしており、交換条件としてあの姫さんが嫁ぐらしい。しかし、どこの情報は知らないが王党派のトップのウェールズ皇子に宛てた恋文らしいものがあるらしく、レコン・キスタはそれを探しているらしい。それが見つければゲルマニアとの同盟は解消。国の中で最弱とも言えるトリステインは詰み。ということらしい。

むむ、面倒な・・・。レコン・キスタは没落貴族であろうとも王党派に少しでも恨みのあるものは片っ端から仲間に加えてるからマチルダも危ないかもだし、そのウェールズ皇子に宛てた恋文とやらもヤバイ。確かほとんどない原作知識だが、確かルイズがそれを取りに行くことになるはず。問題は山積みか・・・。

とりあえずマチルダの方は勧誘された時は受けると言っておいた。多分、マチルダの実力なら捨て駒として使われるようなことはない

だろうし。

ルイズだ。マチルダは魔法が使える傭兵みたいなもんだから泥臭く生きるだろうが、ルイズの場合マジでヤバイ。戦場なんかに行ったら即お陀仏。

元々考えてたことだが、前倒しだ。アイツを復活させることにする。

ただ、これに関しては並列思考をフル稼働させてようやくできることなので、二人の訓練は一時中止とする。

三人には一応これからすることを説明し、離れていてもらう。

それから、俺は地面にこの世界ではない魔法陣を描き、その中心に『人』を置く。その後『人』に俺の血を数滴垂らせれば準備は完了だ。

周りの人間に被害が及ぶのを防ぐため、周りに結界を張る。さて、やるか。

地面に手をつき、魔力を込める。更に俺の中にあるもう一つの魂を抽出して、『人』の中に流し込む。その過程で周りの地面が余波で揺れたり、俺の全身の毛細血管から血が出たり筋組織がブチブチッと嫌な音をたてたりしているが、まあ、許容範囲内だ。

そのまま続行すると、『人』の方に変化が現れる。ただ真つ白な顔も何もない人形としか言えない物体だったそれからエメラルド色の髪が生え、同じ色の目、その他の人として必要なものが形作られていく。その光景は正直グロテスクだ。全身がグニャグニャ動いた後膨れ上がって形を整えていくのは見ていて吐き気を催す。が、我慢。

ここで集中力を切らせたら反動で俺が死ぬ。多分。

そんなことが1分半程続くと、最後の仕上げとなる。『人』から『カイト』へと変わった体に気を流し込み、魂を定着させ、更に俺の手のひらにあるガンダールヴのルーンをそのまま譲渡する。これで儀式は終了。

満身創痍の体だが、鞭打って何も着ていない『カイト』に服を創造して被せる。これが終わると同時に結界も崩れ、俺も仰向けに倒れる。

そんな俺にマチルダとギーシュは呆然としていたが、シャルロットは泣きながら走り寄って抱きついてくる。
正直痛いからやめてもらいたいが、まあ気持ちはわからんでもないのでそのままにしておく。

5分くらいしてシャルロットも落ち着き、マチルダ、ギーシュの二名も再起動を果たしたので4人で話し合うことになった。俺は動けなくてシャルロットによって膝枕な状況だが。

「とりあえず、質問がある人いる？」

「じゃあ僕から。『彼』は誰だい？それとも君は誰？の方がいいのかい？」

「そうだな……。この場合なら俺が誰、の方が正しい」ということでシャルロット、ルイズの二人に話したことを暴露。すぐには信じないかなあ、などと思ってたのだが、ハルケギニアでありえない魔法を体験しているのですぐに信じた。

「でも、その話とどうつながるんだい？」

「簡単に言えばだな、俺は転生ではなく憑依だった。俺の魂をベールに生まれた魂が先着でいたんだよ。俺の、山代翔吾の魂を守るために。だから、あっちがカイト。俺がショウゴということだ」

「そうか。ちなみに彼も魔法が使えたりするのかい？」

「そりゃあ無理だ。あいつが持つてるのはせいぜい俺と同等の身体能力くらいだよ。魔法の力は俺の魂に付与されたものだからな」
まあ、気は使えるかもだが。

「わかった。ありがとう、ショウゴ」

「おう、じゃあ次」

「じゃあ私から。なんであんたの髪と目の色が変わってるんだい？」

「あゝこれはだな。俺の前世は日本人だから。容姿は魂に影響されるもんだからな。と言っても、この体に俺の魂も慣れすぎてむしろ色以外は何も変わらなかったが」

ちなみに現在の色は黒目、黒髪である。

「ふゝん、そうかい。わかったよ」

「ん、なら最後はシャルロットだが・・・なんかあ・・・る？いえ、ありますか？」

最後に敬語に変わったのは、背中に黒いオーラが見えたためである。

「こんな大けがをするものだとは知らなかった」

いえ、そこまで大けがではないかと。2か月ほど完治に必要なだけで。

「それは大けが」

いえ・・・いや、すんません・・・。

「・・・」

やめて！俺の精神力はもうゼロよ！
ライフ

「・・・」

「いや、ほんとすんませんした」

土下座したいができないのでシャルロットの目を見て言う。数秒後、
なんかため息つかれた。何故？

「ベッドは何処？」

「ああ、ここ」

そう言つて、すぐ隣にベッドを創造。まあ、修練の門の中なら基本
ハンモックだし。作らないとないんだよね。

「絶対安静」

レビテーションによって俺をベッドの上に寝かし、毛布をかけながら
シャルロットは言う。

てか、ギーシュにマチルダ！てめーらニヤニヤこっち見てんじゃね
え！さつさと出てけ！

とか思いつつ、分身を何とか作って外に放り出し、入れないように
結界を何重にも張らせておいた。

「絶対安静」

ああ、すみませ・・・あれ？なんでシャルロットベッドにいるの？

「看病」

いや、同じベッドに入る意味がわからない。

「目を離したら何をするかわからない」

本音は？

「・・・」

いや！そこで頬を赤らめて視線を明後日の方を向けなくていいから！

「お休み」

何の脈絡もなくいきなりきたなおい！そして、眠るの早っ・・・まあいいか。シャルロット温かいし。

とりあえず、さっさと寝てからケガを治すことにしようか。

ギーシュ強化イベント・・・とかいいつつ今回はほとんど何もしてない・・・

作：まずは carzee様 んんん（．．）様、ご感想&リクエストありがとうございます。

カ：さて、まずはほんと申し訳ありませんでしたー！！

作：やっぱりガン〇ム撃破はまずかったか・・・

カ：てか他にどうでもいい奴とか思いつかなかったのか？

作：・・・ハニワ幻人？

カ：また微妙なところを・・・

作：なら、E I - 0 1の最終形態？

カ：スパロボネタはやめい！

作：他に思いつかんのだよ・・・

カ：ダメだ・・・こいつ・・・

作：うつさい！

カ：あとさ、使い魔で希望が来たけど・・・

作：いや、まあ長門はぶっちゃけ好きだけどさ？

カ：つかつたら更にカオスだろうな

作：てか、オリ主パーティーヤバいことになるぞ・・・

カ：まあ・・・ね

作：ということ、性懲りもなくアンケートです

1、長門を使う

2、長門を使わない

どちらかを感想と共にご記入ください。わからない方やどうでもいいと思う方はそのままスルーの方向でよろしく願います。

カ：さて、どうなることやら・・・

作：それではまた次回もよろしくー！！

閑話？リハビリのようなもの（前書き）

作：いえー！新話投稿！

シヨウゴ（以下シヨ）：大体1週間か

作：そうだな！

シヨ：いつもこのくらいのペースで書けばいいのに・・・

作：その辺はまだグダグダだし、今頑張って原作読んでんだよ？1
6まで買ったからさ

シヨ：いや、普通全部読んでから書き始めないか？

作：うつ・・・まあ、そうだけどさ

シヨ：まあ、こんな訳のわからん奴のことはほっというて本編をどう
ぞ！

作：ちなみに今回、話は全く進みません

閑話？リハビリのようなもの

さて、あれから1カ月。まあ外では半日程度たつてようやく完治。

本当なら、もつと早くに完治する予定だったのだが何故か俺の体に治癒魔法が効かないという訳のわからん事態になってしまったので気をフル活用して治癒能力を限界まであげ、ようやく完治したというわけだ。

ちなみに、前回言っていた2カ月とは自然治癒のみでかかる時間だ。

まあ、そんなことはさておき。カイトをさつさと起こすことにする。元々同じ魂の為、今俺とカイトには疑似的なパスがつながっている。それを介して呼びかけてカイトを起動させる、という流れである。

これで無事にカイトが起きさえすればこのパスを切り、カイト復活の儀式は終了を迎える。

と言っわけで早速。

20分経過・・・

「・・・うつ」

お、ようやく目が覚めたか？

「おはようさん、カイト」

「ああ・・・成功したみたいだな」

「おう、まあ元から魂があるんだから余裕だろ？それよりも何か不具合とかあるか？」

「ん・・・鍛えてないからかお前の体ほど動けそうにはないな」
手を握り、開くという動作を何回か繰り返した後立ち上がる。

「そうか、なら俺のリハビリに付き合うか？」
俺もあれだけ寝てればさすがに体が鈍ってしまった。軽く動かねえとなあ・・・。

「おう、そうするわ」

「なら、お前の剣だ」

俺はベッドの近くに放置してあったデルフを持ってきて渡す。

「どういうことだ？」

「そりゃあ、俺の使い手はガンダールヴだからな。今はルーンを持つてるお前が俺の使い手だ」

カイトの問いにはデルフが答える。まあ、あのルーンがガンダールヴって聞いたのもこの休んでる間にデルフがポロッと話したからだが。

「そういうことだ。それに俺にはこいつがあるからな」
そう言って右手に日本刀を、左手に鞘を創り上げる。強度、切れ味ともにデルフには劣るが業物である。

「そついやそうか。ならやるか？」

そう言つてカイトはデルフを構える。それとともに左手のルーンが光り出す。

「おう、どつからでも掛かつて来い」

俺は右半身を前に出し、刀を軽く構え鞘を逆手に持つ。

「なら、遠慮なくっ！」

その掛け声とともにカイトは一瞬で距離を詰め、上段から切り伏せる。相手がシヨウゴだからこそその本気の斬撃である。それが、完全にヒットした。そう思ったのだが・・・、

「残念、残像だ」

そう言つてシヨウゴの姿がゆらりと消える。それと同時に上から尋常じゃない程の殺気がカイトに襲ってくる。

横っ跳びすると、地面に深さ10メートル程の切れ目が生まれる。さっきのカイトの斬撃なんて目ではないほどの威力である。

「ふむ・・・、なかなか速いな」

しゃがんだ状態から立ち上がりつつシヨウゴは言つ。

「いや、お前俺を殺す気か？」

カイトの顔にはだらだらと冷や汗が流れる。

「あ？お前だつて似たようなもんだろ？」

「お前には魔法があるから本気なんだよ！」

「いや、今回は体の調整だから使う気はない」

「だからって、その威力はないだろう・・・」

「まあ、これも訓練訓練。お前の剣技は俺の模倣なんだから実践でないと上達しづらいし」

「う、それを言われると・・・」

「と言うわけで、次は俺の番な？」

そう言っただけで今度はショウゴがカイトの目の前に現れ、左の鞘で殴りかかる。とっさにデルフでそれを弾くが、その時にはショウゴは目の前にはおらず、

「そら、こつちだ」

上段からかかと落としをする。それがカイトにヒットし地面に叩きつけられる。

「まだまだ行くぞ？」

バウンドしたカイトを下から蹴りあげ、軽く15メートル程吹っ飛ばす。

「剣技：舞風まいかぜ」

その瞬間ショウゴの姿が消え、空中から落ちようとしているカイトに黒い影が一閃。それが何十何百と現れ360度から斬られる。それを何とか致命傷だけは避けようとカイトがデルフで急所を狙ったものだけ正確にはたき落とす。

ショウゴが地面に降り立つと数秒遅れて全身打撲でやられたカイトが降ってくる。なんとか受け身を取り怪我をしないようにしたが、そのまま倒れ気絶する。

「ふう、こんなもんか？」

額を流れる汗を腕で拭い、カイトの方へと向かう。全身打撲とかなりやばそうだが、必要最低限の回復をして後はカイトの自然治癒を待つ。

すべてを魔法で治すより、こっちの方が遥かに体にいいのだ。

「ま、風呂にでも入るかね」

カイトはこのまま放置していても問題はないので放置。今は汗を流してさっぱりしたい。と言う理由で風呂に向かおうとしたのだが・・

「・・・」

阿修羅を背負ったシャルロットが現れた。

どうする？

たたかう

どうぐ

はなす
↑

にげる

「あのー、シャルロットさん？どうしたんですか？」

やばい、これ何回目かわからんけど怖っ！

「あなたは病み上がり」

無言のプレッシャーを放ちながらシャルロットは言う。目が据わっ

てるっ!？

まで、落ち着け……。さっきの内容さえばれてなきゃ万事おっけー。よし、

「いや……。だからこそそのリハビリ？なんですが……」
しらばつくれることにした。

「……」

だが、シャルロットはプレッシャーを放っている。あれ？まさか……。

「ちなみに何処から知ってたりします……？」

「カイトを起こす時」

「つまり……」

「始めから」

はい！俺のバカ！逆効果だったよ！ちくせう……。

「……すみません」

素直にさっさと謝るが吉と思い、速攻で土下座。

「……これからどうするつもりだったの？」

ため息とともにシャルロットは言う。そんなにダメな子を見る目をしなくてもいいじゃないか……。

「とりあえず風呂に入ってさっぱりしようかと……」

「わたしも行く」

「そーかそー・・・」
あれ？

「すまん、もう一度」

「わたしも一緒に入る」
そんな顔を赤らめながら言わないで！！

「俺、男。シャルロット、女。わかる？」

「別に一緒に寝たんだから問題ない」
いや、そうだけどさ・・・。

「その言い方には誤解が生じるからやめれ」

「・・・ダメ？」

うつ・・・上目遣い＋涙目・・・。

「もう好きにしてくれ・・・」

負けたよ、負けましたよ！こんちくしょう！あんな目で見られて断れるやつ等いるだろうか、いやいいない（反語）。

俺の言葉を聞いたシャルロットはそのまま俺の手を引っ掴み、簡易で作ったお風呂場へと向かっていった・・・。

閑話？リハビリのようなもの（後書き）

作：さて、まずは 神崎様 c a r z e e様 んんん（．．）様、
ご感想ありがとうございます！

シヨ：とりあえず、この感想から長門が使われると大変だということがよくわかったな

作：．．．そうだな。さすがに無茶にも程があるか

シヨ：だよな。シャルロットとキャラが被るから哀しい現実しか待ってないだろうな

作：うん．．．だが！代わりに他の作品で出して見せる！

シヨ：．．．無茶をするな

作：ふっ、基本的に話の下書きを書いてもアドリブで5割位変化させる俺にとって新しいキャラをねじ込むことは造作もないのだよ！

シヨ：そしてg d g dな話になると

作：ぐふっ．．．

シヨ：何ヶ月も書いてない作品もあるんだから程ほどにしるよ？

作：．．．おう

シヨ：それにしても空気化してしまったキャラどうすんだ？

作：ちゃんと出番あるからそれまでは・・・

シヨ：空気というわけか・・・

作：まあ、作者も頑張って空気化しているキャラ達を動かしている
うと思いますのでどうぞお楽しみに！！

シヨ：無理やり終わらせやがった・・・まあいいや。それではまた
次回もみなさんよろしく願います！

サモンサーヴァント（前書き）

作：ようやく書き終えた・・・短いけど

シヨ：そうだな。やっと使い魔召喚か

作：長く険しい道だった・・・

シヨ：お前が色々やろうとするから悪いんだよ

作：まあな。反省はしているが後悔と自重はしない！

シヨ：ちゃんと話が進むならいいけどな

作：進むさ。この先はきつとサクサクと

シヨ：まあそんな戯言はほつといて本編をどうぞ！

作：酷っ！

サモンサーヴァント

「フハハハハ！ーギーシュ！お前の力はこんなものか！」
そう言いながら俺は近くにいたゴーレムを殴りとばす。

「くっ・・・行け！ワルキューレ！」
ギーシュの号令と共に、15体のゴーレムが横一列のフランクス・
・・・と言えはわかるのか？まあそれが5列ほどあるというふざけた
状態で突っ込んでくる。

うゝむ、今回は魔法、気、共に使わない縛りだし・・・。

とりあえず、一番始めのころより数段速いゴーレムから1本の剣を
奪う。

「剣技：空破斬」

横に剣を振るう。元は気を斬撃としてとばす技だが、今回は剣速に
よる衝撃波のみで攻撃。衝撃波が出るとともに剣は柄のみを残して
刀身が消滅。威力に耐えられなかったみたいだ。

まあ、でもその一撃でゴーレムの1列目は真つ二つ。2列目はなん
とか耐えたみたいだが大ダメージを負っている。

それを確認すると同時に一気に駆け、

「ライダーキック！」
ただのとび蹴りでゴーレムを粉砕。3列目のワルキューレも吹き飛
ばす。

「ファイアボール！」

空中にいる俺が回避できないと判断したらしいギーシュは俺に火球を放ってくるが、空気を蹴って格ゲ・おなじみの二段ジャンプ回避。そのままギーシュの後ろまで行って首に手刀を当てる。

「チェックメイトだ」

「あゝ、また僕の負けか」

寝っ転がりながらギーシュは言う。なんか最近こいつの行動が年相応というか現代人っぽい軽い感じになってきた気がする。

「まあ、俺に勝つなんて何百年か早い」

てか、こいつの魔法量はすでにスクウェア一步手前あたりだが、何故かラインスペル等は使えない。なんで使えんのかわからんで模擬戦をやって実用的な魔法の運用法を身につけさせることにした。

しかし、何がいけないんだろうか・・・。

そんなことを 思いつつ偏在を100体と影分身100体の計200人抜きをやることにする。

俺と同じ技量を持つだけあってなかなかに厳しいものを感じるが、うまく立ち回り制覇。

その後、ギーシュの為にラインスペルを連射する。

「いつも思うけど、ラインスペルを5個同時打ちというのは軽くヘキサゴンスペルも超えるんじゃない・・・」

まあ単純計算で10、ドデカゴンスペルとも言えるのか？

「・・・君みたいな異常な魔法使いが呼ぶ使い魔ってどんなだろうね」

ふむ・・・。そっぴや魔法使えるんだし俺にもできるのか。

言われたらなんか興味湧いてきたな。

「よし、やるぞ」

と言うわけで色々用意してみた。アヴァロンとエクスカリバー。サモン“サーヴァント”なんだしこいつを杖代わりにしてみる。

次、契約用の魔法陣。頭の中にあるものを適当に書いてみた。来た使い魔が人間に準ずるものだったらキスするのは嫌だし。

ぶっちゃけ俺の存在とルイズの魔法はイレギュラーとも呼べるものだから可能性としてはないといいきれないので用意した。

で、俺が使い魔を召喚するって言ったらカイト、シャルロット、マチルダ、ルイズ、ギーシュが集まった。

まあ、ギーシュは始めからいたんだけどさ。

ついでにここでルイズに俺とカイトに関して説明すると複雑そうな顔をしていたが、俺の誠心誠意の心で接したら納得してくれた。

「誠心誠意じゃない。クックベリーパイで釣った」

「シャルロット、俺の心の中ナレーションを読んでの発言はやめろ」
誠心誠意接したんだ。決して買収じゃないんだからな！

「・・・」

そこ！そんな目で俺を見ない！

もーいいや。ほっといてさっさとやろう。

アヴァロンに収まったエクスカリバーの柄を持って詠唱開始。

「“全世界”のどこかにいる我が道を共にゆく資格を持つものよ、
我が声が聞こえ、なお且つ我と共に歩むことを承諾するものは来た
れ！あ、本当に暇な奴だけで良いからな？」

途中まで厨二、最後グダグダという最悪の詠唱をする。一応ゲートの向こう側にいる者へ聞こえる親切設計さ！

しかし、ゲートが現れん……。まさか暇な奴はいなかったのか・
・。と思った瞬間、いきなり空間が割れ、ダストシュートから飛び
出すごみのようにポンポンと何かがはじき出される。どうやら2
人の人みたいらしい。

片方は茶髪のざんばらヘッドに淡い黒の澄んだ瞳。178cmのほ
どよく引き締まった体格で顔立ちはワイルド系美男子。機動性重視
のラフな服装が主で身体中の至る所に大小様々な傷痕がある青年。

で、もう片方なんだが・・・青いドレスに騎士甲冑を身につけたき
れいな金髪を持った少女。ついでに血だらけ。

その姿、その顔立ち、俺の気のせいじゃなければだが・・・最優の
サーヴァントセイバーもといアルトリア・ペンドラゴンであった・

•
o

サモンサーヴァント（後書き）

作：さてまずは 神崎様 月光閃火様 感想ありがとうございます！

シヨ：いやー月光閃火様が黒化してて怖かったな！

作：そうだな・・・わき道それ過ぎてたな・・・。

シヨ：まあお前が悪い

作：そうっすね

シヨ：後ヴェスperia消したんだな

作：ああ。このままいくとネギまに入るのが何時になることやら・・・
・てことになりかねんからさ

シヨ：まあ元々入る予定はなかったからいいけどさ・・・ネギまも
だが

作：細かいことは気にせずいこー！

シヨ：・・・まあ計画的にことは進めろということだな

作：うん、気をつける

シヨ：それではバカやローな作者はほっという皆様、次回でお会い
しましょー！！

作：お前今回の俺の扱い酷すぎじゃね・・・？

■最近色々いぢやいぢやしてきた（前書き）

作：最新話投稿！

シヨ：今回は長かったな

作：体調も悪かったしテストあったし

シヨ：勉強はまったくしてなかった気がするが？

作：ぐっ・・・そ、そんなことより本編をどうぞお楽しみください
！！！！

シヨ：逃げたな・・・

最近色々ごちゃごちゃしてきた

とりあえず、セイバー（便宜上こう呼ぶ）のケガを治癒した後ベッドに寝かす。もう1人の方も同じようにベッドに寝かす。

ちなみにちゃんと別々のベッドだぞ？

事情やらなんやらに関しては2人が起きてから話し合おうということになった。

ので、しばらくの間暇になるということで商売の話をすることにした。ちょうど全員集まってるわけだし。

「さて、建物の方が今のところ7割程度は完成している。今日中（外の時間）には完成するんじゃないかと思う」

ちなみにルイズに関してだが、面倒なのですべてカイトにほっぽり投げた。なんか分離したからか前ほどルイズ優先に考えることはなくなった。これがルーンのせいなのかカイトの魂のせいなのかはわからないが。

ギーシュは修行の名目で手伝わせる。ギーシュ自身も興味があるそうなので万事おっけーだ。

まあ、それは置いといて。今回の議題だが、制服をどうするか。と言うことだ。

さすがに今着ている服でそのままするわけにはいかない。貴族の服だし平民の人達が来づらい環境になってしまうからな。

今のところ基本は皆、浴衣か着物を着てもらうことにしている。ま

あ、女性陣は着物の着せ方がわからないから浴衣で統一なんだが・
・。

そのデザインをどうするか、と言うことだ。まあ、浴衣とか着ものとかの存在を知らないのでわからんだろうから、俺の分を実際に着て見せてから決めてもらうことにする。

とりあえず浴衣。白を基調として襟と袖辺りに淡い蒼色をあしらっている。

着て見せたところ、反応がなかった。硬直してた。そんなに似合ってたなかったかコンチクショー……。

次に着物。黒の直垂にさっきの浴衣と同じデザインの羽織を着て、腰のところで細い帯で留めている。

これまた着て見せたらまったくの反応がない。しかし、これ意外と動きやすい。よし、これからの普段着これにしよう。ついでに帯刀もしとくか……？

ちなみに、履いてるのは下駄ね？こっちの方が味がでるといっかさ。

「さて、まああんな感じの服なんだがデザインどうする？」
固まってる人達を再起動させてから聞いてみる。

「ショウゴのと同じ奴がいい」
はシャルロット。まあ同じ蒼色だし共感？とかを持ったんだろ。

「わたしはこういう感じで」

とはマチルダ。淡い感じの緑色とところどころ白色であしらった感じのデザイン。

「じゃあ妾はこれじゃ！」

とはバハムート。最近構ってなかったので手伝ってもらったことにした。デザインはグレーに白色。

「じゃあ僕はこれで」

ギーシュは紺色の浴衣にするようだ。

ルイズたちは、忙しいからやめておくらしい。

さて、そろそろ実行段階に移りそうだしあつちの準備も始めるとしますかね。

■最近色々ごちゃごちゃしてきた（後書き）

作：今回は感想なし・・・

シヨ：ま、今回はしょうがないだろ。使い魔召喚だったんだし

作：やはり状況とかそういうのが良くなかったか・・・

シヨ：その辺は今後の文で挽回してけ

作：そうだな

シヨ：さて、今回の話だが召喚しといて完全スルーの回だったな

作：皆さんがマチルダ姉さんとの契約にかんして忘れておられるか
もと思つて

シヨ：一番はこのまま放置して流れに組み込むのが難しそうになる
のを防ぎたかったからだろうに

作：それもある・・・

シヨ：もつと計画性もとうぜ？

作：無理

シヨ：即答だな、おい・・・

作：まあ、基本これは俺が『こんな展開になつたらおもしろいだろう

な」を実現化する小説だし

シヨ：それでついでに皆様にも楽しんでいただければ・・・と？

作：きつと俺と同じ考えを持つ方もおられるはず！

シヨ：まあ、突っ込みもそろそろ面倒になってきたしこの辺で。さ
よなら

セイバー（アルトリア）、ハルケギニアに立つ（前書き）

シヨ：うわ・・・サブタイからわけわかんね・・・

作：どうしてこうなった・・・orz

シヨ：そうだな。本編の方もほんとわけがわからん・・・

作：すみません、セイバー出しといてなんですけど口調と性格が似てるだけの別人となつてると思います。見たとき『なんだこれ！』と思つてもあんまし感想に強く書かないでください。作者の心が碎けます。

シヨ：碎けてもしょうがない出来だな

作：それを言われると本当に申し訳ない・・・。今回はほんと賛否両論どころか否一論となりそうですが、どうぞよろしく願ひします・・・

セイバー（アルトリア）、ハルケギニアに立つ

全員からデザインに関して聞いた後、製作を開始。

女性陣のサイズに関してはメジャーを創り、使い方を教えた後ほっぽり投げ、ギーシュもついでに頼む。

その間に俺は布を創り出しておく。

採寸が終わったらせつせと製作に入り、結構な時間をかけて作り終える。それらを全員に渡し、今日は解散。としたかったが、

「う・・・」

どうやらセイバーが起きたらしい。知らない人たち全員で囲むのもどうかと思ったので俺以外の皆にはある程度下がってもらい、俺はセイバーのベッドの横に立つ。

数秒後、セイバーが目をつつすらと開ける。そして、俺をぼくと見つめる。とりあえず、俺も見つめ返す。

「ここは・・・どこですか？」

ようやく意識がはつきりしてきたのか、俺に問いかけてくる。

「ハルケギニア。俗に言う並行世界といえるところだ」

「わたしは・・・死にかけていたはず」

ほんとにな。お前があのケガで出てきたときはビビったよ。

「俺が治した。それくらいの力は持ち合わせている」

「それはわかります」
は？

「どういうことだ？」

「まず、あなたが言ったようにここが並行世界ならば、それを超えて詠唱を届けさせ、なお且つ私をここに呼びこんだ」
そついや適当な詠唱を素敵設定にしてたな。

「そして、これが一番大きな理由ですが」

「まだあつたのか？」

「はい。あなたと私には何らかのパスがつながっており、そこからあなたの力の一端を感じることができます」
・・・おい。

「それは何らかの契約が行われていると思っていいのか？」
みたところルーンもないし・・・。

「ええ。間違いないでしょう」

・・・俺にうつかりスキルなんて付いてたっけ？大方準備してた陣と共鳴起こして不完全な契約でも結んだんだろうか。

「しかし・・・あの詠唱は真面目に言ったものなんですか？」
あゝ・・・。

「本気8割遊び心2割といったところ？無理やりに連れてこないよ
うな素敵設定にしたんだが」

「ええ。わたしも死ぬ間際でどうかしていたのかもしれませんがそれに答えてしまってここにいます」

血の流しすぎでセイバーもテンションがおかしくなっていたのかね・・。

「まあいいや。とりあえず送り返す術は考案してないからもし帰りがたくなったら言ってくれ。頑張つて創つてみる」

聖杯に頼む程の願いだ。落ち着いて考えたら戻ることも・・。

「いえ、死ぬ間際の時にはかなえない願いもありましたが、何故か今ではそこまで固執することはないようです」

「・・ありえん。何が起こつてこうなるんだ？・・。契約に不具合があるのか？」

「まあいい。それはとりあえず横に置いておこう。今話すべきことはこれからどうするかだ」

後でもう一人の方と合わせて術式見直さんとな。

「わたしはあなたについて行きます。元々そのような契約でしょう」

「あゝ・・。うん。そう言えばそうだったネ」

自分でも言ったことをど忘れしていた。・・。つーかあれって下手したらプロポーズ・・。

深く考えないでおこう・・。。

「じゃあこれからよろしく・・。えゝと？」

「アルトリアで結構です」

「なら・・・リアでいつか。改めてよろしくな。俺はショウゴで良
いから」

「はい、こちらこそよろしくお願いします」
そう言って俺とセイバー・・・じゃなくなってリアは握手した。

セイバー（アルトリア）、ハルケギニアに立つ（後書き）

作：・・・さて、今回も感想が書かれてなかったのでさくつと行くか

シヨ：そだな。

作：で、今回セイバーがあんな風になってしまった理由を挙げるとしたら・・・

シヨ：したら？

作：あれです、使い魔が主人に好意的感情を抱くとかどーとか。あれが不完全な感じで現れてあんな感じに・・・

シヨ：ほんとグダグダだな……。つかそれじゃあ陣を書いた意味なくね？

作：一応伏線があるのだよ、ワトソン君

シヨ：ワトソンじゃないがな

作：まあ、その話は次々回辺りに・・・

シヨ：次回は？

作：まあ、流れから見てもわかると思いますが、もう一人の使い魔、月光閃火様が投稿して下さった彼がメインとなります

シヨ……よーやくか……あれからどれくらいたつたんだろうな

作……うう……。それでは今回はこのくらいであであー
♪

シヨ……

模擬戦・・・だったんだがなあ（前書き）

作：さて、ようやく使い魔関係は終了です

シヨウ：で？今回の内容はどうなんだ？

作：・・・本編をどうぞ

シヨウ：おい、スルーは・・・

模擬戦・・・だったんだがなあ

「・・・ここは？」

リアとの話が終わった直後にもう一人の青年が起きる。タイミングいいの悪いのか・・・。

「ここはハルケギニア。とりあえずアンタのいた世界ではない」
そう言つと青年はこつちを向く。

「お前は・・・あの変な言葉を言つてた奴か？」
その認識の仕方はやめい・・・。

「シヨウゴ、それは無理というものです」
そしてリア。ためーは心を読んでんじゃねえ。

「それで、どうなんだ？」
おつと。答えてなかったな。

「あつてるよ。ただその呼び方はやめてくれ。俺のことはシヨウゴで良いから」

「そうか。俺は李楓^{リーフオウ}。フオウで良い」

「わかった。ならフオウ、お前はあの言葉に賛同と言つたか了承したのか？」

一応聞いとかねばいかん問題だからな。これは。

「ああ。出ないと俺はここにいないだろう？」
よかった、誤作動はしてなくて。

まあ、形式的には二人とも納得してるみたいだから皆のことを紹介して、この世界のことを説明してから術式改善といきますか。

ということ、二人にシャルロット以下略の皆を紹介。

フォウ以外は大体わかってると思うので省略。で、フォウの自己紹介。

「俺は李楓。ストリートファイトで生計を立てていたから少々腕には自信がある。なんとなくショウゴの言っていたことに興味を持ってこの世界に来た。わからないことなどが多いがこれからよろしく頼む」

とのこと。ストリートファイトって・・・俺のいた世界とも違うみたいだな。

そんなこんなで全員が自己紹介し終えたらこの世界の常識を教える。主にメイジとか貴族とかの面倒なものを中心に。

で、それが終わったら二人の術式をみる・・・ふむこれなら。

「二人とも俺の前に立って」

そう言って二人を立たせる。

「えーっと、ここをこうして・・・」

頭の中に術式を映し出し、それを直接魔力で修正させていく。

「で、これをこうして・・・完成！」

その瞬間、二人にカードが降ってくる。は？カード？

わらわらと皆が集まる。そのカードには・・・

リアとフォウの名前、数字、方位、星の名前、色、二人の姿他諸々が書かれていた。

あれ・・・これどつかで・・・ああ、ネギまか。と言うことはあれはバクティオーの陣だったのか。というかよく覚えてたな俺。

まあいいや。それより二人のアーティファクトは何かなつと。

アルトリア・ペンドラゴン

中略

アーティファクト：エクスカリバー

・・・は？なにこのふざけたカード。んなもんがアーティファクトとして存在してたら怖いんだが・・・まあ便利だしっか。

で、フォウの方はっ・・・

李楓

中略

アーティファクト：The limbs which wear
a magic（魔を纏う四肢）

ふむ・・・みたことないし実際に見せてもらうか。一応リアも一緒に。

「とりあえず、二人ともそのカードもって アデアット って言うて見て」

「了解です」

「わかった」

「「 アデアット 」」

その後、二人はそれぞれ変化していた。

リアは完璧英霊状態の姿。エクスカリバー片手に騎士甲冑を纏った姿である。

フォウは手と足に手甲と脚甲が装備されている。

「これは・・・」

リアは自分の姿に驚いている。まあいきなり手放した愛剣があったらびっくりだよな。

「ふむ・・・これならいけるか」

手足の状態を確かめながらフォウはそうつぶやく。多分格闘術が何かを使うのだろう。

ついでに二人の力でも見させてもらおうか。リアはゲームのみ、フォウは聞いてもないからな。

そう言うと、まずはリアから。

「じゃあいくぞ？」

「はい」

リアが答えるとともに片手に刀を創り出し、斬りつける。リアはそれに瞬時に反応し弾く。

弾かれると同時に回し蹴り。しかし、リアはバックステップで避ける。

そこに刀を投げつけ、新たに刀を生み出す。

今度は日本刀ではなく、逆手で持つ小太刀だが。

リアがそれを斬り伏せると俺は懐に入り斬りつけるのだが半身を引かれて回避される。

その反動でリアは回転斬り。それをバックステップで避けるがリアはそれに追隨して猛攻を仕掛けてくる。

それをすべて見切り小太刀で受け流し、タイミングを計る。

そして、リアが少しだけ大振り————コンマ何秒の単位で————になった瞬間、残像と化して俺の姿をかき消す。リアが俺を見失い、なお且つ俺の位置を上と特定したと同時に俺は丸くなって刀を下に突き出し、

「忍法：飯綱落とし」

そのまま回転斬り。しかし、これも弾かれる。だが、これでチェックメイト！空中から小太刀をリアの足元へ投げつけ、

「忍法：雷電」

何処からともなく小太刀に雷が落ちる。そして、そのまま小太刀は消え、リアも膝をつく。

「こんなもん？」

「不思議な術を使うのですね、ショウゴは」

「まあ、あれはねえ・・・」

まあ、これでとりあえずリアの力はわかった。この世界じゃ最高ランクにも程があるだろうな。多分その他スキルも残ってるだろうし、エクスカリバーの真名開放もある。余裕で対軍、うまく立ち回れば国もいけるかもな。

次はフォウか。こいつはどんなことをしてくるんだろうな。

「よし、じゃあ準備はいいな？」

「ああ」

とりあえず、牽制の意味を込めて軽くジャブ。それを軽く避け、炎の纏った拳で殴りつけてくる。

それを避け、炎の纏ってない部分を持ち投げようとするが斜め下から今度は雷を纏った足で蹴りつけてくる。

しょうがないので腕を放し、サイドステップで避けてから距離をとる。

どうやら自分の手足に炎などの属性を付加して戦う拳闘士のような。しかし、まだアーティファクトの力は出ていない。どんななんだろうな。

と思った瞬間、一瞬で目の前にフォウが移動してきて、殴りかかられる。

紙一重でそれを避けるが、移動速度はいまだ衰えず、更にパンチが

地面に当たった瞬間爆発した。

その煙幕を利用し再び距離をとる。今度は気配を絶って。

推測だが、あのアーティファクトは纏わせた属性によって効果が変わるみたいだ。足に雷なら雷の速さでの移動。手に炎を宿してパンチを放てば爆発と言った具合に。ありや完璧にあいつの戦い方にあった武器だよな……。

とか1瞬のうちに考察していると風が煙幕を吹き飛ばす。どうやら属性付加だけでなく放出も可能のようだ。

しかし属性付加か……。そっぴやネギまにも似た効果の魔法があった気がするな。確か魔法を取り込んでっ！

かわしてみると今度は風のパンチ。頬が軽く切れているところから鎌鼬が発生してるみたいだな。厄介な……。

でも、おかげかどうかわからんが思い出したぞ！さて……。使ってみようか。

両手に雷。それらを合わせて……。掌握！

すると髪が白くなり、更に肌も白くなる。目は赤くなった。完璧にアルビノ状態かよ！

まあいい。そう思って1歩踏み出す。するといつの間にかフオウの背後に移動。どうせなので首筋に手刀を放つが避けられる。が、また移動。今度は懐に入り蹴りあげる。咄嗟に脚甲で防ぐが体は空中に浮き上がる。

「無手技：舞風」

ぶっちゃけこの前カイトに使った剣技：舞風の無手バージョン。技名同じだし。

そんなことは置いといて四方八方から蹴りやパンチを放つ。いつもは気の強化で使うが今回は雷×2。最早影すら残らない。そのスピードで蹴り続け、フィニッシュにかかと落として地面にたたき落とす。

あれ？模擬戦のはずがいつの間にか変なバトルに！？

まあ今更か。とりあえず、フォウを回復し、起こす。その間に皆も駆け寄ってくる。

「すまん、いつの間にか熱くなっちゃってさ」
手を貸してフォウが立ち上がるのを手伝う。

「いや、俺もまだまだだとわかった」
苦笑しつつフォウも言う。

「まあ今のままでもこの世界に勝てる奴はいないだろうがな。二人とも」

目の前に立つリアとフォウに言う。多分ここにいる皆で戦争起こしたら余裕で世界征服できそうな気がする。

「いえ、まだまだ精進が足りません。もっとしっかりしなくては」
リアはどうやらまだまだ頑張るようだ。

「そうだな。ショウゴ、また後で稽古をつけてくれ」
フォウも同じよう。どうやら他のみなさんも俺らの戦いでやる気が

出たようだ。

これから本当に忙しい毎日になりそうだな・・・。

模擬戦・・・だったんだがなあ（後書き）

作：マジすんませんでしたー！！！！

シヨウ：まあ、ようやく出せたと思ったたらいきなり叩きのめすって・
・酷い扱いにも程があるだろ

作：打ってたらいつの間にかあんな展開に・・・

シヨウ：しかも、中途半端にネギま絡めるし

作：いや、使い魔より従者の方がなんか対等ぽい感じがしたからさ、
変えてみた

シヨウ：まあ、奴隷みたいな使い魔よりかはいいけどさ

作：とりあえず、今回はようやく銭湯開店・・・かな？

シヨウ：何故疑問形？

作：先にデモンベインからキャラ登場をさせようか迷っててさ

シヨウ：なら両方やれよ

作：多分デモベ↓銭湯の2本立てで行くと思います。そして月光閃
火様、フォウ君はあんな感じでよろしいでしょうか？よかったら感
想に書いてくれると嬉しいです

シヨウ：ということで今回はこのくらいで。次回でまたお会いしま

し
よ
ゝ
！

揺れる心（前書き）

作：今回は前回の予告通りではなく、リアのことに関しての問題をどうにかすることにしました。

シヨ：しかし・・・どうにかなるもんなのか？

作：その辺は本編を見てからの楽しみ？ということだ

シヨ：ふーん、まあ今回もよろしくおねがいします！

揺れる心

その日の夜、リアは夜空を見上げ何やら悩んでいる。その姿が気になったので隣へ座って聞く。

「どうした？浮かない顔して」

「いえ・・・この身が願っていたことを思い出したもののどうしてか前のように強く渴望することがないのです。その分自分の過去を冷静に振り返ることとなりどうすればいいのが全く分からなくなってしまうて・・・」

ふむ・・・。

「ならば剣をとれ、リア」

俺は立ち上がり創造したエクスカリバーの切っ先をリアに向ける。

「っ!!」

俺の発した殺気に反射的に飛び退き構えるリア。

「行くぞ」

短く言葉を発し、駆ける。神速を超え更にその上へ。そして剣を振りおろす。見えぬであろうその一撃を今まで培った直感によってリアは避ける。

「何を！」

その言葉も続きを発する前に更に連撃を加えていく。それらをどうにかしてリアは受け続ける。

「実はな、俺はお前の過去がどんなものだったかを知っている。そ

して、その願いもな」

「！！！」

俺が言った言葉にリアは驚く。まあ、並行世界なわけであって彼女の伝説はないのだから。

「その理由はまた今度話すとして。今はお前のことだ、リア」
俺はそう言いながら剣を下ろす。

「・・・」

いきなり襲ったせいか、それとも他に理由があるのかリアは剣を構えたまま沈黙する。

「お前が願ったのは王の選定のやり直し。これはあってるな？」

「ええ」

よかった、間違っでなくて・・・。

「その願いがどんなに歪んでいるかはわかってるのか？」

「・・・」

答えは沈黙。頭では理解してても心が許容できない・・・そんなところか？

「結論だけ言つとくとな・・・その願いは間違っている」

「！！！」

まあ、リアも昔のことを思い出して不安定だったのだろう。その身からは考えられない早さと力によって剣を振りおろしてくる。それを軽く受け流しながらも語る。

「起きたことはやり直せない・・・これは最早世界の理だ。これを崩すことなどできはしない」

俺の言葉には答えず、騎士王の名に恥じぬ連撃を放つリア。正直この世界で真面目に修行したのともらったチート能力のおかげでぎりぎり喋れてはいるのだが・・・

ぶっちゃけきつい。英雄の名は伊達ではないというわけだな。数々の試練を乗り越えた経験や力は伊達ではないと言すべきか。さらにこの前の模擬戦とは違って明確で強力な殺意もある。ここは戦場で何もでもないのに・・・。

「仮にやり直せたとしてもそれは、それまでに死んでいった者たちへの冒涇だ。彼らの死が無意味だったと突き付けているのと同じじゃないか」

俺の言葉をはねのけるように激しさを増すリア。こりや最後の手段をとりださねばヤバいか・・・？

とりあえずぎりぎりまでは頑張るということで何とか避け続ける。

「さらに、そこで生きている者たちへの裏切りだ。彼らも同様生きていることを否定するようなものだ。それを間違いではないと何故言いきれん？ 答えろ、リア・・・いや、アーサー王」

そこまで言うとは激しかった剣撃が嘘のようにとまる。リアは片手で剣を握りしめ、俯く。

「・・・ならば、私はどうするべきだったのですか！！ 私の子でたくさん民は死に、それが最善であると信じてその者たちから幸福を奪った！！ 私ではないものが王となれば彼らを含めたたくさんのが救えるかもしれない！！ それを願うのが何故間違

と言える！！」

その叫びは彼女自身が抱えていた後悔に他ならない。そして、今まで抱えていた苦しみだ。ここまで抱えて良く生きて、更に王としての責務も果たそうとする・・・尊敬できる奴だな、ほんと。

でも間違いは間違い。それは正さねばならない。

「確かにお前の言うとおりお前でないものが王となればその者たちは救えるかも知れんがな・・・。ならばお前の救ってきた命はどうなる？その者たちは確かに幸福になった。ほかならぬお前のおかげでな。しかし、その他の奴が王となることによってその者たちは不幸になるかもしれない。お前が救えなかった者たちを救う代償として。その彼らを裏切ると言うのか！！アーサー王！！」

「ならば・・・私は・・・」

剣がその手からこぼれ落ちる。ここまで感情が不安定になるもんだったのか？あの契約って・・・。

「お前が自分のとった道をどう思うかが大切なんだ。お前自身、自分の選び取った道を間違いだ・・・後悔するようなものだったと断言できるか？」

この手に持った剣を消し、リアに近づく。

「わたしは・・・」

「断言できないのならお前はその道を後悔などはしていないのだろう。そりゃ少しはしているかもしれないがな。それでもやり遂げたことに意味はあった。ならお前は自分の生涯を誇れ。自分にも守れたものはあった。自分の気持ちを、初めに誓ったことを最後まで貫き通したと」

俺はそう言い、リアの頭に手を載せる。リアはそれを払いのけることもなく、ただただ俯くばかり。

「お前はお前の責務を果たした。ならそれを絶対になかったことにしてはならない。わかるな」

リアは俯いたまま頷く。

「よし！なら盛大に・・・は無理だが月見酒としゃれこもうぜ」

暗い雰囲気吹き飛ばすがごとく、リアの頭をわしゃわしゃつ、と撫でる。そのせいで括っていた髪もほどけてしまったが・・・まあストリートの方が俺はなんとなく好きだから放置。

リアは羞恥心か、はたまた怒りによってか顔を真っ赤にしている。俺的には前者の方が断然嬉しいが、まあ、どっちでもいっか。

そう思いつつ亜空間からとっておきのワインをとりだす。普通平民である俺ではお目にかかれない代物だが、まあそこは昔色々あった、ということ流してくれ。

とりあえず、いまだフリーズしたまんまのリアを再起動させる前にグラスを創る。

「おーい、リア？大丈夫か？」

手を顔の前で何回か振るとリアがはっ、と我に返った。

「す、すみません！」

「いやいや、そんな謝ることじゃないし。とりあえず、ほれ」

復活と同時に謝りだすリアを止めてグラスを渡す。それにワインを注ぐ。自分のにはすでに注いである。

なにがなんだか理解してないリアに苦笑しつつ、グラスを掲げ、

「とりあえず、乾杯」

チン、とリアのにぶつけてから飲む。

まあ、きっとリアも大丈夫だろうし・・・明日からもがんばりますか！！！

揺れる心（後書き）

作：まずは、白銀陛下様 月光閃火様。ご感想、ご指摘ありがとうございます。

シヨ：あの誤字はさすがにヤバかったな。

作：何を思っ^てあんなことを書いたんだろう・・・。

シヨ：頭がどうかしてたんじゃない？

作：・・・かもな。とりあえず、すぐに間違いは直ったんだしいいじゃん？

シヨ：まあ次からはきをつけにやいかんだろ

作：そだな。で、月光閃火様、その言葉でものすごく救われます。

シヨ：しよーじき文字だけ羅列しすぎじゃね？とか思わないわけでもなかったわけだが

作：うん、まあ今回は軽めだけど変えてみた。意識はちょうどさっきクリアしたばかりのフェイトで。

シヨ：まあダメダメなわけだが。そして、やってからリアとか出せよ・・・

作：いや、もつと早めに終わらせる予定がさ、バッドエンドを1つ見て心が折れた・・・

シヨ：もろっ！！

作：まあそんなわけで今回はこんな感じですよ！みなさん楽しんでいただけたでしょうか？

シヨ：いきなりエンドかよ。まあえーっと、また次回もよろしくお願ひします！

稀代の魔導書とエンカウント（前書き）

作：とりあえず今回は2話投稿。

シヨウ：しかし銭湯までは行かないと・・・。

作：思った以上に進まなかった・・・。

シヨウ：そりゃそうだろうな。この夏にはハマったアニメを参入させようとプロット編集してたらそうなる。

作：ほんとこの小説がどんどんカオスになっていくZE

シヨウ：バカ発言してる作者は放置で本編をどうぞ！

稀代の魔導書とエンカウント

翌日（内部時間）、一度外に出てみると妙な魔力反応がちょうどトリスタニアの方で感じられた。

それがなんなのかを確かめるため、俺はトリスタニア郊外にあるマーカーへと飛んだ。

妙な魔力反応のある場所に向かって歩く。裏路地のそのまた奥の奥。おかげで途中浮浪者とエンカウントしまくった。まあ、出てきた瞬間顔面パンチ1撃で仕留めつつ進んだがな。

さて、そんなこんなで反応のしている物体を発見。古い本である。何の本なのか気になったため拾い上げてみる。

「ネクロノミコン……？」

何故こんなものが……？的な思いを持ちつつ呟くと、

『主を認証。契約承認。汝、我アル・アジフの主と為す』

……は？と思う間もなくネクロノミコンは光り出す。それが収まると俺の腕の中には……

紫色の長い髪で同じ紫色のドレスを着た少女が腕の中にいた……

「ってはあ！？」

待て！！てかこの姿どっかで見たことあるような……

「うるさいぞ……って誰じゃ？^{なれ}汝は」

おっと、少女の目が覚めたらしい。

「俺か？俺はシヨウゴだ」

「・・・何故汝は妾を抱いておるのじゃ？」

「そりゃ、ネクロノミコンって名前の本を拾ったらいきなりお前が現れたんだよ」

「何！？まさか汝が妾のマスターか！？」

「多分・・・アル・アジフの主と為すやらどーたらこーたら言ってた気がする」

「・・・ん？アル・アジフ・・・！？デモンベイン！？」

「どうかしたか？」

「いや、なんでもない・・・」

なんでこう別のゲームとかから参入してくるんだろっ・・・。

「そうか。とりあえず下ろしてくれ」

「ああ」

「汝は妾のマスターか・・・。まあとりあえずよろしくなマスター」

「とりあえず呼び方が堅い。シヨウゴで良い」

「そうか？ならばシヨウゴ。よろしくな」

「こちらこそ・・・アルでいいか？」

「む・・・まあよろう」

「今更だけどさ、マスターってなんだ？」

「わかっておらなかったのか。妾はネクロノミコンと言う名の魔導書の精霊で、マスターである汝はその中にある魔術を行使することが可能なのだ。そして妾の力で汝の力の補助も行える」

へっ・・・でもさ、クトウグアとかイタクアとか使ったら確実にアウトだよな？後デウスマキナってないのか？あっても困るけど。

「まあいつか。これからよろしくなアル」

そう言つて右手を差し出す。問題はすべて蚊帳の外へ投げ捨てておく。

「あ、ああよろしく・・・」

何でかは知らんが若干びっくりした感じでアルは俺の右手を握った。

「さて、お前のことも皆に紹介せにやらんし帰るかな」

さへてみなさんどんな反応を返してくれるかね。

銭湯開店までの幕章

アルと自己紹介をした後、特に行くところもないため修練の門へ帰ることにする。

修練の門に入った時にこの空間にアルが驚いたり、皆にアルのことを紹介したら「またかこいつ・・・」みたいな目で見られた・・・
ってまたってなんだ？

まあいいや。それは置いておいて、新たに仲間となった3人に事業に関してどうするかを聞いてみる。

リアは「ショウゴはマスターですから傍に仕えるのは当たり前です」とか言ったのでデコピンをして、

「いいか、俺らは一応主人と従者という関係ではあるけどな、そんなじゃなくて仲間・・・いや家族か？うん、俺らは家族だ。ここにいる全員がな。だからそんな言い方をするな。お前自身がどうしたいか決めるんだ」

「わたしは・・・そうですね、少し興味がありますしやってみたいです」

ときちんと考えて言ってくれた。

フォウは「俺も興味があるし、なにもやらずに過ごすなんてできない」
とのこと。

アルは「うむ、面白そうじゃから妾もやる」

らしい。

と言うことで、3人の浴衣を作る。

リアは青。

フォウは黒。

アルはドレスと同じような紫色。

それぞれ製作し渡す。その後、皆で着てから微調整を行ったりした。

それから銭湯が完成するまで色々していた。

例1フォウ&リアとの模擬戦

「はあ!!」

フォウの右ストレート。

「甘い!!」

それを受け流し、そのまま腕をつかみ一本背負いの要領で投げ飛ばす。結構エグイ音がしたので後で回復させんとな・・・。

「そこです!!」

考え事をしていると、間髪なく放たれるリアの一振り。それを1瞬で創り上げた忍刀で受け流す。構造も適当だったためそれだけで忍刀は碎け散る。しかし、それを気にすることもなく懐へと入り、

「烈破掌!!」

気弾をゼロ距離で複数個炸裂させる。

「がはっ！」

これにて二人とも撃破と・・・。

例2 ギーシュフルボッコ（笑）

「そらそらそらそら！！！」

「ひい！！！！！」

ゲート・オブ・バビロン

俺の背後には王の財宝に似せて創った亜空間があり、そこから適当に創りだした武具を放出しまくってみた。

それを錬金によって生み出した鋼鉄の壁だったり、人型ゴーレムではたき落したり、ブレイドではたき落したりしてた。

魔法ってあんなに同時展開できたっけ？ついでに命の危険に反応したのか知らんがスクウェアクラスの魔法も使っている。やっぱり人は追い詰められたときが一番強いな。

ゲート・オブ・バビロン

ちなみに亜空間はあくまで疑似王の財産なので神秘性もないただの武具だ。切れ味は上物だが。

「弾幕はパワーだZ E」

アンリミテッド・ブレイドダンス

フェイトの格ゲーで某弓兵の超必殺技『無限の剣舞』をダメ押しと言わんばかりに発動。

ギーシュの頭上に数百数千もの武具が。まあ、これはすべて刃引きしてあるが。

俺が手を挙げたのに反応してギーシュも上を向き・・・なんか悟りを開いた表情になった。

それを見届けて俺は腕を振り下ろす。それと同時に亜空間の方は閉じ、上空の剣軍がギーシュに降り注いだ……。

例3アルの魔術と触媒創り

「うゝむ……大体の魔術は通常でも使えるんだがなあ……」
探索用の魔術とかアトラックナチャとか。

「何かダメなものでもあるのか？」
この世界のことをまだ知らずにいるアルは？マークを浮かべ言う。
まあ、この世界のメイジのレベルを知らんだろうしねえ……。

「とりあえずクトウグアとイタクアは使用禁止な」
あんなんだしたら大変なことになる。

「そうか。それでショウゴ、汝は触媒とかを持たないのか？」

「触媒か……」

デモンベインは……2丁拳銃だったわけ？

「うむ。妾の場合は銃を使ったりしていたぞ」
どうやら当たってたみたいだが……。

「うゝむ……ガンⅡカタを作ってみようか……」
あれないと接近戦できないし。

ついでにモデルも決めないとな……グロツク17とベレッタM9
2FSでいいかな。これしか（作者が）知らないし。

というわけで双銃を創る。両方とも自動装填式で、装弾数は面倒なので両方とも15で固定。マガジンも同じものにした。別に無限バンドナよろしくで、装弾数は関係なしにしても良かったのだが、そこはロマンがあると言っことで・・・。

銃弾は基本的には普通の弾を創るが、何となく炸裂弾バーストバレットやら散弾やらを作ってみたりもした。

まあ使う場面はそこまでなかったりもするのだが・・・。

後はガンⅡカタを極めるか・・・。

後はシャルロットと昼寝をしたり、リアやアルがいつの間にか傍らで寝てたり、料理を作ったり、リアの食事にびっくりしたり・・・。

まあ平和に過ごし、ついに、銭湯が完成した。

銭湯開店までの幕章（後書き）

作：まずは トッシー様 サブゼロ様 元樹様。ご感想ありがとうございます。
ございます。

シヨウ：えっと、トッシー様とサブゼロ様から質問みたいなのがあるが・・・

作：お二方に言えることですが、能力やらキャラやらは完璧に作者の趣味です。そうとしか言えません。

シヨウ：じゃないと途中からカオス空間が起きたりはしないしな。

作：そこは俺も思ってるから否定出来ん……。え〜と、次に元樹様。ありがとうございます。これからがんばります。と言うかこの感想のおかげでほんと頑張れます……。

シヨウ：ありがたいお言葉だしな。

作：うん。さて、今回はこのくらいで。次回こそは銭湯開店へ！

シヨウ：それではみなさんまた次回〜♪

アンケート（本編じゃないので注意！！）

くそ暑い日が続く日本ですが、読者の皆様はお変わりなくお過ごしでしょうか。

今回このよくわからない物を投稿したのにはわけがあります。

そのわけとは、どう考えても原作通りに進むことってないんじゃないかな？ということなんです。

ぶっちゃけ主人公のショウゴ君には力を与えすぎました。どう進んでも無理 という結論しかでない・・・orz

ということで、読者の皆様にアンケートを実施したいと思います。

その1 敵キャラで欲しい人物

オリジナルでもどっかの原作から引っ張ってきてもらってもかまいません。

例 デモンベインのドクターウェスト。ガリアのヨルムンガルド製作に飛び入り参加。とか

その2 原作のイベント

原作で起こったイベントで出てこないものがあると思いますので、出してほしい！というイベントも募集します。

その3 出してほしい原作

今現在、次に行くネギま！では色々ぶち込んでカオスに仕上がる予定となっております。ここまできたら作者の知ってるものだけじゃなく読者の希望もぶち込んでしまおう。と思ったことからです。

ちなみに出そうとしてるもの・・・魔法先生ネギま！ 化物語 カードキャプターさくら

あれ？そこまでカオスじゃない？まあいいや。いい加減なものです。お願いします。

予定は未定。この言葉を痛感した・・・。色々出したいのが増えました。

このアンケートの締め切りは一応アニメゼロ魔一期終了（つまりタルブでの戦闘）までです。

おい・・・デュエルしろよ（前書き）

作：久々の投稿・・・

シヨ：どうした？

作：いやさ、アンケートって集まらないんだねえ

シヨ：まあ、当たり前だろ

作：とりあえず後何話かはアンケートの結果が関係ない話を出しますんでよろしくお願いします

シヨ：ふがない作者だがよろしくたのみます。それでは本編どうぞ！

おい・・・デュエルしろよ

銭湯開店・・・から数週間たった。開店してから今までの間に大分知名度が上がって結構な人たちが来てくれる。

更に、途中で思いついた食堂の方でも儲かっている。味はいい上に低価格の為、風呂に入ってから食べて帰る人が多い。まあ、食事だけの為に来る人もいるのだが。

さらに、利益も出だしたため、今では一般の人からも雇用している。今までは俺が分身で人を増やして回していたが、それもない。食堂の方もきちんと指導をし、俺がいなくても大丈夫なようにした。

「というわけで、今日の宣伝に行く人を決めるぞ」

なにが“というわけ”なのかは分からないが、とりあえず皆集まる。

「さて、皆せーので一気に引いてくれ」

俺の手の中には割り箸が人数分。まあ王様ゲームのあれ。

で、引いた結果・・・

「よろしく、シャルロット」

「うん」

というチームに。他の皆（リアとかアルとかが特に）不満げな顔をしつつも本来の持ち場へ戻っていく。

「ま、行こうか」

宣伝用のビラを背後の空間から取り出し、シャルロットに渡す。

シャルロットは無言でうなずいて俺の手を握って歩き出した。

あれから数時間。まだ行っていなかった地域にも足を運び、チラシを配る。平民でも簡単に来れるように良心価格なのでチラシを見たときのびっくりした顔が面白かった。

さて、新しい顧客が増えそうだなあ、と思っていたら爆発音が。以外に近くで起こったみたいなので二人で見に行くと、貴族が二人魔法を打ちあっていた。

理由は知らないが決闘みたいだ。ただ周りへの被害を考えずに放ちまくっている。おかげで、ここに住んでいる人たちの家などに被害が及んでいる。

シャルロットが袖を引っ張る。どうしたのかと思って見れば、

「ショウゴ」

と一言ばかり。まあ俺もこれはさすがにどうかなあ、と思うため、介入することに。

「双方、杖を引け！！」

声に気を込め、二人の行動を止める。

「貴様、平民の分際でどういっつもりだ！」

あーやだやだ。典型的すぎで嫌になるね。

「どういうものにも、あんたらのせいでこの人達が迷惑してるんだ。さっさとやめて自分の屋敷へ帰るなり、別の周りの迷惑にならないところでしろ」

「平民の家が壊れようが平民が死のうが我には関係ない。むしろどうでもいいことだ」

あー……。こいつらは最悪だ。話だけで済まそうと思ったがしょうがない……。

「おい、なら俺と決闘しろよ」
デュエル

蟹さんのディスクを手に創り、はめて二人に向かってそう言った。

「ふん平民などすぐに始末してやるわ」

「貴族に逆らったことを後悔させてやるう」

「あーはいはい、じゃあデュエル!!」

「俺のターンドロー！行くぜ！俺はスピードウォリアを召喚！」
俺がカードを攻撃表示でセットすると、目の前に灰色のホイールが足についた戦士が現れる。

「な、なんだそいつは！」

急に現れたスピードウォリアに貴族どもがビビる。

「何、貴様らの使うゴーレムとそう変わりはないさ。さて、スピードウォーリア攻撃！ソニックエッジ！」

俺の言葉でスピードウォーリアは走り出す。

「スピードウォーリアの効果発動！召喚したターンの攻撃時に攻撃力が倍になる」

だんだんスピードウォーリアの走る速度が上がり、貴族に向かう。

「う、うわあー！」

やっぱみたこともないものが凄いスピードで迫ってくるのは恐怖しかないんだろうな。適当に魔法を連射しているが、スピードウォーリアには当たらない。

そして、そのまま貴族の元にたどり着き後ろ回し蹴りをぶち当てる。当たった貴族は吹っ飛びあっさりと戦闘不能。張り合いのない・・・。

すると、攻撃を終えたスピードウォーリアに突如炎が飛んできてスピードウォーリアを爆散させる。ライフを見れば4000から3000まで減っていた。

「はははっ！どうだ！私のトライアングルスペルは！貴様のそれも一撃だったな！」

攻撃力1900か・・・こいつがしょぼいのかこの世界がしょぼいのか・・・両方か？

「俺のターンドロー！俺はジャンクシンクロンを召喚！」
今度は白いマフラーを巻いたオレンジ色の戦士が現れる。

「更に！ジャンクシンクロンの効果でスピードウォーリアを特殊召喚！」

更に腕を交差させて防御の姿勢をとっているスピードウォーリアが現れる。

「な、なに！？」

先ほど倒したばかりのスピードウォーリアが現れて動揺しまくっている。

「俺はレベル2のスピードウォーリアにレベル3のジャンクシンクロンをチューニング！」

すると、ジャンクシンクロンが白い光となった後3つの星がスピードウォーリアの中に入る。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！シンクロ召喚！」

来い！ジャンクウォーリア！」

スピードウォーリアが変化し、今度は青い戦士になる。

すでに貴族は戦意喪失状態だが・・・

「さあ行け！ジャンクウォーリア！スクラップフィスト！」

背中にあるブースターで加速し、貴族に突っ込んで殴り飛ばす。これにて一件落着。

貴族二人を縄で縛り、辺りの家を直しておく。周りで怖がっていた人たちもこっちに来てお礼を言ってくる。

とりあえず銭湯のことを宣伝した後、近くの広場へと逃げることにした。

「お疲れ様」

「ありがと、シャルロット」
近くのベンチに座って一息つく。

「それじゃ、昼飯にするか」
周りには誰もいないので普通に亜空間からバスケットをとりだす。

「今日はなに？」
目をめっさきらきらさせながらシャルロットはバスケットを見つめる。

「今日はサンドイッチだ」
具としてツナ&トマト、タマゴ、カツの昼飯用とイチゴ&生クリームのデザート用を持ってきておいた。

「いただきます」
二人で手を合わせ、食べ始める。いつも思うがシャルロットの仕種って何故小動物を連想させるんだろうか？
モキュモキュといった擬音が聞こえてきそうな感じだし。

俺がそのことに考察しているとシャルロットは食べ終わったようだ。ついでに睡魔が来たのかうつらうつらしている。

「シャルロット」
名前を呼ぶと、シャルロットがこっちを向く……前に上半身を倒して俺の膝が枕になるようにする。

「眠いんなら眠れ。我慢することはないさ」

顔が真っ赤になってることは放置で頭を撫でながら適当に頭に浮かんだ歌をハミングする。

しばらくするとシャルロットの寝息が聞こえてくる。

それを確認して俺は一言つぶやき、頭上に短剣を創り放つ。

「外したか・・・？」

まあ認識内に異物はないしいつか。

春の暖かい日差しが降り注ぐ。シャルロットの寝顔を見てたら俺も眠くなってきたな・・・ZZZZ

おい・・・デュエルしろよ（後書き）

作：まず 月光閃火様 リオレイア様。ご感想などありがとうございます

シヨ：フオウの扱いに関してどうすんだ？作者

作：うう、マジすんません……。後数話の間にきちんと活躍させますんで！！

シヨ：後はアンケートに答えてくれた唯一の方

作：ありがとうございます！一応ジパングは父親の方がゲームを買ってきてるんでそれをやれば・・・思い出せるかな？

シヨ：最後にやったのいつだっけ？

作：多分中学に上がる前位・・・？

シヨ：・・・

作：ま、まあどうにかするさ！それにモンハンの方はわかるし！！

シヨ：ま、頑張ってくれ

作：頑張って考えてみますんでこれからもうろしくお願いします

シヨ：さて作者、今回はネタに走りすぎだと思っただが？

作：いやぁ・・・なんかこう思いついたままを文章にしてみた

シヨ：あれはどうかと思うが・・・

作：他に思いつかなかったんだよ！

シヨ：しかも文章めちゃくちゃだし

作：ひ、久々に書いたから仕方ないだろ！！

シヨ：もつと計画的に行こうぜ？

作：それができたら苦労はせんわー！！ちくしょー！！！！

シヨ：・・・作者が逃走してしまいましたのでこの辺でお開きとさせていただきます。アンケートのほうはまだまだ募集中ですのでよろしく願います。

それではまた次回でおあいしましょー！

キチガイ？それとも電波野郎？果たしてどっち？（前書き）

作：いえーい・・・

シヨ：1ヶ月以上も放置すんなよ

作：中間、修学旅行のダブルパンチはきついんだぜ・・・

シヨ：修学旅行でなんでそんなに元氣なくなるんだよ？

作：行き先はグアム。それだけの響きならいいけど、向こうの気温は朝早くから30度越え、湿度は常時80%越え、向こうの高校&大学生との交流、バスケ中にケガ、こっちはこっちで帰ってきたらめっちゃ寒いし・・・

シヨ：・・・作者が鬱モードに入っただので本編に入らせてもらいます。どうぞ。

キチガイ？それとも電波野郎？果たしてどっち？

今日の宣伝には俺とアル、フォウの三人が選ばれていつも通りさつさと終わらせた。

のだが、なんか首の後ろがチリチリと焼けるような感覚・・・ぶっちゃけなんか起こりそうな気がしたので郊外へ向かって見ると、

「ようやくみつけたのであゝる！」

と、どこから現れたのかは分からないが白衣を着た緑の髪の男とトンファー（仮）をもった少女が後ろに現れる。

「だれだ？お前ら」

「吾輩の名はドクター――ウエスト――！！！」

ギューイーン！とエレキをかき鳴らしながらフォウからの質問に答える。

えゝつと・・・たしかアルと一緒に世界とこの人だっけ？

「で、汝は何をしに来たのだ」

「ん？吾輩はそのショウゴという少年をけしにきたのであゝる」といいながら俺の方を指さす。

「なんでだ？」

「今いる雇い主の依頼であゝる。というわけで、アゝイム・ロックンロール！」

背中に持っていたギターケースを掲げ・・・って！

「全員俺の後ろに入れ!!」

そう言いながらこの前作った拳銃2丁をとりだす。

「レッツ・プレイ!!」

西博士からロケット弾が飛んでくる。それに対して俺は拳銃を構え、

「レールガン!」

不吉を運ぶ黒ネコのあれを2丁で再現。ロケット弾は当たると同時に爆破。ついでに西博士も狙ったのだが隣の少女によって避けられた。

「ぬ、やはり簡単にはいかないのである。エルザ!」

「わかった口ボ」

どこかに走り去る西博士と構えるエルザと呼ばれた少女。

「さて、どうすつかねえ・・・」

このままこいつを無効化させてからいつてもいいけどあのキチガイ何やらかすかわからんなあ・・・。

「シヨウゴ」

「ん?」

後ろからフォウが一步前へ。

「俺がこいつの相手をする。お前はあの・・・ウェストだったか? あいつをアルと一緒に追ってこい」

アーティファクトを出してフォウも構える。

まあぶつちやけそれしかないだろうし・・・。

「わかった。ここは頼むぞ」

「任せろ」

エルザのことはフォウに任せ、アルと共に西博士の方へ向かった・
・まではいいんだが、

「なあ・・・アル」

「なんだ？ ショウゴ」

「これ・・・何？」

俺達の目の前にあるもの。それは、ドラム缶のような胴体に短い脚と長い4本の腕がついたロボット。大きさは・・・とにかくでかい。

「スーパーウエスト無敵ロボ28号スペシャル（皇帝の紋章）である。貴様はこの餌食となるがいいのである！」

なんというか・・・一気にやる気が失せた。

「なあ・・・アル」

「なんだ？」

「使わないと言ったけどさ、あれには使ってもいいよな？」

「ああ。いいと思うぞ」

「じゃ、やるか」

手に持った銃口をスーパーウェスト（ry）に向ける。

「ふんぐるい・むぐるうなふ・くとうぐあ・．．ええい以下略！来い！クトウグア！」

唱えるのが途中でめんどくさくなった。まあ、力でゴリ押しすればどうにかなるんじゃない？理論でやったところ．．

「．．．？」

「ここは．．．どこですかね？」

赤い髪をツインテールにした少女と長い銀髪の少女が立っていた．．
．。何故．．．？

キチガイ？それとも電波野郎？果たしてどっち？（後書き）

作：まず ZIN様 月光閃火様。ご感想ありがとうございます

シヨ：さて、今回は活躍なしだったんだが？フオウ

作：次回活躍するんで楽しみにしててくださいね？

シヨ：で、キーワードの間違い前にもあったよな？

作：直してたつもりなんだけどなあ・・・感想を見た後直したけど・・・直ってるよな？

シヨ：自分で確認しろ。次、月光閃火様からのアンケートの答えだが？

作：とりあえず、ブレイブルーを買って現在ちまちまプレイ中ですがでも出せるかなあ・・・？

シヨ：他のはまだ作者が何も手を付けてない状態なのでわかりませんが頑張ってみるらしいです

作：最近はEXVSとかフロントミッションとか色々やってるしねえ・・・

シヨ：正直ただの阿呆だな。テストの点も悪かったし。

作：・・・誰かいいい勉強の仕方を教えてください・・・。マジで・・・

シヨ：阿呆な作者は放っておいて今回も短い本文だったんですが、次回からの展開は地味にだが考えてるそうなので多少は早く更新できそうなので少しは期待してやって下さい。それではまた次回！

作：今回最後に登場した新キャラ・・・皆わかるよな・・・？

邪神・・・ねえ・・・（前書き）

作：今回は一週間で更新

シヨ：以外に早かったな

作：これからはこれくらいの速度で更新していきます

シヨ：へえ・・・まあ頑張れ

作：そして最後に月光閃火様。マジすんません・・・今回はなく
次回にフォウ君は活躍することになりました・・・

シヨ：言ったことくらい守れよ・・・

邪神・・・ねえ・・・

前回からのあらすじ。

なんか邪神呼んだのに女の子が二人来ました。隣のアルの目が心なしか痛い・・・。

「あゝ・・・ちよつといい？」

いつまでもフリーズしてるわけにもいかないので俺は二人に話しかける。

「あ、もしかしてあなたが私たちを呼んだ人ですか？」
長い銀髪 of 少女の方がこちらの質問に応える。

「ああ。あれを壊すのを手伝ってもらおうと思ってクトウグアを」
そう言いながら俺はスーパーウエ（ryを指差す。

「あゝ・・・なんです？あのいかにも『私は悪の組織の一員だ』と主張してる巨大ロボは」

「知らんがあいつの雇い主が俺を殺せと轟叫ぶらしい」
叫んでるのかどうかは知らないが。

「どこから拳の形したMAP兵器が飛んできそうですね」

「飛んできたら嫌にも程があるがな・・・まあいいや。とりあえず

自己紹介な。俺は山代翔吾。気軽にショウゴとでも呼んでくれ。で、俺の隣にいるのが魔導書キタブ・アル・アジフの精霊、通称アルだ」

「あ、私は這いよる混沌のニャルラトホテプです。で、こっちの無口なのがクトウグアのクー子です」

「よろしく」

お互いの自己紹介終了。つーかなんでウェスト何もしなかったんだろ。

ぐ

ん？今の状況に似つかわしくない音が何処からか。具体的にはクー子とニャル子のお腹から。

「あちゃゝ・・・そう言えばまだ3時間目の途中でしたね」

「お腹すいた・・・」

どうやらまだご飯を食ってなかったらしい。特にクー子の方は悲壮感を纏ってる気がする。

「あゝ・・・その二人。あれ壊したら何か食べさしてあげるから頑張ってくれない？」

どうも俺は今回戦闘をする気が起きないので二人にはぜひとも頑張ってもらいたい。

「ほんとですか！！よっしゃークー子！さっさと潰してご飯を食べに行きますよ！」

「うん・・・全てはご飯の為。恨まないでね」

どうやら俺の言葉で一気にテンションが上がったらしい。二人の表情が一気に明るくなった。まあクー子の方はシャルロット並みに変わってないが。

「わたしの宇宙CQC、劇場版」

何がどのように劇場版なのかは分からないがそう言っただけでニャル子は足元の影から何かを引き出す。

「わたしの宇宙CQC百式」

その言葉と共に何かがクー子の周りに現れる。

ニャル子を持っていたのは武骨でメカメカしたチェインソー。

クー子の周りには螢のような炎の塊が6つ。

「お前らのそれ何？」

とくにニャル子。お前のそれ。

「これですか？これは『口にするのはばかられる対艦チェインソー』です」

「それは思いつき口にしてるからおかしい」

「わたしのは『クトウグアの配下』」

「以外にそのまんまなんだな」

俺の突っ込みをスルーしニャル子はチェインソーを持って駆けだす。外見は普通の少女なのに出している速度は人外のそれだ。邪神の名前は伊達ではないらしい。

駆けだすニャル子に腕のドリルとミサイルで応戦するウエスト。その巨体から考えるとなかなか早い攻撃速度だが、

「させない」

ミサイルはクトウグアの配下によって撃ち落とされる。一秒の間に何発かそれぞれがローテーションを組んで放っているためほぼノータイムで熱戦がニャル子へ当たりそうなミサイルを撃ち落としていく。

そしてニャル子の方は振り下ろされたドリルを上に乗って飛んで躲き、そのまま腕を伝って走っていく。

「な、なにいゝ!?!」

今更過ぎるウエストの叫び声。

「これでおしまいです。私の宇宙CQC! 這い寄る殺法! 邪神! 大! 切!」

意味のわからん叫びと共にモノアイの辺りにチェーンソーを振り下ろす。

そして爆発。

「お、覚えておくのであゝる!」

そんな叫び声とともにウエストは星になった。

「それではご飯にしましょう!」

いつの間にか隣にいたニャル子が俺の手を引っ張って言う。クトウグアも同じように。とりあえずフオウを迎えに行かないとな。

邪神・・・ねえ・・・（後書き）

作：まず 春夏秋冬様。ご感想ありがとうございます。アンケートの方もありがとうございます

シヨ：あの発想はお前の頭の中になかったな

作：いやあ・・・忘れてたな

シヨ：あれらに関しては使いやすそうだけども、どの奴を使うんだ？

作：ぶっちゃけその時の気分と場の状況だな

シヨ：適當すぎる・・・

作：他の皆様もまだまだアンケートの方は募集していますのでどんどん書き込んで下さい！

シヨ：さて、作者的には次の更新も一週間を目途にやっていくそうなので頭の片隅の片隅の片隅辺りに置いておいてもらえると嬉しいです

作：それでは皆様また次回もよろしくお願いします！

思い込みの激しい人（前書き）

作：今回はようやくフォウ君の初活躍回です！

シヨ：ようやくだな

作：前置きはこのくらいにして本編をどうぞ！

思い込みの激しい人

時間は戻りシヨウゴがウエストの方へ向かった時のフォウサイド。

「とりあえず戦わずに済んだら楽なんだが・・・無理か？」

フォウはそう問いかけたが答えはトンファーによる打撃。それに拳を当てて受け流す。追撃で回し蹴りを放ったがそのまま前転をして避け、また同じ位の距離まで離れる。

「やれやれ・・・ケガしても恨むなよ！」

そう言いつつ脚甲に緑色の風が竜巻のような形で纏われる。駆けだすとドンツ、という音が起こりエルザの前に現れ、

「せいっ！」

右足で顎を狙う。それをエルザはトンファーで受け止めるが、

「吹き荒れる！」

右足に纏われた風が暴風と化してエルザに叩き込まれる。もちろんそんなことを予測してないエルザは吹っ飛ぶ。

受け身をとって地面との激突は避けたが、風の刃によって結構ぼろぼろな様子。だがそこまでダメージが入ったようすはない。

「敵性レベルを変更。対魔術武装へ移行！」
『ディグ・ミット・ノー・グレイブ我、埋葬にあたわず射し！』

エルザがそう言うとはるか上空から棺桶が飛来する。そして中から

何やら幾何学的文字が刻まれた大砲が現れる。

大人が複数人でようやく持ち上げられそうな外観を持つ大砲をエルザはその細腕1本で軽々と担ぎ上げる。

「術式魔砲『ディク・ミイ・ノー・グレイブ我、埋葬にあたわず』!」

それをフォウへと向けるとほぼノータイムで緑色の光の渦が走る。

「ちっ!」

舌打ちと共に横へと飛んで避けるが、

「何!？」

光の渦は四散し、数十本に分かれフォウに追随する。

「爆ぜろ!」

生み出した炎を爆発させ急激に方向転換。ビームの方はついてこないの一回限りの追尾らしい。

それはともかく、彼の向かう先はもちろんビームを放ったエルザの方である。

「シィッ!」

向かってくるフォウに対して大砲を振るうも蹴りで受け止められる。受け止めたのが空中だったためフォウはそのまま後ろの方へと下がる。

二人が向き合い、また駆けだそうとした瞬間

ドゴーン!!

大きな爆発音が。さっきシヨウゴ達が向かった方から。二人とも同時に目を向けると、

大きな金属の塊が降ってきた!!

「やばっ!!」

力が前方の方へと向いていたのでエルザの方へと駆ける。ついでにエルザも抱える。

「ロボッ!? な、何するロボ!!」

「五月蠅い! 少し黙ってる!」

風を纏わせ跳び、更に解放して加速。ダメ押しとばかりに炎を爆発させ加速。跳ぶというより飛ぶと言える感じである。

なんとかその塊を避け安堵の息をこぼす。それと同時にエルザを降ろす。

「悪かったな、いきなり抱えたりして」
しかし、エルザはボーツとしている。

「どうした?」

「・・・男に抱きかかえられたのは初めてロボ」

「そうなのか?」

「ジェネレーターの出力が上がってるロボ。温度の上昇も確認。これは一体・・・」

「ジェネレーター?」

「そうか——これが恋ロボか」

「は？」

「絶体絶命の危機にあるヒロインを颯爽と助け出す……前にそんな物語を聞いたことがあるロボ」

「おい、こっちは完全に無視か？」

「それじゃさよならロボ」

「ああ……っておい!!」

フォウの呼び声にも応えずに颯爽と駆けだした。

「なんなんだ……？ いったい……」

まあここで考え込んでも仕方がない。シヨウゴのところへいこう。そう思ってフォウはシヨウゴのいる方へと向かった。

思い込みの激しい人（後書き）

作：さて、こんな感じになりましたがどうでしょうか

シヨ：何か意見があつたらドンドン書いてくれ。作者が凹むから

作：お前・・・最悪だな

シヨ：いいじゃねーか。批判が来るってことはそれだけ改善の余地があるってことで

作：まあ前向きに考えればそんな感じにも思えんでもないが・・・

シヨ：そんなことは置いといて

作：いや置いとくな

シヨ：次回は？

作：・・・まあ一応はあれだ。呼んだニヤル子さん達の相手とか

シヨ：次回の更新もこれくらい早くできるように頑張りますので皆様もどうかお付き合ってください

作：後、放置してたブログを再開したんでよかつたらそちらもどうぞ。作者プロフィールからいけるんで

シヨ：まあ更新速度は不定期でその日にあったことを適当に書き連ねてるだけのよくわからない代物だが

作：すべて事実だから何も言えねえ・・・

シヨ：こんな感じですが次回もよろしくお願いします！

クトゥルー神話・・・暗っ！！（前書き）

作：期日を軽く一週間オーバー・・・マジすんません

シヨ：お前そればつかだな

作：面目ない……。今回はクトゥルー神話関係の書籍を読んで・・・心が折れた・・・

シヨ：まあそれが売りだろ？

作：まあそうなんだが・・・

シヨ：というわけで今回のサブタイは作者の気持ちです。では、本編をどうぞ！

クトゥルー神話・・・暗っ！！

さて、キチガイもお星様にし何故か？マークを頭の上に飛ばしているフォウを回収して両腕にニヤル子とクー子、背中にはアルをぶら下げながら俺の家（修練の門）に帰る。

ニヤル子とクー子の二人に約束した飯を用意する。その間、二人はこの空間に大はしゃぎしている。

「飯できたぞ」

呼んでみるが、二人はどんなテンションになったらそうなるのか、バールに見えるものを使って大暴れしていた。何度か声をかけてみるも反応はない。というか聞こえてない。

しよーがないので実力行使で物理的に止めた。なんとなく数百本のフォークを乱れ投げして。

「わ、私たちがやられるとは・・・」

「シヨウゴ・・・人間？」

首根っこを掴んで引きずっていると、二人は俺にそう聞いてくる。

「一応・・・生物学的に見たら人間・・・のはず」

最近自分のスペックに関して疑問を思うようになってきた。

とりあえずそのことは置いておいて、冷めないうちに飯を食べることにする。

「おいしーですねー!!」

「・・・!!」

がつがつと少女らしからぬ男顔負けの豪快さで次々と机の上の食べ物
を二人は平らげていく。いつもの癖（某騎士王とか蒼髪の魔法使
い）で多く作りすぎたかと思ったが、どうやらそれは杞憂のようだ
った。

それから1時間後・・・

「ふいっ・・・美味でしたねぇ・・・」

「うん・・・」

デザートまできれいに平らげ二人は満腹な様子。本当にシャルロ
ットといいリアといいこの二人といい・・・何処にあんな自分の体
積以上の食べ物詰め込めるのだろうか・・・。

「じゃ、ぼちぼちお互いについて自己紹介といこうや」

さつきは簡略な自己紹介だけだったし、フォウも居なかったのでお
互いもつと詳しく話し合おうぜ！みたいなことになった。

俺の方からはここがハルケギニアという地球とは全く関係のない・
・と思われる異世界であること。この世界には魔法と呼ばれる技術
があり、それを使える貴族・王族により統治されてること。大体内
世ヨーロッパ辺りの文化レベルであること等々を話した。

で、二人から聞いたのは、まずクトゥルー神話の邪神群は実在する
こと。それらは一体ではなく人種・・・例えばニャルラトホテプ星
人のように無数にいること。クトゥルー神話はその邪神群の中の一
体が実際にラブリフト御大に会いに行つて作られた大方真実なも
のであること。二人は宇宙小学校の生徒であること。いつも通り？
教室で暴れまわっているとクー子の目の前に扉が現れて、それに二

ヤル子ともども巻き込まれこちらに……ということらしい。

そんな紹介を終え、邪神のお二人は、

「へえ、これが魔法ですか……」

「面白い……」

ちょうど興味を持った魔法を俺が実践していた。まあ本格的なのではなく人魂見たいのを作ったり、指先から小さい噴水を発生させたり、大人のこぶし大の氷を作ったりとごくごく簡単なものであるが、非常識の塊とも言えるニヤル子とクー子であるが、魔法は邪神の中でもフィクションとかそういうものらしい。似たようなことができるのにな。

「とまあ俺とかは例外だけど、基本的にはマント付けて偉そうにしてる奴が使うのがこういうの。後、一般的には杖がないと使えない」
出していた炎やらを消しながら二人に言う。

「そうですか……ねえシヨウゴさん」

「なんだ？」

顎に手を当て何か考えながらニヤル子がつ。

「こっちにもうちよつといてもよろしいですか？」

「ん？ いやまあお前が大丈夫ならいいが……学校は？」

「サボ……ゴホンゴホン、もとい休暇です、バカンスです！」

「ごめん、そこまで言ったらバレバレだから。素直にサボると言え
ばいいと思う」

「では学校をサボりたいのでいてもいいですか？」
清々しいほど大っぴらにニヤル子は宣言した。

「・・・まあいいと思うよ？ただ自己責任だから俺のせいとかにす
るなよ？」

「ありがとうございます！！」
そう言つて俺に跳んで抱きいてきた。

「あぶっ！いきなり抱きつくなよ・・・」
周りの女性陣で慣れてなかったらヤバかったぞ。主に俺の後頭部が。

「わたしも残る」
ニヤル子とじゃれ合っているといつの間にか俺の右腕を抱きこむよ
うにしているクー子がそう言う。

「お前も？」

「だめ・・・？」
瞳をウルウルさせながら上目遣いで言われたら・・・

「いいよ」
断れるわけがないさ。うん。

「ええい！さつきから抱きつきすぎじゃー！！」
紅茶を優雅に飲んでいたはずのアルがこっちに跳んでくる。

「別にいいじゃないですかー。ほら、シヨウゴさんも嫌がってないですし」

「（こくこく）」

「そう言う問題ではない！というかシヨウゴもなんとか言ったらどうじゃー！」

「あゝ・・・人肌は温かくて気持ちいいですよ？」

「ちょうど中也肌寒い時期だし。クー子とか特にあつたかい。寝るとき湯たんぽ代わりになりそうだ。」

「シヨウゴが望むなら・・・」

「って声にも出してないのに何言ってるの!？」

「乙女の直感」
インスピレーション

「ぽ・・・とか口で言わなくていいから！あざとすぎ！というか表情ぜんぜん変わってないぞ！」

頬に手を当てて表情に変化のないクー子。この子は・・・まったく。いつの間にか離れていたニヤル子とアルはガチバトルをやっている。お互い本気でやりすぎだろ。

俺は二人のことをクー子に頼み、今回まだ一度もしやべってないフオウのところへ向かう。帰るときからだったがいまだに何か考え込んでいる。

「お前は大丈夫か？知恵熱とかで倒れないだろうな？」

「ああ・・・大丈夫だ」

どう見ても大丈夫とは思えないから声をかけたんだが・・・。

「なんか言われたりしたのか？」

こう・・・小学生的に言えば『やーいお前のかーちゃんデーベースー』とかそういう感じに悪口を・・・。

「いや、いきなりダーリン呼ばわりされた」

エ？

「そこんとこ詳しく」

で説明されたのを聞き、第一に思ったこと・・・、

「マジすんませんでした」

まさか爆散した一部が飛んでいくとは・・・元の原因である俺にとつては頭がいたい・・・。

「いや、それはいいんだが・・・」

「やっぱり悩んでんのは告白されたからか？」

いくら皆から鈍いといわれようとこれくらいのこととはわかる。

「ああ。それにジエネ・・・何とかっていうのも」

「ジエネ・・・ジエネレーターのことか？」

「それだ」

以外に機械とかには弱いのかな？

「あの娘は世間一般では機械人形に分類される」
あのキチガイも技術だけ見れば稀代の天才だからな。あれだけのものが作れるのは早々おらんだろ・・・あれで性格もよかつたらなあ・・・。

「やはりか」

「ん？知ってたのか？」

「蹴ったとき異常に硬かったし、抱えたときの重さ、あとなんか駆動音みたいなのも聞こえたからな」

「ああ・・・」

こいつくらいなら駆動音くらい聞き分けられる・・・のか？
まあいいや。

「で、最初の問いに戻ると・・・」

「ああ・・・」

でもなあ・・・俺も前世から合わせて一度もそういうことがないしなあ・・・。

「すまん・・・力になれそうにない」

ここは素直に頭を下げる。

「・・・いや、これは俺が解決すべき問題だからな。気にしないでいい」

「そうか」

「それよりも、あいつらのところに行ったほうがいいんじゃないのか？」

「え？」

指差されたほうを見ると・・・クー子まで参戦してさらに激しさ増したバトルに・・・って！

「お前まで何参加してんだ！？」

俺はダッシュして三人の下へ向かった。

シヨウゴの後姿を見てフォウは思う。

「あいつらも苦労するだろうな・・・」

クトゥルー神話・・・暗っ！！（後書き）

作：はじめに 月光閃火様 ご感想ありがとうございます

シヨ：フォウがそう見えるのはたぶん見間違いではありません

作：エルザ出すときにこうしようかなって即効で決めましたし

シヨ：まあくつつくかどうかは神（作者）のみぞしる・・・といったところでしょうか

作：はっはっは・・・まあ基本行き当たりばったりというか2、3話先あたりまでしか考えてないし。しかもぼんやりとしか

シヨ：本当に大まかな流れだけではできてるのにな

作：いやあ・・・文章を書くのは難しい・・・

シヨ：それは誰もが思ふことだし精進あるのみ

作：そだな

シヨ：というわけで次回をお楽しみに！

悩み（前書き）

作：ども

シヨ：今回も微妙に遅い。短い。薄い

作：うぐっ・・・なんでもないファンタジー的日常を書くのがこんなにむずいとは・・・

シヨ：まあそんなどうでもいいことは放っておいて、本編をどうぞ！

悩み

「ふう……」

額に流れた汗を拭う。最近修練の門に来る（住む）人が増えてきたので、時間の流れを速くした空間（指定された物体（人）は除外）にある畑や農場の拡張を行い、ひと段落がついた。

広さにして……多分北海道位の大きさなので全員が自重せずに全力で取り組んだ。おかげで1時間とかからずに済んだ。主に頑張ったのはギーシュとマチルダ、俺の土関係の魔法が使える奴らだが。他の奴らはこんな感じ

シャルロット……シルフィードやバハムートと連携し、建物や柵などに使う材木運び

リア……材木の伐採

アル……柵などの作成

ニヤル子&クー子……腰に犁のついたロープを付け走りまわる

俺&フォウ……種まきやら牛・羊の誘導

ギーシュ&マチルダ……錬金による土壌の改善

ギーシュとマチルダはぶっ倒れた。きつと精神力が切れたんだと思う。アルはなんか色々作ってる。ブリキのおもちゃみたいな。きつと露店とかで売ったら子供たちが寄ってきそうな位に出来がいい。シャルロットとニヤル子、クー子は……模擬戦をしている。けっしてなんかガチバトルみたいなものではない、断じて。

フォウはのんびり木陰で休憩中。そんでもってリアは……あれ？

「……」

何か悩みがある様子。アイツ一人で抱え込んで負のスパイラルにはまるからなあ……。うむ、ここは。

「リア」

「あ・・・なんですか？シヨウゴ」

「遊びに行くぞ」

「は？」

俺の突拍子のない言葉にびっくりしているリアの手を引き、俺はトリストニアに向かった。

リアの手を引きながら商店街を回る。

「おっちゃんこれくれ」

「まいど」

途中美味そうなものがあれば買って、二人で食べ歩いたり

「嬢ちゃんたち可愛いねえ、一緒にあそばねーか？」

「俺は男じゃボケが！！」

ナンパしてくる男どもをせん滅したり、

「リア射的下手糞だな」

「五月蠅いです！ならシヨウゴがやって見せてください！」

「まかせろ」

縁日でもないのにやってる射的で遊んだりした。

昼過ぎ、飯も食い、ちよつと街中から外れた広場。その木陰に俺らは並んで腰を降ろす。

「ふう・・・色々回ったがどうだった？」

「どう・・・とは？」

俺の問いにリアは首をかしげる。

「面白かったか？もしくは楽しかったか？」

「ええ・・・始めは訳がわからない状態でしたが、途中からは楽しかったですよ」

リアは笑みを浮かべながらそう言った。

「そつか。それなら良かった」

「??？」

「お前なんか悩んでそうだったからな。パーっと楽しんで息抜きでもしないとやっとなれんぞ？」

「・・・」

俺はそう言つと寝転がる。リアは黙つて俺を見る。

それからどのくらい時が流れたか……。二人でぼーっとしている
と、

「あ、シヨウゴがいるぞ！」

「ほんとだ！」

「シヨウゴ兄ちゃん！」

そんな声が聞こえたので身体を起こすと、見覚えのある子供が三人
こちらに向かつてきていた。

「どうした？ガキども」

「今日の仕事終わったから練習しようと思って」

そう言つて脇に抱えた前に俺があげたサッカーボールを見せる。

「そうか。今日は俺も暇だし……。やるか？」

「いいの！」

「おう！」

俺は立ち上がり、嬉しそうに笑っている三人に返事をする。

「じゃ、いくぞ！」

「「じゃ〜ね〜!!」」

夕方になり、三人は帰っていた。あいつらもちやんと練習していたみたいで、結構上手くなっていた。これは俺も練習せんとやばげかね？

そんなことを思っていると、リアが何かほほえましいものを見る目で俺を見ていた。

「どうした？」

「いえ、あの子供らと遊んでいるショウゴはとても楽しそうでしたね」

「まあ・・・ガキは嫌いじゃないし、サッカーをするのは好きだからな」

でも俺とかフオウとかだけでやると少林サッカー的なものになりかねるので、ああいう子らとやるのが楽しい。

「そんなあなたを見ていたら悩んでいたこともすっきりしました」

「そうか？ならよかったよ」

うん。今日一日連れまわした甲斐があった・・・まあ午後からは俺らのサッカーしてる姿しか見てないと思うが。

「では帰りましょう。早くショウゴの作ったご飯が食べたいです」

「お、そうか？そう言ってもらえると作りがいがあるな。なんかりクエストとかあるか？」

「いえ、あなたが作ってくれるならば何でも。私は好き嫌いとかありませんから」

「そかそか。じゃー今日は・・・」

そんなことを話しながらリアと俺は並んで家に帰った。

「わたしが悩んでいたのはあなたのことなんですよ？ ショウゴ」

悩み（後書き）

作：今回はリア編といったところです

シヨ：最後の締めのあるなに？ねえなに？

作：落ちが思い浮かばなかったので無理やりだね♪

シヨ：キモ・・・

作：うつさい！さて次回ですが・・・

シヨ：今回みたいな日常をするか本編を進めるか・・・どちらがいいでしょうか

作：日常の方であればキャラ明記のうえでよろしくです。主人公じやなくてもいいですよ？カイトとか放置気味ですしね。あの辺でもいいです

シヨ：期限は1週間です

作：ちなみに何もなかった場合は本編が進みます

シヨ：それでは次回をお楽しみに！

作：活動報告に最近ハマったことにかんして書いてるんで、それに
ついてコメントしてくれると嬉しいです

貴様ら・・・俺を怒らせてそんなに死にたいか！（前書き）

作…ども

シヨ…今回は感想がなかったので本編の続きです

作…それではどうぞ

貴様ら・・・俺を怒らせてそんなに死にたいか！

ある程度事業の方も軌道に乗ってきた今日この頃、俺はラグドリアン湖に来ている。

といつてもここが目的地ではない。

「綺麗な湖だなあ」

俺は隣にいるシャルロットに向けてそう言つと、コクコクと頷いて答える。

そう、今回はシャルロットの実家？に向かっているのだ。理由はシャルロットのお母さんの容態を見て治せそうなら治すためである。

「でも・・・水かさが増えている」

シャルロットは周囲を見ながらそう言う。確かに家とか浸水の恐れあり。みたいな感じだが・・・

「なんかあつたんかねえ？」

理由もわからんしどうしようもない。

「ラグドリアン湖には水の精霊がいる」

ふむ・・・ということは水精霊に対して何らかのことをしたからこうなった、と見るべきか。

それがこの奴らがやったのか、はたまた別のところの奴がやったのかは分らんけど。

「ま、暇があれば寄ろう」

というわけでシャルロットの家へレッツゴー！

「といたかつたんだがなあ」

周りにはみなりと装備と育ちの悪い人達が数十名。後なんかロープを被った奴一人。なんか人の気配ではないので偏在とかスレイプニルとかそういうのだろう。

で、さらに俺の後ろには商人らしき人。この人達に襲われてたっばい人。

ここまで逃げてきて追い詰められたらしい。そんな気配を察知したから俺はわざわざここにきている。シャルロットを先に行かせて。

「さて、お前ら覚悟はいいか？」

「ああ！？何言ってる「ま、答えは聞いてない」げぶらっ！」
俺の言葉に応えようとした奴を殴り飛ばす。

「「「「「お頭！！」」」」」

自分たちの頭が殴り飛ばされたのを見て叫ぶ他の奴ら。

「ほらほら次いくよ」

そう言っただけで俺はドンドン殴り飛ばしていった・・・。

「で？お前さんはなんなん？」

残った一人の人でないもの。ロープを深くかぶって顔は見えないが、体つきからして女だろう。

「ふふっ・・・」

意味深な笑いをするローブ女。

「で？お前さんは？」

奴が笑ったのと同じタイミングで襲いかかってきた商人っぽいのもうやらグルだったみたいだ。

「ハジケなさい」

女がそう言った瞬間、商人っぽいのが爆発した。

「バカね……。あの人形に関わ「誰が人形だつて？」っ！？」
後ろに立ち首にナイフを添える。

「ま、お前さんは本人じゃないから脅して聞こうとしても無駄だな。消え失せろ」

「あの子がどうなっているかもわからないのに？」

目の前の首がちょん切れそうな奴はそう言うのを聞いてぎりぎりナイフを止める。

「何が言いたい？」

「ふふっ……。私は罔。あなたと一緒にいたあの人形は回収させてもらったわ。どうしても取り返したいならアーハンブラ城に「わかった。お前は用済みだ」

行き先さえわかればこいつは用済みだ。一度帰って準備しよう……。

「そんなに重装備でなにに行くんですか!？」
帰って貯め込んでいた装備やアイテムを回収していると、リア達がやってきた。

「なに・・・ってそんなの決まってるだろ？」

ジャキン、とバズーカ（ばい）物に弾を込め、背中に背負う。

現在の装備は城でも切れる鋼系を操る為に必要なグローブ、戦艦くらいなら一撃で落とせるバズーカ、妖刀と呼ばれる程の切れ味を持つ刀二本、この前作った拳銃（片方はクー子召喚の反動で大破）。あとは自分の身。これだけあれば・・・

「ガリアをちよつと滅ぼしてくるだけさ」

余裕で一国を落とせる。

「ちよつ!! あーた何言ってるんですかつ!？」

「・・・なんでがりあ？を落とすの？」

ニヤル子とクー子に両腕を掴まれ止められる。

「そうですよ! 少しは事情を話してください!」

「そうじゃ! 妾たちにもわかるよう事情を説明せい!」

後ろからリアが、前からはアルが抱きつくようにして止める。

「皆の言うとおり、俺らにもわかるように説明してくれ」
最後にフォウが現れそう言った。

「そうか・・・」

「しかしのう・・・」

「さすがに・・・」

「国を落とすのは・・・」

「・・・どうかと思う」

全員がつながるようにそう言った。めっちゃ息があってんな。

「しょうがない・・・ヴェルサルテイル宮殿を吹き飛ば「それもだめです!!」え・・・」

リアにダメの言われた・・・。なんでだよ。

「えゝ、じゃありません! シャルロットを助けるだけで十分でしょうに」

そうは言ってもなあ・・・。

「家族攫われたらそれ相応の報いを受けてもらわんと・・・」
俺の身内に手を出したらどうなるか・・・教えねばなるまい?

「やりすぎですから。そもそも一つの国が落ちたらこの世界が大混乱に陥りますよ? 関係のない民にまで影響を与えるのは許せません」
むう・・・それもそうか。

「わかった。じゃあちよつと連れ戻しにいつてくるから皆は「いきますよ?」は?」

途中のリアの言葉に俺は呆けた声を出す。

「人を攫うような輩ですよ？どんな罠があるかわかりません。それならば少しでも戦力が多いほうがいいでしょう。それにあなたは私のマスターであり家族です。どんな所にも付いていきますよ。それが戦場であるならばなおさら」

目を閉じ、微笑みながら言うリア。

「そうじゃな。妾は汝の魔導書で家族。なら一緒に行くのは当然であらう？」

ふふん、とでもいいそうな得意げな顔でいうアル。

「わたしだって一応召喚された身ですし？シヨウゴさんのことは好ましいですし一緒に行きますよ。暴れられるのも楽しそうですし・・・なにより人さらいは許せませんしね！」
ガッツポーズをしながらのニヤル子。

「わたしも助けになれるなら・・・頑張る。シヨウゴがいなくなるのもいや」

無表情のように見えて笑っている雰囲気のクー子。

「俺も家族の一員だ。家族を助けるのは当然のことさ」
いつものように軽い感じに言うフォウ。

そうだな・・・。一人で突っ走るのはみんなを信用してないのも一緒だ。なら・・・、

「みんな・・・シャルロットを助けに行く。力を貸してくれ！」

「「「「はい！（おう！）（うむ！）（ん）」「」「」」

閑話：前に書いてて忘れてたさ・・・（前書き）

作：執筆中小説のなかを整理してる途中見つけたんで投稿します

シヨ：本編の続きじゃないんで注意してください

閑話：前に書いてて忘れてたさ・・・

それは、俺・リア・アル・フォウの4人で宣伝ビラを配ってる時に起きた。

「貴様！私のマントに汚れがついてしまったではないか！これをどうしてくれる！」

「す、すみません！どうか命だけは・・・」

その声の方を見ると典型的な貴族の容姿、つまり豚。と、子供を庇う様に抱いて泣きながら許しをこう母子の姿があった。どうやら子供が豚のマントに汚れを付けてしまったらしい。

「シヨウゴ」

リアからの言葉。それだけで何をしようとしてるのが理解できた。さらに他の二人も何も言わないだけで怒気がよく伝わってきた。

「まあ、当たり前のことか・・・よし！なら俺の作戦を聞け」と言うことで作戦を説明、更に必要な道具を創り出し渡す。

「準備はいいか？3・2・1・・・ゲーヘン！！」

俺の合図で走りだすのは言った本人の俺とフォウ。ちなみに豚から見て俺達は背中の方にいるので気付かれてない。

「ああーすみません、あしがすべりましたああー！！」

棒読みのセリフと共に俺とフォウによって足を蹴り飛ばす。

「ぐはっ！！」

いきなり蹴られたことによって膝がつくんの要領で倒れる貴族。仰

向けになったところで、

「A定食お待ちじゃ!!」

身体強化の魔法で空に跳んだアルが豚の顔面にトレイをぶつける。ちなみにA定食とか言いながらトレイには何も載ってはいない。

「ぶほっ!」

それで後頭部を強く打ち付ける豚。今意識があるのかどうかは怪しい。

で最後に、

「討ち取りました!!」

リアが模造刀を叩きつける・・・鳩尾に。完璧にオーバーキルだ。もうチョイ他の場所を狙ってほしかった。豚から汚物が出てきてるから。

だからそんな清々しい笑顔で『いい仕事やった』みたいな顔するな。全然よくないから、最悪の締めだったから。

まあそのことについては後で言及するとして、今は呆然としているさっきの母子の元へ向かう。

「大丈夫か?」

話しかけると、まだ母親の方は現実に御帰還されていないらしく、反応はなく、

「うん!お兄ちゃん、ありがとう!」

子供の方が元気よく返事をした。

「それはよかった。まあこれからは気を付けてな」
頭を撫でながら言ってやり、ついでに宣伝ビラを1枚渡して、みんなの元へと向かう。

「いや、うまく行ったな」

フォウが悪戯を成功させた子供のように笑いながら俺の肩をたたく。

「うむ、あのような輩を叩きのめすのは実に気持ちいい」
アルもまた同じように笑いつつ隣に寄ってくる。

「そうですね、人助けをするのは気持ちがいいことです」
とオーバーキルに使った模造刀を俺に返しつつ、リアも言う。

「まあ、そりや気持ちのいいことなのは賛成する。うまくいつて気持ちもいい。だが、リア。もうチョイ考えて人を叩け。鳩尾殴つたら汚い終わり方になるのは丸わかりじゃねえか！」
バシッ、とリアの頭にツツコミを入れる。

「す、すみません・・・」

「いや、怒ってるわけではないから。次からは気をつけるよってことだ」

まあ次なんてあつてほしくはないが。

「そ、そうですね。次回からは気を付けます！」
いや、うん。その心意気はいいんだけどさ。次があるとは限らんかな？ 多分・・・。

まあいいや。これからのことなんてどうにでもなる。

「じゃ、ビラ配り再開するか」
そう全員に声をかけ、また俺達は周りの人達に配りながら歩き始めた。

閑話：前に書いてて忘れてたさ・・・（後書き）

作：前回ので書いてませんでした、今週中にゼロ魔一期分終わらせにいきたいと思います

これは・・・嘘だろ？（前書き）

作：というわけで更新

シヨ：てか本当に終わるのか？ゼロ魔一期分のとこ

作：一応山場が済めば即タルブ戦！みたいな感じだし

シヨ：てことはカイトらはいま宝探し中か？

作：そう。別にカイト強いし、ギーシュは鍛えてあるしシャルロットいなくても話はどうかなるだろうと思って

シヨ：ふん

作：詳しく知りたい方は言うてください。早急に書き上げますんで

シヨ：まあそれは置いておいて・・・本編をどうぞ！

これは・・・嘘だろ？

てな訳でやってきましたアーハンブラ城。とりあえず他のみんなとは別れて一人ダンジョンのマッピング。ついでに敵の戦力調査。できれば何事もなくシャルロットを攫えるといいけど多分無理だろうから外と中とで同時に攻めてみよう。

まず、外にはある程度の兵士。たしかこの城は打ち捨てられたも同然だから少し警備の量がおかしい気もする。

とりあえず外の詰め所にはどこぞの貴族がいるみたいだからここに何かがあるのは間違いない。ちゃんと約束守ってくれるといいんだがな・・・。

続いて中に入る。なんか入口のところに結界？みたいなのがあつて、ついでにそこら中から罠の気配が。ご丁寧に人間の手で作られたものから魔法によって作られたものまで。まあ、この程度なら簡単に察知も解除もできるのでサクサク行こう。

そこら中の警邏の数がだるい。確実に潰しにかかってきてるな。まあこの数を俺一人で相手するなら凄くだるいというかヤバいかもしれんのだが、別に相手するわけではなくスルーすればいいので関係なし。さて、次行ってみよう。

適当に扉を開けると厨房にたどり着く。置いてある料理を食べてみるが、コックが作ったものではないみたいだ。多分当番制とかじゃ

んけんで負けたとかで下っ端の兵士が作ったんだろう・・・男料理過ぎてなんとも言えん味だ。何となくこういうのを放置するのは俺の性分に反すると言うかむかつくのでササッと味を整えてから出る時間があれば見た目も良くしたんだが仕方ない。ついでにシャルロットと彼女のお母さんの為にサンドイッチも作っていく。

その後、次々と扉を開けていくもあるのは下っ端の部屋だったり、執務室だったり、メイドの詰め所だったりして当たりがなかなか出てこない。

三十分ぐらいしてから魔法とかの罾の気配が強いところに行けばいいんじゃない？とか思ったりしてorzったのは別のお話。

そしてようやく発見。どうして権力者は高いところが好きなのか・・・。まあ朝焼けとか夕焼け見るには高いところが一番なんだけどさ。

まあそんなことは置いて。罾を解除し中に入る。そこにはやつれた女性が一人ベッドで眠っていた。慎重に近づいてみる。監視系の魔法も魔法具も全部俺の姿が映ることがないので糸などを警戒して一步步進む。まあどうやら大丈夫だったみたいだが。

女性の顔を見るとどこことなくシャルロットに似てる気がした。薬のせいかわからないがやつれてしまってるのでわかりづらいが。とりあえず、当初の目的である病気の治療を今やっておくことに。なかなか厄介というか人間の薬じゃねえ効力を発揮しているみたいだが、この程度ならば大丈夫だ。

「毒を消し去れ・・・リカバー」

元の術に指向性を持たせ、魔力を馬鹿みたいに消費（具体的には全体の5割程度）し無理やり強化して術をかける。もっかい見れば正

常に戻っていることがわかった。これで一つ目の任務はコンプリート。

この人放置でシャルロットを捜すわけにもいかんし・・・というより確実にヤバいだろう。一緒にいないっていう時点で何か頭の後ろでちりちりという嫌な感じが拭えない。一度皆に預けてこよう。そう思っでシャルロットのお母さん（仮）を背負う。さて行くとしてう。

自分の周りに認識誤認の結界を張りながら駆けていく。ここに来るまでと治療で魔力を使いすぎた。戦うには全く支障はないのだが、隠密に徹するのは魔力がないとどうしようもない。というわけでさっさと抜け出して行きたかったのだが・・・

「ふむ・・・今までまったく姿が見えんとは・・・奇怪な術を使ってるな、蛮族よ」

城を出たところで何かいきなりそんなことを言われた。

周りの兵士もこいつ何言ってるんだ？みたいな視線を俺に声をかけた男性に向けている。まあ周りから見れば何も無い空間に話しかけているのだからそれも当然のことだろう。

しかし・・・何故ばれた。

そう思ったら、

「なに、お前が連れてきている女性には魔法具を付けていてな。それのおかげで位置が特定できるのだよ」

と懇切丁寧にそんなことをのたまってくれた。周りに魔法の気配が多すぎて分かりづらいが、集中すれば何かがついているのがわかる。それを指向性を持たせた魔力の塊で破壊。だがこれでどうしようもなくなつた。今はっているのは相手の認識を俺がいないと誤認させ

るだけで、何かがあるとわかっていれば普通にばれる。まあばれないから普通は使っているんだが。ちなみに周りの兵士の皆さんはまったくこの男を信用してないのか俺の姿は見えてない様子。これは好都合。

試しに森の中に逃げる。けれども普通についてこられた。まあ背負っている女性にあまり負担をかけるわけにはいかんからそこまでのスピードがないので当然とも言えるのだが。

とはいってもこのままでは埒が明かない。ので、一瞬相手から見えなくなる位置にある木の後ろに隠れ、影分身を十体ほど出して逃げてみる。

が、敵さんは何のためらいもなく俺に付いてくる。こりやますます人間とは思えんなあ・・・。

これ以上は無駄だろうから迎え撃つことに。止まると一拍遅れて敵さんがやってくる。

「お前、俺にあの人いないってわかってたか？」
そう言っただけは後ろに背負った女性に変化した影分身を消す。

「いや。お前の気配はよくわかったが、あの女性の気配は皆無にだったのだな。どのお前が背負っているかはわからなかったよ」
ふむ・・・どうやらどうにか誤魔化したようだ。ちなみに俺の気配が隠れられなかったのは、全部の女性影分身と本人にさっきの結果を上乗せしたらなくなったためである。

「で？それがわかってるお前は俺を倒せると思ってるのか？」
結局、あの物騒な装備はほとんど没収され唯一残った妖刀の一振り

である『天ノ羽々斬』を構える。十束程度の長さの刀で、詳しい内容は面倒なので端折るが、日本神話上においてヤマタノオロチをぶった切った刀である。

「それはお前の方だろう。みたところ魔力はない。おとなしく捕まるといい。争いは好まんなのでな」

特に何の構えもとらずにいる・・・ように見えたが何やら薄い壁のようなものが魔力でできているような気がする。

「どんな効果かはやってみればわかるか・・・。それじゃ、行くぞ」
特に何の強化も行わず、持ち前の身体能力のみで突撃。隙だらけのその体に一閃を叩き込もうとしたが、

「うおっ！」

柔らかいものにぶつかったかと思えば、打ちこんだのと同じ位の力で弾き飛ばされる。

「こんな魔法は聞いたことないな・・・」

空中で体勢を整える。今までにない新鮮な防御だった。あれ面白いな・・・。

「貴様、本当にただの蛮族か？危うく反射を破られるところだったぞ」

カウンター・・・？あれって確か・・・。

「なあ、アンタもしかしてエルフとか言うやつ？」

「ああそうだ。我はエルフのビダーシャルだ」

帽子をとりながら聞いてもない名前まで教えてくれた。典型的なフアンタジー漫画とかに出てくるような姿だな。

「カウンター・・・確か“あらゆる攻撃を跳ね返す先住魔法”だったか？」

「そうだ。貴様ではどうしようもない。あきらめろ。先ほど程度の攻撃では揺らぎはしない」
む・・・そこまで言われるとき・・・。

「いいぜ、その言葉忘れんなよ？」

「ふん、石に潜む精霊よその力を持つて我に仇なす敵を討て」
ビダーシャルはそう言って手を振りかざす。それに操られるように周りの石が浮き上がり、俺に向かって飛んでくる。

スピードはそこまでない。が、弾幕量の多さにため息が出る。それから全部叩き落としていくもすぐに浮き上がり戻ってくる。めんどいな・・・。

「剣技：円月衝」

その場でぐるっと一回転して迫りくる石のつぶてを弾き飛ばす。そしてビダーシャルへとダッシュ！

奴さんはそれでも焦りの一つも見せない。蛮族だからと侮っているからだろうし、カウンターに絶対の自信があるからだろう。まあ俺に対してそれはアウトだが。

「剣技：滅魔閃」

俺が刀を横なぎに振るう。奴のカウンターと精霊との契約もろともを断ち切る。そのことに驚きの表情を浮かべている奴に俺は

峰打ちで首筋を打った。

——追連——

昏倒したビダーシャルを木の根元に寝かせ、一度皆のところに向かうとしたら、

『シヨウゴ！大変です！』

リアから念話が来た。

「どうしたんだ一体」

随分と焦ってる感じなんだが・・・。

『簡潔に言います。シャルロットは・・・』

リアがシャルロットの名前を出したと同時に

ズドン！！！！！！！！！！

人が使うような大きさではない鉄球が飛んできた。咄嗟に刀で真つ二つにして難を逃れたが、何処から何によって飛んできたのかわからない。

その答えはすぐに判明した。視力を強化しなくとも分かるほど大きな身体を持つ騎士甲冑を纏った巨人が遠くから歩いてくる。その大きな身体には足の先からビダーシャルが使っていたカウンターが使われている。背に背負っているその体に見合った剣も恐ろしいだろう。

だが、そんなことは関係ない。俺が一番心から呆然とした理由は一つ。

『彼女が兵器として使われています』
巨人の頭の中に見えるシャルロットの姿だった。

これは・・・嘘だろ？（後書き）

作：今回は技の説明をします。ひと段落したら全部一度設定としての方がいいですかね？

剣技：円月衝・・・ぐるっと一回転して疑似竜巻みたいなのを起こす。基本的に防御とか乱戦の時に使う。わかりやすく言えば、スマ○ラのリン○の回転切りとかワンピー○の○口の竜巻とか

剣技：滅魔閃・・・魔に属するもの（魔法やら契約のパス、霊の類等々）を斬りつける技。前に『斬魔閃 二の太刀をつかってほしい』と言われたんでウイキ先生でみて自分でアレンジして使ってみました・・・どうですかね？

女を怒らせるとマジで怖え・・・（前書き）

作：さて更新

シヨ：なかなか速いな

作：今週中に終わるつもりだからな。毎日更新しないと

シヨ：ちなみにゼロ魔一期が終わったらどうなるんだ？

作・・・それでは本編をどうぞ！！

シヨ：・・・

女を怒らせるとマジで怖え・・・

とりあえずあの巨人がアーハンブラ城の広場で止まったのをみてから皆と合流。そこには・・・

「ようやくきたのである」

「遅い口ボ」

ウエストとエルザがいた。

二人がここにいる理由を聞くと、今まであの巨人——ヨルムンガルドを製作していたのだが、その試作機の動力としてメイジ——つまりさっきのシャルロット——を使うと言われた。それに対してウエストは自分の美学に反するとかで離反。あいつらに敵対するであろう俺達と合流・・・というわけらしい。

ちなみに何で動力に関して知らないのか聞いたところ

「吾輩は基本的にあの巨体を人間の動きをするための開発を行っていたため知らなかったのである。こちらの魔法というものもわかってはいないのもあるのであるが」

とりあえず、シャルロットをあのままにするのは良くない。だが、魔力が枯渇すれば死んでしまうから短期決戦で決めなくてはならな

い。シャルロットを傷つけず、あれに動く暇を与えず吹き飛ばす・
・。難しい。

しかし、どうにかしなくてはなるまい。

「とりあえず皆は周りの兵士の相手をよろしく頼む。シャルロットは俺がどうにかするから」

人数は圧倒的にこちらが不利ではあるが、俺を含め全員にかしら対軍への攻撃手段を持っているので楽に済むだろう。

「妾はシヨウゴについて行く。魔導書じゃからな。魔術師になれば多少は魔力が回復するじやろう」

ふむ、それもそうだな。というわけでアルは俺と一緒に。

「他の皆は大丈夫だな？」

「ええ。シヨウゴもご武運を」
自身の愛剣を携えるリア。

「ふっふっふ。腕が鳴りますね」

黒い笑みを浮かべながら腕をブンブン振り回しているニャル子。

「・・・頑張る」

ぐっと拳を握り心なしが周りの温度を上げるクー子。

「こちらは任せておけ」

屈伸などの準備運動で身体各部を確認するフォウ

「ダーリンの為ロボ。頑張るロボ」

何処からか飛来した棺桶から取り出した大砲を担ぐエルザ。

ちなみにウェストはここにいると邪魔なんで修練の門に叩き落とし

ておいた。

「じゃ、行くぞ！」

『おう！！』

初魔術師モードになって空を飛ぶ。下の方では光の奔流や炎、緑色の魔力光等々が見える。それに伴って兵士たちの絶叫も……。皆飛ばし過ぎ……。

下の出来事に頬をひきつらせながらもヨルムンガルドへとたどり着く。だが……。

「どうすんだ……？」

今は魔力がある程度回復しているので結果を張ってばれないようにしているが……。策が思いつかん……。

「ふむ……動力部を一撃で吹き飛ばすかシャルロットを助けるかの二択であるじゃろうが……。」

俺の頭の上に乗っかってるちびっこになったアルは唸る。まあ気持ちかわからんでもない。

多分動力部は人の心臓辺り。シャルロットがいるのは頭部。だが、この二点の装甲の厚さとカウンターや硬化などの魔法が半端ないのだ。下手な攻撃は通らない。更にウェストが言うには、あれの動作は人間並みに俊敏らしい。あの野郎……無駄に高性能にしゃがつ

て。

魔法も物理も効きづらい。一撃はさすがに無理か……？なら削っていくしかないか……。

やりたくはないが今のところこれしか策はない。できる限り早めにケリをつけるしかない。

「アル、援護頼むぞ」

「任せよ。汝には指一本触れさせはせぬ」

そんな心強い言葉に頬を緩ませ、俺はヨルムンガルドに突撃した。

S I D E シャルロット

暗い……。周りは何も見えない。自分が何処にいるのか、上を向いているのか下を向いているのかすらわからない。右も左も何処を見ても同じような闇、闇、闇。次第に身体の中から何かが抜けていくような感覚がする。私は何でここにいるんだろう……。確か母様をショウゴが治せるかとも思っ、屋敷に向かつて……。途中で何か争いの音がするから先に行つて。つて言われたから屋敷に向かつて……。途中目の前がいきなり真っ暗になって……。それから……。

わからない。それになんだが眠くなってきた。次に起きたらショウゴの顔をみれるんだろうか……。

さて困った。アルの魔術の中からバルザイの偃月刀を取り出し、投げつける。そこまで殺傷能力の高くないそれは弾き飛ばされるだけで終わった。

それでこちらに気付いた敵は音速と思える速度で拳を振るう。それをグレイズしながら突撃する。手の中には妖刀天ノ羽々斬を持っている。

「剣技：霞桜」

擦れ違い様に縦に刀を振るう。その後には気で作られた桜の花びらが舞い、それらが小さな隙間へ斬撃となって飛ぶ。それによって振るわれた右腕が落ちた。

が、直線に飛んだ俺に左手の裏拳が飛んでくる。咄嗟に障壁と身体の強化をしてガードを固める。

「ぐっ！！」

対魔能力が高いせいかな障壁は破壊され、威力を少しも落とすことなく俺に襲いかかった。身体は強化してあったのでガードした左腕が折れただけで済んだが・・・ちとヤバイ。魔力もそこまで残ってないので治癒することもできないし、気による回復は戦闘中にできたものじゃない。

相手のラッシュをアルの援護もあってぎりぎりのところで避けつつ斬りかかるが、厚い装甲と片手しか使えず威力が半減しているせいでほとんどダメージが通ってない。

どうすっかなあ・・・と思った矢先、

「ショウゴー！」

ナイスタイミングで皆がやってきた。一度パリィして皆のところまで下がる。

「ナイスタイミングだ！お前ら！」

「シヨウゴさん、左腕どうかしたんですか？」

ニヤル子がブラインと垂れ下っている左腕を見て言う。

「ああ、ちよつと相手の右腕落としたら折られた」

そう言った瞬間、皆・・・というかりア、ニヤル子、クー子から絶対零度を思わせるような殺気が起こる。

「そう・・・ですか」

あのかりアさん？前髪が垂れ下ってて、さながら欧州版貞〇に見えるよ？

「ちよ～～～～とそれは許し難いですねえ・・・」

ニヤル子さん？どこからそんなボールやら手榴弾やらチェーンソーやらを取り出してるんです？

「焼き尽くす・・・この世にその存在の一片も残さない・・・」
ちよっ！！クー子も燃え上がるな！てか物騒すぎるぞ！

「お前ら！あれにシャルロットがまだいることを考慮しての発言だろつな！」

殺気を漏らし続ける三人に向かって俺は言う。

「ええ。大丈夫ですよ？ちゃんとわかってます」

「シャルロットさんには傷を付けたりはしませんよ」

「助けたら・・・消す」

こわっ！！

「では行きましょうか」

「そうですね」

「うん」

俺はそう三人が言つてヨルムンガルドに向かつていくのを見送る。
そして・・・冥福を祈つた。

ケリはすぐについた。魔力放出全開で振るわれる相手の拳をリアが破壊。

私の宇宙CQCエンハンサーとかいう真つ黒な装甲に身を包んだニヤル子が超中型パイルバンカーとかいうのを打ち出し、
クー子がクトウグアの配下と自らが生む炎で足を消し、機動力を奪う。

そして、シャルロットのいる頭部を上空に叩き飛ばした後、残った胴体エクスカリバーに約束された勝利の剣でフィニッシュ。

俺は頭が飛ばされた時に飛んで頭を全力で刀と翼で切り刻み、装甲を削ったところに気を纏わせた拳で穴を開けた。中には椅子に鎖で繋がれたシャルロットが。

鎖を斬り裂き、シャルロットを抱え、脱出。それと同時に頭は地面に落下。クー子がマジになり、宣言道理その存在の一片も残さない程の火力で消し炭にした。

一連の行動を終えた三人は清々しい笑顔だった。

マジ怖え・・・。

女を怒らせるとマジで怖え・・・（後書き）

作：さてシャルロット救出

シヨ：特に何もなくてよかったよ

作：今回はこのお話のエピローグ的なものからタルプ戦にかけて・・・
か、ジヨセフのところへ行くか・・・

シヨ：どっちか決まってるのかよ・・・

作：どっちでもいいんだよなあ。ジヨセフどうしようか・・・

シヨ：どうって？

作：殺すか改心させるか

シヨ：デッド・オア・アライヴだな

作：二極端すぎるかな？

シヨ：さてな

作：みなさん、どちらがいいと思いますか？よければご意見をお願いします。一応期限は明日の夜9時ごろまでとします。

シヨ：来なかった場合は？

作：ガリアは一度放置。後に回す

シヨ：適當すぎるな

作：この作品はそんなもんだ。それでは次回もよろしく願いします！

すでに原型とどめてないんだぜ！（前書き）

作：昨日は更新できなかった・・・

シヨ：そうだな

すでに原型とどめてないんだぜ！

シャルロットは衰弱はしていたが、命に別状はなかった。気を流して治癒速度を底上げしながらシャルロットの屋敷に向かう。ぶつちやけ今から学院に戻ったら真夜中になる。それなら近くで一度休ませて、朝になってから改めて向かった方がよいだろう。

屋敷には執事の人っていて、俺らが連れているシャルロット達を見て部屋を都合してくれた。

「ありがとうございます。もしお二人に何かありましたらシャルル様へ顔向けができませんでした・・・」

「いや、こっちは好きでやったことですし。それよりも、ケガ大丈夫ですか？」

シャルロットのお母さんを攫うときに果敢に兵士に立ち向かったせいでケガをしたみたいで、各部に包帯が巻かれていた。

「ええ、大丈夫です。それより、皆様もお疲れでしょう。お部屋をご用意させていただきましたのでどうぞ」
そう言っただけ俺らを各部屋に案内してくれた。

次の日の朝、起きて広間へ向かうとカイトの分身がいた。

「なんかあったのか？」

そう聞くと、カイトの分身は事情を話し始めた。

その話を簡単に説明すると、こうだ。

お姫さんの命令で絶賛内乱中のアルビオンへGO！理由はラブレター回収の為。魔法衛士隊のワルドとかいうのと、ギーシュが同行。ちなみにギーシュは姫さんに気にいられたいが為に。まあ始め似たようなこと言ってたししょうがないか。

それは置いて、途中色々面倒なことがあったものの特に支障はなく進み、目的のブツを回収したのだが、トチ狂ったワルドがルイズを攫おうとしたので左腕切断。殺そうと思ったものの、予想以上の逃げ足と周りの状況がヤバかったため、離脱。トリステインに戻ってきた。

その後、シエスタが故郷に帰省すると言うので郷土料理の為に同行。竜の羽衣という名のゼロ戦を発見。ギーシュに頼んで手伝ってもらい、コルベール先生主導の元、三人で修理。さらに、トリステインに先ほどアルビオンを乗っ取ったワルド所属の国士回復運動レコンキスタ（笑）が宣戦布告したらしく、現在タルブで戦闘中なそうだ。で、あつこはシエスタの故郷でも大切にしてたからちよっくらゼロ戦で行ってくる。ということらしい。

ここまでの話を聞いて俺が思ったこと。ゼロ戦一機じゃ無理だぜ。初めて乗るんだし。

よし、ここは俺も参戦してこよう。万が一にでもここに飛び火したらやだし。みんなには・・・言わんでおこう。

と思ったんだけどなあ……。玄関に向かうと先の説教をしてきた三人とアルが仁王立ちしていた。それから二十歩ほど離れたところにエルザとフォウが。

あれ？ばれる要素とかあったっ「広間から廊下まで良く聞こえる声でしたね？」……。そうですか。

「またあなたは一人で行くとしていたんですか？」
軽くふくれっ面なリアが言う。

「いや……。ちょっと急いでいかないといけない……。すみません」

言い訳をしようとした瞬間、殺されそうな程きつい殺気を放たれ即座に土下座する。へたれとか思うやつ！人から外れた力を持つ者・・略して人外の四人に殺気を放たれるとマジで怖いんだぞ！
というかフォウとエルザ！てめーら「やれやれ学習しない奴だな（口ボ）」とか言ってるの聞こえてんだからな！

「まあ今は急がねばならぬのも事実じゃから何も言わん」
よっしゃ！この空気から脱し「ただし！」……。まさか？

「後から……。皆の言うことを一つずつ聞いてもらう」
・・・なんだろう。この状況から抜け出せるのは嬉しいけど後から俺何言われるんだ・・・？

何か新しい技とか的？それとも蓬莱の玉とってこいとか？それとも俺から人の尊厳をなくすんじゃ・・・。

「どうしたんですか？」

いや、皆の浮かべている笑顔を信じよう。ほら、あんなにきれいな

んだからきつと大丈夫だ、うん。

現実逃避気味な今のショウゴは気付かない。普段ならわかっただろう。彼女らが「計画通り・・・」という感じの笑みを浮かべていることに・・・。

さて、気を取り直して、今回は後方に張っているトリスティン軍にたどり着くまでに敵戦力をせん滅か最低互角になるまで削ることが目的である。

戦力は俺、リア、アル、クー子、ニヤル子、フォウ、エルザ、カイトinゼロ戦である。

敵歩兵の数が多いため少しでも頭数を増やすため今回はアルを個人戦力として扱う。

ただ、歩兵はどうにかなるとして空戦できるやつが俺とカイトしかないのが少しきつい気もする。まあそこはどうにかしよう。

「つーわけで、皆死ぬはずがないけれどもケガには気を付けて最後まで気をつかないように行動するように」

戦場に向かう途中、タルブ村で好き勝手してやがった敵兵を撃滅して、さも修学旅行とか遠足に行く前の時の先生みたいに注意事項（笑）を確認する。

これに悪乗りしてニヤル子とクー子は「「はい」と元気よく返事をし、リアは「ええ」といつも通りに、「任せておけ」と傲慢不遜な態度のアルに、「ああ」とクールに決めるフォウ、「ダーリンには指一本触れさせない口ボ」てめーは仕事をきちんとこなせよ？

エルザ。

「そんじゃま先いくわ」

そう言つて俺は亜空間の中から取り出す、リフボードを。あれから魔改造を施し、通常の最高速度を時速240?に、ネタで付けた二トロに至つては一定時間まっすぐにしか飛べなくなるが時速800?を超す。俺以外には扱えない代物になり果てた・・・。

ついでに今回は魔法のブレイドを多少改造し、取り込んだ魔力で^{マナ}ボードにブレイドを展開できるようにした。これで厚い鉄も斬り裂ける！が売りである。

とまあこんな感じのリフボードで俺は空へと飛び立つ。見れば竜やら戦艦やらで空は一杯で、もう黒色に染まつて見える。

特に隊列も乱してないようだし、まだカイトは来てないようだ。ま

あ最後の調整やらがあるんだろ。

タイムリミット

時間制限もあるし、さっさと行きますか！

すでに原型とどめてないんだぜ！（後書き）

作：さて、まずは R a i N様 ご感想ありがとうございます！

シヨ：神鳴流っておかしいよな。一人なのに決戦奥義って・・・

作：お前はもっとひどいことができるけどな

シヨ：・・・それは言わない約束だ

作：まあそんなことは置いといて、次回！タルプ戦終わらせます！

シヨ：おわつたら？

作・・・次回をお楽しみに！

タルプの中心で愛を・・・叫ぶ？前篇（前書き）

作：うう・・・また更新できんかった

シヨ：てか今回で終わるんじゃないかったのか？

作：・・・本編どうぞ！

タルプの中心で愛を・・・叫ぶ？前篇

さて、突然だが人間には様々な力が宿っている。ポピュラーなものを言えば魔力や気、霊力とか。その他にも生命力やら存在の力、魂の力等々・・・他にも色々あるがここでは割愛する。

で、今回注目するのは魂の力。これは少し違うがやる気などと呼べる代物で、気のように体外に放出したり、魔力のように障壁を張ったりできるのだが、特有の力として『魂を強化する』ことができる。今回はこの能力で自分の魂を強化して、魂の階位を一時的に上げる。それによって俺は本当に『人』外としての力を得る。具体的には神が使う神気が使えるようになったりする。

だが、これをするには少々時間がかかる。以前、一気に上げすぎたせいで暴走しかけたことがある。海の上でやっていたのだが、その余波でモーゼの十戒の如く、海が割れた。比喻表現ではなくガチでその後、強烈な筋肉痛や身体的不調を二週間程強いられた。あの時はマジできつかった・・・。

だから、普段から少しずつ上げておき、こういうときに少しでも早くできるようにしているのだが、戦闘中にやろうとすると速くて30分、遅ければ1時間以上かかる。無防備な状態になるなら5分ですむのだが。

まあ、贅沢は言ってられない。いこう。

今回はリフボードに乗っての戦闘なので、ブレードを発生させて刃をつくるブーメランを創った。即席なので5分使ったら消える消耗品だ。まあそれでも竜を斬るとか戦艦を相手にもとれるのでなかなかのものだろう。

「さて・・・いきますか！」

とりあえず二本。射程距離内にいる敵にロックしブーメランを投げ
る。ブーメランとは言えない変則的な軌道を取り、竜の翼やら足や
らに傷を付け、俺が通り抜けると同時にボードと手に持った3本目
のブーメランで斬りつけ落としていく。周りから魔法やら砲撃やら
色々飛んでくるが、エアトリックを使いまくって避ける避ける。爽
快感マックスである。ついでにテンションも上がってきた。

「うらあ！」

ネタの二トロ発動。一気にスピードが上がる。周りの奴らには俺が
消えたかのように見えるだろう。

途中、俺に跳ねられた奴も多々存在したが、ご愁傷様とだけ言っ
ておく。二トロが止まるころには竜騎士達の後方に位置した艦隊のど
真ん中に。

各艦による一斉砲撃が飛んでくるが、俺のスピードについてこれる
ほど性能がいいはずもない。魔法などは追尾もあるが、飛んでいる
砲撃にあたったりして、俺に当たることはない。俺は俺で竜騎士が
こちらに戻ってくるまで、ブーメランを投げまくって甲板にいる兵
士の腕や足を死なない程度にとばしたり、マストをへし折ったり、
大砲を壊したりして敵戦力を無効化していった。

SIDE シャルロット

「ここは・・・？」

確か真つ暗なところに私はいたはず……。でも今いるのはお屋敷。

「母様!!」

かかっていた布団を蹴飛ばして母様の寝室へと走る。

バターン!と大きな音を立てて中に入ると、気持ちよさそうに寝息を立てている母様がいた。

一応変なところがないか確認したところ大丈夫だった。

「お嬢様!お起きになられましたか!」

ベッドのそばで安堵のため息をつく、ペルスランが駆け寄ってきた。

「大丈夫。それより、そのケガは?」

「いえ、見た目ほどは大したものでは。ショウゴ様が治してくださいましたから」

「ショウゴが・・・!?ショウゴはどこ!」

「先ほど出ていかれましたが・・・?」

「何処に行ったかは?」

「確かタルブで何かあるとおっしゃってましたよ?」

「わかったありがとう」

ペルスランにそう言って外に出る。口笛を吹くと、すぐにシルフィードが現れた。

「きゅいきゅい、お姉さまもう大丈夫なの?」

「大丈夫。それより早くタルブへ向かう」

「どうして？」

「シヨウゴがいる」

「シヨウゴが？あそこ今人間達が戦争してるはずなのね！」

「だから早く！」

「ちっ！」

落としても落としても沸いて出てくる……。こいつらはGか？黒光りするのか？でっかいホイホイにぶち込むぞこんちくしょう！

「死ね！」

そう言いながら背後から竜騎士が槍をついてくる。それをブーメラ
ンで受け流し、人を殴り飛ばす。

いまだカイトはこない。もしかしたら来ているかもしれないがまっ
たくと言っていい程にこちらに向かってくる戦力が減っていない。
どーすんだこれ……。。

SIDE リア

「ぐはっ！」

目の前に立ちふさがる者は斬り捨てる。兵の練度自体はそこまで高くない。囲まれてもどうにかできる程度だが、

「ちっ！」

さすがに数が多すぎて止められずに後ろに行こうとする者が出てくる。それらを阻止して動いているとどうしても前線が下がってしまう。あまり使いたくはなかったが、

「はあっ！」

インビジブル・エア
風王結界を解放。その余波で周りにいたものを吹き飛ばす。

それを見向きもせず次の敵へ。さて、先ほどの攻撃を警戒して前に進もうとする者はいなくなりました。

ショウゴのほうは今どうなっているんでしょうか。

そう思いながら足が止まっている兵を片っ端から薙ぎ払っていった。

S I D E アル

「アトラック・ナチャ！」

周りの兵に向かって魔術による捕縛術を発動。魔力によって編まれた糸にからめ捕られる。捕まった兵を魔力弾で片っ端から吹き飛ばしていく。

しかし、アルの得意な距離は近距離ではない。

「くらえ！」

ゆえに相手に踏み込まれることが多々あるが、

パリン・・・。

剣に斬り裂かれたアルからはガラスの破片が散らばる。それと同時にその斬りかかった兵も吹き飛ばされる。

「はあ！」

更に上空には巨大な魔法陣。そこから出てくる魔力弾の弾幕。それによってこの地帯に踏み込んだ兵はことごとく飛ばされる。

「しかし数が多いな・・・」

そう思うが、余力は十分。この調子ならば後一日戦い続けても支障はない。そう思いつつも呟かすにはいられない。

後からシヨウゴには色々やってもらわねばな。

その光景を思い浮かべただけでやる気が出てくるアルなのであった。
・・・。

SIDE ニヤル子&クー子

「クー子！」

「大丈夫」

二人の邪神による戦闘・・・というより蹂躪。銀髪の美少女からはバールのようなものが何十本も飛び、手榴弾がばらまかれ、近くに
いる兵は殴り飛ばされる。

赤髪の美少女は周りに火の玉を思い浮かばせるもの×6から秒間数十発のレーザーをばら撒き、周囲には炎を撒き散らす。それらに対して人間であるレコンキスタの兵たちは為す術もなく飛ばされ焼かれる。

「あんたカロリーは大丈夫なんですか？」

最初からクライマックス状態のクー子にニヤル子は言う。クー子が使う全力状態——クロスファイアシークエンスは著しくクー子のカロリーを使うのだ。そう長い間展開できなかったはずなのが・・・。

「シヨウゴにこれもらったから」

そう言っで見せるのはいつもシヨウゴが使ってる亜空間。中には多種多様の食べ物が。これは自分が全力を使うとカロリーを消費すると言ったらシヨウゴが作ってくれたものだ。左手の薬指についている指輪が媒体となる。

「って！あんた何でそんなところに指輪付けてんですか！」

「・・・ぽ」

「あざとい！あざとすぎるわぁ！！」

戦場の真っただ中であろうといつもの二人なのであった・・・。

SIDE フォウ&エルザ

「エルザ！」

「わかつてるロボ！」

敵を殴り飛ばし、風で斬り裂き、炎で吹き飛ばす。敵の間を走りぬけながら敵を屠るフォウが撃ち漏らした敵を後方にいるエルザが『ディグ・ミノー・グレイブ我、埋葬にあたはず』で吹き飛ばす。

コンビを組むのは初のはずなのだが、妙に息のあったコンビネーションを見せる二人に反撃の機会も与えられず倒されていく兵士たち。周りにいる兵士を掃討し終わり、エルザとフォウは合流する。

「ナイス援護だったな、エルザ」

「もちろんロボ！ダーリンだからこそあれだけ息があったロボ」
そう言いながらフォウの腕に抱きつくエルザ。なんかもう・・・うん。戦場の真ただ中でいちゃつく二人（エルザが一方的にだが）であつた・・・。

タルプの中心で愛を・・・叫ぶ？前篇（後書き）

作： Rain様 ご感想ありがとうございます

シヨ：訳がわからんってさ

作：まあ行き当たりばったりで文章構成もめちゃくちゃだからな

シヨ：どうにかしろよ

作：努力はします・・・では次回お会いしましょう！

ちなみに今回のサブタイ特に意味はない

んで。

タルプの中心で愛を・・・叫ぶ？後篇（前書き）

作：くそっ！微妙に間にあわなかった！

シヨ：惜しかったな

タルプの中心で愛を・・・叫ぶ？後篇

あれから二十分程。あともうちよいで詠唱が終了するのに・・・敵さんは減るところが増えるばかり。戦線維持できてねえだろ！と言いたい。てか予想以上に戦いながらこの作業はキツイことに気がついた。おかげでブーメランすら創れなくなった。

それ程までに集中力が切れているせいで敵さんの波状攻撃&死角からの攻撃を避けられなさそうだった。まあ一撃くらいならくられても死なんだろ。そう思っただけで痛覚遮断してカウンターでも決めようとしていたのだが、

『がはっ！』

周りにいた奴らが氷の柱——ジャベリンに貫かれて落ちていった。飛んできた方向を見ると、

間近に迫っている蒼色が見えた。その次の瞬間に衝撃。落ちるかと思っただけ・・・。

「シャルロット？」

飛んできたのがシャルロットだとわかり声をかける。ぶっちゃけ狭いどころか立てる部分は一人分であり、決してこのボードは二人用ではない。

イコール、シャルロット・・・

落ちる落ちる！！

周りの敵はシルフィードの威圧感（笑）で攻撃できない。その間にシルフィードに並び、背中にシャルロットを乗せる。

「どうしてさっきの攻撃をよけようとしなかったの？」
体勢を整えたシャルロットは早々に黒いオーラを放ち、先ほどのことを聞いてくる。

「いや、ちよつと今手が離せなくて」

主に詠唱のせいで。そのことを話すと、

「私が時間を稼ぐ」

そう言つて杖を構える。反論しようとしたら問答無用で殺されそうなイメージが湧く黒いオーラを放たれたので、

「30秒よろしく！」

素直に頼ることにした。

俺の言葉に頷き、敵さんが迫ってくる前に氷の矢が飛ぶ飛ぶ。近づいてきたら近づいてきたらで、前に渡した氷のルーンによる剣で斬り裂かれたりとシャルロット無双である。途中までそれを見ていたが、最後の詰め部分は全能力回さないとうしようもなかったので、意識を思考の波の中へと沈める。

「・・・」

周りのことは何も分からない。風の切る音や、兵士たちの怒号、爆発音・・・全ての感覚がシャットアウトされる。そしてよりクリアに。

目を開けるとそこには真つ白な火の玉・・・といつても大きさが俺の身長何倍も大きい。そして中に何かあるようだが、濁っていてよく見えないしこれがなんなのかは考えてもわからない。

でも、感じる。これがきつと魂なんだろう。そして最後はこれに力を込める。きつとそれがトリガーなのだ。そう直感え、その通りに身体を動かす。

どのくらい時間が経っただろう。一分？それとも一日？はたまた一年？十年？百年？ここにいるのは何よりも長く、何よりも短い。しかし、これでパズルは完成。自分の中でカチツと音が鳴り、何かが溢れてくる。きつとこれが神気なんだろう。

さあ戻ろうか。

目を開けるとそこは・・・戦場でした。まあ当たり前のことだが。ちなみにシャルロット無双は続いています。というかこのまま任せとけばどうにかなるだろう、と思える程の無双っぷり。まあそんなことはしないけど。

身体は力で溢れている。先ほどまで詠唱に使っていた並列思考も完全フルスロットル。準備は万端。後は行動するのみ。

『各員さがれ。マジで危ないから』

そうリア、アル、ニヤル子、クー子、フオウ、エルザ、シャルロットに念話を送る。俺の言葉に素直に従ったのか、下では兵士が空を舞う。シャルロットはすでに退避済み。皆から撤退完了の返事を受け、俺は敵の間を縫いながら詠唱を開始する。

「神の雷、天より落ちる極光の光よ。その力を我に仇なす者への罰となりて降り注げ！」

それと共にどこから長い間にわたって聞いていなかった機械の駆動音が。今来たか！その姿を目に収め、進行方向に落ちないよう調整し、

「断罪の光!!」
ジャッジメント

放った。天から降り注ぐ極太ビーム。それは竜騎士、戦艦、歩兵、メイジ・・・それらすべてに落ちる。触れるものは焼けず、消える。

それと時を同じくしてカイト操るゼロ戦からも巨大な光があふれる。それは触れるものを壊しはするものの人を殺めることはない不殺の光。

とか思いながらポケーツと眺めているとその光と俺の断罪の光が化学反応を起こし、ご丁寧に俺パーティー全員だけをその光に包み込んだ・・・。

タルプの中心で愛を・・・叫ぶ？後篇（後書き）

作： R a i N様 ご感想ありがとうございます！

シヨ：最後らへんで毎回感想ありがとうございます！

作：ほんとにね。さて、今回でゼロ魔は一度一区切り付けます

シヨ：といつても後からまたゼロ魔に戻ったりするんでご安心？ください

作：次回は・・・まあできる限り早めに・・・最低でも今年中にあげます

シヨ：もっと早くできんのか？

作：最低でも、って言ってるだろ？一応学校が終わるまで・・・つまり来週までには書き上げる！

シヨ：あ、そう・・・

作：では、皆様また次回でお会いしましょう！

光を抜けるとそこは・・・（前書き）

作：一週間ぶりの更新

シヨウ：ちなみにこいつストック貯めようとして失敗しました

作：・・・のでこれからも行き当たりばったり更新になります

シヨウ：さて、それでは本編どうぞ！

周りを見る。鎧をまとった兵士や魔法使い然とした格好の人間が辺りに倒れている。あちゃー……。一応声に出したんだが……。避けられなかったか？途中面倒になって加速したせいで着弾時に凄い衝撃だったのは認めるが。

そんなことを思っていると、目の前の穴から少女がはい出てくる。赤い髪をポニーテールにし、背丈と同じくらいの杖にちっさいメモ帳見たいなものを持つてる。

そんな少女がはい出て俺と目があう。とりあえず相手が目を外さないので見つめ返す。1分くらいたたただろうか、少女が一言。

「アンタ……。だれだ？」

ふむ……。まあいきなり戦場に俺みたいな不審人物が落ちてきたらしょうがないか。そう思って、

「カイトだ」

偽名を名乗る。さすがに訳のわからんところで本名を出すほどバカではない。

「カイト……。か。お前は何処の奴だ？連合？それとも帝国か？」
連合……。帝国……。？

「なんだそれ？」
ハルケギニアにはそんな勢力はない……。はずだ。ガリア、ロマリ
ア、アルビオン、トリステイン、ゲルマニア……。まあ小国もある
だろうが大きな勢力はこんなもんだろう。

「知らないのか？今魔法世界で起こってる全面戦争だぞ？」

魔法・・・世界？まで、その単語どこかで……。思い出せ俺！頑張れ俺！きつとこの状況を打破できる情報があるはずだ！目を閉じて脳細胞をフル稼働させ記憶を探る。

「つと、魔法の射手・雷の1矢」

少女は後ろに一本の雷によってできた矢を後ろに放つ。うめき声が聞こえることから攻撃しようとして反撃されたと言うところだろう。それより・・・魔法の射手？・・・あ。

「ネギまか！」

「うおっ！」

俺の声に少女が驚いた声をあげる。いや、俺もいきなりで悪かったか。

しかし思い出したぞ。内容は知りもしないが主な人物の名前だけ。つてゼロ魔とおんなじかいっ！

「ど、どうしたんだ？」

「いや、なんでもない・・・」

とりあえず疑問は解決。これからどうすっかなあ……。あ、そう言えば・・・、

「お前の名前は？」

この目の前の赤髪ポニーテールさんの名前を聞いてなかったな。

「私か？私はナギ、ナギ・スプリングフィールドだ」
・・・あれ？スプリングフィールド？

まあ、気のせいだろ。うん。きっと偶然同じ名字なだけだろう。

さて、最優先でしなきゃならないのはリアたちと合流かな。どうやらあっちも、こっちに向かつてるみたいだし。

「あんた、どうやら連合でも帝国でもないみたいだけど、これからどうするんだ？」

考えをまとめていると、ナギが聞いてくる。

「近くに同じように落下した家族と合流が最優先だな」
「つかあいつら異常な速さでこっちに来てるんだが・・・各々強化して全力で向かってんのかね。」

「それから？行く先あるのか？」
「ん、そいつは考えてなかった・・・。」

「その辺は家族と決めるよ」
そう言つて、空に手を掲げる。その数秒後、シャルロットの杖が落ちてきたのでキャッチ。どんだけ高いところに現れたんだろ・・・。

「もし・・・」
「ん？」

「もしよかつたらただけどさ、紅き翼に入らないか？」
「・・・え」と？

「それは・・・どういう？」

「あゝ・・・アンタのことを気になったというか気にいったというか・・・あーもー！！私らしくないな！とにかく！アンタといたら楽しそうだし、何となく一緒に居たいと思ったし気に入ったんだよ！悪いか！！」

おう・・・最後らへん逆ギレ気味なんだが・・・。しかし、悪くない申し出だな。この世界のことは知らないに等しいし、別に生きてはいけるだろうがこの世界の常識（法律とか）ぐらいは知っておきたい。後、この世界の魔法とか聞いて、どうにかハルケギニアにも帰れるようにせんといかんしな。そういう点ではメリット満載だ。だが・・・こいつらが戦場にいたということはこれから戦場に立つ機会があるということ。家族の皆を戦場に立たせるのはやりたくない。まあ俺だけが行けばいい話だろうが・・・あいつらが納得するだろうか・・・無理だな。しかし・・・

考え込んで数十秒、

「とりあえずだな、皆の意見を聞いてからだ」
結論はこんな感じに。優柔不断とかいうなよ！！

「わかった。じゃあこっちの仲間も紹介しといたほうがいいな」

「そうだな」

そう言ってお互いの仲間を念話で呼ぶ。

「よし、じゃあカイトの仲間が来たら安全なところまで移動しようぜ」

「なら行こうか」

「え？」

そういつた直後、俺の後ろに皆が急に現れる。どんな速度だよ……マジで。

ナギは急に現れた皆にびっくりしている。
ちなみに、後ろにいるリア達はナギを見て俺に『こいつ誰?』みたいな念話を全員が送ってくる。ええい!五月蠅いわ!全員でやんな!

「こいつは俺の落下地点にいたナギだ」
とりあえず、ナギの頭に手を置いて紹介する。

「あんた達がカイトの家族か?」
擦ったそうにしながらも俺の手を払わずに皆にナギはそう言う。つかいきなりやったことだが、良くキレられなかったな。

「そうですね」
皆の中からリアが出てきて返事をする。

皆はじーっとなギを見た後、俺の方を見ってくる。ため息を吐きながら『またかお前……』みたいな視線ばっかだが。
つか前にも言ったけどさ、またかって何が?

「とりあえず、安全なところに行こうぜ」
ナギの提案に反対する理由もないので俺達は移動を開始した。

光を抜けるとそこは・・・（後書き）

作：二日遅れですが、メリークリスマス！ス！

シヨウ：それやるんならクリスマスに投稿すりゃよかったじゃん。
今回の分できてたんだし

作：・・・ぎりぎりまで粘ってストックを貯めようとしたんだよ！

シヨウ：失敗したけどな

作：・・・まあね。でも学校で次の分を半分はどうにか書いてるし。
明日と明後日も学校あるからその間に頑張っで見せる！

シヨウ：そして別の小説が出来上がる・・・と

作：う、うるさいわ！

シヨウ：まあそんな作者のどうでもいい近況やら予定は放っておいて、今回から新章『ネギま大戦期』となります

作：いえーパフパフ！！

シヨウ：で、きつとみなさん思いというかおかしいだろ！と思うであろう部分・・・なんでナギ・スプリングフィールドがTSしてんだよ！

作：・・・ノリ？勢い？

シヨウ：最悪な理由だな！おい！

作：あと、東方やってて魔理沙みたいな口調の女の子が出したかったが為に・・・

シヨウ：マジで一回死んでこい・・・

作：だが断る！一定の周期でやってくる鬱期の時なら頷いたかも知れんがな！

シヨウ：そんな自信満々に言うことではないだろう・・・

作：まあね。さて、では今回はこの辺で。感想、ご意見、その他もろもろ受け付けています

シヨウ：また次回でお会いしましょう。

紅き翼（前書き）

作：いえ、投稿！

シヨウ：結局まとまらなかったな

作：てか、ネギま！の原作31までしか買っていないからさ、造物主
どうすっかなあ・・・て感じなんだが。コードオブライフメイカー
とかグレートマスターキーとか訳分からん物体が出だしたしさ

シヨウ：その辺は作者の頑張りどころだろ？

作：そだな。それでは本編をどうぞ！

紅き翼

ナギの仲間と合流するため、俺達は移動し始めた。その道中でナギは今更になって気がついたことを言う。

「そっぴゃ、カイト。お前魔力とか気とかないのにどうやって傷一つなく着弾できたんだ？」

着弾って……。そう思った後、自分でも今更になって魔力と気が感じられないことに気づく。あれ？なんでだ？神気は感じられるんだが……。

「シ……カイトさん、あなたの髪はいつから白くなったんです？は……？」

「今の俺の髪……白い？」

そう聞くと各々が肯定の返事をする。神気使った影響かねえ……。

まあそんなことはさておき、

「リアとかフォウは俺とのライン切れてる？」

なんか自分の中でさえあやふやな感じでラインとか探れないので本人たちに聞いてみる。あれは魔力によるものだから切れてたらマジで俺の魔力なくなってるってことなんだが……。

「いえ、シ……カイトとのラインは切れていません。ちゃんと繋がっていますか……」

「特に問題はないぞ」

ふむ……。それならこの神気が代わりに流れてるってことが、魔

力は潜在的に残ってるってことになるな。

「さっきからどうしたんだ？髪の色違ったのか？」
事情を知らないナギは仲間外れにされたと思ったのか、急にそう言う。

「ああ、俺の髪はほんと黒なんだよ」
簡潔に説明。まあ俺の中でその理由は大体・・・というか一つしか要因がないからどうでもいいんだが。

「へえ・・・そうなのか」
俺の返事にナギはそう答えた。

そんなこんなで、指定された場所へと俺達はたどり着いた。少し開けているところで、そこには刀をさした何となく苦労人な空気を醸し出す日本人ぽい青年、白い髪をした少年、フードをかぶった魔法使い然とした格好をした青年の三人であった。

「ふむ、この三人がナギの言ってた仲間というものか」
アルは俺の傍に飛びながら言う。

ちなみに、アルやリアは自力での飛行手段がないのでアルとマギウスモードになってから身体強化からのリアをお姫様だっこしつつ飛行してここまで来た。

ニヤル子はシャントツ君と名付けられたシャントク鳥という馬の頭に蝙蝠の翼、鳥とか付いてるくせにうるこでおおわれてる邪神印のモンスターに乗って、クー子は灰色の直径2メートル程度の炎『ア

フォームザー』に乗っかっている。

ナギはこれらを見ても特に驚いたりはしなかった。曰くこの魔法世界には竜やら大蛇やら、地球のファンタジーに出てくる動物がたくさんいるし、魔法というものがあるんだからそんなものがあってもいいじゃないか、とのこと。

ちなみにシャントツ君は見た目にそぐわず、以外に可愛い感じがしないでもない。声的に。

「あなたがナギが戦場であつたという人たちですか？」

ロープを被った青年が代表みたいな感じで出てくる。てか、後ろの侍・・・かな？は殺気立ちすぎ。せめてもうチョイさりげなさを装って警戒してくれ。主にリアとかその辺が無駄に対抗してるから。

「詠春、大丈夫だからそう警戒すんなって。私が保証するよ。というより、こいつらならここまで来るまでに私を倒すくらい造作もないと思うぞ」

ナギは三人にそう言う。すると三人は異常なものを見るような目になった。

「ナギがこんなことを言うとは・・・明日は槍・・・いや世紀末になるのか？」

「うむ・・・あのどんな相手だろうと『私は無敵だー』としか言わぬナギがお・・・」

「もしかすると・・・ですよ？」

三人はこそそそと何やら話し始める。てかロープのやつ。俺を見てなんだってんだ？

それから少しして。ナギの仲間が落ち着いたところで、互いに自己紹介となる。

「わたしは青山詠春。神鳴流剣士だ」

「わしはフィリウス・ゼクトじゃ。これでもお主らの何倍もの時を生きておる」

「私はアルビレオ・イマです。どうぞよろしく」

で、こつちも自己紹介する。その後は皆で話し、お腹がすいたので飯にしよう、ということになった。調理人は俺。

「なあ、こいつらを紅き翼に入れようと思うんだが」

ナギが俺の作ったご飯を食いながら本題を切りだす。ちなみに献立は白米に味噌汁、川魚の塩焼きである。

で、皆さん反対するかと思いきや特にそんなそぶりはなく二つ返事でOKが出た。その理由を聞くと声を揃えて『ナギですから』とのこと。

それはどういう意味なのか、ナギがキレていたのを見る限り悪い意味でのことなのだろう。

そう言うわけで仲間になった後、俺達はこの世界に関して色々聞き大体のことを把握し、この世界の魔法を習うことにした。

あ、そうそう。この世界では本名を名乗らず偽名で過ごすことにした。紅き翼の面々には後々話そうと思う。で、これからだが、俺は

カイト、シャルロットはマリアン（シャルロット↓シャル↓シャル
ティエ↓坊ちゃん↓マリアン）、アルトリアはアンジェラ（金髪な
のでという安直な理由）、アルはネロ（ネクロノミコンより）、ニ
ヤル子はフィフ（銀髪という安直な理由）、クー子はアリア（赤髪
というry）、フォウはクロウ（エルザからの呼び名より）、エル
ザはルーヒー（緑髪とry）となった。
で、ファミリーネームだが皆同じハーシエルにした。孤児院出とい
う設定で。

まあそれは置いて、先生はゼクトとなった。始めはナギに聞こ
うと思ったのだが、アル（アルビレオがこう呼べと言った）が「ナ
ギの師匠がゼクトなので彼に聞いた方がいいですよ」と言ってくれ
たのでその言葉通りゼクトに習うことにした。

ちなみに生徒は俺とシャルロットだけ。他は観戦客である。

数日後、俺はナギと同じバグキャラ扱い、シャルロットは優等生と
いう扱い。

俺がバグキャラ扱いなのは適正属性が全属性であることと、習熟度
の早さがおかしいため。大体の古代語呪文^{ハイエンシエント}覚ええたし。実践で使うレ
ベルではまだないと自分では思っているので使わないだろうけど。

シャルロットは適正は水に氷、風が一番、次点で闇。後は平均的な
魔法使いレベルらしい。水と氷は上級、闇は中級、その他は下級と
いった具合。

そのため、俺はゼクトからは免許皆伝扱い、シャルロットはゼクト

と話し合っている。

魔法を覚えた俺は今のところ一番の問題とも言える魂の強化の解除・
・はどうやらどつかで呪文を間違えていたらしく解除ができない
状態なので、神気の扱いをやっている。

魔法を使うときは自動で魔力に変わるらしく問題なく使えるのだが
常時溢れている状態の為、周りにプレッシャーというか、何かしら
の力を与えているらしので制御するべく試行錯誤している。

ちなみに、今は結界を周りに張り、力が漏れないようにしている。
早めにどうにかせんと日々生きるのもままならない。頑張ろう。

さて、時は流れ紅き翼に入ってからちよつとして。俺達は王国のと
こまで来てた。

「鬼神兵に戦艦の大盤振る舞いだな」
黄昏の姫巫女とかいうのがいるらしい塔へ走りながら隣で飛んでい
るナギ達に言う。

「そうだな・・・だが気にいらねえ」
そうナギは怒りながら答える。まあそんな紅き翼全員が思ってる
ことだ。

「落ち着けナギ」
紅き翼の良心、詠春が宥める。内心奴もキレてると俺は思う。俺だ
ってそうだしな。

そんな感じに塔へ到着。止まると同時に断罪の光を放つ。ジャッジメント ナギも逆側の敵に対して千の雷を放ってまとめて吹き飛ばす。

「そんなガキまで担ぎ出すことはないさ」
魔法陣の中に降り立ちながら俺は言い、

「そうだな。後は私たちに任せとけ」

周りを囲んでいる敵を睨みつけながら飛んでるナギがそう続ける。
「というかアンチヨコ見ながらはカッコ付かないぞ？」

少し遅れて、他についてきていた詠春は魔法陣の上に、アルは飛びながらナギの隣に立つ。

シャルロット達はちよつと離れたところで戦っている。まだ舞空術を覚えてない為地上で暴れてもらっている。

後、俺達の顔は仮面で隠してある。素顔で有名なるのを避けるためである。

ま、そんな余談は置いておこう。詳しくはまた今度ということだ。

「お、お前らは……紅き翼！？」
アルブラ

俺達の姿を見て、少女の隣に立っていたローブの男は戦きながら？
言った。それに続けて、

「私がナギ・スプリングフィールド！！またの名をサウザンドマス
ター！！」

ナギは名乗った。誇張しすぎじゃないかなあ……。お前覚えてんの5、6個だろ？そう前日聞いたのだが、「こんな風に言ってた方がカッコ付くだろ？」みたいなことを返された。

「え」と百重千重と重なりて走れよ稲妻・・・」

アンチヨコを見ながらナギはもつとも得意な呪文を唱える。それに合わせて俺や詠春、アルも各々敵を屠る為に構える。

「行くぜ！千の雷！！」

ナギが放った千の雷で鬼神兵が大体落ちる。詠春は真・雷光剣！とかいって周りを焦土と化してるし、アルも重力魔法でぺちゃんこに潰している。俺はというと・・・

「魔法の射手・連弾・雷の1000矢&火の1000矢」

初級魔法で絨毯爆撃を起こしてみたりしていた。ちなみにチヨイ改造して魔力を無駄に込め、着弾時に魔力を開放、中級呪文程度の威力を放つえげつない魔法になり果てていた。使い道はこういう時にしかないが。

とりあえず一時的に周りは敵の数が減った。そう思って、先ほどの少女の元へ向かう。ローブの男はスルー。何か言ってる気もするがな。

「お前だいじょーぶか？」

繋がれている鎖を引きちぎり、口の端に流れていた血を拭う。少女は俺の言葉に首をかしげている。ふむ、よっぽど生活がひどかったんだな。扱いがヒトらしくないとかそんな感じかね。

「お前の名前は？」

せめて俺らがヒト扱いせんといかんとは思うが、まずは名前を知らんと始まらん。

「ナ・・・マエ・・・？」

何故カタコト？そんなにひどいのか？

「ああそうだ。お前の名前だ。ちなみに俺はカイトだ」

「カイト・・・アスナ、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

うげ・・・王族だからなげーなおい。後ろにいるナギなんて頭からマジで煙吹く5秒前みたいな感じになってるし。

「アスナね・・・。いい名前だ」

くしゃっ、とアスナの頭を撫で俺は立ち上がる。

「さて、ナギに詠春、アルよ。奴さんを沈めに行くぞ」

「そうだな」

詠春は片手に持つ夕風を引き抜き、シャキンと鳴らす。

「そうですね」

アルは胡散臭げに笑いながら。

「あ、それリーダーの私のセリフだ!!」

ナギは・・・うん、がんばっ!!

「よっしゃあ行くぞ!!」

「だからそれわたしのセリフ!!というか詠春もアルも従うなああああ!!」

紅き翼（後書き）

作：まずは 紅蓮様 ありがとうございます。その願いは・・・叶うと思います？

シヨウ：何故疑問形？

作：いや、ナギはいいとしてさ。アリカ様入れたらアル＝アジフと口調被る・・・

シヨウ：ああ・・・

作：一応アンケートアリカ様をハーレムに入れるか否か。期限はアリカ様が出るまでです

シヨウ：いや、わからんだろ

作：話数的には速攻で行くなら3〜4話、だらだら行くなら6話位です。日にちは・・・1月中旬から下旬辺り・・・かな？

シヨウ：アバウトだなあ・・・ま、そんなわけでどうぞ気が向きましたらどうぞよろしくお願いします

作：それでは、また次回でお会いしましょう！

仮契約・・・こんな物だけ？（前書き）

作：はいどうもみなさまあけましておめでとございます！

シヨウ：今年もよろしく願います！

仮契約・・・こんな物だっけ？

この前のオスティア侵攻を阻止してから数週間、俺達は戦場を駆けまわっていた。

まあ、ナギの戦争の参加理由が力試しとか名を売る為とかそんな感じだったからな。もっと慎ましくいけよ。お前さ、仮にも女の子なんだし。そう思いつつ周りの敵を屠る・・・分身が。

現在ちゃんと戦争に参加しているのは分身である。本体はというと・

「ほら、おかゆだ。お前なんか飯とかちゃんと食ってなさそうだから消化にいいものを持って来てやったぞ」

「・・・？」

「ああそうか。ほれ、あゝん」

「（パク、モキュモキュ・・・ゴクン）」

「どうだ？」

「ナンカ、ポカポカスル・・・」

「んゝそうか。それはよかった。とりあえずお前のその片言の喋り方どうにかするかね」

みたいな？会話文だけでわかるかどうか分からないが、この前会ったアスナに会いにいつている。ちなみに不法侵入で。まあ、あそこに張られてる程度の結界じゃ俺には通用しないからな。

「こんなもんだろ」

そんなこんなで俺の周りには敵の兵が死屍累々。でも死者はいない。なんか本体にできるだけ殺さずに相手側に送り返しとけと言われた。こつちの方が相手にダメージを与えられるからだそうだ。

敵兵を集めて転送術式を起動。敵の前線基地の座標に合わせて送り返す。任務完了。本体にそれを伝えて俺は消える。本体あいつらに殺されるんじゃないか？とか思いながら……。

「さてカイト。あなたが今こうなっている理由はわかりますか？」
目の前でリアが黒いオーラを纏いながらそう言う。俺はその目の前で正座した足の上に50キロ位の石を載せられている。

で、俺の周りを囲むようにシャルロット、アル、ニヤル子、クー子、ナギがいる。各々俺を殺すんじゃないかと思うほどの殺気を放っている。

「……分身に戦闘を任せてアスナのところに行ってたから？」

「良くわかってるじゃないですか」

俺が答えると、名状しがたいバールのようなものというニヤル子の主兵装でぺちぺちと頭を叩かれる。ちなみにクー子も同じものを持つていて、そっちは焼き鋳^やみたい^こに熱と炎を帯びている。

「いや、あの……ダメなことでしたか？」

「……まああの子が不憫だったのはわかります。あのような扱いは許し難いですからね」

「まあそうだよな。じゃあなんで今俺こんな怒られてんの？」

「わからない？」

シャルロットは氷の剣で頬を軽く斬る。タラーッと血が流れる。いや、シャレになんないよ？シャルロット。

「わからないから聞いたんじゃ「ドンツ！」」アリア……機動砲台をいきなり打つのはやめようや」
ぎりぎり頭を傾けて避けたものの、軽く髪が焦げたぞ。

「わからないカイトが悪い」

ぶいつ、と顔を背けながら言う。

「しかし、どうしろと？謝っても許してくれないんだろ？」

「そうですね……あ」

「どうした？アンジェラ」

「いえ、タルブに行く前に約束したことがあるじゃないですか」

「・・・ああ、そう言えばそんなこともあったな」

「あれと合わせてショウゴには私たちの願いを聞いてもらいましょう」

みなさんもいいですよね？とリアが聞くと“異議なし”と声をそろえて言うアル、ニヤル子、クー子の三人に、“そんなの聞いてない”とあの時寝てたシャルロット、“タルブってどこだ？”と考えるても永遠にわからんであるうことを必死に考えるナギがいた。

そんなバラバラな感じだったが、話し合いの結果。

「いや、これはないだろう・・・」

「お前に拒否権はない」

俺が呟くとばっさりナギにぶった切られた。俺が居るのは魔法陣の上、詳しく言えば仮契約バクティオーの魔法陣の上だ。

みなさんはもうわかったであろう。あいつらが提案してきたのは仮契約バクティオーすることであった。しかも、血の契約の方ではなくキスのほう。リアはもう持つてるので普通にキスしてください、と直接的に言われた。

お前ら自分の身体大切にしろよ。といったら皆に殺されそうになった・・・というわけで拒否権なく俺と皆で仮契約。それぞれカードが出てきた。名前には真名・・・てか本名が書かれてるので見えないうちにそのまましまった。アーティファクトは活躍の機会にこうご期待！ということだ。

ちなみにだが、何故か俺が主扱いになってますよ？

仮契約・・・こんな物だっけ？（後書き）

作：シェン様 ユウト様 さろう2世様 ご感想ありがとうございます
ます

シヨウ：良かったな。アンケート答えてもらえて

作：だねえ。オリキャラ案も出してもらえたし。まだまだ募集しますからねー！

シヨウ：いまのところアリカのハーレム入りに2票だな。前のを抜いたらだが

作：皆様アリカ様好きなのですね？まあ、元々は考えてなかったんだが入れてほしいと言う意見があるなら入れて見せましょう！

シヨウ：これ以上増やしてどうすんだ、って話だな

作：その辺は・・・頑張るさ

シヨウ：やれやれ・・・さて、まだまだアンケート（前に出した奴と前回の分）は募集してます

作：では、また次回！

強襲筋肉達磨（前書き）

作：一週間以内に更新できたぜ！

シヨウ：普通はもっと早くするべきだろうがな

作：くっ・・・

強襲筋肉達磨

そんなこんなで数週間。相も変わらず俺はアスナのところへ遊びに行き、常識を教え、最近ではようやく片言からひらがな表記へランクアップを果たした。

そして、女性陣からは毎回殺されそうに。まあ毎回何も言わずに出てるからなだけど。

分身でサボるって言うても殺されかけるので言うこと自体に意味がないのだが。

さて、今日は一仕事終えた後、近くの開けた場所ですき焼きとなった。

「へえ・・・こいつが日本の鍋料理ってやつか」

箸の先を加えながら言うナギ。そんな行儀悪いことすんなよ。

ちなみに、今回作ってるのは詠春。まあ京都が実家らしいし久しぶりの日本料理には心が躍る。

「じゃ、早速肉を♪」

詠春が野菜などを切り分けているうちにナギが肉を入れたす。

「あつ、ナギおまつ・・・何肉を先に入れてるんだよ!!」

そこに戻ってきたエプロン姿の詠春。両手には野菜とか豆腐とか載せたボールを持っている。

「トカゲ肉でも旨いのかかのう?」

ナギを叱ってる詠春をしり目にゼクトが何かの肉を入れる。

「ゼクト・・・それはなにの肉です？」

それを見たリアからの質問。軽く頬が引きつってるような気がする。

「ふむ、先ほど狩ってきた龍種の肉じゃ」

「意外とうまかったぞ。俺が前食ったときには」

「ほく、そうなのか・・・。楽しみじゃのう」

そんな感じで会話していると周りが固まってるのに気がついた。

「どうしたんだ？皆」

「カイトさんとゼクトさんの非常識さにあきれ果ててるんですよ」

そう答えるニヤル子はあきれた様子は見えない。ついでにクー子もこの二人は一応邪神だし常識が違うんだろ。きっと人間が食ったら大変なことになるものを食ってるに違いない。

「ま、食えるんならいいや」

そんな皆が固まってる中で数秒くらいしてナギがそういう。それからまたどんどん肉をぶち込んでいく。

「バカッ！火の通る時間差というものがあつてだな・・・」

ナギの暴挙を見て詠春復活。どうにかとめようとするも両手にはボール。どうしようもない。

ナギに鍋のことを語る詠春を見て、アルビレオは口を開いた。

「知ってますよ、詠春。あなたのような人のことを・・・」
「そこまで言って一回息を吸い、」

「『鍋將軍』・・・と呼び習わすそうですね」
そう言つて後ろに雷が落ちる。無駄に演出を凝らしてる。ほんとに無駄だ。

「ナベ・シヨーグン!？」

「つ・・・強そうじゃな」

ナギとゼクトは何を想像したのか身震いしている。

「それって鍋奉行だろ？」

俺がそう突っ込むもナギとゼクトの二人は聞く耳持たず。二人して「わかったよ・・・詠春。私の負けだ。今日からお前が鍋將軍だ」とか「すべて任す。好きにするがよい」とか言っている。それを聞いた詠春は微妙な顔をしている。

それから皆してわいわい騒ぎながら鍋を囲った。途中でアスナに食わしてやりたいと言っていたので次いくときは鍋を食わしてやろうと思う。

で、いろいろ話していると何かが飛んでくる気配がした。感じたと同時に立ち上がって軽く後ろに下がる。

ドカツ!!!

鍋に大剣が突き刺さる。それに伴い中身が飛び出るが、全員が空中で回収。具はひとつも地面に落ちなかった。ちなみに5割が皆の皿の中身を合わせた分で、残りは俺の皿に乗っている

それはともかく、崖の上に人影が現れる。

「食事中失礼~~~~ッ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！
！いっちょやろうぜ！」

どうやら犯人はあの筋肉ダルマらしい。まあ特に怪我とかはしてないから大丈夫・・・

「フフフフフフ・・・」

訂正。詠春が鍋を頭からかぶってた。なにやら平坦な声で笑い声を発している。

みんなは えいしゅんから １メートルはなれた

「食べ物を粗末にするやつは・・・」
ぶつぶつと何かを詠春は呟いている。

さらにみんなは えいしゅんから はなれた

「どーしたー来ねーのかー？来ねーならこっちから・・・」
背中に背負っていた大剣で手をたたきながらそんなことを言ってる筋肉ダルマに・・・

「斬る」

「おほっ！！」

瞬動で詠春が斬りかかった。筋肉ダルマは少し避けたみたいで持ってた大剣のみが真つ二つになっている。

そのあと詠春は気の斬撃を飛ばす。筋肉ダルマの立ってたあたりが地面にすべり落ちた。

「お？詠春の攻撃を凌いでるぜ？」

続く詠春の連撃を折れた剣で防ぐ筋肉ダルマを見てナギが言った。
鍋の中身を食べながらであるが。てか、自分の分なくなっただからって俺のから強奪するな。リアもシャルロットも落ち着け。

いくらか続いた後、筋肉ダルマからカプセルが投げられる。中身は・
・

「なあ、前が見えない」

確認する前にシャルロットに目をふさがれた。ご丁寧に他の皆もやつてるみたいでまったく前が見えない。

「見ちゃダメ」

シャルロットが一言で説明する。誰かが俺の横腹つねってるヤツがいる。地味に痛い・・・。

「さて、私が行くかな」

ナギがそう言ってたぶんあの筋肉ダルマの元へ向かう。どうやら詠春は負けてしまったらしい。何を使っただろうか・・・。

ナギが飛び出していくと、目に当てられていた手がはずされる。

見るとナギと筋肉ダルマはお互い魔力と気を手に集めて殴りあっていた。

それで二人の距離が離れるとナギは気による分身を作り出す。筋肉ダルマはそれを一撃で全滅させるが

「千の雷！！！」

ナギの得意呪文が放たれる。筋肉ダルマはどうやらそれを気で防御

したらしい。

「まったく、二人ともバグだな」

「汝もじゃがな。というかカイトのほうがいっそう質が悪い」
俺の呟きに酷い言葉でアルに返された。皆も周りで頷いている。俺の評価はそんなものだったのか・・・。

「しかし・・・このままじゃと周りが荒地になるぞ」

ゼクトが二人の戦いを見ながら言う。まあ中々上級の魔法に気で強化した数十〜数百メートルの範囲に及ぶパンチなどを放ってたらそうなるだろう。

「カイト・・・」

フォウの呟きとともに皆がこっちを見る。俺にとめてこいと？そういうことか？

「・・・わかったからそんな目でこっち見んな」

しゃーないので平和的に解決することにする。二人のところへ向かう途中、俺は両手に黄色くて先端に半球状の物体がついた棒を創り出す。

「せいのっ！」

二人が激突する前に両手のものを叩きつける。

「な、なにすんだ・・・？」

「あ、あれ・・・？」

二人は吹っ飛んでから立ち上がろうとするも立ち上がれない、

「立ち上がろうとする気力が起こらないってか？」

俺の言葉に二人は頷く。

あの棒の効力は触れた者の魂の力を吸い取るというもの。ここで言う魂の力はやる気に近いもので、寝れば回復するものである。

しかし、枯渇すれば気絶して数日間から数週間ほど起きられなくなる。

説明はこのくらいにして、

「ほら、行くぞナギ」

倒れているナギにしゃがんで背中を向ける。

「うゝ・・・起きる気しねえ」

つかまるうとしたみたいだが、思った以上に吸い過ぎてしまったらしい。

「ま、今回は仕方ないか」

そう言って俺はナギをお姫様抱っこする。

「わっ・・・」

少しびっくりしたようだが、すぐに気持ちよさそうな笑みを浮かべる。

「てめーら！次は決着つけて・・・やるぜえっ」

「いつでもこいや筋肉ダルマあ」

倒れながらもそう言う筋肉ダルマにナギは言い返した。

それから数カ月後、何がどうなったのかわからないが筋肉ダルマ
と、ジャック・ラカンが仲間になった。

強襲筋肉達磨（後書き）

作：君に届け様 和刀様 れおぼん様 神世希様 ロア様 ライ様
ありがとうございます！皆さんの感想を見て一言、皆様アリカ様
大好きなですね！

シヨウ：反対意見がないというな・・・

作：最初考えてた流れにぶち込んだら大変な事態になりそうだった
のですが、ない頭使って考えてどうにか辻褄あわせがすみました・
・

シヨウ：大変みたいだな・・・あと、この状況から原作主人公ど
うなるのか？って質問もあるみたいだが？

作：とりあえず超 展開がおきてどうにかなりますのでご心配なく

シヨウ：いや安心できないだろ、それ

作：まあそのときまでお楽しみにつてことで

シヨウ：ふうん

作：それとさらに新しく聞きたいことがあるのですが、エヴァンジ
エリンをどうしましょうか

1 家族とかハーレムとか何でもいいけど身内入り

2 同盟とか対等な協力者

3 無干渉 or 敵対

とりあえずこの三つです。別に他の意見があれば聞きますので。結構話の長さとかかわるんでお願いしますね？

シヨウ：他のアンケートもまだまだ続いてますんで、そちらもよろしくお願いします

作：ということでは今回はここまで。次回をお楽しみに！

紅き翼のとある一日（前書き）

作：どうもでかいイベントのない話を書くのが難しい・・・

シヨウ：そんなもんだろ

紅き翼のとある一日

今日も今日とて敵兵を屠る。手柄を欲しがるアホどものおかげで辺境へと飛ばされたので皆リラックスした雰囲気だ。敵を狩る。

「えーと・・・低地！『ち』だラカン」

隣のラカンにそう言いながら目の前の敵兵を殴り飛ばす。ちなみに右腕が吹き飛んだ後転移魔法で敵基地に送り返す。

「ち・・・ち・・・地名！『い』だナギ」

ラカンはバカでかい斬艦刀（仮）を振り回して敵を吹き飛ばしアンチヨコ見て呪文を唱えるナギへと振る。

「い・・・い・・・イラン！」「はいアウトー」あつ！ちよつ！
今のはノーカンだ！」

「残念だったなナギ」

「じゃあ後は任せた」

そう言つてラカンは他の紅き翼の元へ、俺はアスナのところへ向かう。最後に「ちくしょー！！」とか言つて千の雷がぶっ放されていたのを見て敵に黙とうを捧げ、転移した。

「さてアスナ、今回の飯は鍋だ」

「ナベ・・・？」

「そうだ。寒い時期に大人数で食べると美味しい飯だ。まあ俺とお前
しかないけどな」

「ふん・・・」

話しながら詠春から借りたコンロやナベなどを引っ張りだし、すでに
準備しておいた具材も取り出す。

鍋に水と昆布を入れて煮込む。だし汁が出たら具材を入れて・・・

「いただきます」

アスナと二人手を合わせて食べ始める。初めに比べて随分と人間味
が増したものだ。そんなことを思いながら食べる。

「ねえ」

「どした？好き嫌いはだめだぞ」

「そんなんじゃないくて、どうしてシヨウゴはここにきてくれるの？」

「そうだな・・・自己満足というか・・・ねえ。来たいから、とし
か答えられんな。ここに来るのは迷惑か？」

そう聞いてみると首を横に振る。

「そうか。ならよかった。ほらこれも食つとけ」

そんな感じでほのぼのと俺とアスナはナベをつついた。

さて、冒頭で言ったように辺境に飛ばされたため前線に比べて暇が多い。その為、休暇気分で俺達は過ごしているのだが・・・

「昼間から酒盛りはないだろ・・・」

誰が持ちだしたのか・・・十中八九ラカン当たりだと思われるが、

「「「「・・・zzz」」」」

「おらあつしょ〜ご聞いてんのか！」

「あなたはいつも・・・聞いているのですか？まったく・・・」

「どうしてこうなった・・・」

年少四人組（シャルロット・アル・ニヤル子・クー子）は俺の周りですり寄って寝ており、俺は身動きが取れない状態、ナギは酔っぱらって俺の首をかくかくと揺らし、リアは何もないところを向いて俺（と思ってる存在）に説教をしている。

ちなみに周りには紅き翼の面々は居ない。厄介事に巻き込まれまいとして遠くで酒盛りをしているらしい。後でぶち殺す・・・！

「ふ・・・みゆ・・・zzz」

シャルロットはそんな声を上げて身じろぎをする。起きたかと思っただ、ただ膝に猫のように丸まっただけであつた。

「かつおぶし・・・zzz」

「素うどん・・・zzz」

「ネギ・・・zzz」

アル・ニヤル子・クー子の三人は同じ夢でも見てるのか？てか具がかつおぶしとネギだけって・・・哀しいな。

「わたしは・・・わたしはなあっ!!」

そんなことを思ってる間にもナギは首を揺らすのをやめて背中へばりついて泣く。なんだ？泣き上戸なのか怒り上戸なのかはつきりしうぜ。

「待たされるこっちの身にも・・・」

あっちはあっちでリアの説教が続いてるし・・・。そんなに俺は怒られるようなことをしてるのか？

・
・
・
・

皆目見当もつかんな。まあ今度やぶへびにならない程度に聞いてみよう。それよりも・・・今のこの状況どうにかせにやいかんな・・・。

とりあえず、布団を人数分出して寝かせる。ナギは泣きながら、リアは説教しながらこっくりこっくり首が揺れていたので慎重に寝かせる。

全員寝かせたら向かうは他の奴らの居るところ。さて・・・いこうか。

紅き翼のとある一日（後書き）

作：さて 山田太郎様 パパチャ様 鍛冶野 雅様 ユウト様
ロア様 ライ様 ご感想・アンケートの方ありがとうございます。

シヨウ：エヴァも大人気だな

作：だなあ……。まあそうなるであろうことは予測してたし、こ
っちの方が書きやすいけどな

シヨウ：初期段階ではそうだったもんなあ

作：色々やりすぎたせいでどうしようか迷った結果のアンケートだ
ったけどさ

シヨウ：ふーん、あとアレだ。前回俺がラカンとナギに使った道具
だが……

作：鍛冶野 雅様の思っている通り、『スタンプ・デッド』から持
つてきました！作者も中学の時に読んで嵌りました。面白いですか
らぜひ皆さんも！

シヨウ：ここは販促する場所じゃねえから

作：そだね。そろそろ本題です。これまたアンケート。『この作者
どんだけアンケートするつもりだよ！』とお思いの方もいらっしゃる
でしょうが、そういうのは心の中だけにとどめておいてください。
感想で送られると作者が凹みます。
さて、それではいきますよ？

カードキャプターさくら、化物語、電波女と青春男 e t c . . . (作者が思いついてない) をぶち込むか否か。一応それぞれ読んで『これ行けるんじゃない?』と思った結果です。他にもいくら読者様からのご意見の方もりましたが、入れられるのと入れられないものがあります。その辺はご容赦を。というわけで、

1 やっちなまえ! 作者!

2 これはいいが . . . こいつはダメだ!

3 ざけんな! バカ作者!

4 それもいいがこれはどうだろう?

の4択です。お願いします。

続いてアーティファクト。この前仮契約しましたが、アル「アジフ、シャルロットの両名が決まっております。そこでいい案がありましたらどうぞお願いします。他のも大募集です。

最後にヒロインですが、ドンドン意見をください。ついでにアーティファクトもあると嬉しいです。

以上3つのアンケートです。どうぞお願いします。

続・紅き翼のとある日常（前書き）

作：次のイベント消化したらアリカ様が出てくるからメインヒロインであるシャルロットに焦点を当てようと思ったのに・・・どうしてこうなったorz

シヨ：知らんがな。まあとりあえずどうぞ

続・紅き翼のとある日常

「貴様ら覚悟はいいか・・・？」

身体から真つ黒なオーラを発したシヨウゴが紅き翼の面々の前に現れる。その姿はまさしく魔王と呼ぶにふさわしい。

「お・・・おちつく」問答無用っ！！」

前に出てきたラカンが最初のターゲット。奴の腰をつかみ、

「ぬおりゃああー！！」

「ぐへっ！！」

バックドロップ。しかしそれで済むかよー！！

「せいっ！！」

二回。

「やあっ！！」

三回。

「とおっ！！」

四回目。そしてバックドロップの体勢から起き上がって再度ラカンの腰をつかみ、

「ラストォ！！」

ハイパーボム！ラカンは地面に犬神家の如く突き刺さった。

「さて、次は詠春の番だ」

「な!？」

反論する暇は与えない。桃色の魔力でできた紐でがんじがらめにする。

その状態の詠春を空に浮かべ、俺も合わせて浮かぶ。

手には先端に赤い宝玉があり、それを挟むように音叉状のヘッドがついている白い杖。

それを頭上に掲げると、俺の目の前にこの世界の魔法とは違う魔法陣が浮かび、更にそれを囲むように環状に桃色の魔力が伸びる。

それらの中心に元〇玉のような魔力の塊に流星の如く魔力が集まる。正直集まってる魔力の総量がこの世界の最上級魔法を超えた。詠春も絶望の色を顔に浮かべてる。

「これが私の全力全壊・・・!」

なにか字が違うとかそんなのは気にしないでくれ。

「スターライトォ・・・」

この魔法の名前を呼ぶ。こんなえげつない名前を付けた本編主人公には脱帽だな。

「ブレイカー!・・・!」

そして放たれる集束砲撃。千の雷をも超えるその光は詠春をたやすく飲み込む。

だが、これで終わるわけじゃないんだぜ!

「ブレイクウ・・・シュート!!」

ダメ押しでガシヨンガシヨンと柄に付いた魔力が込められたカールリッジより六発全部を上乗せして集束。ただせさえ勢いの強かったスターライトがえげつないものへと変化していた。

込められた魔力全部を消費したら、杖の排熱機構からカシユーと熱が放出される。詠春・・・お前のことは忘れない！

「さて次はゼクト」

詠春のことはさらっと流し、次なる標的へ。俺の言葉にビクウとなるが知ったことじゃない。杖を背負い、今度は黒いコート、それも顔が見えなくなるほどのフードがついたやつを着る。

「参る・・・」

チエーンを振るってゼクトを空へ。そこへマントの裾が槍のようになって連続突き。

「望み通りくれてやろう・・・」

誰も望んじやいないか思っではいけない。俺の周りに白い・・・そう塩の塊のような炎が浮かびゼクトに当たる。

「天から・・・お塩！」

技名は空耳。正式名称は知らん。ともかく白い炎に当たって再び舞いあがったゼクトに上からデ○ボールのような白い炎を叩きつける。

ズドーンとか、なんか凄い音がした気がするが、まあいいや。この世界じゃ日常茶飯事だし。

「そしてラスト・・・アル」

逃げる余裕はあっただろうが、逃げたらどうなるか考えた上でここに残ったようだ。すでに何かを悟りきった顔をしている。

「ギアを上げるぜ！」

身体に魔力を通す。

「カモン、スファイア」

両手の中に青い魔力の球体を生み出す。

右手のそれを前に突き出し、

「スファイア・・・！」

青い魔力光の砲撃がアルを飲み込む。それが収まろうとしていたが、

「ブレイク！」

左の追撃。再び溢れる青い砲撃。

そして、それが終わろうとしたとき俺はスファイアを残して飛ぶ。魔力を右足に集め、

「スライサー！」

右足を振るうと振るう軌跡に合わせてラストの砲撃が。それによってアルは吹っ飛ぶ。

周りにあるのは死屍累々な状況の紅き翼。まあギャグ補正がかかっているからどうせ無傷で終わるだろう。

一方前回ぐでんぐでんに酔い潰れていた女性陣。その中から立ち上がる影が二つ。

「うゝ・・・頭いてえ・・・」

「ふらふらする・・・」

ナギ、シャルロットの二人だ。どうやら二日酔いによる頭痛に苦しんでいるようだ。

「あれ・・・私達なにをしてたんだっけ？」

「・・・わからない」

最早記憶にも残らない程の量を飲んだようだ。一応この二人、お酒にはなれている。ただ前回は限界突破をしまったためこんな感じに。

寝起きに二日酔いで頭の働かない二人は水浴びでもしてしゃきつとしよう結論を出した。

そうときまれば行動！といわんばかりに歩きだし・・・頭痛によってしゃがみ込んだ。

紅き翼の面々が今回いる場所の近くには川が流れており、少し上流に向かえば滝もある。二人は滝の方に向かった。魔法で勢いを減らせばシャワー代わりにもなるという理由からだ。

ぼろっとしていたので彼女らは近くまでつくと適当に服を脱ぎながら川へと進む。服は後でまとめればいいや。と思いながら二人は川の中へ入り・・・

「あれ・・・？どうして二人が？」

「・・・へ？」

凍りついた。

「・・・」

訂正。一人は特に気にせず進み、シヨウゴの前までいく。

「お前・・・まだ酔ってるだろ。ほら、ちゃんとタオルを巻いて」
いつにもましてぼろっとした様子のシャルロットを支えながらタオルを巻いていく。その姿は娘を風呂に入れる父親のようである。

「キ・・・」

そんな二人とは違い、フリーズしていたナギが再起動を果たし、

「キ・・・？」

「キヤアアアアアア！」

シヨウゴの鼓膜を破らんとするような悲鳴を上げた。

幸い、近くにいるのは酔い潰れて眠っている面々と、逝っちゃってる面々だけなので俺の手が後ろに回ることにはなかった。

いやはや、シャルロットとよく入ってたから自分が同年代ってことを忘れてた。いつもは父親気分だしなあ。

ところどころ年相応な反応を見せるショウゴだが、基本的には親のような態度で接するため風呂とかそういうのは特に何も感じていなかった・・・というより、初めはシャルロットの姿にどぎまぎしていたが、自分の精神年齢を考えた結果、そんな思考に至る・・・というわけだ。

しかし、彼の外見は15、6。ナギ達とは同世代。あちらからしてみれば同年代の異性と一緒に入るというわけで。

シャルロットは自分の気持ちとショウゴの性格やらを考えた結果、恥じらいもクソもない感じになっている。が、ナギはその域に達してない。というわけでさっきの悲鳴につながる。

いやはや、こういうのは普通男子が女子の入ってる風呂に間違ってるのがセオリーというのに・・・ま、どうでもいいや。

「落ち着いたか？ナギ」

「あ、ああ」

とりあえず、肩に手を置いて深呼吸をさせ落ち着かせる。ちなみに別に服を着たりせず、俺は腰に一枚、ナギも巻きつけてる一枚のみ。

「ごめん、ちょっと驚いてさ」

少し落ち着けば、ナギは素直に謝った。先ほど大きな悲鳴を上げたことだろう。

「別に普通じゃないか？気にすることはない」
特に被害はなかったし。更に肉体的に強度が増したのか鼓膜が破れることはなかった。

「そうか」

「あっちの風呂沸かしてあるから入って来い。いつまでもここにいたら風邪ひくぞ？」

川から水を引いて魔法で良い感じの温度を保ち、汚れやら温度やらを元のようにして川に流す。という循環型の簡易温泉的なものを作ってた。結構上手くいって自身作である。川が近くにある時は毎回作ることしようと思う。

「カイトは？お前もずっといたら風邪ひくんじゃ」

「この程度で風邪をひくほどやわじゃないさ」

女の子は身体を冷やしたらダメなんだぜ？とも言っておく。

すると、ナギはシャルロットを連れてちょっと離れ、何かを話始める。

少ししてから顔が赤くなったナギと少し嬉しそうなシャルロットが戻ってきて一言。

「カ、カイトもい、一緒に入らないか？」

「はあゝ気持ちいい・・・」

ぐでぐんと身体を風呂の中で浮かべるナギ。お前さっきの恥じらいとか何処いったんだよ、といったいくらいの緩みっぷりである。

「・・・」

対してシャルロットも俺の膝の上でまったりしている。まあいつものことだから気にしない。後頭部が顔に当たるので右肩に顎を乗つけて俺もまったりする。

今は夕方くらいなので日が沈む様子が見られる。いつもは特に気にはしないものだが、こういう時に見ると美しく感じるのはなんなのだろうか。

ナギやシャルロットも夕焼けの様子に見とれている。

どれくらいたっただろうか。ぼくっとしているうちに夕陽も消えかかり、そろそろ晩飯の用意をしなければならない時間になってきた。

「二人はどうする？俺は上がるけど」

「ああゝ・・・またあとで入るから私も出る」

「わたしも」

ということで全員一緒に上がった。特に三人とも何も感じてない様子。もっかい言うが、ナギの恥とかの概念・・・何処いった！

続・紅き翼のとある日常（後書き）

作：さて さろう2世様 ロア様 式様 ご感想・アンケートあり
がとうございます！

シヨ：シャルロットのアーティファクトはいいものを教えてもらっ
たな

作：俺ジヨジヨはMADのネタかMUGENにでくる承太郎とD
IOしか知らんなあ。あと、式様。俺その小説一巻しか読んだ
ことないです。面白かったです

シヨ：どうにかするしかないだろ。というより今回の話・・・

作：MUGENのトーナメント見てたら書きたくなった。後悔はし
ていない。

シヨ：色々無茶すぎると思うんだが？

作：気にしたら負けだ。てか基本的に元のゲームとか知らんしな、
ラカンとゼクトに使った奴

シヨ：おい

作：皆さんも元ネタはわかりましたか？自分的には有名だと思うよ
うな思わないようなものばかりですが・・・

シヨ：どっちだよ

作：それはさておき、アンケートはまだまだ募集中ですのでよろしくお願いしますね！

シヨ：おーい

作：さて、次回はついにアリカ様登場！？までいきます！・・・行けたらいいですね・・・行けたらいいなあ

シヨ：もうチョイはつきりいけよ

作：では次回もよろしく！

シヨ：最後まで無視かよ・・・

グレート＝ブリッジ奪還作戦（前書き）

作：最近の学校のせいで作者の疲労とストレスがマッハ・・・

シヨウ：ここで愚痴るな・・・まあ本編をどうぞ

グレート＝ブリッジ奪還作戦

俺たちがバカンス気分で辺境の地の戦場を暴れまわっているうちに、連合はグレート＝ブリッジを奪われたらしい。

とりあえず奴らにはざまあwwwとだけ言っておこう。

あそこが奪われるのは色々と連合にとってまずいらしく、苦渋の選択といった感じに上層部は俺たちを招集した。

といっても、俺たちの配置は端っこの方で、中央は欲に目のくらんだアホどもの手勢で固められている。明らかに俺たちに手柄をとられないようにというのが丸わかりだ。

上のバカげた欲に付き合わされる末端の兵士たちにはご愁傷様、と言った感じである。

「やっぱり人間ってアホですねえ」

とはニヤル子の言。まあ、ちゃんとした奴もいるんだろうけど大体はそうなんだろうなあ、と俺も同意する。

「権力を持ったアホ程救いがたいものはないものじゃな」

これはアル。相変わらず、自分の氣に入らない者には毒舌全開だ。

「・・・シヨウゴはあならないでね？」

そしてクー子。大丈夫だ。俺にはそんな氣ないし、そんな権力を持つような機会はまったくないから。

とりあえず、

「ツモ。国土無双」

「まゝたシヨウゴさんの独り勝ちですか」

「まったく・・・何をやっても勝てんとは」

「シヨウゴ・・・素敵」

「ニヤル子、アル。そんな責めるような言い方をするな。クー子はありがとう」

「ジャラジャラ」と牌をかき混ぜながらそんなことを言い合う。ちなみに作戦開始10分前の行動がこれである。

「あと一局できるか？」

「というかこのままでも関係ない気がしますけどね」

「別に動かんでもせん滅できるじゃろうし」

「わたしたちが動く必要ない」

やる気のかけらがまったく感じられないという。正直シャルロットとナギは俺におぶさるように、リアは俺の隣に座りながら俺たちの対戦を見ていた。

「ラカンやアル、ゼクト、フォウ、エルザは少し離れたところでポーカー。ゼクトの一人勝ちのようで、ラカンが白い煙を上げている。そして、残った詠春は・・・」

「お前ら・・・まじめにせんかー！！！！」

俺らの行動にぶち切れていた。相変わらず真面目だな。この前のやつで桃色の砲撃がトラウマになったくせに・・・。

しょうがない。苦労人の詠春の為だ。少しは真面目にいきましょう

か。そう思つて麻雀を片付ける。

俺に合わせてニャル子たちも立ち上がり、

『アデアット!』

それぞれが得物を構える。ニャル子はサイコロにボール。アルはアンチマテリアルライフル。クー子は腕輪と機動砲台。シャルロットは白い本、リアはエクスカリバー。ナギは金色の指輪を左の薬指に。フォウは手脚甲。エルザは大砲。ラカンは斬艦剣。詠春は刀。アルビレオは胡散臭い笑み。ゼクトは無表情。

どこかおかしい部分があつたかも知れんが全力でスルーだ。

「よし・・・じゃあお前らいくぞ!!」

そう言つたナギの言葉で俺たちは駆けだした。

「じゃあ行きますよ!」

先手必勝とばかりにかけながら離れている敵兵めがけて手の中のサイコロをぶん投げる。か細い少女の腕から放たれたそれはソニックブームを発生させて敵兵を吹き飛ばしながら前へ進み・・・空から光が降ってきた。その範囲内にいた敵戦艦をも巻き込んで周囲を焼き払っていく。

「あゝ5の目がでたんですね。ご愁傷様です」

手をかざせばあら不思議。先ほどの惨劇を起こしたサイコロが手のひらに収まっているではありませんか。

ニャル子の使つたサイコロは出た目によつて効果が変わる。なんと

も気まぐれなものだが、本人はそれを気に入っている。『ロマンがあつていいじゃないですか！』とのこと・・・。

「次は妾じゃな」

そう言いながら身体に不釣り合いなほどのアンチマテリアルライフルを構え、

「ファイア
発射！」

弾丸を放つ。赤い軌跡を描き敵艦に着弾した時、灼熱の炎が上がる。

あのアンチマテリアルライフルは弾丸に魔法や、魔力そのものを使って放つ機構になっている。先ほどのアル自身の中に書かれているクトウグアの炎を再現する魔術を弾丸にしたもの。

人知の及ばぬ邪神の炎。高々人の張った魔力障壁程度で防げるほどのものではない。敵艦は塵も残さず消えていった。

「クトウグアの炎の使い方」

腕輪のついた右腕を横に一閃。その向こうにあつた敵艦群が燃え尽きた。クー子の腕輪は空間をつなげる能力があつて人を通すことはできないものの、魔法や非生物なものを通すことのできるもので、先ほどはクー子の炎を敵艦群の中に送り込んで一閃した。

「わたしも負けてられないぜ！『千の雷』！」

今まで魔法媒体として使っていた杖をボードのように使い、指輪のついた左手を前に出して無詠唱で千の雷を放つ。

ナギの指輪には持ち主の雷属性の適正と能力を高める効果があつて、元より雷が得意属性であるナギがそれを持つと、先ほどのように無詠唱で千の雷を放つことができるようになるのだ。

もうひとつ別の能力があるのだが、それはまたの機会に。

それを聞いたアルビレオとゼクトは「ナギのバグっぷりに更に磨きがかかったようですね（じゃな）」とか遠い目をしながら言っていた。

「わたしも行く」

白い本を開け、シャルロットは光に包まれる。光が収まると、シャルロットはスピードスケートのスーツみたいな格好になっていた。その格好になって、空中に氷の道を形成。その上を目にもとまらぬ速さで滑っていく。敵兵の真上辺りにつくと、

「コールドテスト・アース
極寒の大地」

敵兵の中に入って地面に手をつく。その瞬間、周りの敵兵はすべて凍る。

シャルロットの手にした本は氷に関する力を高める。どうやらシャルロットはハルケギニア式に準拠した力が上がるらしく、水と風も高まっていたらしい。

それ単体でも使えるが、先ほどのように全身をスーツで覆う別形態になることも可能。しかし、その時には氷の魔法以外は使えないという欠点もある。まあそんなことは関係ないと思える程の強さを持っているのだが。

「というか私たち必要ないですよね？」

アルビレオはシャルロット達の暴れっぷりを見ながらつぶやく。一応こいつも少し離れたところから重力魔法を放って敵を潰しているが、あいつらに比べると見劣りする。

「まあそう言うなって。俺らの援護射撃ないと危ないだろ？」
そう言いながら魔法の射手（という名の殲滅魔法）をぶっ放す。俺

たちが狙うのは大体あいつらの死角となりそうな場所にいるところや、射程外のところにいる兵に対してである。

ちなみに、ゼクトやらラカン、詠春、フォウにエルザらは現在中央や逆側のところへ救援に向かっている。

「カイト、私もう常識ってなんでしたっけ？って思い出しているんですが」

目の前の鮮烈な光景にSAN値がガリガリ削られている様子のアルビレオ。クトウルフにまつわるものが三人もいたらそうなるのも必須・・・なのか？

「正氣に戻れ、アル。少し向こうで休んでろ」

ここは俺が食い止める！とか死亡フラグを建ててみる。

「すみません、そうさせてもらいます。あと、あなたが死亡フラグを建てたところで叩きおられるのが目に見えてますから」

そんなことを言っただけでアルビレオは後方へ下がっていった。失礼な奴だ。俺だって死ぬときは死ぬんだぞ？人間なんだし。

しばらく殲滅戦を行っていると、何やら敵本拠地に大きな魔力反応が。推定ではナギの2/3位。

光の柱が空へと伸びて、その中から現れたのは・・・四肢を持つ人型で手足の形状は細く長い。首にあたる部分はなく、頭部は仮面のような無機質な形状をしているもの。その名も・・・

「サキエル・・・？」

俺の言葉と共にその小さいほうの顔から光線が発せられた。

グレートブリッジ奪還作戦（後書き）

ショウ：さて作者、最後のあれなんだ？

作：第三使徒さ

ショウ：なんで今出たんだ？

作：いや、人数多いから原作通りの状況だと味気ない終わり方をするから敵を増やしてみた。他にも色々候補はあったけど初めだしこいつで良いかなって

ショウ：・・・まあいい。お前の適当さは十分にわかってるさ

作：その言い方もどうかと思うが・・・

ショウ：当然の評価だ。

作：ひでえ・・・

ショウ：己の行動を考えろ。それではみなさん、また次回へ。

作：ちよっ！

グレートブリッジ奪還作戦 終（前書き）

作：久しぶりにPVとユニーク見てみたんだ・・・

シヨウ：どうだった？

作：PV 1 / 7 2 8 / 3 4 8 アクセス ユニーク 2 2 5 / 9 5 7 人
だった・・・

シヨウ：お前何時から見てなかったんだよ・・・。

作：うう、すみません・・・。

グレートブリッジ奪還作戦 終

「ってやば！」

咄嗟にシールドを軍の前面に張る。形状が六角形のATフィールドっぽくなっている。無意識にネタに走るとは恐ろしいな……。

とりあえずそのATフィールドもどきで防いだ後、最前線へひとつ飛び……する間に魔法によって拡声器と変声器代わりのものを生み出す。

『全軍に通達、これより大規模殲滅魔法を使用する。巻き込まれない者は速やかに後退せよ。繰り返す……』
声のもとはこの作戦の前に聞いた総司令の声。それを分身も使って連合の全兵に伝える。紅き翼にも別に念話で後退するよう伝えておく。

兵が後退するのを上空から見つつ、サキエル（暫定）の攻撃を防ぐ。合間に千の雷とか放ってみたが、ATフィールドによって無効化。絶対領域は伊達じゃないな。

初号機を創って無効化も面白そうだが、そんなことしたらこの橋が吹き飛んでしまうので自重せねばならない。

そんな感じに時間稼ぎを行っている、紅き翼の面々が現れた。

「何しに来たんだ？お前ら」

逃げるように言ったのに。そう思っただけの発言だったが、シャルロットやナギ辺りから一発殴られる。ご丁寧に魔力による強化の拳で。

「また一人で何とかしようとする。少しはこっちも頼ってほしい」

「マリ안의言うとおりだぜ。何でもかんでも一人でやろうとするな！」

シャルロットとナギの言葉に頷く他の面々。いやはや・・・そこまです断行動多かつたっけ？

まあここまで真剣そうな顔で言われたらそうなんだろうな。反省は後ですとしよう。ひとまずアレ片付けてからだ。

「あいつにはアブソリュート・テラーフィールド。通称ATフィールドが張られている。というか今俺が使ってるこれな」

話している間にもサキエルからは光線が放たれるが、俺の張ったATフィールドもどきによって防がれている。

「この強度はどれくらいなんです？」

ニヤル子が俺のATフィールドをさしながら言う。

「千の雷が当たってもびくともしない程度の強度」

そう言った瞬間、紅き翼の面々は表情が強張る。それも無理はない。この世界での最上級魔法でびくともしないとかどうしようもないかな。

「それってどうするんだよ？ 私たちで一斉攻撃でも食らわすのか？」
確かにナギの言うとおりここにいる全員で一斉に攻撃したら確実に吹き飛ばさるうが・・・

「お前はここら一帯を消滅させる気か？」
俺らが本気で一斉攻撃なんてしたら大変な破壊力だ。というかこの橋すらも消滅させたら何のためにこの作戦が実行されたのかわからなくなる。

「じゃあどうするのですか？ 策があつてそんなに余裕そんな感じでいるのでしょうか？」

「アンジェラ、いい質問だ。作戦はこうだ」

俺突っ込む↓ A Tフィールド中和↓後は適当に攻撃。そう言ったらまた殴られた。

「わたしたち必要ないじゃないですか！」

「何を言うニヤル子。もし俺が攻撃できない状況だったらどうすんだ？」

「そんな状況来ることがありませんよ！」

そんな決めつけるように言うなよ・・・そして周りの奴らも頷くな。

「まあなにを言おうがこれ以外に手はないから・・・行くぞ」

答えは聞かずに走り出す。瞬動で一氣に近づいてフィールド全開。中和する。

その間にもサキエルは光のパイルやら光線を出してくるので地味に前に進めない。千の雷を放ってみるもかき消されるし・・・。

やべえ・・・この辺吹き飛ばしてでもこいつ消し去りたい。と若干理性が吹き飛びそんな感覚を持ちかけた時、空間に隙間が開いて、そこからクー子（のだと思う）炎が飛び出してくる・・・俺を巻き込むようにして。

慌てて空へと飛びあがる。危うく燃やされるところだった・・・。

下を見ると、サキエルはクー子の炎を喰らって大分消耗しているようだ。いくなればN2地雷喰らった位に。

むう・・・まさかクー子の炎で燃え尽きんとは。まあ逆に考えれば

今がチャンスである。

空に魔法陣を描く。サキエルを覆える位の大きさである。

「七つの星に裁かれる!」

サキエルの周りに六本、そして中心に一本の光が差し、

グラン・シャリオ
「七星剣!!!」

地面を、橋を、水を、全てを吹き飛ばす。もちろんサキエルも・・・あれ?橋が・・・

「やべ・・・」

爆発の余波の煙で周りからは何も見えない状況。ささつと気付かないうちに修復。威力をサキエルの位置に集束したおかげか一部分だけが吹き飛んだだけで済んだので余波で煙が晴れるまでには直せるだろう。

そして、煙が晴れ・・・皆から一発ずつ殴られた。いたい・・・。空中だが、その場でうずくまる。

「また独断専行しやがって!」

バチバチと身体から雷をほとばしらせるナギ。お前はどこのビリビリ中学生だ?

「少し・・・頭冷やそうか?」

周りに冷気を集めるシャルロット。その言葉は物理的に冷やす時に使うわけではないぞ?

「それとも燃えてみる?」

機動砲台を侍らせるクー子。そんな両極端な選択肢は嫌だ。

「ねえ、いまどんな気持ちですか？ねえどんな気持ち・・・？」
チエーンソーを持ってその腹でぺちぺちと叩くニヤル子。刃が当た
りそうで怖いからやめてくれ。

「このうつけが・・・」
毒を吐くアル。どうやら本気でキレているらしい。

「一度死ねば治りますかね？ええ任せてください。苦しみなど与え
ず一瞬で・・・」
目からハイライトが消えてるリアがエクスカリバー片手にいう。そ
んな死ぬときの配慮なんぞ要らん。

他の奴らからも同じように責める目・・・いや、ラカンだけが大笑
いしてる。後でぬつ殺す・・・！

『聞いているのか（のですか）！』
あゝ・・・わかったからそんなに武器を向けなくて向けないで！！

グレート＝ブリッジ奪還作戦 終（後書き）

作：さて さろう2世様 コタロウ様 かりんとう様 ご感想・ご指摘ありがとうございます。さろう2世様、ありがとうございます。学年末が終われば平穏が待っていると思って頑張ります！

シヨウ：で、お次はコタロウ様からだな

作：これはアニメを見るか小説を讀つかせにやらんかな？検討はしてみます。最悪wiki先生頼りになる可能性もなきにもあらずですが・・・

シヨウ：おいおい……。で、最後はかりんとう様からだな

作：説明不十分でしたか……。うゝむ……。地の文を増やすか？とりあえずこれからは気を付けていきます

シヨウ：で？サキエルは一話で退場か

作：・・・別のやつを出すときは活躍の場を与えるさ

シヨウ：最悪だな

作：そ、そんなことより！今回のこの話でプロローグからちょうど50部目です！

シヨウ：逃げたな……。まあいいか。よかったな、ここまで書けて。途中放り投げてたもんな？

作：うぐっ……。あんなことがないよう気を付けますよ……。ここまで続いたのは読者の皆様が読んで下さる方がいらっしやったからです。これからもどうぞよろしく願いします

シヨウ：それに伴いアンケートだそうだ

作：はい。なにか書いてほしい番外編とかあったら言って下さい。本編と並行して作りますんで

シヨウ：自分で考えろよ

作：思いつかないんだよちくしょー！！

シヨウ：逆ギレすんな！ええい！作者が暴れ出したんでこの辺で！次回もよろしく！

作：うがー！！

アリカ王女との会談（前書き）

作：うぼあゝ一カ月ぶりですねみなさん

シヨウ：遅れた理由は後書きにて。ではどうぞ！

作：ようやくのアリカ王女です！

アリカ王女との会談

・グレート・ブリッジ作戦から俺たちは各地で暴れ回った。主に女性陣が、だが。俺やラカン、詠春にアルビレオやゼクトも普通の兵士に比べれば比にならないほどの活躍だったが、やはり彼女らに比べれば霞む。まあラカンは大男で斬艦刀を振り回してたし、詠春は唯一日本刀を使って、しかも真・雷光剣などという大規模魔法に匹敵するものを放ちまくってたから男性陣の中でも目立っていたが。おかげで、俺とアルビレオ、ゼクト以外の奴らには二つ名がついた。どれも厨二病過ぎて心底俺にはつかなくて良かったと思う。きっとそのうちそれらに関しては本編で出ると思う。後、途中で仲間も増えた。名前はガトウとタカミチ。元は捜査官らしい。

まあそんなことは置いといて。今日はガトウが協力者がいるとか言っただけで本國首都までやってきた。そんな大勢はいらないというので俺は観光に出ようかと思ったのだが、強制的にナギに出席させられた。最近扱いがひどくないか……？

現在ここにいるのはナギ、アルビレオ、詠春、ラカン、ゼクト、ガトウ、タカミチ、そして俺。他の奴らは宿で寛いでたり、街に出てくるとか言ってた。俺もこんな面倒なところじゃなくてそっちに行きたかった。

協力者との会談場所についてもぶつぶつと愚痴を呟いていると、どうやら協力者がやってきたらしい。そして出てきたのはおっさん。どっかで見たことがあるが……確か名前は……

「マクギル元老院議員！」

そうそうそんな名前。だが、本人が言うには違うらしい。

そういった後、マクギル元老委員の後ろにある階段から左右に護衛を待らしたローブで顔をすっぱり隠している人物が上ってくる。そして、俺たちの前まで出てきて、ローブをとる。

「ウイスペルタティア王国・・・アリカ王女」

マクギル元老委員が言つとそのアリカ王女はローブをとった。長い金色の艶々な髪、多少釣り上がった青いサファイアのような瞳。ふむ・・・なかなか綺麗な人だな。

彼女を見ながらそう思っているとなカカンが彼女に近づいて行く。まあ女好きだししょうがないか。

「ほ・・・あんたがアリカ王女ねえ」

「気安く話しかけるな下衆が」

・・・きつつい性格の持主のようだ。無表情でラカンはそう言われてカチンと固まっている。ナギはそれを見て大爆笑していた。

その様子を眺めていたら横のほうから視線を感じる。見れば先ほどと寸分の変わりようもない無表情でこちらを見つめてくる。こちらと目があっても変わらない。

なんとなく目を外したら負けのような気がしてこちらもじじじっとな見つめ続ける。

どれくらい経っただろうか。いや言うほど時間は経ってないが。せいぜい3分もたつてれば長いなあというところ。あちらがやめるまでまでこちらも逸らす気はなかったのだが、爆笑していたナギがいつの間にか俺の隣にきていて、脇腹をつねられた。初めはそのまま目線をそらさずに話しかけていたものの返答は脇腹のつねる力が強くなっただけだった。

それでも俺はそれに耐え続け、ついに、アリカ王女は俺から隣のナギに視線を移した。

っは！勝ったぜ！とドヤ顔をしたらナギに殴り飛ばされた。

「お前私と呼んでるのわかってたよな？」

イイ笑顔で指をパキポキ鳴らしながら言うナギ。このままでは追撃のグランドヴァイ・・・じゃなくて千の雷とかが飛んできそうなので、

「アリカ王女というVIPの前だぞ。おとなしくしなきゃだめだろう」

と正論を言ってみる。そしたらナギの額に青筋が浮かんで口パクでこう言った。

『あ・と・で・お・ぼ・え・て・ろ』

どうやら死刑フラグが立ったようだ。調子に乗りすぎた・・・。軽く絶望してたら、ふと影が。みると、目の前にアリカ王女の顔があり、

「大丈夫か？」

と心配された。表情は変わってないが、眼には心配しているような色が見える。とりあえず問題ないただけ答えて立ち上がる。殴られた時にボグシャアツ、と人の身が鳴らしてはいけない音が鳴っていたが、特に頭が陥没したとかはない。

「ありがと心配してくれて」

とりあえず目の前に立っているアリカ王女にお礼を言う。敬語じゃないが大丈夫なのだろうか。

「いや、当然のことであろう?」

俺の言葉に軽い笑みを浮かべながら答えるアリカ王女。無表情のキツイ性格の人かと思っていたがどうやらそんなことはないらしい。

とりあえず自分の中でのアリカ王女の評価を変えてから、ナギのことどうすっかなあと思考を巡らせ始めた。

・顔合わせも終わり、宿に帰る途中、

「わははは!うまくやりやがって!」

そう言つて俺の肩をバシバシと叩くラカン。声が大きく煩いうえになんとかイラツとしてしまったので殴り飛ばす。

「ああ?何がだよ」

殴り飛ばした手を払いつつラカンに声をかける。どうせこの程度じやダメージにもなりはしない。現に吹っ飛んで行つたはずのラカンはすでに戻ってきている。

「なにつてアリカ王女のことだよ。お前だけじゃねえかあんなにイチヤイチヤキヤキヤおしゃべりしてたのはよ!」

うぜえ・・・なんだこの中年のおっさんみたいな絡み方をしてくる奴は。今度は本気で殴り飛ばしてやろうか。

「しかもお互い名前を呼び合う?こりゃ脈があるな!お前どんだけ女をはべ」

俺が内心物騒なことを考えている間にもラカンは喋りつつけるが。

そこまで言ってラカンはどこかに吹き飛んで行った。俺は元凶のほうを見る。そこには、拳を振りぬいて体中からバチバチと電気をほとばしらせているナギの姿。逆方向をみると飛ばされたラカンが湾をはさんで向こう側の街にまで飛んで行く様子が見える。

その威力に俺はラカンの冥福を祈っておく。さらばラカン永遠に。胸の前で十字を切る俺に詠春やアルビレオ、ゼクトは苦笑い。まあ気持ちはわからないでもないと言ったところだろう。アルビレオの場合なんか他にも邪悪なオーラを感じるけど。

ラカンのことは放っておいて、どうしてもかはわからないが怒るナギを俺はどうにかする事にする。

「落ちてけナギ。どうした？」

「・・・わからねえのか」

こわっ！めちやくちゃドスの利いた声で言うナギ。前髪が垂れて・・・ってリアと同じ感じがするんだが・・・。

「ああそうだな。お前は全然わかってない」

ふふふふふふ・・・と低い声のまま笑うナギはぶっちゃけ怖い。どうすりゃいいんだ？助けを求めるべく他の奴らを見る。すると、アルビレオはニヤニヤ笑いながら念話を飛ばしてくる。

『ふふ。ナギはあなたがアリカ王女と仲が好さそうにしてたのを見て嫉妬してるんですよ』

ふむ・・・。あれか。兄をとられそうになった妹、みたいな感じなのだろうか。ふふふ。可愛いじゃないか。

「すまんナギ。機嫌を直してくれ」

こぼれる笑みを隠そうともせずに俺はナギに言う。するとナギは考

え込むようなしぐさをし、

「なら・・・買い物に付き合ってくれるか？この街にいる間に」

「その程度なら別にお安いご用さ」

「そ、そうか。なら頼むぜっ！」

笑みを持ってナギのお願いを快諾する。そうすると、ナギは顔を赤くして宿のほうに走って行く。急にどうしたのだろうか。そう思うものの結局わからないので考えるのをやめた。というか早く帰らないとな。他の奴らに約束させられたし。

そう思っただけ俺もナギの後に続くように走って宿に向かった。そして、出迎えは黒い瘴気を立ち上らせる一同。

どうしてだ・・・？

原因は分からず、あれよあれよという間に全員と出かけることが決定していた。

まあ皆の機嫌が良くなるならいいけどさ。俺がそんなことを思いつつも今日は過ぎて行く・・・。

アリカ王女との会談（後書き）

作：まずは h a k i 様 ご感想ありがとうございます

シヨウ：色々と書かれていたようだが？

作：うん。その辺は番外編とかちよくちよく本編に入れようかと思っています

シヨウ：さて、遅れた理由といこうか作者・・・

作：体調不良と学年末テスト、後は内容が思いつかなかったり二つ名どうしよっかなあと思ってたりしたら・・・マジですみません

シヨウ：前二つは許してもらえるかもしれんが後の二つはダメだろう・・・

作：しかも明らかにダメだろこれは・・・ていう二つ名しか思いつかなかったから濁したしね

シヨウ：どうすんの？

作：・・・誰か思いついたりした人はどしどし書いてください。真面目っぽいからネタまで何でもあります。ほんとよろしくお願いします

シヨウ：もしなければ作者の最悪な二つ名が流れることになるので

作：あうう・・・

シヨウ：まあこんな作者ですが次回は一週間以内にあげられるはず
です

作：とりあえずアリカ王女とのイベントです。お楽しみに。

姫様の護衛（前書き）

作：今日は名古屋から携帯にて投稿のため感想の返信は次回にて

姫様の護衛

・とりあえずあれから色々動くことになった。俺、ラカン、ナギを残して他の皆は情報収集へと回った。

理由はラカンは馬鹿だから。ナギはアンチヨコをやめて呪文を覚えようと修業をするらしい。

で、残った俺はというと・・・

「あれはなんじゃ？」

「あれはアイスクリームだ。冷たくておいしいけど・・・食った事ないのか？やっぱ」

「うむ」

「食べてみるか？それなら買ってくるけど」

「いや、私も一緒に行こう」

こんな感じにアリカ姫の護衛（という名の遊び相手）である。今までほとんど王城から出たことのないアリカ姫にとって街に存在するものすべてが珍しいらしく政務をこなしている時以外はほとんど街中の散策に連れ出されている。俺としても楽しいのでいいのだが、帰った後の皆の反応が地味に困る。ラカンは中年のおっさんのごとくうざく、アルは何かニヤニヤしてこちらを見て、女性陣は不機嫌なオーラを隠そうともしない。それらを外から見守る詠春やゼクト、フォウにエルザ。生温かい視線が実にイラツとくる。

「どうかしたのか？」

おっと。先ほどまで考えていたことが顔に出ていたみたいだ。

「いや、ちよつと考え事だ」

俺の答えに、そうか。といった後、また色々指をさして聞いてくる。それに俺はわかる範囲で答えつつ、二人で首都を歩き回った。

さて、先ほどまでの和やかな雰囲気から一転。現在大変な状況に陥っている。

「大丈夫か？アリカ姫」

「うむ」

現在俺の腕の中にアリカ姫はおさまっている。そして周りは崩れ落ちた建物。いきなり飛んできた大規模魔法のせいである。とりあえず人的被害は抑えたものの、衝撃で建物が損壊した。

「まあでも敵さんの捕捉はできたし」

潰しに行きますか。そう思ってまずはアリカ姫を避難させておこうかと思っただが、

「まあまあ。私も一緒に行こう」

俺の服の袖をつかんで止める。いやあんたね・・・。

「自分の身分を考えて行動してくれ。あんたになんかあると困るのはこの国だぞ？」

「心配せずともそのようなへまはせん。私の魔法も役に立つはずじやぞ？」

むう……まあウィスペルティア王家の魔力は他とは違う物みたのだが……

「それに時間がないのじゃからさっさと行動して潰したほうがいいじゃろう」

「はあ……しょーがない。俺から離れるなよ？流れ弾に当たるかもしれないからさ」

「うむ」

そうとなれば善は急げ。さっさと潰しにいこう。そう思った俺はアリカ姫を抱えたまま捕捉した敵のほうへと飛んだ。

「で？そのまま敵の本拠地を潰しに行ったと？」

「そーだよ。アリカ姫が付いてきたのは自分の意思。別に俺が連れまわしたわけじゃない。ちゃんと説得したうえでこれだからな？俺が怒られる筋合いはないはずだ」

「いや、そこはお前どんなことを言われようと避難させるべきだろくに」

「いやいや、俺には姫様に逆らうような度胸はないさ」

「どの口がいうか・・・」

結局敵の本拠地を潰しに行ったら朝帰りになった。最近戦場で暴れてなかった分俺も暴れられたし、アリカ姫もストレスがたまっていたのか、どこからかとりだした西洋剣を振り回して敵を薙ぎ払っていた。比率としたら俺：アリカ姫＝6：4くらい。そのことについて詠春に怒られそうになっていたので先に事情を説明したのだが、そんなに意味はなかった。呆れながらも説教をする詠春。さすが紅き翼の常識人。

そんな感じに詠春と話していると、

「詠春さーん！」

ガトウの弟子であるタカミチ少年がなにやら興奮した様子で部屋の中に入ってきた。

「あの怖い冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニッコリ・・・。僕びつくりしちゃって・・・あ、なんかカイトさんにお礼を伝えて、だそです。確かに笑いましたよねっ?！」

「うむ。驚いたのじゃ」

タカミチ少年の言に後ろから一緒に入ってきたゼクトも同意する。しかし、

「タカミチ少年。王族である相手にずいぶんないようだな?誰かに聞かれたらどうするんだ?」

確実に不敬罪で首が飛ぶと思う。ハルケギニアよりはゆるいだろっけど冷血お姫様はないだろ・・・。

「あっ!え、いや!その・・・」

俺の言葉に赤かった顔が一気に真っ青になる。落ち着いたら自分が

言ったことの大変さに気づいたらしい。冷や汗がたらたらと流れている。

「まあ落ち着けタカミチ少年。別にそう思うのも無理はない。俺も第一印象はそれに近かったからな」

あの姫様は交渉の席でもあんな仏頂面なのだろうか。もしそうならヤバイだろ。交渉ごとはいかに相手と円滑に関係を作るかがキーポイントなのに。いきなり非友好的に見える態度はどうかと思う。

「お前も十分不敬罪ものだよ」

詠春は何か呟いたようだが俺には何も聞こえなかった。そう聞こえなかったのだ。

とりあえず俺はパニックっているタカミチ少年に深呼吸をさせて落ち着かせ、話が終わってから差しだそうと思っ
て懐にしまっておいたものを詠春に差し出す。

「これは？」

「ん？証拠品」

小さな巻物になっている証拠品のひもをほどくと立体映像が出てくる。そこに映っていたのはメガロメセンブリアのナンバー2が誰かに話しかけているものであった。

「それじゃ行ってくる。そっちは頼むぜ」

俺は他の仲間の奴らにそう言う。

「そつちも気をつけてな」

「無茶しないように」

「そうですね。カイトはすぐに自分の身を危険にさらしますから」

「やはり妾もついて行ったほうがいいじゃろうか」

「まあ何を言おうが私たちは拠点でお留守番ですけどね」

「・・・もぐもぐ」

上からナギ、シャルロット、リア、アル、ニヤル子、クー子である。クー子は行く前に作ってやった肉まんを食べている。

紅き翼はこれからマクギル元老院議員のところへ俺がこの前見つけた証拠を届けに行く。これにより連合は戦意を煽る者がいなくなり停戦。で、アリカ姫が帝国の姫様にこのことを伝え帝国も停戦状態に持つて行くらしい。

そして、俺の役割はアリカ姫の護衛。会談の場に近衛兵は連れていけないので俺を連れていくらしい。俺の素顔はバレてないし、お付きの人みたいな扱いになる。

それからいくらか会話を交わした後、お互い目的地へと飛び立った。

あれから数刻。アリカ姫が用意したボロボロの中古船で会談の場へ到着した。途中、俺が普段着（ジャージに旅人のローブ）のまま

あることに気がついたアリカ姫がどこからかとりだしたメイド服を着るように言ってきた。

何故メイド服！？と思わずにはいられなかった俺は「他の服はないのか？」と聞いてみたものの、

「お主の容姿からしたらこちらの方が妥当であろう？それに敵がお主をただの女だと認識すればより不意がうちやすかるう？」とのたまわれた。俺としてはスカロン亭以来の悪夢再来は嫌だったのだが、時間の問題もあって無理やり着せられた。

俺が内心ルールル・・・と涙を流しつつ顔には笑顔を貼り付けている間にも時は進み、

「ヘラス帝国第三皇女、テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじゃ」

「ウェスペルタイア王国、アリカ・アナルキア・エンテオフシュア。今回はこの会談を受けていただいてありがたく思う」

「いや、こちらとしてもこの戦争はどこかおかしなものを感じる。それにこれ以上続けても民を疲弊させるだけじゃからな」

こんな感じの挨拶から帝国の姫様とアリカ姫の会談がはじまった。どうやらアリカ姫は公の場合ならば表情を作れるようだ。表向きだけど。まあ俺が思ったような事はしないらしい。

さて、二人の話を盗み聞く限り帝国にも相当数の完全なる世界が入り込んでいるようだ。しかも両国とも過激派のトップから下が。しかし戦争を起こして何をする気だ？死の商人？それが妥当な線だろうがまだまだ情報不足。決めつけるにはまだ早いな。

個人的感情は今横の方に置いておいて、姫様二人の話を聞いて有

用そんな情報だけを覚えつつ周りを警戒する。

まあ何かが来たとしても命の危険がない限り下手に動けそうにないが。

会談の途中、あちらからだろうか。姫様二人の前に紅茶が置かれる。さっと視たところ魔法的なものはかかっていない。薬だったらヤバいが。それに備えて神力でアリカ姫の毒物に関する耐性を上げておく。帝国の姫様が気にした様子もなく飲んでいるので心配はないだろうが念には念をというやつである。

と思ったのがフラグだったのか、

「・・・zzz」帝国の姫様が急に机に突っ伏して眠り始める。ゴツンとなった額は痛そうだ。

まあそんな軽口を言っていなければやってられない。何故ならこの付近に大量の転移魔法の反応が感じられたのだから・・・面倒臭え。

血の嵐（前書き）

作：またもやほぼ一カ月

シヨ：そろそろ見捨てられるんじゃないのか？

作：うぐっ・・・

血の嵐

・転移魔法の反応を感じた瞬間、ドアから鎧を着けた奴らが大量に入ってくる。各々槍やら剣やらを俺やアリカ姫、テオドラ姫、そのお付きの人に突きつける。

とりあえず、どういう意図でこのようなことをしてきたかが知りたいため、顔に恐怖の表情を浮かべて涙目にしておく。

アリカ姫もいつもの無表情のままおとなしくしている。のんきに寝息を立てているテオドラ姫がうらやましい。

部屋内を完全に制圧された時、ドアが開いて一人の男がはいってきた。姿としては豚肉の原材料といえばわかるだろうか。服装から見てこいつらの上の地位にいる奴なのだろう。

「ご機嫌麗しゅう姫殿下方」

「何が目的じゃ」

「いえ、別にどうもしませんよ。ただしばらくはとある場所で過ごしていただくようになりますが」

要するに戦争を止めようとするこの二人が邪魔だつてことか。それならナギたちのほうにも妨害か何かをやられているかもしれない。

「お前ら、姫殿下らをあそこへと連れて行け。丁重にだぞ」

豚が周りの奴らにそう言っていると、兵士らはアリカ姫とテオドラ姫を連れて部屋の外に出て行った。

「この者どもはどういたしますか？」

部屋の中に残された俺とテオドラ姫のお付きの人。その処遇をどうするのか兵士の一人が豚に聞く。

「ふん、お前らの好きにしろ。こ奴らに用はない」

そう言つて豚は部屋から出て行つた。それと同時に兵士たちの鼻息が荒くなる。

「へへっ隊長・・・好きにしていいますよね？」

「ああ。思う存分やれ」

その言葉を聞いたときテオドラ姫のほうのお付きの人の顔が恐怖の色に染まる。ま、俺もこんな奴らに襲われるようなことはごめんなので。

「目を閉じて耳もふさいでろ」

そう言つてから背中の手をまわしてナイフを創る。それに加えて無詠唱で魔法の射手を遅延待機させておく。

「怖がるなよ嬢ちゃん達。すぐに気持ち良くなるさ」

そう言つて近づいてきた奴が俺に手を伸ばした瞬間、

ブシャアアアアア・・・

「え・・・？」

首が飛んで、その断面から血が噴水のように飛び出る。その死体を蹴り飛ばし、次の獲物へ。俺達の周りにいる奴の首を片っ端から跳ね飛ばす。

「う、うわっ・・・！」

ここまでに数秒。俺の周りの奴らの首が全て跳ね跳んだところで相手はようやく事態を認識する。だが、それも時すでに遅し。叫び声をあげそうになった奴から待機していた魔法の射手で頭を跡形もなく消しさり、その光景に目を向けている他の奴らの首を跳ね飛ばしたり消し去ったりした。

とりあえずこの部屋の制圧は終わった。この事態がばれるまでにあの豚のところに行ってアリカ姫らの行き先を調べないといけない。

その前にテオドラ姫のお付きの人のところへ行く。彼女は部屋の隅でガタガタ震えたままいた。声をかけても反応はなく、どうするべきか考える。時間はあまりない。かといって記憶操作などの処置は俺自身がやりたくない。

ので、彼女の周りに認識阻害と五感阻害、対物理魔法の結界を張っておく。これでこの娘はいると認識されないし、すすり泣きなどの音も聞こえず、触れず、見えず、ばれることもない。魔法が飛んできたりこの部屋が崩れたりしようとも無傷で済むだろう。情報収集が終わったら回収することにする。

・返り血で真っ赤に染まったメイド服からいつものジャージ&ローブの姿になる。やはりこちらのほうが安心感がある。

やたら権力を振りかざす者たちは高い所を好むと思った俺は上を目指して走り出す。途中で出会った巡回中の兵士どもは全て一見敵必殺（サーチ&デストロイ）。ことごとく首を跳ね飛ばしていく。

このロープは意外とお気に入りのなので返り血を浴びないように注意しつつ廊下を進む。俺が通った後にはおびただしいほどの赤い血で染まる。

それらを気にしないように進み、ついに豚がいるであろう部屋にたどり着く。扉は他のものよりも重厚でいかにも指令のような存在が居そうな部屋である。

その扉を俺は蹴破る。扉は引き戸だったのか、つながっている壁も巻き込んで盛大に倒れ土煙を起こす。

「だ、誰だ！」

突然自室の扉が蹴破られたとなればそれはそれは驚くことだろう。無様にもうろたえている豚に向かって俺は歩く。手には血の滴るひと振りのナイフ。一步一步進むごとにカッン、カッンと音が鳴る。豚には俺の姿が見えてないだろうからわざと足音を立てる。奴にはこの音が死神のやってくる音のように聞こえることだろう。

「お、お前は・・・！」

煙が晴れ、俺の姿が奴の目に映る。どうやら俺の姿を知っているらしい。

ま、でもそんなことは知ったことじゃない。

「お前はここでおしまいだからな」

「なにを・・・」

「ご愁傷様」

奴が言葉を発し終える前に氷の槍に貫かれる。倒れる奴の後ろには

青い髪のシャルロットが現れていた。

ぶつちやけてしまえば仮契約カードで念話を飛ばした後、召喚した
だけなのだが。

「無事？」

シャルロットは近づく俺にそう声をかける。

「ああ。そつちも無事か？」

「みんな隠れ家に向かった」

「そつか」

そこまで言葉を交わした後、俺は感謝の気持ちも込めてシャルロットの頭を撫でる。気持ちよさそうに目を細めている彼女に癒されつつ、死体となった豚の頭から必要な情報のみを読み取る。禁術扱いである魔法だが気にしない。ばれなきゃ罪じゃないのさ。

一分もしないうちに必要な情報が見つかった。どうやら彼女達はすでに夜の迷宮と呼ばれるところへ運ばれているらしい。無駄に行動の速い奴らだ。

「見つかった？」

「ああ。まあ特に問題はないからすぐに行こう」

名残惜しいがシャルロットの頭から手を離す。そして、足を振りおろして床をぶち破る。

それと同時に横のシャルロットの腰に手をまわして抱く。

いくらか床を蹴破ってたどり着くのはテオドラ姫の付き人のところ。

いまだに結界内で震え続けている。

これはしばらくは治らないかも。と思い、彼女の額に手を当てて強制的に眠らせる。起きる頃には落ち着くことだろう。

彼女を背負い、シャルロットを連れて隠してあるオンボロ飛行船の
ところに向かい、俺らは夜の迷宮に目指して飛び立った。

血の嵐（後書き）

作：ライ様 さろう2世様 オーギル様 ご感想、二つ名ありがとうございます。

シヨ：取り合えずですが、このアホ作者は地震とは全く無縁の地域に暮らしているので今回遅れたのはこいつ自身のせいです

作：まったくもって申し訳ないです・・・

シヨ：遅れた理由としてはふと考えたがエンディングが決まっていというもの。それについて悩んでいるうちにまったく関係のないこと（いろんな小説の二次小説の妄想とか）を考えついたりして、結局この悩みが解決されないという始末。結論からいうと真正のアホです

作：ほんと言い訳できません・・・

シヨ：結論が物語が進めばおのずと決まるかな、とのこと。死んだ方がいいのでは？

作：・・・

シヨ：とまあ、作者のアホ話は放っておきましょう。きっと次の話は早く上がることでしょう。皆様も感想でもご指摘でも何でもよろしいのでプレッシャーをかけてやってください。追い詰められないと宿題もできないような奴なんで

作：・・・

シヨ：…どうやら作者はただの屍となったようです。これではどうしようもない。皆様また次回でお会いしましょう

世界の敵（前書き）

作：お久しぶりです皆様。とりあえず今回はささ々と本編に行こうかと。それではどうぞ。

世界の敵

・アリカ姫達が囚われている夜の迷宮。そこから数キロ離れた場所に俺とシャルロットは立っていた。

双眼鏡を作つて、見れば巡回中の兵士がうじゃうじゃといる。外にそれだけいるのなら中にはあまりいない・・・と思いたい。

「どうするの？」

俺と同じように双眼鏡をのぞきながらシャルロットは言う。いくらか策はある。

1 見敵必殺（サーチ&デストロイ）

スニークングミッション
2 隠密行動

3 粉碎 玉砕 大喝采

言つておいて何だが3は却下。アリカ姫たちも巻き添えを食らうことになる。

となると1か2になるわけだが・・・さっき見敵必殺をやったわけだし今度は隠密行動でいつか。逃げるときは転移すればいいし。

となると必要なものは・・・

「はい、シャルロット」

「これは何？」

「手に持てばわかる」

そう言って手渡したのは内部を見ることができる透視魔法のついた望遠鏡とトランシーバー。

それらに手に取れば使い方がわかるように概念を込めた。

シャルロットがそれらの使い方を覚えている間にさつと俺は着替える。

緑色のバンダナに迷彩服、無限バン。ナ、レーション他もろもろ・・・。

そう、知る人ぞ知るあの人へとなりきるのだ。武装はチャフ（魔法にも対応）と麻醉銃。スニーキングだからな。

CQCも使えばいいのだが無理なので普通に首をキュツと捻るだけにしておく。

「準備は？」

「万端」

「じゃ、いつてくる大佐」

「大佐じゃ・・・」

言いたいことは言ったのでシャルロットの言葉は最後まで聞かずに崖を飛び降りる。ところどころに生えている出っ張りを足場に次々と飛んでいく。

「これより零さ・・・任務を開始する」

『わかった。サポートは任せて』

胸元に引っかけられているトランシーバーで連絡を取りつつ任務開始！
タクト ミッション

建物の立つ近くの崖から上の様子をのぞき見る。建物の入り口に二人、巡回する人員が12、3ほど。コンテナなどでいくらか死角が生まれている。それを使って上手く進んでいこう。

まずは気をこっちに向けなきゃな。そう思って小石を投げる。

「ん・・・？」

一人の巡回兵士が小石の音に気付いて近づいてくる。そして、俺の射程距離に入った瞬間、

パスッ・・・

「う・・・」

サイレンサーのついた麻酔銃から音の消された針が飛ぶ。相手の頸動脈にきれいに刺さり、数秒で意識を失った。その倒れた体をコンテナの陰に隠す。ついでに杖や金目の物を手に入れておく。悪く思うなよ。

さて、サクサク行こう。

・「助けに来たぞ」姫さん達」

あれから特に障害もなく頸動脈への麻酔銃乱舞によって死屍累々（殺してません）の夜の迷宮。その最奥にある牢屋の一室に姫さん方は閉じ込められていた。

「遅いぞシヨゴ」

連れ去られてまだ数時間しか経ってないはずなのにこの言われよう。
この速さならどう考えても遅いとは言えないはずなんだが。

まあいい。

「とりあえず隠れ家いくぞ。あいつらもいるだろうからな。そっち
でうろろしてる嬢ちゃんもこっちこい」

「む、嬢ちゃんではない。テオドラ・バシレイア・ヘラ」長い長い。
面倒だからテオドラ姫な」最後まで人の話をきくのじゃ！」

そう言っつかみついてくるテオドラ姫を片手であしらいつつ外のシ
ヤルロットに任務成功を伝える。待つとけば船で拾いに来てくれる。

待っていると言の壁の向こうにそろそろ来るそうなので神気をまとって
適当に壁を殴って穴をあける。その後ちやうど船が到着したので二
人を連れて船に乗る。

さて、みんながいるであろう隠れ家へ向かうことにしよう。

・というわけで到着隠れ家。建物の前には俺ら以外の仲間が全員集
結していた。

「シヨウゴ無事だったか！」

「だからシヨウゴなら心配ないといっていたでしょう」

「そう言って一番心配してたのは誰でしたっけね？」

「……そういうフィフも人のこと言えない」

「わ、妾は心配なぞしておらぬぞ！」

「お前ら全員50歩100歩口ボ」

「まあシヨウゴが死ぬ姿など想像できんがな」

上からナギ、リア、ニヤル子、クー子、アル、エリザ、フォウの順である。というか最後のフォウの発言が酷過ぎる。俺だって人間なんだから死ぬにきまつてるだろうが。

『ないない』

……いいぜ、その幻想をぶち殺す！

「ようやく終わったか」

結局認識は変えられず両手両膝を地面についてこの世の無情さをかみしめていたところ、アリカ姫が話しかけてくる。

「どーしたんだ？アリカ姫」

「うむ。今や世界全てが我らの敵じゃ」

「そーだな」

どの国にも完全なる世界の奴らが入り込んでいる今、世界全てが敵

と言えるだろう。紅き翼もどうやら指名手配されたようだし。まあ俺やシャルロット、リア、アル、ニヤル子、クー子、フオウ、エリザのハルケギニアからの仲間らは仮面などをしていて一応顔はばれていないが。

「じゃが、お主ら紅き翼は無敵……違うか？」

「違うないな」

むしろこの戦力に勝てるとしたら……こちらが知覚できない距離からの超超長距離射撃による暗殺か人海戦術によるこちらの疲弊を待つほかないような気がする。まあこちらが知覚できない距離からの攻撃なんぞ来るまでのタイムラグで知覚できるうえに人海戦術なんぞ国がいくつ消えることかわからん位にやられるだろうからどちらも行っことはできないのだが。

「ならば我らが世界を救おうではないか。こちらの兵は世界全てに比べれば僅かばかり。じゃが、我らならやれるだけの力がある。シヨウゴ、お主の力を私に預けよ」

おー、アリカ姫すげーな。下手な男より男らしい。ならば俺も答えようではないか。

「いーあー！アリカさんプロポーズですかそれは！ダメですよ、シヨウゴさんには私がいいますからね！」……」

「あの「ほう、アリカ。お前そんなことしようとしたのか？そしてファイフ、シヨウゴはお前のじゃねえ」……」

「俺の話を「……だめ、シヨウゴは私の」……」

「ねーってば「違う、私の」……」

「あ「それは聞き捨てならぬな。 ショウゴは妾のじゃ」……」

「い「いえ、私がもらいます。 あなた方は下がっていてください」

……」

「う「な！ち、違うぞ！プロポーズなどでは……いや、そうじゃな。 ショウゴは私のじゃ。 だれにも渡さぬ」……」

俺の話のはずなのに俺が一言もしやべらせてもらえない件。 そして俺は誰のものでもない。 いつ誰がどこでそんなことを決めたし。

いつの間にか彼女たちは口喧嘩から大乱闘にワープ進化していた。 というか、人外が混じっているはずなのに全員互角とはこれいかに。 アリカ姫も前線で戦えばいいと思うよ。

なんかいい話だったはずなのにどうしてこうなったんだろうか……？

世界の敵（後書き）

作：まず初めに長々とお待たせしてしまいほんと申し訳ありませんでした。理由はのちほど活動報告にでも書いておこうかと思ひます。ほんとすみませんでした……。

シヨ：とりあえずこの作品を投げ出したりはしないのでご安心ください

作：では、 R a i N様 さろう2世様 ご感想ありがとうございます。

シヨ：よかったな。見捨てられてなくて

作：ほんとさろう2世様、こんな長々と放置してしまった作品を楽しみにしていただいてありがとうございます。この感想を見てこれを書きあげたといつても過言ではありません

シヨ：で、 R a i N様の作品だが？

作：なのはは2期までしか見てないんですね…… F o r c eとか V i v i dとかはお金がなくて手が出せず……。これあげたら見てもみようと思います

シヨ：W i k iと写真を適当にググって見れば良いんじゃないのか？

作：それしか方法はないものな。とりあえず、ちゃんと見させていただきます。楽しみにさせていただきますね

シヨ：さて、今回はこのくらいかな

作：では、また次回に。今度はこんなに長々と放置はしませんので

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9067i/>

セカンドライフは波乱万丈！？

2011年8月10日03時55分発行